
十七で死にます。

レルリク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十七で死にます。

【Nコード】

N5491C

【作者名】

レルリク

【あらすじ】

クールで非凡な高校生、陸奥実^{むつみ} 流^{りゅう}がある手紙を手にしたことで始まる物語。流は手紙の謎を考えつつも学校生活を送るが…。

零戒目「序章」

私はそこにいた。

大きい道路に目立って光るランプは決まったようなサイレンを鳴らし、やがては止まる。歩いていた人たちは歩くのを止めてその一部始終を見ていた。

白の箱に赤いラインを引いて赤い十字を付けたような車から緑の衣装を着て台を運ぶ。それに何かを乗せてゆつくりと車の後ろに入れた。

そして間もなく、甲高いサイレンを鳴らして走り去っていった。

「ふああああ…。眠い…」

俺はビーチサンダルを履いて目の前の鉄の青い玄関を開けた。ちよつと重いが筋トレの一環と思えば辛くはない。そして外に出る。朝日が目に突き刺さり、俺は手で遮った。それで眠気が三割ほど取れる。

俺が住むマンションは三階十九室でちよつと小さいが、ここ最近に造られたなかなか新しいもので、しかも家賃が安い、住みやすいとハイクオリティーなものだ。ただなぜか庭へ続く階段がコンクリートでなく、鉄板を何枚も張り付けたようなタイプだった。でも俺的にはかなり気に入っている。

その階段をテナポ良く降りていく。その度にくぐもった懐かしい音を奏でる。

“通称”庭についた。ここの管理人はこのわずか畳五条くらいの

スペースと三つの花壇を“庭”と呼ぶ。ちょっと可愛い。

だが、目的の郵便受けに行くにはどうしても庭を通って門前にい
かなくてはならない。そこに設置されているからだ。

そこまで約五秒くらいで着いた。

「俺のは…、これだ」

三行六列に並ぶうちの二行三列目の郵便受けに手をかける。解り
づらければ真ん中の行の左から三番目だ。余計わかりづらいか。

番が軋みながら中身をさらけ出す。中身は新聞紙と一枚の高級感
溢れる手紙だった。

「どれどれ？」

後ろの蠟で固めた様子をきれいに切り取り、中を拝見する。そこ
にはこれしか書いてなかった。

「あなたは死にます。」

「戒目」開始

ミーンミンミンミンミー……！ ミーンミンミンミンミー……！
ジジジジジジジジイ……！ ミーン……

「ちて、この問題は……」

しるわい……。。

「出席番号二十三番、陸奥実^{むつみ}やってみるお！」

しるわいな……。

「おい、聞こえてるのか？」

しるわい……。ー

「陸奥実！ 返事くらいしろよなあ！」

しるわい……

「むっ、陸奥実さん、呼ばれてますよ……？」

しるわい……。あ……。。

「……悪い」

パラパララッ……

「 $5x + 6y - 11 = 0$ です」

「……正解だ。これはある難関大学の問題なんだが……。陸奥実
流石だな。それでは、解を説明するぞ！」

やっとうるさいのから逃れられる。いや、まだ続きそうだな……。

俺はふとして窓の景色を眺めた。俺の席は窓側の前から二列目。
その端には木の枝がひょっこりと入っていて、そこにいるセミ
が元気にお尻を揺らしているのが見える。

目線を校庭に向ければ、体育で頑張っているだろう生徒たちがコ
ースに沿って走っている。

さらに奥の校門は日傘をさして歩く人が通ったのがわかる。
それに比べて、窓を閉め切った密閉空間。一年前に導入された文
明の利器が空間を冷やしていく。そして俺の頬にその風がかすり、
気持ち悪いほどに体温をさらっていく。

黒板には先ほどの問題の答を書いていく教師。それを逃すまいと
真剣な眼差しを送る生徒たち。そんなに悪な連中ではないが、こう
して見ると哀れにも思えた。

キーンコーンカーンコーン……、キーンコーンカーンコーン……！

学校特有のベルが空間に振動を与えた。ちなみにうちの学校は電子音だ。

その途端に教師は動かしていた赤チヨークを止めた。

「……ふむ、今日はここまでだ。復習だけはしっかりな。では号令！」

ある男子が台本通りにかける。それによって授業は終了した。

「……………ふう」

今日はなぜか疲れてしまう。さっさと帰ってのんびりしたい。ということと俺は帰る支度を早く済ませた。

だがその前にSHRショートホームルームがあることをすっかり忘れていた。

それはあざ笑つかのように始まる。ちなみに担任は今の数学教師、岡本だ。

「ここ最近、ニュースでも報道されてるが、自殺者が増加しているようだ。老若男女関係なく……………な」

西暦2019年の現在、別に大した問題ではないと思う。だが、それを聞いていい気分になる人間になる人間などいるわけがない。

この“自殺”は最早、社会問題にまでなっているくらいだ。

「みんな、一分間だけ時間をくれ……………」

この部屋に無音の、悲しい時間が訪れる。みんな俯き手を合わせ、目を閉じる。

死者に対する黙祷。

若干一名はしていないが。

その後はいつも通りの連絡だった。全く俺には関係ない。

「では、解散！」

全員一斉に立ち上がった。荷物を持って別れの挨拶を交わしながら出ていく。廊下に待たせていた人は笑いながら人混みに消えていった。

俺は少し遅れて廊下を出る。そうしないと巻き込まれるからだ。案の定、そんなにいない。

背伸びをして階段を降りようとした時、後ろから声があった。そつと振り向く。

「むっ、陸奥実さん……」

そこには髪の毛の長い女子が両手に鞆を持って立っていた。背中あたりまで伸びた栗色の髪、ほんのちょっとだけ顎がとがった柔らかい顔つき、透き通った茶色の優しい瞳をしている。その娘は俺と目が合うと恥ずかしそうに視線を外した。

「一緒に、帰りませんか……？」

「……いいよ」

「えっ、あっ……ありがとうございます！」

たまにはいいかなと思ったただけだ。そうに決まっている。そうだ、うん。

敬語は使わなくていい、そう伝えるのだが、これは癖なんです、と平然と返された。

俺はこの不思議な気持ちを抱えたまま彼女と歩いていった。

「…………あの時大丈夫でしたか？」

「えっと…………、まあ、眠かったただけだ」

なんでこんなにも返答に困るんだろう？俺は奥手ではないのだが…………。

彼女の名前は東條^{とうじょう}真乃^{まの}。俺の隣の席の女子だ。そして六限目の数学で気遣ってくれた人だ。まあ、無視してただけだけど。

だが正直なところ、彼女に頭が下がる事がいくつもある。感謝はいくらしても足りないほどだ。

でも本人は気にしないでほしいので心の内で礼を言っている。

東條が一步先に行って勢いよく振り返った。

「何でしなかつたんですか！」

「？何を？」

「“黙禱”です！ダメですよ、しなきゃ…………」

怒られるのは当然か。

東條は俺の目をまじまじと見てくる。クリアな瞳に俺が映っていた。ならばこちらもと見返す。すると驚いた表情を見せて数歩先に歩いた。少し紅くなっている。

「とっ、とにかくそういう儀礼的な事はして下さいよー！」

「……わかったよ」

よろしいです、と指を立てて言うと二人して笑いあった。なんか可笑しかった。

こんな時間は嫌いではない。なんというか、ゆったりと落ち着く時間を肌で感じれるような、静寂とは違う時間がよかった。

歩道が赤く染まりながら黒い面積を広げていく。先ほどまで蒸し暑かった空気も、冷めた風のおかげでいくらかマシになっていく。

俺らは談笑しながら歩いていった。

「あつ、私はここで……」

「ああ、気をつけるよ」

俺らは二つの道にそれぞれ別れた。東條の背中を見送っていると振り返って手を振ってくれた。俺もそれに応えて、自分の帰路に入るのだった。

「……ふう」

再びの閑静。それは体に纏わりつきながら空しさを感じさせる。もう自分の足音しか耳に入らない。

俺は暇つぶしにあれを考えてみることにする。

「あなたは死にます。」

「…………ふう」

そう。あの手紙だ。

最初は入れ間違いか寝ぼけてたのかと思った。でも確かに俺宛だし、顔を殴ってみたが本当だった。我ながら痛かった。

俺に対する悪戯……はちょっと考えづらい。それならばあんな手間暇かけて手紙は作らないし、悪戯の趣味も悪い。

かと言ってこれが本物なら相当困る、というか嫌だ。

「ふう……、つと」

足に何かが引っかかった。石だった。

そしてこれは着いた合図。

俺はいつの間にか家に着いたようだ。どうやら足が早くなっていたようだ。

家と言ってもマンションだ。三階十九室あるここは一年前に建てられた新しいマンション。俺はその一年前にタイミングを見計らって引っ越してきたのだ。

俺は案外気に入っている。特にこの鉄板を張り付けたような階段は哀愁を漂わせる代物だ。それをテンポよく二階まで上っていく。そして三つ目のドアの前で止まった。

「…………鍵は…………と」

財布から取り出してドアを開けた。

「ただいまあゝ」

……
俺は靴を放り出してから居間へ続く廊下を走る。断じて幽霊が怖いからではない。なんとなく走りたかっただけだ。

そして居間に入り、壁伝いにスイッチを探す。あった。

電灯は何回か点滅した後によろやく点いてくれた。でもその光はまるで劇場で俳優を照らすスポットライトのようで寂しかった。鞆は隣の自室に放り投げておいた。その際に時間を見といた。

「今は五時半くらいか……。買い物は遅くなるし、残り物でなんとかしよう」

俺はエプロンを着て台所に向かった。

今日はカレーにしよう。冷蔵庫にはにんじんもあつたしジャガイモは……。辛うじて残っている。肝心のタマネギは昨日、近所のおばさんから大量に頂いたばかりだ。

そして約一時間後には、スパイシーな香りを醸し出すカレーが完成した。作り方は……。省かせてくれ。ただ、レトルトではないことは確かだ。

「さてと、いただきます」

自分で夕食を作り、買い物を考えて生活していく。これはつまりは、一人暮らしだった。そう。俺は今、一人暮らしを始めている。誰も家族と一緒に、とは言っていない。

というのも、受験を控えていた頃に両親と兄と姉を亡くしてしまった。俺は父さんの兄にあたる言わば叔父さんに預けられるのだが、合格した高校とはかけ離れすぎている。それで結局一人暮らしとなつたわけだ。

「流石だな。二年でこの成長は我ながらすごい」

まあ、確かに一気に四人も喪うのは相当辛いけど、泣いても何もない。この割り切りの良さが今に繋がっているのである。

「ごちそうさまでした」

もし、一人暮らしを始めるなら絶対にしなければならぬことが二つある。それは節約と交友だ。これさえやればどうにかなるものだと思おう。

「片付けは……明日でいいか。風呂に入る……あ」

風呂に水入れるの忘れてた……。

お陰様で只今九時。風呂に入るのに一時間もかけてしまった。まあ湯加減は最高だったが。

俺は歯磨きをした後にあれに取りかかる。

「あなたは死にます。」

どうしても気になる。いくら悪戯だろうが何だろうが動機はあるはずだ。と言っても考えても無駄だが、暇つぶしということにしてくれ。

「素手で出したのなら指紋がついてるはずだよな。……」

俺は徐にテレビを付けた。楽しいのは……、ないか。
結局消した。

「……仕方ない、勉強でも……」

ピンポン！

いきなりベルが響いた。思わず体が飛び跳ねる。

俺は玄関に急いで向かった。

まず、チェーンを外して格子を引っ張る。鍵を二つあけて玄関の端にあるタツチパネルで番号を押した。これで漸く開けられる。…
…四・二秒か。まずまずだな。

「どちら様ですか……ってあれ？」

ドアの先には誰もいない。真っ暗な景色だけだ。俺が靴を履いて外を見渡しても、同じ。

何とも薄気味悪い。

「また鍵閉めなきや」

俺的にはそちらの方が重大だ。これらのセキュリティは外すのは早いがかかるのは面倒。特に暗証番号が。もう鍵だけでいいだろうと思ひ、チェーンと鍵だけかけた。

でも、これらは決して無駄ではなかったのが後に思い知らされた。

「なるほどな。悪戯の領域は越えてないようだ」

振り向いた先には、手紙が置いてあった。玄関マットの上に。

「二戒目「参加」」

夜なのに必死に鳴いているセミ。いや、夜だからだろうか。夏を報せるそれは清涼感があり、蒸し暑さもある程度手助けしてくれる。扇風機が元気に首を振りながら微風を浴びせていた。うちはクーラー反対組なのだ。

しかし今、体は熱い、頭は寒いという異例の状態に追われている。

「……………ふう」

手紙を開けてみて少し驚いたことが二つ。一つ目は作りが全く一緒なこと。二つ目は二枚あること。しかも二枚目は白紙だった。

これはもう悪戯で決定だ。

「……………十時か」

寝てしまおうか。俺はもう踏ん切りがついた。 自室のベッドにダイブインして寝っ転がった。

「おやすみ……………」

の前に。

「コンタクト外さなきゃ……………」

俺は特別目が悪いわけではない。しかも決してゲームのやりすぎではないしファッションでもない。これには原因があるのだ。寝る前に気づいて良かった。

とりあえず洗面所に向かった。

「……つつつと……」

コンタクトは慎重に取らないと眼球を傷つける恐れがある。だからたとえ朝でも夜でも神経をとがらせる必要がある。そしてコンタクトをつける理由は鏡を見ればわかる。

「いつ見ても不思議だな」

俺の瞳は赤が強めの赤茶色をしているのだ。よく、アニメとかでは瞳の色が黄色だの緑色だのあるが、これは現実世界だ。ちなみに俺は歴とした日本人だ。間違いない。

さらに両親も日本人だから、おそらく有り得ないはず。でも有り得てしまったのだ。

ちなみにこれを知っているのはごく少数だ。“知っていた”ならもう少し増えるが。

「まるで何かの主人公みたいだな」

コンタクトは黒いカラーが入っていて無理やり黒い茶色を作り出している。

それでも不思議なものだ。

誰もそんなことに気付かずに学校生活を送っているのだから。

「……ふう」

これで用はない。安心して寝れる。ハズだった。

「あれ？ 手紙が開いてる。しまい忘れたか」

自室にある机に置いたのだが、勝手に開いている。だけではない。一枚目がぴったりと広げられていたのだ。まるで張り付けられたように。

既にセキュリティはセットしたし、物音もしていない。

つまりは……。

「有り得ない」

幽霊はいない。絶対にいない。たとえ天と地が……いや、そんなことはどうでもいい。

「一枚目は一通目と同じはずなのに、内容が付け足されている……」

そこにはこう書いてある。

「あなたは死にます。従うか逆らうかは自由。下にお名前をお書きください。」

「……………」

とりあえず従うしかないな。いや、待てよ……？
ペン立てから適当に黒ペンを取り、名前を綴る。

「My name is Ryu Mutsumi.」

一応読めるように書いた……つもりだ。

すると、せつかく書いた名前がとけ込むように消えてしまった。普通ならここは驚く場面だが、いちいち反応してたら切りがない。そしてそこに代わりの文字が浮かんできた。

「日本語でお書き下さい。あなたは日本人ですよね？」

そう現れると同様にして消えていった。

なんかこいつ、ムカつくな……。ジョークが通じないのか？ ま

あ、書く方も書く方だが。

今度こそしっかりと日本語の漢字で書いた。

「それでは同封していたもう一枚を見て下さい。」

するとまた消えていく。無駄に書かせてごめんなさい。

これで大丈夫のようだ。

でもまるで誰かと会話しているみたいで不思議だ。……だから手紙なのか？

もう一枚には冒頭に“説明書”と書かれていた。

説明書？

「えっと、「陸奥実 流様、あなたは」……！信じられない、と
いうか意味が解らないぞ」

そこにはこう記してあった。

「今年でお亡くなりになられます。詳しく申しますと、2019年
九月十六日、午前十二時に亡くなります。」

それは明確で重々しい死亡宣告。しかし、日にちが中途半端……
でもない。この日は俺の誕生日だ。つまり、俺が十七歳に成った瞬
間に死亡するということだ。

しかもこれはほんの二、三行だ。それだけでもショッキングなの
に、まだあるのか……？

とりあえず続きだ。

「ですが、それを回避する方法がございます。」

なんとも親切な。

「一、素直に諦める。」

二、現在の自分の年齢分だけ関係が全くない他人を抹殺する。

三、最も親しい友人を一人だけ抹殺する。」

「……もう、悪戯にも程があるぞ……！ 誰だ、こんな不謹慎な手紙をよこしたヤツは！」

親切がどうのこうのではない。もう度を超えている。だが、だからと言ってこれを本物の領域に踏み込ませていいのだろうか？ いや、まだ堪えきれぬ。まだ境界線だ。可能性はある。

「注、三をお選びになる際は一つ条件があります。それはあなた自身の手を下さないこと。あなたが“直接”抹殺しなければよいのです。」

その他、あなたが従うか逆らうかは自由です。」

「……ふっ」

俺はそれらを手紙にしまい、机に置いた。

「あっははははははは……！」

俺の中の脳内メーターが振り切れ、針が吹っ飛んだ。

総合した結果、本物という領域に達してしまったのだった。

割り切りが肝心だ。

「だけど抹殺って……。ふざけすぎだろ……。！」

自分の命の為に他人の命を生贄にする。なんとも醜いことだ。おそらく、金持ちで太っているやつなら、何の躊躇もなく実行しているだろう。

でも状況はそれとさほど変わらない。

「俺は一体どうすればいいのだろうか？」

現在は六月二十四日。時間はまだ三ヶ月はある。先ほど割り切りが肝心と言ったが、人命に関わるなら話は別だ。

とりあえず俺はベッドに潜り込んで考えてみた。

しかし、どうやら限界が来たようだ。今日の溜まりに溜まっていた疲れが俺の脳を緩慢にさせていき、遂には完全にストップした。

三戒目「関係」

「えー、それでは、校長先生にお話を伺います。校長先生、お願いします……」

「はい。えー、皆さん、明日からは夏休みに入りますが、呉々も事件や事故に巻き込まれないようにしてください。もしそうなったら110番の後に速やかに学校に連絡してください。これからさらに暑くなりますが部活や勉強に励みながらも、精一杯遊んでくださいね！……以上です」

「ありがとうございました。ではこれにて、第一学期終業式を終わります。諸連絡のある先生方は……」

セミたちの合唱は学校を包み込み、まだ夏は続くことを俺たちに教える。

太陽は生憎、雲に隠れていて要所要所でしか現れなかった。それでも蒸し暑さは衰えない。

「暑いな……。まるで吸血鬼に血を吸われるようにやる気が失せていく……」

俺は完全に暑さに負けていた。今年は異例の猛暑らしい。なんとなくいったって、四十度を超える日もあったのだから当然か。つくづく、南国気分を味わっていた。

涼しくなつてほしい。常日頃に思うことだ。しかし、俺は素直に受け入れられなかった。

「あと二ヶ月……。結局何も起きてないし、わからない。やはり悪戯なのだろうか……」

手紙を受け取ってから早一ヶ月過ぎてしまった。びっくりした。時間というものはまるで生き物なのだと言ひしめる。

「……ふう」

「……おい、陸奥実」

何だと思ひながら後ろを振り向いた。ちなみに今は教室だ。終業式が終わつて教室で待機してるところ。

そしてそこにはよく見知つた顔の生徒が立っていた。

「なんだ、とおちゃんか」

「なんだとはなんだ、陸奥実！ 暢気に窓の外を眺めてるやつに言われたくはない言葉だ！」

通称とおちゃんこと、前橋まえはし 透気とおきはうちの2・Aのクラスメートだ。最早野球部と言つていいほどの坊主頭で身長も俺よりでかいスポーツマンだ。実際には陸上部だが。

ちなみに俺は170くらいだ。

漸くこのクラスにも慣れてきて今では楽しく生活している。

「そついや、東條がお前のこと呼んでたぞ……って来た」

真乃はクラスの結構な数の女子を率いて入ってきた。女子は頭髪検査があるのだ。でも、なんで真乃はスルーなんだ？

女子に一言言つと、真つ先に俺のところへ飛んできた。

「流さん、捜しましたよ！」

「いや、今の雰囲気は捜してる雰囲気ではなかったよ」

「……バレました？」

バレたとかの問題ではなくて、頭髪検査やってただろう？

ちなみになんか以来、真乃とはすっかりになつてしまつたようで、今では下の名前まで呼び合う仲になつていた。

「ヒューヒューヒュー！ 熱いねえ二人とも！」

「ホントよね！ あの二人はデキてるわね！」

「もしかして、やつちやつたのかしら……？」

「可能性は大だな……」

そのおかげかせいか、うちのクラスでは陸奥実&東條カップル説が成り立ってしまった。俺らは付き合つてないぞ！

そんな冷やかしまくりの連中にドロップキックをぶちかますやつもいた。それは一人しかいない。

「そんなんじゃないから！」

そのドロップキックで骨がへし折れる音がしたのは俺だけだろう

か。でも内心はスツキリした。

真乃は随分変わった……。当初はおしとやかで子猫のような雰囲気だったのに、今ではかなり暴力的になったというか、おてんばになったというか。まさに、猫かぶりだったのだ。

真乃は作業を止めて戻ってきた。

「それですね、実は……」

「ほらあ、席に着けよお！ お待ちかねタイムだ！」

今度はドアを叩きつけるようにして岡本先生が入ってきた。よく見ると、大量の紙を持っている。

仕方なく生徒全員は席に着いた。真乃は一体何を言おうとしたのだろうか？

「さて、一学期は今日で終わりだが、校長先生の言うとおり事故に遭うなよ！ では、通知表を返す。一番の者から来なさい」

通知表。その言葉はある意味、死刑よりも重みのある言葉だ。みんなはその言葉が出た瞬間、空気が重くなるのを感じただろうな。少なくとも俺はそうだ。

一番の生徒が震えた手でその“赤紙”を受け取った。赤紙とは、世界大戦の時に用いられた召集令状のことだ。

おそろおそろ開く。

「……うそだあああああ！」

そいつは爆死した。

後で見せてもらったが、……やばい、いや、やばすぎる。例えるなら、特攻しにいったが操縦不能で日本に墜落したくらいやばい。

わかりづらいか。

ちなみに真乃も受け取ったが、特に何もなく平然と席に着いた。良かった方なのか？

そしてとおちゃんがやってきた。

「陸奥実、勝負だああああ！ 俺の評定平均、ピー（自己規制）点がお前のに勝ったらジューズをおごってくれ！ 負けたらおごるかー！」

結局いくつより上ならいいんだ？ 自己規制する意味がわからない。

「むつみい！ 早く来いよお！」

なんやかんやできてしまった。とおちゃんがにやにやしてこちらを見ている。自信があるのか……？

今回は手応えは感じられなかった。よくわからないのだ。

俺は受け取りに行った。その間の距離がとてつもなく長く感じる。重圧を感じる。

そして遂に岡本先生の前に立った。先生はかなりのしかめっ面をしている。

「陸奥実！」

「はっ、はい！」

声がつわずってしまった。

そしていきなり俺の肩を掴んだ。……痛い。

「俺あ今までこんな成績を取ったやつは見たことがない。つまり、

お前が最初の偉人だ。さあ、受け取れいい！」

「は、はあ……」

それはどちらの意味だ？ それによって今後の対応が違ってくるぞ。

手を離すと通知表を賞状を渡す感じで渡した。俺はそれを片手で受け取る。そしてすぐその場で開いてみた。ほかの連中も俺の見たさで寄ってくる。

「……すごいですね。びっくりしましたよ」

「なんだ、このキレイに揃った数字は……！」

「いや、俺の方がびっくりしてるよ。まさか取ってしまつとは……」

結局とおちゃんとの勝負は圧勝だった。何てったってオール10だったのだから。

「すごいなあ！ 陸奥実君は！」

「そうなんですよ！ ここまでくると、ヒイチヤいますよね」

「かなり酷いぞ、真乃……」

学校は終わり、念願の夏休みに入った。と言っても夏休みは明日

だが。

俺らは既に帰路にいた。

ときどき雲に射し込む光がギンギンに照りつける。それがコンクリートを焦がし温度を上げていった。

「陸奥実君！」

「ん、何だ？」

「ワイ、実は早く宿題終わらせたいんやけど、手伝ってくれんか？」

関西弁で話すこの人は、なたゆみ 奈多弓 なつめ 棗さんだ。真乃曰く“なつちやん”。

棗さんは大人顔負けの美人だ。黒髪のショートにちよつと細い顔立ち。二重の奥にある淡い茶色にはどこかミステリアスさを含んでいる。真乃が子どもなら棗さんは大人だ。しかし見た目からは判断しかねる関西弁……。

まるつきり正反対な雰囲気の二人だが、それは外側だけ。

「別に構わないけど……」

「やったあ〜！ おおきにおおきに！ 真乃やんもやるなあ！」

「はい！ 喜んで！」

中身は同質の二人だった。

というか、気になることが二つある。

「ど〜でやるんだ？」

「決まっとするやろ、陸奥実君家や！」

やっぱり。こうなることはわかっていた。しかし、なぜ男の家に遊びにくるんだ？

「いつするんだ？」

「いつというか……、今から五日くらい泊まり込みでやればええん
ちやう？」

はい、ちよつと待て。今の発言に六個くらい異議があるのだが。
いや、待て。その前に冷静になるんだ。

「それはいいですね。枕投げしたくなりますね！」

うちは旅館じゃない！

そもそも勉強するだけなのに泊まり込みってどういうことだ？
しかもそれでは俺の秘密が一気にバレてしまう。それだけは避けな
ければ！

俺はまさか使うとは思わなかった脳みそをフル動員させる。

「話の腰を折って悪いんだが……」

「ん？ 何か問題発生かいな？」

今、発生中だ。

「実はだな、うちは泊まり込み禁止令を施行中なんだ」

「え、なんですか？ 迷惑は最小限にしますから……」

「いや、前にも泊まり込みをさせた事があったのだが、その時近所迷惑になってしまって……。それで親が禁止したんだ」

以前は実際にあつた話を雄弁と語る俺。納得してくれるかどうか……。
でも意外にあっさりと通つた。

「そつやな。親にまで迷惑かけてまではしたくないしなあ」

「そうですね。ごめんなさい、浮き足立っていました……」

「いや、いいんだよ。それに宿題なら図書館でも学校でもできるし」

この瞬間、物凄い罪悪感が身にまとわりついた。素直になって謝っている二人の姿を後ろめたかった。

「では、明日にでもやりましょうよ、図書館で！」

「そつやな！ 枕投げは無理でも、本投げはできそつやしなあ！」

「どちらにしても質たちが悪い。止めとけ」

「冗談や、なあ真乃やん？」

「えっ？ やらないんですか、本投げ？」

本当に真に受けたのか？ 実際にやるうと思つたのか？

真乃は不適な笑みを浮かべながらこちらを見た。かなり不気味だ。

「つと、じゃあ俺はここで」

「あ、じゃあさいならあ〜！」

「さよならあ！ 流さん、明日忘れないでくださいね！」

「覚えてればな！」

俺らは一人と二人に分かれていった。

そしてそれから歩いていく。そういえばまだ昼なんだ。いつものリズムが崩れていた。つまりそれは二回の食事をするということ。

「しまった。食べ物は昨日で切れてたんだった。昼はなんとかなるけど……」

夜はどうにもならない！

しかもこれから某スーパーでセールではないか！

「マズい……。仕送りしてもらってる身としては、実に見逃せない！」

俺は大量の汗を垂らしながら全速力で駆けていった。

四戒目「唐突」

七月二十九日、十二時十五分。

結局、五日間も図書館にこもりつづけ宿題を終わらせた。ただし、俺は終わっていない。真乃と棗さんに教えつきりで自分のには手をつけられなかったのだ。

「休みかあ……」

今思えば初めての夏休みだ。家族のいない夏休み。一週間くらいなら堪えられるが、1ヶ月以上はきついかもしれない。バイトとか趣味とかで時間を潰すしかない。

でも夏休みは終わってほしくない。休みたいからというのも一理あるが、そんなのよりも大きい理由があった。

「あなたは死にます。」

手紙だ。

本当に死ぬかどうかはもちろん分かりはしない。分かったときは即ち死んでいる。無性に腹が立つてくる。何が狙いだ？

一体何なんだ、こいつは！

信じなければそれで終わりだし、異変もない。けど何か引っかかるのだ。奥歯に骨が突っかかって取れない感じ。

最早ベッドで唸るしかない。

ピンポン！

非常に不愉快だ。実際に味わってみたいとこの苛つきはわからないだろう。

ピンポーン！

さっきから何だ？ この音は。

ピンポーン！

誰かが呼んでいる。

この時間帯では何も用はない。だから訪ねられることはないはずなのだが……。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ポーン！

ベルが壊れるし速すぎだ！ 明らかにゲームのし過ぎの傾向ありだ。

……わかった。今の連射で全てがわかった。

その途端、何かが噴き出す鈍い音がした。ガスバーナーに近い。そしてガタンともものうるさく響いた。

「騒々しいな。何かあったのか？」

ベッドから起き上がったて玄関に向かう。途中の居間で明らかに変が起きていた。

「……二つ質問がある」

目の前の物体は首を傾げる。

「まず、何の用だ？」

物体はどこから持ってきたのかわからないカンペを俺に見せた。喋ればいいものを……。

しかもなぜか英語で書いてあった。

日本語で書けばいいものを……！

俺はそれを訳した。

「遊びに来ました。なので私たちと遊ばなければなりません」。絶対かよ！」

“絶対王政”みたいなむちゃくちゃさだ。

もう正体を明かしてもいいだろう。真乃だ。おそらく容易に想像できただろう。

そして二つ目の最大の疑問をする。

「どうやって侵入した？」

真乃は玄関の方に指差した。おそろおそろ行ってみると、ヤバいことになっていた。

「ドアが……ない」

玄関が綺麗に青い空に変わっていた。そこに写る女性はかなり神秘的でミステリアスだ。夏空にぴったりの麦藁帽子をかぶり、微笑んだ。

「こんにちは、陸奥実君」

「……………」

いつもの彼女じゃない。俺は呆然と立ち尽くしていた。ってそうじゃないそうじゃない。何で扉がこうなって……。するといきなり後ろから突進された。あまりの勢いに吹っ飛ばされ、一メートルくらいに渡って体が擦れた。痛い。

「なあに惚れ込んでんだよ！ 東條に言いつけんぞ？」

「いたたたた……それより遊びに行くってどういうことだよ？」

俺はおちゃんの手を借りて立ち上がる。

「ん？ そりゃあ暇だからな。お前も暇だろ？」

「答えになってないし、暇じゃない」

「何を優等生ぶっちゃって！ ほら行くぞ！」

まるで俺を銀行強盗が金を盗むかのように持ち上げる。じたばたと反抗するが、さすがは陸上部。いとも簡単に抑え込む。結局素直に降参するしかなかった。

そんなことよりも。

「せめてご飯食べてからにしろよ！ 今十二時半だぞ！」

「何！ ごちそうしてくれるのか！」

……しまった。やつらはこれを狙っていたんだ。気付いた時には三人が俺を囲み、目を光らせていた。

しぶしぶ居間にお呼びして昨晚のシチューをお持ちして差し上げた。

「ごちそう様！ んめかったぞ！」

「ホンマやなあ！ あの絶妙なトロリ加減、口の中に広がる野菜のハーモニーは隠し味のソースによってさらに昇華されている！」

「そうですね。私もあんなに美味しいのは久々でしたよ」

お前らはどこかの主婦か？ しかも棗さんに至ってはグルメレポーターか？

でもこちらとしてはすごく嬉しかった。自分の作ったものを周りの人に評価してもらうことは滅多にない。でもまさか、真乃たちは思わないだろう。

これは俺の作ったシチューだということに。

「ところで、どこに行くんだ？ まさか、広いところで鬼ごっこ缶けりではないよな」

無理矢理連れ出してしかもこんな炎天下の中でそれだったら、どうしてくれよう？

「よく分かったな！ 橋の近くの土手で鬼ごっこしようと思ってたんだ」

とおちゃんが肩を回しながら言った。

……まさかそんな事になろうとは……。

俺を包むセミの嘲笑がドアの事件を消し去っていった。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ！」

とりあえず、落ち着こう。

まだ死にたくはない。まだ……死にたくない！

何でこんなことになったんだろう？ ちゃんと仕事もこなしているし、人間関係も決して悪くはない。なのに……なぜ！

「やるしかない……、やるしか、方法はないのよ……！」

私のバッグの中に入っているそれが唯一、私の生きる道をくれるものだった。そしてあたかも“それ”は私の本能の分身のようだった。

歩いていくと、見えてくるのは土手に挟まれた河だった。

私は落ち着かせるために急ぎ足で土手へと向かう。河のせせらぎに身を任せれば自然と落ち着くだろう。

「……はっ！」

心臓が一度だけ跳ね上がった。それを合図に顔から幾つもの滴が垂れていく。

そう、向こう岸には元気にはしゃぐ青年たちが二、三人いるからだ。彼らがまるで天使が跳ねているように見える。

だがそれよりも印象的だったのが、土手に仰向けている彼だ。まるで三人から孤立しているように見えた。

「……やるしかない」

私は夕陽に染まるそれを握りしめ、バッグに入れた後、歩いていった。

「さて、どうしたものかな……」

一体何時間遊んだらうか。缶けり、鬼ごっこ、陰鬼、プロレスなど子どもじみた遊びに没頭してしまった。我ながら、まだまだガキなんだと改めて思う。でもプロレスって……？

俺はセミの鳴き声を聴き入っていた。それにたたずむ夕陽がどこか懐かしい気分にさせてくれる。まさしく童心忘ることなかれだ。俺の下にはやけに楽しんでる人たち。左手には向こう側へと繋がる橋があった。右にはずっと続く道。河は向こうの人の顔が辛うじて判別できるくらい幅がある。

「むっちゃん、捕まえてまうで！」

「おっと！」

鬼ごっこしてるのちょっと忘れていた。確かにあれはいかにも捕まえてくれて言うてるようなものか。

俺は棗さんと向き合う。そしてお互いに隙をつかかった。一触即発。動けない。

だが、あえて俺は少し動いた。右に。

「そつちか！」

棗さんは簡単に引つかかってくれた。

俺はすぐに左に切り返す。つまり、最初のモーションはフェイクだ。そのまま左へ走ろうとするが反射的に反応した手が行く手を阻む。

だが、それは背中を反らすことで逃げられた。

「ちい！ やるなあ！」

イントネーションの違うそれがやけに爽快だ。

俺はそのまま橋の方へ逃げていった。ここまでくれば大事だろう。

「みんなあ、どこにいるんやあ〜！」

棗さんが一人で暴走している。あの大人びた雰囲気からは全く想像できない。

それにしても真乃とおちゃんはどこにもいなかった。一体どこに隠れているんだ？ ふとして河の方に目が入った。

「……竹、か？」

なぜか竹の棒が垂直で浮かんでいる。しかも流れに従うことなく留まっている。……そこまでするのか？

そしてその周辺の陸にやけにポーポーに生えた雑草群。明らかに風景とマッチしていない。

「……水遁の術に隠れ身の術。忍者か！ 遊びにそこまでするのか？」

それを見つけれない棗さんも棗さんだが。
ふとしてまた何か違和感を感じた。

「…………あれ？」

夕日に黄昏る少年がかなり神秘的で爽やかだ。本当に私はやっていいのだろうか？ 思わず踏みとどまる。

幸か不幸か、橋は人っ子一人いないし車が通る気配もない。しかも少年はそちらに夢中で気づいていない。まさに大チャンスだった。

「…………やるのよ…………私…………！」

私はバッグから堂々とそれを取り出し、体の後ろに隠した。右手が不自然に震えている。彼はまだ気付かない。

あと約十メートル。彼が苦笑いしたのが見えた。

あと八メートル。もういける。ぶるぶると震える足がしっかりと地面を蹴りだし、スピードが出る。

あと五メートル。彼が気付いた。それはもう遅かった。

「なっ！」

彼がびっくりした隙に、決行した。

「がはっ、……あっ！」

何が、起こった？ 体は不思議と煮えたぎるように熱い。特に右のわき腹が熱かった。焼けた鉄を押さえつけられるくらいに。目の前には苦しそうに息をするマスクの女性。長い金髪がゆっくりと揺らぎ、黒いサングラスの奥の潤んだ瞳が波打っている。時間がスローモーションで過ぎていった。そしてそれのお陰で理解できた。

「ううっ！ううっ！……！」

ナイフを肉に突き刺し、抉るようなグロテスクな音が唯一聞こえる。まさしくその通りでわき腹に……。口から溢れ出すそれは口から顎に伝って、穢す。

「……ふう！」

不思議と気持ちいい。
俺は何かを出しながら倒れた。かもしれない。

「死に、た……くない、……まだあ……」

体は寒いのに頭が熱い。この感覚はどこかで……。
……もう、いいや。どうせたす……からない……いやだ、……ま
だだ、せめて、メッセー……、

「……と、三人……する……」

俺はとつとつ掴んでいた意識を放してしまった。

五戒目「病院」

「……父さん！ 母さん！ 兄さん！ 姉さん！ 何してんだよ……、起きろよ！」

四つのベッドにそれぞれ白い布がかけられている。

最悪だった。大切なものを一気に四人も失ってしまうことの苦しさを、そしてぽつかりと空いた空虚感。

逃げたかった。これから孤独になるだろう世界から。

「うわああああああ！」

「……ああ……？」

夢？ 夢だったか……。

「あつ、つつ……！」

脇腹から全身にかけめぐる電気的な激痛。そのせいで朦朧とする意識を叩き起こされた。冴えてきた。

とにかく白が目立つ部屋、厭に体を冷やさないほどのクーラー。そして腹には包帯、体中に変なチューブやら線がくっついていた。隣で定期的に響く電子音は虚しさを強調する。

ここは病院らしい。

そして次第に思い出ししてきた。いきなり通り魔に遭ったことを。ふと目が合った。

「今、何時何分何曜日、地球が何回回った時だ？」

「ふえ……？ ええ、えつと……」

かなりしどろもどろしている。ちょっと可愛かった。

「今は七月三十日、十一時四十二分、地球が何回か回った時です」

「……本当か？ ちょっと最後は怪しいが、まあいいか」

ちなみに俺もわからない。

涙目になりながら伸びる真乃。それと一緒に欠伸もした。そして目をこする。

「寝てないのか？」

「いえ、これから寝ますよ」

「……寝るな寝るな」

全く、相変わらずだ。

でも今からということとは、それまでは寝てなかったのか？俺が言おうとした時、真乃の人差し指が押さえつけた。

「気にしないで下さいね」

「！」

鼓動がその時強く打った。そしてそれを切欠にみるみる顔が熱く
なっていく。でもそれと裏腹に当初を思い出していた。
本当にいくら感謝してもし足りない。

「あれ、流さん、紅くなってますんか？」

「えっ？ あっ、いや、その……」

マズい。このままでは真乃が“いじりモード”に入ってしまう。
俺は頭を冷やし、瞬時に脱出路を作り出す。

「そ、そういえば、棗さんとおちゃんは……？」

「……っ……あっ、二人ですか？ 今飲み物を買に行かせ……行
つてくれます」

なぜ今、言い直したんだ？ しかも密かに舌打ちもしたよな？
でも二人はいやな気分で購入物はしていないと思う。なぜかと言
われても答えられないが。

「もう大丈夫だ。大分良くなってきたよ」

「あっ、そうですか。じゃあ帰りますね」

「……」

真乃は素っ気なく立ち上がると帰る支度を済ませる。そして一礼
すると、ドアノブに手をかけた。

待て待て。なぜそうなる？

俺は精一杯振り絞って一言言っしかなかった。

「すみません。やっぱり大丈夫じゃないです。居て下さい。」

「……仕方ないですねえ。全く流さんは柄になく寂しがり屋さんなんですわね！」

ああ、そうさ。流さんは寂しがり屋なんですよ……。ちくしょお……。

そもそもこいつはお見舞いに来たんだよな？ 患者をむやみやたらにけなしに来てるだけじゃないか？ そう思うと胃に穴が……。！
その時、ブシュッ！ と何かが弾ける音がした。しかも痛い。

「いかん、傷が……！」

「すみませえくん！ 誰か来てくださあ〜い！」

「……うっ……」

なんだこのベタな展開は。いや、冗談抜きでやばくなってきた。
意識が……遠退いて……。いく……。

「……ふう、死ぬかと思った」

とっさにナースコールをかけたおかげで一命は取り留めた。危なかった。向こうに花畑が……。きっとそこが生死の境界線だったん

だ。人生二度目の流血沙汰だ。新聞の見出しに「興奮しすぎて死亡」なんて書かれた日には表を歩けない。いや、天国か。
真乃は今、本気で謝っている。こんな感じに。

「すみません！ 調子に乗りすぎました！ 本当にすみません！」

実に危なかったが、まあいいだろう。面白いものも今見れたし。

「いや気にするなよ。死にはしなかったし」

「そうですか。じゃあ止めます。……それですね……」

全くこの娘は、なんて素直なんだろうか……。実に腹が立つてるよ。

だが真乃は一変して少し険しい表情を見せた。真剣な話をするのは容易に想像できた。

「どうして刺されたんですか？」

「？ なんてそんなこと聞くんだけ？」

「あつ、別に気になっただけですよ」

「……そうだな、うーん……」

嫌な事だが考えてみよう。

どう考えても俺は面識がない。しかも恨みを買つような事もしてないしされていない。いや、もしかしたら、相手には何かあるのかもしれない。例えば、亡くなった親に対しての恨みを息子で晴らすとか……。いや、それならばただの通り魔の方がまだ納得はいく。

やはりただの凶行だろうか……。
ふとして俺の頭の中に何かがよぎった。それは気を失う前に微かに聞こえたワードだ。

「確か、“三人”って言ってたような……」

「“三人”ですか……。まるで選ばれてるようですね」

ということは、俺は何かに選ばれたわけだ。とても笑い話にならない。

「選ばれる……か。“三人”……“選ばれる”……はっ！」

「何か心当たりがあるんですか？」

「……喉乾いた……」

「そういえば遅いですね。一体どうしたのでしょうか？」

俺はその後、適当に相づちを打っていった。

それにしても危なかった。とっさに話題を転換できてよかった。

ちよつと整理してみよう。俺を刺した犯人は女性だった。しかも恐ろしく興奮状態で異常だ。

そして捨て台詞の“三人”と真乃が言った“選ばれる”。おそらく前者の意味は状況から判断して、“あと三人”か“三人目”のどちらかだろう。いや、この際どちらでも意味合いはほぼ同じだ。

なぜなら犯人は“手紙を持つてる可能性がある”ということなのだから。

つまり、犯人は死から免れる為に俺を襲ったということだ。

となると……。

「……さん……流さん！」

「なっ！ なんだよ……！」

いきなりはびっくりするからやめてほしい。

「話、聞いてましたか？」

……聞いていない。急に頭が混乱してきた。

「聞いてないならいいです」

「……いや、もう一度言ってくれ」

「もういいですよ。大したことじゃありませんし……。それより！」

近くにあるスタンダードな丸いちゃぶ台を思いつ切り叩いた。その衝撃でお茶碗やらコップやらが揺れる。……どこから持ってきた？

「何か食べましょう！」

「……はい？」

思考が完全に停止する。

「だから、ラーメンでも餃子でも、チャーハンでも食べましょうよ
！」

待て待て。なんで全部中華系なんだ？ 確かに食べたいけど。

「俺は一応怪我人だぞ。出掛けるのは無理がある。だから……」

「じゃあ出前取ります!」

「どんだけ食べたいんだよ……」。

そんな事を思っている俺をよそに、真乃は携帯を開いていた。病院は携帯禁止だぞ!

しかもチラシなどを持っていない。ということは、電話帳に入れているのか? 恐るべし、東條 真乃。

「醤油と餃子それぞれ五つで餃子は大きめに……」

微かだが内容が聞こえてしまった。おそらく“醤油ラーメンと餃子がそれぞれ五つ”だろう。しかも餃子のサイズにケチつけるとはつくづく恐るべし、東條 真乃。さらに、とおちゃんと棗さんにもおごるなんて。

いや、それよりも……。

「あと一セットは誰が食べるんだ? 他にも誰がいるのか?」

「いえ、私が二セット食べるんです」

「……最近ボケが多すぎだ。ツッコむ側のことも考えてくれ」

「いや、流さんと漫才してるわけではありませんから……」

なぜか真乃は顔を紅くした。何か変なこと言ったか?

そしてそのタイミングで何かが轟く。肝心なのは“響く”ではなく、“轟く”だ。

そう。病院の廊下を走り抜ける騒音だ。そういつのは体育館でやってくれ。

全く最近の若者は……。

「おらあ！ 買ってきたぜえ！」

「あつ！ 陸奥実君、起きとるで！」

全く、この若者が……！ 少しはマナーを守ってほしい。目の前にいるヤツも含めて。

まあ、絶対この二人だとは思ったが。なんでこんなにプアマナーなんだ？

そう思っていると今度は看護師さんたちがドアから睨みつけている。すみません。こいつらはただ極度に空気が読めないだけなんです。

二人は俺の苦労さを全く気にせず立ちはだかった。ちょっと無理して体を起こす。

「無理せんでええよ！ そのまま寝とき！」

「いや、大丈夫だ。それより……」

とおちゃんが抱えているダンボール箱は何なんだ？ 大きく“水”と書かれている。

「とりあえず、ジュースはキツイだろ？ だから水だ」

「いや、そうじゃなくて……」

なんで一本じゃなくてダンボール箱なんだ？

ああ、ツッコミは疲れる。

「えつとやな。たまたまスーパーまで行っとなら、なんと“特売”やったんやあ！そこら辺のやつよりマシやろ？」

「……確かに」

そこは学生兼“主婦”としては大いに納得だ。棗さんは一人暮らしはできるだろう。ちなみに特売は来週までだそうだ。

「……すみませーん。出前の者ですが！」

「来ましたねえ！代金は既に払ってあります。いただきますよー！」

みんな一斉にラーメンを頬張った。戦闘準備早すぎ。俺も一口……美味い。

「ではこれで」

「はい。ありがとうございました」

新米そつな出前の人静かに出て行った。

「……ふう」

やっとゆったりできる時間になった。なんか疲れた。と思いきや

そこへ、白衣を着た男の医者がノックして入ってきた。

「陸奥実君だね？」

「はい」

真乃たちはできるだけ目立たなくして見ていた。

医者は服を脱がせ、半裸状態にする。

「まさに運が良かった。あと数センチずれていたら、君の肝臓は片方失っていたよ」

「……本当ですね。でも、かなり痛いです」

医者の前では無理は言わない。無理をして死んでいくパターンがよくあるのを知っていたからだ。

医者は少し笑うと、頭を撫でてくれた。

「全治二週間くらいだね。命に別状はないから安心なさい。但し、無理な行動、我慢、あと食事は控えるように」

医者は真乃を見ながら言った。真乃は舌を出している。ある意味、俺を襲った犯人だな。

「では、これで」

「あ、ありがとうございます！」

今度はにっこり笑うと、音を立てないように扉を開けて出て行った。

この時代にあんなに感じのいい医者も果たしているだろうか。未経験なのに平気でメスを握ったり、投与する薬を間違えたりするやつもいる時代だ。

だが今の頭を撫でてもらった感触。あれからは温かい何かを感じた。そしてどこか懐かしい感じがしたのは気のせいだろうか。

クーラーは相変わらず一定温度を保って冷やしている。

六戒目「時間」

「……そもそもなぜ、自殺件数は増加傾向にあるのだろうか？ 確かに現代社会は複雑化している。様々な感情が人々を狂わせ……と言っても納得はいく。

しかし今回は違う。倍近く増加しているのだ。

八月九日現在の自殺件数は推定、四万五千件。昨年度の現在の約一九倍だ。

この異常事態について、政府の……」

「なあに見てるんですか？」

「あつ、いや、見てわかるだろ？ 新聞だよ」

世の中は物騒になっていく。その中で鍵を握るものは“情報”だ。様々な意見交換や問題について詳しく載っている。そもそも、新聞自体暇なら見るが。

でも今回ばかりはそうはいかない。なぜならこの原因を知る一人だからだ。そして、この怪我のおかげで気づいた点がある。まさしく、怪我の功名である。

「ふう……」

そう。俺以外に手紙を持っていることだ。これはかなりいい情報だ。いるのといわないのとで大きく変わる。

相談ができることだ。同じ境遇に立たされてる者同士、助かりたい気持ちは分かり合えるはず。

しかし逆に言えば、分かり合ってくれなければ用はない。つまり、生贄にされる。

さらに警察にお世話にならずになおかつ手っ取り早い殺し方。それは自殺に追い込むこと。俺の手紙の回避方法の三番目を見てください。話は早い。

親友を抹殺する。

抹殺方法に自殺は駄目とは書いていない。

……ここまできると恐ろしい。我ながらまるで狂言者のようだ。

なんとかしなきゃ……！

その時、真乃がいきなり立ち上がった。いきなりはびっくりする。どうやら時間のようだ。今は九時ちょっと過ぎ。面会時間っていつまでなんだろう？

「それでは今日はこの辺で帰りますね」

「……そうだな。ひ弱な陸奥実に無理させちゃあダメだよな」

さっきまでだらけていた連中だが、果たしてそれは気を遣ってくれているのか、けなしているのか。

でもどうこう言いつつも毎日来てくれるのは嬉しかった。時々、他のクラスメートも来てくれるが、こいつらほどではない。それでもすごく嬉しいが。

三人はそれぞれ荷物を持って立ち上がる。

「じゃあ、また明日な！」

「……りが……と……」

「何か言いました？」

「ああ、いや、またな！」

そして三人は廊下へと消え去っていった。ドアを閉めるその音がまるで俺を隔離する。そしてまた孤独感を痛感させられるのであった。

やけに寂しくなった。俺はリモコンでテレビをつける。ちょうどお笑い番組がやっていた。

「……………」

そういえば、やけに冷えたものを感じる。特に頬を中心に。原因はすぐにわかった。

「窓が開いてたか。…………届くか？」

俺は全力を振り絞り、窓に手を伸ばした。届きそうでも届かない。自分の腕ってこんなに短いのか？ まあ、寝た状態ではさすがに無理だ。ちなみに誰も起き上がってとは言っていない。リトライ。再び挑戦する。

「…………あとちょっと……………」

のところで手に阻まれた。とても細くて綺麗な手先だった。

「駄目よ、無理しちゃ……………」

俺の代わりにドアを閉め、鍵をかけてくれた。

その看護師さんはすごく魅力的な女性だった。端麗な顔つき、とても長い金髪、綺麗なアーチを描くまつげの奥のエメラルドグリーンが揺らいだ。

「さ、早く横になって」

俺の衰弱した体は言われるがままに寝かせられる。実際に痛いというのもあるが、それよりもその瞳に釘付けにされた。

日本人にはないエメラルドグリーン。

そして看護師さんはちよっとだけテレビを見る。どうやら好きな芸人が出ていたらしく、大人特有の含み笑いをしていた。

しかし、なぜかリモコンで音量調節をする。少しものうるさくなる。さらに窓の鍵をしっかりと点検する。何かおかしい。

「……………」

そしてドアの方を見やる。鍵がかかっている。つまり、外側からは侵入不可能。

それがわかった途端、頭の警報が鳴り響く。これが三度目だ。心臓が速く鼓動して、体中から信じられないほどの汗がでる。クーラーが悪寒を促進させる。

「……………見つけた……………」

「……………！」

周りに聞こえるかと思うくらい心臓が跳ね上がった。……………警報が木魚を叩く音に変わった瞬間だった。

叫ぼうとした時、口を塞がれた。あの綺麗な手で。声が出ない……………。

あの傷が……………。

「うふふ……………」

不気味に妖しく微笑む。もう、駄目か……………。

しかし、パツと俺を解放し、頬に手を当てる。冷え切った汗を温めた。

「私と、同じ人……」

「……えっ……?」

看護師さんはすぐにトレイをベッドの近くに持ってきてくれた。そこには二リットルの水とコップが二つある。

その二つともに水を注ぎ手渡してくれた。正直戸惑った。もしかしたら毒が……、いや、ここまでして殺す理由はない。一思いに飲み干す。

「……ふう」

ひんやりした水が熱を奪いながら喉を通り過ぎ、胃に到達する。そのひんやりさが心臓や脳のオーバーヒートを抑えていった。二杯目には完全に冷やしきり、正常に作動する。

落ち着きを取り戻したところで俺はおそろるおそろる慎重に尋ねる。

「あなたが……俺を刺した……人ですか?」

看護師さんは明らかに表情を曇らせる。それが俺に確信をもたらした。しかし、焦ってはいけない。まだ安全圏ではないからだ。しばらく沈黙が続く。

「……」

「……」

.....

沈黙を破ったのは、看護師さんの頷きだった。

「そつよ……。なら、手錠をかける？」

もう観念はしていると思うが、それとは裏腹に威圧感が立ち込める。乱暴に水を注ぎ、口に流し込んだ。コップを握る両手が微かに震えている。

俺は決めた。

「いや、手錠どころか、電話も使いませんよ」

「えっ……？」

かなり驚いていた。それはそうだ。自分に危害を与えておいて、それを許すなんて有り得ないのだから。
看護師は少し笑った。

「あなたも持つてるわね？ ……手紙」

「……わかってたんですか？」

「女特有の勘よ。気にしないで」

綺麗なブロンドをなびかせながら言った。この人は一体……？
看護師さんの名前は美浦陽さん。手紙は今年の二月十二日の次の日、つまり十三日に手紙が来たらしい。そして期日は来年の誕生

日の二月十二日。

「あなたはいつぐらいに……?」

「俺は二ヶ月くらい前の六月二十二日です。そのようだとかなりバラつきがありますね」

そしてわかったことが二つ。一つ目は年齢に関係ないこと。よく、同年齢の人たちだけ対象にするふざけた事件などがあるが、これは例外のようだ。

二つ目は期日だ。どうやら期日は絶対に次にくる誕生日のようだ。その証拠に美浦さんの期日は来年の誕生日であるのが何よりの証。

「情報交換をしましょう。こんな機会はありませんから」

「……そうね」

俺らはそれから小一時間くらい情報交換した。お互い包み隠さず話し合う。

この機会をどれほど望んでいただろう。同じ境地に立たされている者同士で話したかったのだ。変な言い方だが、仲間がいてよかった。

「そういえば、あなたの手紙って話によればかなり違うわね」

「……どういうことですか?」

頭に嫌な予感がよぎる。

「あなたは二通来たのよね? 私は一通しかもらってないの」

「……………」

さて、問題が発生した。

全て共通だと思われる手紙にいくつかの違いがあったのだ。果たしてどちらが……………？

美浦さんは続ける。

「しかも名前を書かされたわ。そしたら文章が現れて、こう書いてあったわ……………」

その声が震えていて怖かった。…………大丈夫だ。幽霊はいない。

「美浦 陽さん、あなたは2020年の二月十二日にお亡くなりになります。ですが、それを回避するための方法があります。」

細かいところを抜けば俺のとさして変わらない。しかし、最初だけだった。

「一、素直に諦める。

二、自分の年齢から抹殺する無関係の他人の年齢を引き、それが0になるように抹殺する。

三、十八歳未満の無関係の他人を四人だけ抹殺する。

四、最も親しい友人を一人抹殺する。

注、四をお選びの際は一つ条件があります。それは、あなたが手を下すこと。“直接”であればよいのです。

その他、あなたはわけもわからず人気もない裏路地で
されて死ぬでしょう。

そして従うか逆らうかは自由です。」

「……本当、ですか……?」

あまりにもめっちゃくちゃ過ぎる。例えどれかを選んで成功させたとしても、代償が大きすぎる。待っているのは、地獄の結末だ。しかも死に方まで……。これも明らかに悪戯を超えている。

「私は……、どうすればいいの……?」

美浦さんはとうとう泣き崩れてしまった。俺のベッドにしがみついて。たくさんの雫はシーツを湿らせていった。

俺もどうすればいいのかわからない。手紙をもらったあの日からずっと……。でもすべき事は理解してるつもりだ。

「美浦さん、あなたは俺を殺そうとした犯人ですが、そんなことは忘れます」

「え……?」

「生き延びるんですよ！ 別の方法で！ それに手紙がデタラメかもしれないじゃないですか！」

気休め程度にしか聞こえないだろうな。でも……。

「……そうね……ありがとう……!」

くしゃくしゃになり果てていた顔に喝を入れる。ついでに美浦さんにもやってあげた。……やり返された……。痛い。

正直、俺は犯人を憎んでいたし恨んでいた。こんな痛い思いさせやがって……と。

でもそれよりも憎むべきものがあるじゃないか。こんなふざけた

手紙なんかすぐに解いてやる。そして生き延びてみせる。

「幸か不幸か推理系の小説や謎解きをやったかいがあった」

「……あつ、そうだね。それを聞いて思い出したことがあるの」

既に泣き終えていた美浦さんがちょっと噎れて言った。余韻が残っている。

すると白衣のポケットからメモ用紙くらいの紙を渡してくれた。見てみると、数字の羅列とアルファベットの文章だった。

「私の携帯の番号とメールアドレスよ」

「いいんですか？」

「構わないわ。あと、あなたのはあとでいいから……」

美浦さんは最後の一杯を飲むと、立ち上がった。そういえばもう十一時前だ。

「今日はありがとね」

「いえ、こちらこそ。ありがとうございました」

トレイを片手でしっかりと持つ。そして一礼してから出口へと向かっていった。

ドアは空いた手で開かれて、徐々に閉じていき、閉まった。今度こそ独りになってしまった。

「……ふう」

おっ
き
ま
ま
で
湿
っ
て
い
た
場
所
が
、
少
し
乾
い
て
い
た
。

七戒目「余暇」

「あのおく、すみません……」

「……はい、何でしょう？」

俺がいるのは病院だ。

先日、東條から学校に連絡があった。なんでも、陸奥実が通り魔に遭ったとか。全く、あれほど事件に巻き込まれるなと口をとがらせたのに……。でも、大事で何よりだ。

「あの、陸奥実 流って子が入院されてると伺ったんですが……。私はその子の担任の岡本という者です」

「あつ、そうですか……。ですが、陸奥実さんは今日の午前に退院されましたよ」

「そうなんですか。いやあ、よかったです。無事に退院できて。」

そうか。既に退院してたのか。そういえば東條にそれを教えてもらうのを忘れていた。我ながら、駄目だな。

俺は受け付けの人に一言かけて病院を出て行った。

自動ドアが開いた瞬間、熱風が体を焼き付ける。中はクーラー、外は直射日光。この一步でガラリと環境が入れ替わる。最後、クーラーを堪能してから欲を断ち切った。

「仕方ない。本人に直接会うか」

黒塗りされた車の鍵を外し、乗り込んだ。中は外より暑い。すぐ

にエンジンをかけ、クーラーをつける。

「マンションだったな……」

アクセルを思いっきり踏んで加速していった。

「陸奥実、そっちはいいか！」

「大丈夫だよ」

全く、病み上がりの人間を労働させるとは。体中から悲鳴があがっていた。つまりは筋肉痛。当然だ。二週間も入院して、いきなりブルーシートとその他荷物を運ばされればそうなる。

でも、嫌々やっているわけではない。

セミやら鈴虫やらが共に歌い、気分を改めて夏に染める。そして顎に伝う汗がその歌と混じり合い、爽快な心地にさせてくれた。

そんな中、夜空に一筋の光が駆け上がっていき、

満開の花を咲かせた。

そう。今は花火大会なのだ！

以前、鬼ごっこをしたあの土手で開催される花火大会。しかもかなり有名で遠くの都道府県からも見に来るほどのものである。ちなみに昨年は雨で中止だった。だから実質、俺は初めてなのだ。

「よし、杭打つぞ！」

そして俺らはそのポジション取り。花火をよりいい角度で見たいのだ。そしてとおちゃんが厳選してくれたのが、この土手の斜面だったのだ。ここは丁度真つ正面で見れるし、屋台も近くで使い勝手がいい。さすがは自称“場所取り名人”。

「それにしても遅いな」

現在は八月十五日、七時二十九分だ。花火大会開催まであと三分近くしかない。ちなみに、今の花火は三十分前の花火らしい。アバウトな時報だし、なんとも贅沢な。

「全くだ！ と言いたいところだが、女子には女子なりにいろいろ忙しいんだよ」

「いろいろって？」

「いろいろだ！」

よくわからないが、とおちゃんが言うからそうなのだろう。俺は目の前の仕事を始めた。

しかし、とおちゃんは何をそわそわしているのだろうか？

その時、後ろから分厚い木の板を転がす音がした。それは下駄であることは容易に理解できた。そして二人して振り返ってみる。

「お待たせしました！」

「すまんなあ！ 待ちくたびれてしもうたか？」

そこには棗さんと真乃が並んでいた。ここは斜面なので、見下ろしている。

いや、それよりもびっくりなのが容姿だった。

「おお……！」

「……すごいな」

二人とも浴衣姿だった。真乃は空のような色と栗色の髪が見事にマッチしている。トゲがなく実に可愛い。

それと対照的に棗さんは藍色だった。もともと大人っぽい綺麗さが相乗効果でさらに醸し出す。

俺らは釘付けにされたのだった。

「なっ、なあ……、そんなに見られたら、恥ずかしいやんか……！」

「いやいや、めちゃくちゃいいから恥ずかしがるなよ」

そしてとおちゃんはどこから持ってきたのか、三段重ねのブロックに足を乗せた。

「これぞ夏の風物詩！ 画竜点睛！ 花火、かき氷、浴衣姿の美女がいりゃあ、この前橋 透気は南極にいても熱くなるぜえ！」

二人は声を揃えて合わせてやった。……二人は優しい。

俺はあえてツッコミはしない。いや、ツッコむと巻き込まれそうで怖い。いや、軽くヒイていた。

とりあえず、とおちゃんの作戦通り食料を調達しに行く。本人はここでお留守番だ。曰わく、花火の最中に行くのは初心者とする事らしい。さすがは自称“ミスターファイヤーワーク”。

屋台はあの橋にまるで商店街のように並んでいた。ここはもう車両禁止区域なので道路を突っ切っても大丈夫だ。

「きゃっ！」

「ああ、すまない」

「ぐおっ！」

「すみませーん！」

ものすごい人だ。場所という場所に詰めて歩くスペースがほとんどない。つまり接触は避けられない。

人をかき分けながら進んでいくと、屋台が見えた。そこには赤い文字で“かき氷”と書かれている。

「おい真乃、棗さん！ 聞こえるか！ あったぞ！」

「……………ん……………聞こえ……………」

「大事やで！」

人の様々な声が入り混じり、ノイズと化している。距離的に真乃はかなり遠くに、棗さんは……………隣にいた。棗さん、真乃と一緒に……………？

ちよつと真乃が心配になってきた。いくら悪戯小僧でも女の子だ。

「真乃！ 真乃！」

「……………」

返事がない。もしかして……、しまった……！
俺としたことが、なんで気付かなかった！ 下手したら誘拐され
ることだってあるんだ！

「棗さん、今のうちに並んでいてくれ！ 真乃を捜してくる！」

「わかった！ まかしときい！」

棗さんはその姿からは想像できない俊敏さであつという間に屋台
に着いた。俺も早くしよう。

「真乃！ どこだ！」

ひたすら呼んだ。両手で人をどかしながら。ひたすら見渡した。
真乃の顔を浮かべながら。ひたすら走った。汗を流しながら。
しかし見つからない。

「真乃！ まのおおお！」

「私は、ここにいますよ」

いきなり腕に伝わる柔らかい温もり。

「……えっ……！」

その時俺らだけ、いや、俺だけ時間が止まった。

周りの人は平然と歩いていく。子連れの前は笑い合いながら、カ
ップルは一緒に綿飴を食べながら。

でも、その時だけその感触以外に接触がなかった。

それはさらにちょっとだけ強くなる。

「私は、ここにいます……」

「ま、真乃……！」

腕に腕が絡み合い、寄せる。栗色の髪がゆらゆらと舞っていた。とりあえず、空いている左でわしゃわしゃと頭を撫でてやった。

「……俺から離れるなよ」

「……はい」

俺らは目的地へ歩いていった。

途中、また離れそうになったので絡められた右腕をさらに寄せる。真乃は小さい。俺の肩くらいしかなかった。その肩にコツコツと当たると。

ふとして目が合った。真乃は優しく微笑んだ。

心臓は破裂寸前だった。聞こえてるかもしれないほど。それを言おうとした時、真乃が足を止めた。俺も止める。

「流さん」

「ど、どうした？」

唇が震える。

「も、もう、だ、大丈夫ですから……、その……」

「？」

腕に伝わる一定した振動。かなり微動だが確かに感じれる。そしてそれは真乃が言う度に速度を速めていく。頭が熱すぎてぼやけた脳でもその正体は分かった。

「駄目だ。また離れるとまずいだろう？」

「で、でも、ああ、あのですね！ あの……」

自分からやっておいて意外と……？

久々に俺の悪戯心に火がついた。

「ほら、あそこだ。行くぞ」

「う、うわぁ！ 流さん！」

もう抱きついてるとしか言いようがないほど引き寄せられる。絡まれている腕を無理やりひっぱはがし、肩を抱えてやる。ちよつとやりすぎかもしれない。

真乃はちよつとだけ俺の服を掴み、寄りかかる。まるで子猫のように俺の体にうずくまっていた。

あと少しだ。棗さんも手を振ってこちらを確認している。

「むつちやぁぁん！」

「棗さん、悪い！ 少々手間取ったよ！」

そしてやっとここかき氷屋に帰還できた。

「どこにいたん？」

「ああ、あそこらへんでウロウロしてたよ」

と言つても、指差したところは人がうめつくされているところだった。まさか、真乃の方から俺を見つけたとは口が裂けても言えない。

「んで、その抱えてる荷物はなんや？」

そついえば忘れてた。これはちょっとまずい。巧い理由を頭の中で検索する。

「これは真乃の足取りがよくなかったからだよ。肩を貸そつにも身長差あるし……」

これなら大丈夫だろう。案の定、棗さんが追求することはなかった。しかし、俺を見る目がちよつと違うような……。

とりあえず、真乃を解放した。真乃は本当に足元が不安だった。

「むっちゃん、まさかあんた、手え出しとらんよな？」

「え？」

それはつまり……。

「だから、真乃やんと」

「言つな言つなあ！ 大きい声で言つなよ！」

まさかそつちにくとは……。それはそれでまずい。いや、まずすぎる。しかしあの緊張の余韻が続いていて、いい案が浮かばない。仕方ない……。

俺は真乃の両肩をつかみ、耳元で囁く。もうこれしかない。

「真乃、俺の身の潔白を証明してくれ……！ お前にしかできないんだ……！」

そう、本人の口から語らせるしかない。俺のオーバーヒートした脳がなんとか出した答だった。

しかし、真乃は逆に俺の両肩をつかみ返した。そして真乃の口から身を凍らせる一言が出てきた。

「手数料取りますよ……」

この瞬間、真乃の策略の全てが分かった。つまり、ここでミッシェン終了。

「真乃、お前……！」

俺の体から湧き出るように汗が滲む。そしてまた心臓が速くなつていく。しかし、今回は何の気持ちも湧いてこない。俺はずっと掌の上で踊らされてきたのだから。

「大丈夫ですよ。潔白はきちんと証明します。手数料は……、そう

ですねえ……」

別の意味で時が止まった。

「大分遅くなった」

車であちこち行ってたらこんな時間になってしまった。車のステレオがたった今、七時五十二分を表示した。マンシヨンの近くの細い路地に車を停めた。

「……そういえば今日花火大会だったなあ」

花火大会。去年はできなかつたから、今年こそっと思つたんだが……。

とりあえず陸奥実に一言かける程度にしよう。車から降りて鍵をかける。道は薄暗かつた。街灯がポツリポツリと周辺を照らすだけでその間には光がない。とりあえず進もう。

この丁字路を左に曲がれば門にありつけるはずだ。しかし、分岐点までが遠かつた。遠すぎた。足も重い。クーラーに当たりすぎたか。

「そのあなた」

「……はい？」

途中の道の脇にうずくまっている男が声をかけた。顔は暗くてよ

く見えないが、声からして中年くらいだろう。

男は独り言を言いながら立ち上がる。よく聞こえない。しかし、なぜこんなところにいるんだ？

「あんだ、歳いくつだ？」

なんかこの男はマズい気がする。なんというか不気味だ。しかも
どンドン近付いてくる。

ここは素直に言うしかない。

「……五十三ですが」

「……そうか。呼び止めて悪かったな」

男は素っ気なく脇にしゃがみこんだ。一体何なんだ？
俺はできるだけ男の気にふれずに立ち去った。つもりなのだが、
足が動かない。振り返ってみると、

「！」

「あは、あはあはは……」

男がいた。いや、それだけじゃない。

腹に違和感が……。

そう思った瞬間、そこから体中に電気が駆け巡った。そして口に
何かを貼られ……息ができない！

「んうんんうううう！」

電気は激痛に変わり全身の自由を奪い去った。そのままうつ伏せ

て倒れ込む。

痛い！ 痛い！ しかしどうなっている！

腹からは水が流れてくるような感覚がする。それと同時に何かも出てくる。それを理解してしまった時には叫びまくった。

男はなぜか俺のものがきを黙って見ている。

「んぐううううあああああ！」

「悪いなあ……！ あと十秒待つてくれよう……。五分間見ないと駄目だからな」

もはや何だかわからない。激痛と恐怖でパニック状態だった。ただ男が何かを振り上げたのは目に入った。

止める！ 止めてくれええええええ！

「よし！ じゃあショータイムだあ！」

「むがあああああああ！」

「あっははははっはあはあはははっあああっはははははははあ！」

ザクツザク、ブシュツガキメシヤア！ ジャツ、ジャツ、ジャツ、
ジャツ、ジャツ、ジャツ、ジャツ……！

「みんなあ！ エンジョイしてますかああ！」

観客たちは特設会場の周りをうめつくしている。一度火が噴けば、地鳴りと化して俺らを襲うのだ。ただし、しっかりと金網が張られているのでその点は大丈夫。

しかし、なんでこんなにたくさん集まっているんだ？ 花火大会はどうした？

「実況は私、東條 真乃がお送りします！ そしてこちらは私の友人兼commentatorである前橋 透気と奈多弓 棗です！」

ワアアアアアアアアアア！

特設会場の隣にある小さなテントに実況席が設置されている。そこにいつの間にか棗さんとおちちゃんがいた。

「そしてスペシャルcommentatorはなんと市長さんです！」

ウオオオオオオオ………！

初めて見るが、実に市長っぽい。ライトを跳ね返す頭、のほほんとした表情。何気に赤いハイビスカスのポロシャツが似合っている。というか、どういふコネで呼んだんだ？

「それでは市長さんに“男地上決戦”について伺います！ いやあ、市長さん、わざわざ来てくれてありがとうございます！」

「いやはや、どうせ家で寝てるくらいだから逆に感謝したいくらいだよ」

マジですか？ かなり爆弾発言してないですか？

「ありがとうございます！ それでは本題に参りましょう！ 今回の勝負は、“大食い”対決です！ そして料理は……！」

俺らの隣には綺麗に立方体にカットされた氷が置かれた。浴衣姿の女の子たちがそれを専用の機械で細かく砕いていく。それは器に盛られた。

これはまさか……。

「かき氷だあああああつ！」

ワアアアアアアアア！

あの取引をしたがためになってしまった悲劇。でも仕方がなかった。

「流さんが大食い大会で優勝してくれれば、潔白を証明してあげます」

「……お前、その優勝賞品狙ってるだろ？」

「……バレましたか。でも私、欲しいんですよ……」

要するに、契約は優勝ではなく賞品だ。その条件が優勝だから根本的にはさして変わらない。

しかし、大食いといったらかなりシビアな分野だ。

「大丈夫ですよ。ルールは絶対サシですから」

真乃曰く、年に三回のこの大食い大会は通称“男地上決戦”とも呼ばれ、数々の名勝負を繰り広げたとか。勝負は絶対に対一、勝ち抜き戦らしい。

「そして、今のディフェンディングチャンピオンはあのかき氷屋のおじさんなんですよ」

「なるほど、つまりジャンルはかき氷か」

……やるしかない。自分の未来を守るために。やるしかない。自分の潔白を証明するために。

とりあえず、今だけは誤解は解いてもらった。もし負けるようなことがあれば……だが。

「流さん、これだけは勘違いしないで下さい」

「……なんだ？」

真乃は紅潮して俺を解放した。そういえばずっと肩をつかまれているのをつかんでいるのを忘れていた。俺も離す。

「あの時の温もりと私の鼓動は嘘じゃありませんから……。流さんのもの……嘘じゃありませんよね……？」

「えっ……？」

「……尚、シロップは何でもOK！ 飲み物、辛いものは全て禁止です！」

俺はまさかここまで壮大になるとは思わなかった。だってテレビ生中継までされているのだから。レポーターが何人も観客席から押し寄せ、テレビカメラが俺らを映す。

もつとつにでもなってる！

「それでは準備が整ったところで、レディー、ゴオオオオ！」

俺らは同時に武器を片手にかじりついた。

八戒目「決戦」

透明の器に輝く白い妖精。その頂上は淡い赤で染め上げている。それがスプーンで削り取られ雪崩を引き起こす。そして妖精は黒い穴へ放り込まれ、熱を奪いながら消えていく。

その作業を何回繰り返したのか。いや、数えることすらできない。今は一心不乱に繰り返すことが大切だった。なぜならそれが大食いだから。

「さあ始まりました“男地上決戦”！果たして両者はこの一時間にどんなドラマを見せてくれるのでしょうか！」

真乃の饒舌は大したものだ。明らかにナレーション慣れしているのがよくわかる。将来の夢は絶対にアナウンサーだろう。

それにしても、普段食べれば美味しいかき氷をこんなに早く食べてしまうのは勿体無い気がする。味なんかわかったものではない。口に残るのは冷たさと氷の食感だけだ。

「さて、今回のかき氷勝負はどこがポイントになりますかね？ 奈多弓さん！ 前橋さん！」

「うーん、ワイはシロップ思うんやけど……。それぞれ成分がちやうと思っし、何より好みのものチョイスしたらええんとちゃうかな？」

今は手元が忙しいので真乃たちの行動は見れない。ただ、聞いてるしかなかった。

それにしてもめっちゃめっちゃ分析してるな……。ちなみに俺はイチゴにもらった。

……シヤリシヤリ。

「私もわたくしそう思います」

……これはとおちゃんの声なのか？ 工事現場の親方からIT企業のエリート社員になるくらい変わっている。わかりづらいか。

……シヤクシヤク。

「ですが、今回のキーポイントは“我慢”かと思えます」

「と言いますと？」

「一つ目に冷たさです。かき氷は無情にもチャレンジャーの体温を奪い続けます。それによって食べる気も失せてきますし、何より体力を消耗してしまいます。これは持久走と喩えても過言ではありません。」

持久走か……。俺はあまり得意な方ではない。でもちよつと無理矢理すぎないか？ まあ、理屈は合ってるかもしれないが。

……ムシヤムシヤ。

「二つ目に尿意です。これは私の予想ですが、氷を食べているとはいえ元は水です。つまり水分を絶えず摂取しているのです。さらに一時間という長丁場。トイレにチ力い人なら駆け込みたくなります」

な、なんだと！ それはまるつきり俺に当てはまる事じゃないか！

「なるほど！ では、両者がそれで苦しむ可能性は……」

「十分ありますね」

オオオオオオオ………！

間違いない。本場のコメンテーターだ！

それは置いといて、確かに理論上ありそうな状況だ。その考えに当てはめると、シロップはチョイスミスかもしれない。シロップだつて一応は液体。少なからず水分を取ることになる。

そしてとおちゃん、いや前橋コメンテーターが言うように、尿意を早く来すのなら控えた方がいい。

一旦速度を落とす。そして貴重な体力を少し使い、隣を観察すると……、

シロップが全くかかってない！

なっ、なにい！

するとおじさんは目で睨んでくる。その目にはある意思表示が込められている気がした。

ふっ、今頃気づいたか青二才め！

マズい。今ので体力を余計に使ってしまった。

……それにしても生のかき氷は絶対美味しくないな……きつと。だが、さすがにディフェンディングチャンピオンなだけのことはある。勝利に対して執念を感じる。だが……！

俺は睨み返す。

俺はこのままのスタイルでいかせてもらおう！

と表したつもり。でもちゃんと伝わったようだ。

な、なんだと！

おじさんはスプーンの速度を失ったどころかそれ自体を落としてしまった。そしてすぐに拾い上げる。かなり驚いているのがわかる。俺は再び食べることに集中する。

「おおっとチャンピオン！ 手が滑ってスプーンを落としてしまいました。奈多弓さん、あれは……？」

「おそろく重^{フレッジャー}圧^{ヤー}……。見たところ二人は“会話”ができとる。それでチャレンジャーは“あれ”を見たんや……」

今、多分棗さんはチャンピオンのかき氷に指差していると思う。俺は構わず頬張り続ける。

「あれは……？ ああっと！ チャンピオン、シロップをかけてません！」

「そうや！ シロップも液体。チャレンジャーはそれが尿意に繋がることを察したんや……。ところが……」

今度は俺か。それでも食べ続ける姿勢は崩さない。

「ああっと、チャレンジャー！ シロップを無視するがの如く貪っているううー！」

「まさか、そこら辺の気障な高校生あるう者が大食い歴何十年の大

ベテランにハンデをつけるわけあらへん！　しかし、逆にそこを突かれたなら誰だって動揺は隠せへん……」

オオオオオオオ！

「なっ、何ということでしょうか！　私たち素人にはただひたすら食べているようにしか見えないのに、裏では火花の散る激戦をしていたとは！　さすがは“男”です！

さあ、残り三十四分！　まだまだ続きます！」

まだそんなに残っているのか……。恐ろしく時間の経過が遅い。

もうかなり食べた。白と赤の妖精はいくら減らしても新しく復活する。いや、もう妖精でなくて妖怪になりかけている。ないはずの顔が浮かび上がり、俺を嘲笑っているように見える。

体中の感覚という感覚が鈍りすぎていて何をしているのかよくわからなくなってきた。舌と歯は冷えすぎて何も感じない。ただ動いているだけだ。もはや暑い寒いの世界ではなくなっていた。

しかしそれでも、

食う、

喰う、

食う！

喰う！

「ふう……！　ふう……！　ふう……！」

テーブルに積み上げられた俺のオブジェがガタガタ揺れる。それと連動して頭の中の警鐘が鳴り響く。まるでハンマーで殴られたようだ。……痛い！　スプーンが止まりそうだ！

その時何かが倒れた音がする。隣から聞こえた。一旦ストップして見てみると……、

「ぐう……！ ふう……！」

チャンピオンが肘をついてもがき苦しんでいる。体が痙攣するよ
うに震え、スプーンが器と細かく衝突する。間違いない。これは…
…、

チャンスだ。

「うがああああ！」

残りは二十分切った。差を付けるならここしかない！

「ああーっと！ チャレンジャー、スピードを上げましたああ！」

ワアアアアアアアアア！

一心不乱に白い妖怪たちを流し込む。妖怪たちが堕ちながら悲鳴を上げているように聞こえる。食べ終えた器がさらにオブジェを積み上げていく。それはまさしく血と汗といういろの結晶だろう。

まだまだいける。スプーンが我が体の一部のように感じる。羅漢の如き動きは我ながらすごいと思う。頭は以前にも増してひどく響く。

「……………ふう？」

いきなり体中に駆け巡る電流。その電流は俺の体の痺れだった。うっ、動かない……！

ちょうどお代わりして復活した妖怪たち。その山頂に垂直に突き刺さった勝利という名のスプーン。頭はひどい。意識が朦朧としている。雪山に遭難してさらに貧血になった気分だ。

「おっと、チャレンジャーのスプーンが止まりました！」

「マズいですね。あと十二分も残っていますよ」

「ふむっ、勝負をかけるのがちと早かったの！ まずいぞい！」

確かに、相当体に応えた。だがチャンピオンとは引き離せただけ。その証拠に……。

「おらああああああ！」

ワアアアアアアア！

「あああつとお！ チャンピオンがギアを入れてきましたあああ！」

チャンピオンは文字通り、口に流し込んでいた。しかもかき氷はかなり溶けて、ほとんど原型を留めていない。……まさか……！

まだまだ甘いんだよ青二才！ ちよつと弱みを見せただけでこれとはな！ でもその純粹さは悪くねえ！

あれは芝居だったのか……！

チャンピオンが液体と個体の混ざった妖精たちを食べ尽くす。その所業、千手観音の如し。俺も対抗しなくては……！

だが俺の手は動いてくれなかった。

全身を凍らす寒さと今更こみ上げてくる尿意が手を動かすことを許さない。トイレに行っておけばよかった。

「あああつとチャレンジャー！ 完全に止まってしまうたあああ！ 残り八分、このまま逆転になってしまうのでしょうかああ！」

もう誰もが諦めているのだろうか？ あんな若僧がチャンピオンに勝てるわけではないと。俺は負ける……？ まける？ マケル？

……でも私、欲しいんですよ……

「！」

不意に浮かんだ記憶。それはあの時のものだった。彼女があんなに欲しそうな表情を見たのは初めてだった。

もしかして素直に頼むのが恥ずかしくて……？

もういいや……。契約がどうのこうのなんかどうでもいい。俺は真乃に……！

「ぐがああああ……！」

動いてくれ！ 俺の右手よ！ そして奮い立たせるんだ！ 総ての意識を、神経を奮い立たせるんだああ！

「あ、あああつと！ なんとということでしょう！ 完全停止していたチャレンジャーがスプーンを抜き取り、ゆっくり食べ始めましたあああ！」

ワアアアアアアアア！

ばっばかな！ やつは完全に堕ちたハズでは……！

チャンピオンが目て話をしてくる。でもそんな余裕はこれっぽっちもなかった。

意識はゆらゆらと揺らぎ、手元は痙攣する。でもしっかりとゆっくりと口に運んでいく。唯一脳裏に浮かぶあれがどうにか保たせているのだ。

しかし、それ以外にも何かが……。

「がんばれえええ！」

「そつだ！ 諦めるなああ！」

「まだいけるわよおお！」

むつつつみ！ むつつつみ！ むつつつみ！ むつつつみ！

場内エール……？

「あああつと！ 場内を通り越し、場外まで轟く陸奥実コールウウウ！」

こんなのは初体験だった。それのおかげでまた……頑張れます！

「まだ加速していきます！ チャレンジヤーの、いや、陸奥実流が極限状態に追い込まれても支えるモノは何なのでしょうか！ プライドか！ 至福の勝利か！ 私たちには理解できません！」

「何という潜在力やあ……！ ワイにもわからへん！」

「要は精神論なんですよ。何事も諦めず挫けず貪欲に求めれば、必ずと答は出てくるのです」

「ラストスパートじゃああああ！ 二人とも気張らんかああああい！」

観客がカウントダウンを大合唱する。

ラスト十秒。そしてそれは死闘に終止符を打つカウントダウンだ。八秒。長かった。一時間をこんなに長く思うことはない。

六秒。最初はやけになっていたが、こんなに充実感溢れる一日はない。

三秒。これで。

二秒。もう。

一秒。終わりだ。

ビビイイイイイイ！

「しゅっりよおおおおお！」

ワアアアアアアアアア!

鈍いブザー音を一瞬にして掻き消す大歓声。その瞬間、オブジェが係りの女の子の手によって運ばれていった。やっと死闘は終わりを告げたのだと改めて悟った。

「短いようで長かったこの一時間! まずは両雄に大きな拍手をお願いします!」

ウワアアアアアアアアア!

拍手というよりも地鳴りだ。地面をも揺るがすほどだ。しかしマイクの甲高い音により一瞬にして消え去った。

「では、集計は少しかかりますので一旦休憩に入ります。トイレに行く方は近くの公共トイレや民家のトイレをお借りしてください」

その瞬間、先陣を切って駆けだしていったのが二人いた。

「…………ふっ。青二才が、いや、久々に本気を出させてもらったよ、チャレンジャー」

「えっ、まあ…………、あはは…………」

俺らは俺ら専門のトイレにいた。既に係員から場所は事前に聞いてある。本当に二つしかなかった。

そして今、肩を並べているということである。ちなみに俺らの目的の説明はしないでおく。お食事の方は申し訳ありません。

「なあ、チャレンジャー。一つだけ聞きたいことがある」

「……何ですか？」

こういうやり取りは意外に嫌いじゃなかったりする。

「なぜラストはあんなに飛ばせたんだ？」

俺は手を洗いに行く。チャンピオンもそれに付いて来た。この水道は手を入れると水が出てくるオート式だった。意外にシミ一つ無いほどきれい。

「俺はただ……」

「それでは集計が終わりましたので、皆さんお戻りください。繰り返しします……」

放送によって阻まれてしまった。チャンピオンは俺を見ると優しく微笑みかけ、トイレから立ち去った。

俺も顔に水をかけて、さっぱりしてから出ていった。

ステージは静かだった。いや、その表現では生易しい。セミ一匹鳴いていない、物音一つない無音という表現の方が合っている。その静けさは自分の心臓の鼓動さえも耳に入ってしまうほどだ。

そんな全くの静寂な中、ステージ中央にスタンドマイクがポツンと立っている。そこへ実況席から市長さんが歩いてきた。

小さなメモ用紙を開く。

「それでは結果発表です。市長さん、お願いします」

それを切欠に辺りは暗闇に閉ざされた。周りは夜の光のみだ。

なんかこういうのは体育祭を思い出させてくれる。今はそれに近い心境だ。尤も、ここまでは大袈裟ではないが。

「では、発表します……。 “男地上決戦” 勝者は……！」

市長さんの言葉が夜空に伝わっていく。波が流れていくように。

かき氷の頭痛も全く同じだった。押し寄せては引いていく痛みがする。チャンピオンも同様だろう。

そしてやっと息を吸い込む音がマイクで拡大された。

「陸奥実 流！ 勝者、陸奥実りゅうううう！」

……

俺が……勝った、のか？ チャンピオンに……勝ったのか？

ワアアアアアアアア！ ピューピューイーン！ アアアアアア！

信じられない。こんな高校生ごときがチャンピオンに勝てるなんて……。溢れんばかりの達成感と充実感と嬉しさと苦しさ何かとかがいろいろごちゃ混ぜになっていた。

もうわからなかった。でも嬉しい。すごく嬉しい！

辺りはさらに拍手喝采の雨にさらされた。

「逆転に次ぐ逆転！ 彼らは僅か一時間に熱いドラマを演じてくれました……。勇氣、根性、希望、愛……。それらを私たちの胸の奥に刻み込んでくれました……。！ 私は言いたい！ 彼らを……。最高の“男”だドラマと！」

ワアアアアアアアアア！

再び沸き起こった。

そしてすぐに、肩に何か当たった。それは意志を持っている衝撃だった。

「完敗だよ、チャレンジャー……。いや、新チャンピオン！ 俺の負けだ」

そこには屈託ない笑顔で笑いかけてくれるチャンピオンだった。ちよつと涙腺が緩くなった。

「ち、チャンピオン……。！」

ゆっくりと右手を差し伸べる。俺はそのゴツくて肉厚で、とてつもなく熱い手を握った。それによって観客たちはさらにヒートアップした。

おそらく、この握手は未来永劫忘れない熱い思い出となるだろう。

「今、前チャンピオンと新チャンピオンが熱い手を交わします！
そし……ここで……んと……」

あら……？

ちよつと体のバランスがおかしい。いや、それだけではない。景色がグニヤリと曲がりくねり、色が失われていく。しかも砂嵐のような耳鳴りまでする。立っているのも苦しくなってきた。

「チャン………ルトの贈……す！ 贈……は前橋コ……テーター
と奈多弓こめんでー……」

ついに意識までも失っていく。そしてある境目を達した瞬間から、

「っあ……」

なぜか記憶がない。

九戒目「映像」

「おはよう、陸奥実さん。また、入院ですね」

かなり年上の女の看護師さんに偶然会った。自販機の前で。ちなみに、“看護婦”さんとは呼ばず、誰にでも“看護師”さんと呼ぶのが一般的になってきている。

「またお世話になります……」

俺はある種の有名人になっていた。昨日の件のおかげなのか、せいなのか。あれはどうやら相当インパクトがあったようだ。ただし、その代償がこの有り様だが。

でも、あと一週間くらいで忘れるだろう。

俺は看護師さんと別れた後、飲み物を買って戻っていく。

この病院、今思うと相当広い。まあ、ほとんどの科が所属しているものだから、必然的に場所も大きくなる。だが地元の人さえ迷う病院だ。ここに来て約一年の俺では迷路だ。自分の部屋の位置だけ覚えるのできつい。

「さすがにもうあれは勘弁してほしいな」

歩きながらボヤいてみる。確かにあんなことを毎年やってたら身が保たない。その度に入院して迷路に……いや、それはないかもしれない。

「忘れてたよ……」

俺はとても嫌な事を思い出してしまった。やはりあれのインパク

トは強い。

とりあえず久しぶりに思考をそちらに傾ける。

「あれは一体何が目的だ……？」

まずはそこからだろう。

行動には理由が付き物だ。理性的でも感情的でもとりあえず理由になる。そうでなければ本能で動く動物と変わらないのだ。つまり、当然“手紙”にもある……ハズだ。

いや、そもそもこれは誰が送ってきたんだ？ ゆう……は絶対ないから人間としか考えられない。

話を戻そう。

「明らかに俺にさせたいようだな」

そうでなければあんなイカレた方法は出してこない。

そして、俺に殺させて何がしたい？ いや、俺だけでなく同様な連中も含めて。ガラス張りの待合室で俺たちを嘲笑いたいのか？ それとも別の……？

「おっ」

遂に着いてしまった。以前もお世話になった0626号室。ちなみに部屋の数が六百二十六個あるわけではない。左二桁が科の番号で、三桁目が階数、四桁目が部屋である。部屋に関しては二桁になることもあるので、全部で五桁だ。まさしく学校の生徒番号と同じシステムである。

俺はその部屋におそるおそる入った。

「……退院日数、わずか一日」

おそらく、ギネスに申請できるほどの早さだろう。
相変わらずクーラーが風を吹き出しながら部屋を冷やす。そのせいで窓のカーテンが少しだけ揺れていた。真っ白な部屋に差し込む光がそのカーテンにより、一緒に揺れている。

「…………ふう」

しっかりと洗ってあるシート。ベッドに静かに寝転んだ。その前に某炭酸飲料をベッドの脇の丸椅子に置く。時計は一時半を大きくずらしている。

午前中、目が覚めたらいきなりここだった。そして、あの医者があった。名前は神地^{かみち}さん……だったような気がする。

四日。それが言い渡された病院滞在日数だった。

「やて…………」

ついさつき買ってきたジュースを手取る。容器の周りに僅かに水滴が張り付いている。開ける前にそれを指で拭き取ると、水滴が指に溜まり玉を作った。容器の方は太い線が描かれている。ちよっぴり冷たかった。

やっとキャップを開ける気分になった。しかし、指が摘んだ時、軽快な響きが部屋を走る。それは俺の思考を遮断するようなノック音だった。

「…………どうぞ」

名残惜しむように元の位置に戻した。早くしないと炭酸が……。ゆっくりとドアが開く。すると、意外な人物がそこにいた。

「流さん……」

「……！」

真乃だった。一瞬、美浦さんかと思ったり。

真乃は普段と不似合いに暗い。何か嫌なことでもあったのだろうか？

「どうした？ そんな暗くなって」

暗いというよりも落ち込んでいるとも、申し訳なさそうとも取れる。

とりあえずさっきのやつを別のところに置いて、真乃に椅子を差し出した。今回はちよつと動いても大丈夫だ。そして俺はベッドに足を垂らして座る。

真乃は同時に背もたれのない四つ足の椅子にちよこんと座った。

そしてすぐに頭を下げた。

「ごめんなさい！」

「？ 何がだ？」

一体何に対しての謝罪だ？

「流さんが病み上がりして間もないのに、あんな無理をさせてしまつて……」

そういうことか。

ちよつと意外。真乃が体の事に気にかけてくれるなんて。やはり、そこらへんは女の子なのだろうか。

さすがに悪戯心は湧かなかった。

「気にするな。いつものこと……えっ？」

真乃が俯く。……？

「……う、……あうっ、ううっ……、えっ、う……」

泣いてるのか……？ それとも嘘泣き……？

「……う、ごめん、なさい……！ ごめんっなさい……」

本気泣きだった……。雫がポロポロと落ちているのがわかる。

どうしたものか。まさかこんなに泣くとは思わなかった。その雫と時々漏れる嗚咽が俺の罪悪感を引き立てる。こんなに……。

ちよっと展開が早い気がするが、仕方がない。

「……全く、世話のやけるやつだな」

「えっ……？」

俺はその雫を漉くってやった。そしてニツコリと笑った……つもり。多分上手く笑えていない。

真乃はびっくりして遠退いてしまった。確かにいきなりやれば、誰だって驚く。

「だから、気にするなって言っただろう？ それに俺自身が楽しんでたんだから、誰が真乃を責めるんだ？」

ちよっと腹は壊したが、あの時に比べたらなんてことはない。

それを切欠に真乃は茹で蛸のように火照った。どうやら泣くことより他のことに気持ちが傾いたに違いない。
ピタッと止んだ。

「……流さん……、あの……」

「はい、話終わり。それで何の用だ？　まさかそれが用か？」

「えっ？　あ、ああ……」

もう鬱陶しいので無理やり話を進める。こんなのを続けたら一日が終わってしまう。……鼻がかゆい。

真乃は頭をくしゃくしゃにして唸っている。消化不良なのか。でも、さつと髪を整えて深呼吸する。

「私としたことが、入り乱れてしまいましたね」

「まあ、いいよ。で、話を戻すぞ。何か用か？」

「はい、実は聞きたいことがあるんです……」

真乃はやつと元に戻ったようだ。今度は大丈夫だろう。

しかし、それから少し間が空いた。とても言いにくいことなのだろうか？　その間に変な空気だった。空気に動きを感じないというか、流れが止まったというか。

真乃の目つきが険しくなった。

「その眼、コンタクトしてますか？」

「……？　ああ、してる。それがどうした？　そんな大したことじ

やないだろうっ?」

真乃が立ち上がって俺の前に立ちはだかる。顔が少し高くなった。茶色の瞳は真っ直ぐ俺を見下ろしている。いや、俺の眼をただ見つめている。

「それは、……………ですか?」

「…………? 何だって?」

よく聞こえない。まるで自分に言い聞かせているようだった。焦らさないではつきり…………。

「…………それは、カラーですか?」

「…………えっ…………?」

何を言っ…………?

「もしかして、カラーコンタクトって知りませんか?」

いや、知っているどころか今している。ちなみに、俺のこれはかなり特殊な素材でできていて、十日間くらいなら付けっぱなしでも大丈夫なのだ。もちろん特注です。高かったです。じゃなくて、問題はそこではない。

なぜ真乃がそれを知っている?

俺は自分の家では寝るとき以外でも常備しているし、人前では尚更だ。そして二週間くらい入院した時だって、医者には“コンタクトを付けている”としか伝えていない。付け換える時も男子トイレの個室で、携帯を鏡代わりにしてやった。つまり、秘密の漏洩はな

い……と思う。

とりあえず落ち着こう。今ここで狼狽したら、それこそ“Yes”
”になってしまう。”

「……なんでそう思う？」

返答によってもそれが答になってしまいかもしれないので、神経
を使う。

「あれれ……？ 流さん、こちらが質問しているのですが……？」

この手には乗らないか。

どうする？ この秘密は知られてはいけない。気味悪がられるの
は百も承知だし、何よりも自分だって気味が悪い。赤が強い茶色な
んてまるで吸血鬼じゃないか。

冗談はさておき。もう最終手段だ。それは、

「いや。そんな大層なものじゃない」

嘘をつくこと。

「そうですか……、そうですか……」

「……ああ。悪かったな。ご期待に応えられなくて……。……？」

真乃は俺を無視するかのように、延々と呟いている。今日はとこ
とんおかしい。

その時、頭の中でいきなり何かか響き渡った。それは危険を報せ
る警報だった。つまり、何かかやばいということだ。ということは
真乃が……？

とりあえず、様子を見て……。

そう思った矢先、真乃は俺を押し倒した。あまりに唐突で、何が起こったかを理解するのに数秒かかった。しかしいざ行動に移そうとするが、動かなかった。いや、動かせなかつた。

「ま、真乃……！」

「……」

そう。真乃が馬乗りしていたからだつた。両膝で腕を巧く押さえつけている。

ま、まだ心の準備が……、じゃなくて！

真乃の顔が急接近した。顔と顔の隙間は十センチなかつた。それによつて肥大化する瞳が驚きを隠せない顔を映しだしている。

「流さんにも知られたくない事つてありますか……？」

「ちよつと待て、痛い！ 真乃、落ち着けよ……！ どうしたんだ！」

肩にかかる強烈な圧力。真乃が肩を掴んでいる。これは女の子の力じゃない。アームレスリング級だ！

「ふふふ……。流さんってクールな反面、かなりお茶目で可愛いですね……」

何のホメコトバにもなっていない。なぜなら、不気味に微笑んでいるからである。まるでこれから起こることを楽しむかのように、そして哀れむかのように……。

そして気がつくくと、強烈な痛みがなくなっていた。だが、両手に

はそれぞれ銀色を持っていた。

ちよつと待て！ それは話にならないぞ！

「何する気だ！ 早まるな！」

もう叫ぶかのように呼びかける。そして助けを呼んだ。だが、誰かいる気配が全くない。

「流さん。我慢できません……。あなたを壊していいですか……？」

「くう……。！ 離してくれ！」

その想いは届かなかつた。それどころか二つの輪っかを腕と共に、ベッドの柵にひっかける。つまり両手は完全に動かない。乱暴に動かすと鉄同士が擦れるが、同時に手首まで傷つけてしまった。

「あなたを壊してあげます。そして私もあなたと一緒に壊れます」

「ばつ、馬鹿！ 早まるなよ！ 落ち着け！ や、やめ……。止める
おおおおお！」

両手で銀色に光るそれを握り締め、ゆっくりと……。、

あの古傷に……。。

……

「うわああああああ！」

「ぎゃあっ!」

はあっ、はあっ……………、はあっ……………、はあっ……………。

肩が重い。腕が痛い。脇腹が軋む……………。

ここは……………？ って真乃!

反射的に真乃と距離を置いた。長すぎる栗色の髪を床に散らし、尻餅をついている。どこからどう見ても頬を殴っても、やはり真乃だった。

「流さん、いくらなんでもヒドすぎますよ! 人を突き飛ばしておいて……………!」

とりあえず、謝りながら手を貸した。軽い圧力が手に掛かる。

「夢……………だったのか……………?」

「あっ、そういえば相当唸ってましたよ。もしかして、怖い夢でも?」

いろんな意味で怖かった。だって目の前のやつが……………。

でも、この調子はいつもの真乃だ。ということはあれはやはり夢……………? 少々リアル過ぎるが、あれは夢であったと確証づけることにする。

「ふう……………。ところで、いつぐらいから寝ていた?」

「えっと、私が来たのは二時十分くらいですけど、その時からはずっと寝てましたよ」

今の時間は二時三十二分十五秒を切ったところだ。ここに来たときは一時四十七分だったから、時間的なズレはない。俺はホッと胸を撫で下ろすのだった。

「そつだ。今日、真乃は一人なのか？」

と思いきや。

「はい、実は聞きたいことがあるんです……」

その一言で俺は凍り付いた。いや、まさか……？ でも……。と、りあえず話を進めてみよう。あの夢と同じように。

「その眼、コンタクトしてますか？」

「……あ、ああ、してる。それが……どうした？」

真乃が立ち上がって俺の前に立ちはだかる。顔が少し高くなった。茶色の瞳は真っ直ぐ俺を見下ろしている。いや、俺の眼をただ見つめている。

ここまで全く同じだと逆に気持ちが悪いな……。

「それは、………ですか？」

「……？ 何だって？」

ここまで同じなのか。誰かが見ていたら手抜きだと思われてしま

いそつだ。

だから頼む。あれを聞かないでくれ……！

「……それは、カラーですか？」

……同じ。同じだ。まるでビデオを巻き戻し、再生したかのように。しかし、なぜかインパクトが弱い気もする。あっさりとしていた。

それは大きく違うことが一つあるからだった。そう、この“結末”を知っていることだ。だから、俺の知っている“結末”と違うことをすればいいのだ。

すなわち……、

「……よく気づいたな。判ったのは真乃が初めてだよ……」

嘘をつかなければいい。秘密を打ち明けることになるが、命に比べれば……。

「本当ですか！ ちょっと嬉しいですねえ！」

この通り、全く違うシナリオ。

真乃は俺の偽物の瞳をじっと見つめる。

「あの、ついでのお願いなんですけど、それを外して見せてくれませんか……？」

そこまで？

でも、そこまでする必要はない……。

真乃が俺に熱烈な視線を送っている。それを避けるだけで精一杯だった。そしてついに根負けする俺であった。

本当に閲覧料を取りたいくらいだ。いや、もう貰っているか。

「……わかったよ。じゃあ、声かけるまで後ろ向いててくれ。……
恥ずかしいから」

「はい！」

真乃は素早く背を向けてくれた。なんと素直な女の子なんでしょう。

俺は仕方なく外すことに。コンタクトは専用の容器に入れ、近くの椅子の上に置いておいた。

「いいぞ。あまりじろじろ見ないでくれ」

「はいつ！」

真乃は素早く振り向いた。そして本当にじろじろ見ずに、一直線に瞳をのぞき込んでいた。それはそれで恥ずかしいものだ。

果たしてどんな想いで見ているのだろうか？ 異端の眼？ 好奇の眼？ どちらにせよ、口外してほしくなかった。

「すごいです……」

「真乃、近すぎだよ……あっ……」

なぜか分からないが後ろに倒れてしまった。押されて……はいない。

そして真乃の顔が急接近した。顔と顔の隙間は十センチなかった。それによって肥大化する瞳が驚きを隠せない顔を映しだしている。

つまり、同じ……？

「綺麗です……、流さん」

「あっ……!!」

古傷から痛みがすると思ったら、真乃がそこを掴んでいた。包帯を巻いてあるし傷口は塞がっているが、チクチク痛む。それによって汗が滲み出てくる。

「真乃、痛い！ 止めて！」

「……!!」

我に返ったように離れてくれた。

俺は一瞬、また殺されるのではと心配した。いや、怖かった。

真乃がそこを優しい手つきで撫でてくれる。……ちょっとだけ痛みが和らいだ気がした。

「すみません。私、スイッチ入っちゃうとイジメたくなっちゃうんです……。流さんの眼が綺麗だから……」

それは別に構わな……くはないが、俺に責任転嫁したよな？ しかも天性の……。これから気をつけておかないと何されるかわからない。

真乃の意外な性格。そして俺がバラしてしまった秘密。不釣り合いだけど、おあいこだろう。

「あ、流さんまた眼が……！ イジメていいですか？」

「却下。速やかに退去しなさい」

ところで、あの夢は一体なんだったんだろう？

そんな大切な事を真乃との会話で薄れていった。そしてこれが幸か不幸か今はわからなかった。

十戒目「擬態」

「はあ……。全く、かなり人使いの荒いこと」

堅い椅子に座りながら一人グチる。生憎、隣には友人がいるのでグチっても大丈夫だ。だが、一番楽かと思われたデスクワークが苦痛に感じてしまうとは。肩は凝る、目は疲れる、腰が痛むと三拍子が揃ってしまったのだ。

少し厳つい友人は苦笑いした。

「全くだな。人使いが荒いことで有名だから仕方ない」

「でも、あの人は能力は飛び抜けているし、人望が厚いよ。だから俺らはある人の下でやりたいんだ」

さて、刑事の話は終わりにして仕事に戻ろう。ノートパソコンの横で湯気を上らせるコップを手に取り、すする。昼は眠くなるのでブラックにしている。

俺はキーボードを打っていった。

「報告書」

八月十五日に事件が発生した模様。詳細は下記する。

一、中年男性（身元不明）が マンションの近辺の裏道で死亡。

二、中年男性は……」

「八月十五日、五十歳くらいの中年男性が路上で死亡した。男性はマンシヨンの裏通りに車を止め、徒歩で行くところを刺殺された。その裏通りは灯りが少なく、かつ人通りがほとんどない。そのせいか犯人は未だに解明せず……」

「……………ふう」

思わなかった。つい二日前に殺人事件、それもうちの近くで起こった。ついでには、だが、不幸中の幸いか当時俺はかき氷を食べていた。

いくら関係ない事件だとしても、近辺では気持ちが悪い。しかも手口が恐ろしく似ている。これが同一犯なのかどうかははっきり判る。

「……………ふう」

それにしても、もう院内生活も飽きた。

あの二週間のうちの九日目までは我慢できた。けどさすがに、中庭だけの散歩は辛いものだ。それ以外、無論外出も禁止。結局今しているようにベッドでゴロゴロするか散歩するかのどちらかだけなのである。

でもなぜか今頃になって気付いたのは不思議だ。

「今日は真乃たちは来ないようだしな……」

現在は八月十八日、一時四十三分。真乃が来たのは一昨日で昨日は適当に一日中談笑。疲れてしまってテレビや新聞も見ず気になら

なかった。そしてたった今、新聞を読んだわけである。

「……そして事件が起こったとなると……」

そのタイミングでノック音がした。

俺はベッドからゆっくりと降りてスリッパを履く。そして音のする方へ向かった。

腹を壊したせいかな、あの古傷まで痛む。もうかき氷は食べないよ
うにしよう。

ドアのノブに手をかけ引っ張った。

「どちら様ですか……」

「どーも」

なんかどこかで見たことあるような、ないような……。
とりあえず見間違いと判断して、ドアを閉め直す。

「待つて待つて！　なんで閉めるんだい！　開けてくれよ！」

「……………あつ」

五分の二くらい思い出した。

ちょっと土色っぽいコートにテンガロンハットっぽい帽子、それ
らにパイプ煙草をくわえてるイメージのある職業の方だ。いや、別
に実際に着ているわけではない。普通のYシャツに藍色のスーツズ
ボンだ。

もう一度開けてみる。

「やあ、こんにちは陸奥実君」

「……すみません、やっぱりどちら様ですか？」

「えっ？ いや、ちょっとヒドいなあ！」

だからあくまでもイメージだけだ。こんなに若々しくてクチの軽そうな人がイメージ通りのわけがない。それに高校生と見間違えられそう。いや、厳密にはあった。

なぜか前髪だけ四方八方に跳ねていてあとは真っ直ぐの真っ黒で、力が有り余ってそうな弱々しい顔つき。だがそれらをカバーする背の高さ。180センチは余裕で越えている。

「冗談ですよ、虹さん」

「あはは……。冗談でよかったよ」

彼は新戸 虹さん。うちのクラスメートの兄で刑事をやっている。あるひよんなきっかけで知り合ったのだが、思い出したくもない。それにしても不思議なものだ。こんな平社員みたいな雰囲気を出しているのに、刑事とは……。人を見かけで判断するということか。

「今日は弟さんはいないんですか？」

「あっああ。今日の事は話してないよ……」

その弟が実に少し気が合わないやつだから、ちょっとホツとするでも、“話してない”とはどういうことだ？

そこは聞き流さずに突っ込んでみる。まあ、おそろくは……。

「話してないとはどういふことですか？」

虹さんは手提げの革鞆からバインダーとシャーペンを取り出した。予想的だ。

「見舞いついでにコレさ」

「もともとはソレついでの見舞いですよね」

「またまたあ。まあ、とりあえず、立ち話もなんだから座ろうか」

それは俺の台詞なんだが……。

虹さんに例の椅子を差し出した後にベッドに座り込んだ。なんだか上目線で申し訳ない気がするが仕方ないだろう。本人も気にしていないようだ。

虹さんは流れるようにペンを動かしていく。余程の欄があるのだろうか。

「さて、いくつか質問してくけど、それに該当するなら“ハイ”、しないなら“イエエ”、あまり言いたくないことなら“シュワツチ！”って答えてね」

「……悪いですけど、“シュワツチ！”は“イエナイ”に変えて答えますよ」

なんでそこでヒーローのかけ声なのかわからない。

それにしても、虹さんの質問形式は変わっている。普通なら具体的に質問して、それに対して回答者が具体的に答える。だが、これは具体的な質問は出題者のみ。回答者はイエスかノーで答えればいいのだ。だが逆に言えば、完全に割り切らなければならない。それ

に、虹さんは聞き込みの専門家らしく、大抵の嘘は見破れるという。

スベシャルリスト

「じゃあ早速ね……、「ここ最近、異変を感じる」」

「……うーん……」

なんとも微妙だ。異変が起きているといえば起きているが確信が持てない。しかし、嘘は絶対にいけないのが暗黙の了解だ。

「……“ハイ”」

「うんうん、なるほど。では、“その異変を具体的に理解できる”」

「“ハイ”」

「ふんふん……」

いつもは弱々しい虹さんも、仕事になればそれなりに逞しく見える。一応警官だから。ちなみに虹さんは柔道は黒帯、剣道は免許皆伝らしい。

それから、結構な量を受け答えしていく。“アイスクリームとかき氷どちらが好きか”と全く関係なさそうなものから、“当時は自宅にいたか”など、一番始めに聞くべきことまで消化していった。

「ラスト二つだから頑張ってね」

「はい」

少し疲れたかもしれない。

虹さんは間を空けて言った。

「……“一週間前くらいの入院は後ろから刺された左脇腹の傷のせいで”」

「……！」

なんでそんなことまで知っているんだ……？ いや、それは驚く点ではない。他の看護師に話を聞けばわかる。

正直“イエナイ”と答えたいが、それだと結果的に答は同じだ。

「“ハイ”……」

「そうか……。痛かっただろう？」

「はい。あんな痛みは初めてで……う」

あれを思い出したら少し気持ちが悪い。頭も痛くなってきた。吐き気まで……。まずい、頭にまがまがしく映ってきている。そつと頭をさする感触がする。

「大事かい？ ごめん。思い出させちゃったね……」

申し訳なさそうに言った。仕方がないんだ、仕事なんだから。俺は倒れかかった体を左腕でなんとか支える。急に体が重りにつけられたようになって、重い。

「いや……、平気で、す……。ラスト、お願いします……」

「……いや、止めておくよ。とりあえず今は無理しないで横になっ

てよ」

虹さんの鍛え抜かれた両手が俺を包み、ゆっくりと下ろす。ある意味強制的だった。でもその腕は俺を不思議な気分させる。

「今日の仕事はこれでおしまい。」苦労様」

「あ、あの……、あと一つは……？」

「ああ、これは陸奥実君の体に悪いからしないでおくよ」

それが一体何なんだ？ 無性に気になる。

虹さんはニッコリ笑ったあと、鞆から某メーカーのペットボトルの清涼飲料水をくれた。まだ気分の優れない俺としては最高にいいものだった。虹さんも喉を枯らしていたようで、喇叭飲みしている。

「ふはあ！ ……やっぱりこれだよね！ 社会人にジュースは辛いよ」

「虹さんも歳ですね……。ジュースはもう受け付けられないんですか？」

「うーん。どうもダメになったようで……。ってこれでもまだ二十六だぞー！」

全く、俺より十も上なのにイジられるとは……。まあ、この人の人柄が幼いからでもあるが。どっかの誰かさんとは大違いだ。

とりあえず久しぶりに会ったので、体調を取り戻しながらいろいろと話した。友達の兄と仲良くしているやつも珍しいかもしれない。そして二人だけの時間というのもいいものであると実感したのだった。

一体どれくらい話しただろうか。

虹さんの話は意外に面白いから、時間の進みがあつという間だ。それを思いながら外を見ると藍に染まりかけていた。

「……そろそろ行くよ」

「あつ、はい……」

ついさつきまで陽気に語っていた虹さんもそれに気づき、支度を始める。俺は虹さんの使った椅子を無理せず片付けた。その間は終始無言だった。

「虹さん」

「？ なんだい？」

支度が済んだ直後に呼び止める。鞆を片手にかけて振り向いた。

「その、ですね……」

口から出ようとする言葉が喉の奥に引っかかり、巧く出ない。いや、噛み締めて出させない。それとは裏腹に手が震える。

「どづじたの？」

心配そうに窺う虹さん。でも、今の俺は素直になれなかった。いや、なりたくなかった。

「なんでもないです。今日はありがとうございました。弟さんにも宜しく伝えてください」

「あ、ああ、伝えておくよ。それじゃ、さよなら」

やはり素直になることは今の歳では難しすぎる。

俺は廊下へと向かう背中をじっと見ていた。あの頃の懐かしい記憶を思い浮かべながら。そして、それらが一瞬にして儚く散ってしまふ虚しさを噛み締めながら。

「疲れたなあ……。でもこれで、陸奥実君はシロだな」

今の会話、表情、反射的行動、どれを観察しても常人の反応だった。ある一部を除いて。

そもそも、陸奥実君が人を殺すわけがない。彼は人の命の重さを十分知っている。しかも……。とりあえず、シロでよかった。

「虹にい！」

廊下の奥の方の待合い席にいた。自分の弟の瑠璃人だ。

「なんでここにいるんだい？ 陸奥実君のお見舞いかい？」

瑠璃人はにっこり笑う。

瑠璃人は自分と違って少し大人っぽい。さらりとした黒髪にシャープな顔つき、メガネの奥の瞳はほとんど黒に近い茶色で埋め尽くされている。背はそんなでもないがこんな冷めた優等生っぽい青年が自分の弟とは思えない。でも、根はとてもいいやつなんだ。強情だけ。

「いえ、虹にいいお迎えです。帰りましょう?」

「ああ。ありがとっな、瑠璃」

瑠璃人の頭を撫でてやる。信じられないほど髪が抵抗なくすり抜けていく。瑠璃人はそれがたまらなく好きらしい。

自分らは廊下を歩き出した。途中、何人かの一般人とすれ違う。その度に軽い会釈と挨拶を交わすのだった。

そののしばらく後に瑠璃人が手を引っ張った。

「そういえば、陸奥実君はどうなのですか? シロなのですか?」

瑠璃人は陸奥実君にかなり興味を抱いている。彼と同じクラスになった時かららしい。その証拠に“どこに興味があるんだ?”と聞いてみたら、“全部!”と即答されてしまった。

「大丈夫だ。彼は完全にシロだよ」

「……そう」

「?」

意外な反応。残念そうにも見えた。
そしてそれから沈黙が始まった。しかし、自分らが階段に差し掛かった時に瑠璃人がひとりごちた。

「陸奥……がク……かったなら、そ……夕……て僕の……チャにし
ようと思ったのに……」

「……えっ？」

「ああ、いや、なんでもないです。……あはは……」

瑠璃人は勢いよく二段飛ばしで階段を降りていった。自分もそれにならって降りていった。途中、足が滑って頭を打ちそうになったのは言うまでもない。

十一 戒目「水面」

サアアアアアアアアア……………

雨。

サアアアアアアアア……………

雨。雨が降っている。

サアアアアアア……………

ネズミ色がバラつく曇天から無限に雫が垂れてくる。見上げると、雫がたくさん頬や眼に当たって落ちていく。それが変に冷えていた。

「……………ふう」

八月二十日、何時かはよくわからない。多分、退院したのが八時過ぎくらいだったから、二時くらいだろうか。そして、今いるところは……………。

「……………う、うづうつ……………、っ」

「泣くなよ。父さんはそれを望んでないぞ」

「そうよ。お父さんを最期まで見送るのよ……」

とても見たことのある建物の前だ。

まるで聖堂のような入り口の脇に変な銅像が見下ろす。そこに装飾された車がやってきた。木で拵えた大きな箱が家族の手によって出される。そしてそのまま中へと入っていった。

「……陸奥実……」

大きな手が肩を叩く。こんな手は一人しか思い当たらなかった。

「とおちゃん……」

「まあ……仕方ないよな。笑顔でつてのも無理がある」

「……まさかあの殺人事件の被害者が……」

その事実気づいたのはこれが始まるずっと前、しかも遺族の口からだった。

「……すみません。どう言っただご用件でしょうか？」

「……」

俺と同年代くらいの女の子とかなり年の離れた兄らしい青年、彼

らの母親と思われる人が玄関に佇んでいる。それは俺が退院して我が家に着いて何十分か後だった。彼らは全員して俯いていた。

「とりあえず立ち話も何ですから、お上がり下さい」

彼らは靴を並べて上がっていった。

居間に着いて、椅子に腰掛けるように促す。そして冷蔵庫から出した飲み物とコップ四つを持っていった。それらに注いでいく。クーラーはとりあえず付けた。

「……………」

「ありがとうございます……………」

長方形のテーブルに三人と一人が向かい合う。しかし、言葉が見つからない。少し静寂が続いた。ひんやりする風がクーラーを通じて送られる。その機械的な音だけが時間を感じさせてくれる。それに拍車をかけるように青年が口を開いた。

「……………父を、知っていますか？」

「……………えっ？」

「……………父です。……………知りませんか？」

いきなり言われてもわかるはずがない。いや、そもそも彼らとも面識が全くないのだ。なぜ俺は家にながらせたのだろうか？

だが俺に用があるのは確実だ。そしてここで嘘をついても意味がないのも確実だ。

「すみません……。ご存知ありません……」

「……ふざけるな！ あんたのせいで殺されたんだ！」

「？ 言っている意味がよくわからないのですが……」

テーブルを思いっきり叩く。コップがテーブルの上で揺れ、音を奏でた。

しかし、なんでそんなに怒らなければならないんだ？ しかも人を殺した覚えなど……。

いや、そういう関連ならば一つ思い当たる節があるかもしれない。父親……、殺された……。俺と関係がある……。

「失礼ですが、あなた方は岡本先生のご家族ですか？」

「当たり前だ！ ふざけるのもいい加減に……」

「落ち着きなさい、和美^{かずみ}！ 陸奥実さんは何の関係はないでしょう！」

母親は和美と呼ばれた青年を座らせた。女の子も一緒に手伝う。

しかし、いや、でも……。

「ごめんなさい……。兄は短気なものだから……」

「いえ、気にしないでください。それより、詳しく教えてくれませんか？」

「……わかりました」

女の子、早夜さんはこう告げてくれた。

事件のあったその日、先生は生徒から連絡を受けていたようで、俺をお見舞いしようとしたらしい。でもその時間帯には既に退院している。そしてあの時間に、死亡。それはあの日に読んだ新聞の通りだった。

しかも、新聞に書いてあった“刺殺”は生易しく、実際はめった刺しに近い状態らしい。

肉の隙間から本来見えるはずのないモノが飛び出し、でもなぜか頭だけは綺麗に残してある。……それを想像するだけで吐き気がしてくる。

「……なるほど。つまり和美さんは俺が午前中に退院せず、岡本先生と会っていれば、死なずに済んだということですか？」

「……………」

和美さんはコップの中のやつを一気飲みして俯いた。しかし、それだけだ。何も言わないということは、肯定の意味であると捉えられる。

なぜだ？ なぜ俺に文句をつける？ 俺は普通の事をしたただけだ。そう反論しかけた時に、誰かが呟いた。それは岡本先生の妻だった。

「陸奥実さん、もういいんです。夫が亡くなったのはどうしたって変わらないんですから……………」

そのどうしようもない言葉に、わかだまりが完全に消滅した。

それに…………、いや、それはいいとして。俺は大切な事を思い出した。

「お葬式はもしかして今日ですか……？」

岡本先生は俺のせいで死んだ。

そんな強引な八つ当たりが未だに心に染み着いていた。俺は知っている。大切なものを失う苦しみを。まるで今まで積み上げた積み木を見知らぬやつに壊されるような……。

「……つ、……つみ、陸奥実？」

「ん、ああ、何？」

「中に入ろうぜ。みんな行っちゃったからよ」

周りを見渡せば、いつの間にか残っているのは俺とおちやんだけだった。ずっとここにいたせいか、喪服代わりの制服は青から黒へと染まっていた。

「……ごめん、気持ち悪いから先に入つてて。」

「……わかった。無理するなよ……」

とおちゃんはびしょびしょのまま中へ入っていった。濡れた靴が鳴らすくぐもった音は雨でかき消されていく。

本当のところは本当だった。あの時の記憶が呼び水となって思い出されたせいだ。俺の場合、これで三回目だから。

コップに入った濁りを沈澱させるためには、落ち着きが必要だった。俺は少し離れたベンチに座る。髪は風呂に入ったように濡れ、次から次へと垂れていく。体は濡れすぎて、まるで服を着たままプールに入ったようだ。重い。

「…………ふう」

雨は容赦なく続いている。丸一日止みそうにないほどだ。でも冷えるためには必要だった。退院したばかりだけど大丈夫だろう。背もたれに寄りかかり、頭を垂らす。見えるのは点を中心に広がっていく輪っかのみ。

「……………」

気持ちいい……。髪から伝う水はおでこから顎まで渡り、落ちる。あるいはそのまま首を通り過ぎていく。Ｙシャツが体に張り付いている感じがする。

しばらくして、いきなり地面がさらに暗くなった。それと同時に体中に降り注ぐ雫の衝撃も減り、地面に広がる輪っかたちがなくなった。

おそるおそる見上げてみる。

「陸奥実君……………」

疲れたせいだろうか。目の前が少しぼやけてみえる。

「？ お前は……………」

「忘れてしまいましたか？ 新戸ですよ」

にいど……？

そいつは俺の横に座る。俺は頭の中を無理せず緩やかに検索していった。

……思い出した。

「なんでお前がここにいる？ 早く中に入ってこいよ」

「酷いですね……。あなたはなぜそこまで嫌うのですか？」

「別に嫌いじゃない。ただうっとおしいだけだ」

新戸 瑠璃人。いつぞやの人の弟だ。一応クラスメイトで、やけに俺に突っかかってくるやつ。成績でいつも俺を超えようとしている冷血人間だ。

瑠璃人は黒い傘を差している。

「でも、そういうところも嫌いじゃないですよ……」

「黙れ。お前は男に興味があるのか……？」

「そうかもしれないです」

即答するな。余計に気持ち悪くなる。しかもそっち方面にいったら、R指定に入る。

「とりあえず、これあげますよ」

「？」

手渡されたものは、温かい缶だった。今日は夏に似合わず、異常

に涼しい日なのでありがたい。でも……。

「俺はコーヒーは好きじゃない」

「あれ？ そうなのですか？ じゃあこっちにしますか？」

それは既に開けられたジュースだった。

俺は丁重にお断りし、我慢してコーヒーを飲むことにする。苦い。

「そういえば、なんでここにいるのですか？ 風邪引きますよ」

「……別に。特に理由はない……」

「もしかして、今回の件と過去を被らせているのですか？」

「……！」

だから厭なんだ。この、メスで腫瘍を抉り出すような鋭さ。俺の過去を知っているから言えることだ。本人はどう思っているのかわかりたくもないが、多分ブラックジョークのつもりで言ったのだろう。

しかしある意味、俺の気持ちを理解してくれるうちの一人とも言い換えれる。ただし、プラス面では働かないが。

「仕方ないですよ。あれはあなたのせいではないですし」

「……たまには気が利くことを言うんだな」

「でも僕は、あなたの堕ちていく姿も見てみたいです」

「前言撤回」

缶コーヒーが夏に似合わず、程よい暖かさをくれた。

「瑠璃人」

「うわあ！ いきなり言わないでくださいよ……」

ふとして、しばらく続いた沈黙をいきなり破った。多少悪いと思っ
っている。

「なぜ岡本先生が殺されたと思う？」

そう。気になった。岡本先生は俺に会おうとした時に殺されてし
まった。ということは、犯人は何かしらの動機があったはずだ。

「陸奥実君、簡単ですよ。あんな猟奇的なものは快樂殺人しかあり
得ません」

「やはりそうだろうな……」

でも、おかしい。もし、殺すだけなら腹を切り裂いた後に心臓を
やればいいだけだ。だが、遺族の方からの話ではそんなことはされ
ていない。首の下から下腹部までをめった刺しだ。つまり、わざわざ
ざりスクの高い方法で……している。

「しかし、すごいでしょうね。こんなことを路上でやるのは……」

「まともな人間じゃないだろうな。お前みたいなのやつかもな」

「僕はあなたの堕ちていく様などにしか興味はありません」

「……それはそれで、まともではないな」

多少無理やりだが、それを久し振りの“手紙”のせいだとしてしよう。そうすると、“回避方法”のうちこれをやれというのがあったということだ。つまり、最低でも“猟奇的な殺人をしろ”という指示があったということ。

……イカれている。こんなことを実行するなど頭がおかしいとしか考えられない。第一、他の“回避方法”があるというのにこれを選んだということは、もっと酷いやつも……？

「果たして犯人は見つかるのでしょうかね」

「おそらく見つかる。また同じ手口をするだろうから……、ん？」

瑠璃人はいきなり傘を俺らの前に置いた。真っ黒の傘がまるで俺らを見られないように。そして傘を持つ反対の手で俺の顔をたくり寄せる。

「何するんだよ!!」

瑠璃人は意外そうな表情を見せるが、俺は正当な質問をしたただけだ。

目の前には眼鏡をかけた気障な顔があった。それを手でどけて抵抗する。でもぐんぐん寄ってくる。こいつ、本当にそっち系か!

「止めろって！ お前、……かよ！」

「いいじゃないですか！ 髪触りたいんですよ！」

「だったら手だけにしろ！ なんで顔も一緒なんだ！」

一体こいつは何なんだ？ いきなり急接近するかと思えば、逆ギレしてくる。そもそも、俺に何の用があったんだ？

数分間の抗争の後、結局負けてしまい、髪をイジられることになった。でも危なかった。あとちょっとで放送禁止になるところだった。

「……意外にいい髪じゃないですか」

「……瑠璃人、お前とはここまでの仲じゃなかったはずだ。はつきり言って少し馴れ馴れしい」

「あまり気にしないでください。でも何気に嬉しいんじゃないんですか？」

「……うるさい」

一応俺は冷静沈着なクールな男子のはずなんだが、最近はそれが崩れている気がする。そして、こいつは俺より冷血男のような気がするのだが……。

「陸奥実君、これからは宜しくお願いします。僕は外面と内面は大きく違うから、普通に話しかけてくれば、普通に接しますから」

「……まあ、宜しく……」

なんだかんだで作業は終了。しかも、お葬式の方も一応終わっただけらしく、いろんな人たちが出てきた。結局、外で見送る形になってしまった。

雨はタイミングよく薄くなっていき、やがて消えた。

「じゃあ、これで。虹にいが待ってますので」

「ああ、虹さんに宜しく伝えてくれ」

「あ、はい。伝えます。それじゃ、さよなら」

「！」

一瞬、何かとダブって見えた。

雲から光が射し込む中、瑠璃人は走って行ってしまった。あの真っ黒の傘を忘れて。

十二戒目「相思」

「なあ、むつちゃん」

「なんだ？ 棗さん」

それは図書館での出来事だった。葬式から二日後の今日、たまたま棗さんが読みたい本があるということで同行してきたのだが……。しかもなぜか二人つきりで。

棗さんは相変わらず紫色のリボンの麦藁帽子をかぶっている。

「プール行かへん？」

「……………はい？」

「うりゃあああああー！」

水が重い物に叩き付けられるような鈍い響き。それによって飛び散る粒たち。

「うわあー！ー！」

それにはしゃぐ女の子。

そう。来てしまったのだ。

「流さん！ はやくはやく〜！」

「ちょっと待つてる！ …… ったく」

プールに来てしまったのだ。

夏休み終了までもう一週間を切ってしまった。そしてそれはすなわち……、いや、今日はそれは止めよう。せつかくみんなが楽しんでいるのだから、俺も楽しまなくては。

この某プールは室外だ。いくつかのゾーンがあり、例えば自動で流れるプールや、ウォーターライダーなどポピュラーなものがある。何よりも広い。この中でサッカーが四つできるかと思うくらい広いのだ。

そして俺らは、その馬鹿でかいプールのど真ん中に拠点置いていた。一辺三メートルの正方形で、組み立て式テーブルとパラソルを立てて。

「むっちゃん、行ってあげたらどうや？ 手繋いでラブラブう〜！ って」

「棗さん、プールに誘ってくれたのは正直に嬉しい。だが、冷やかだけは止めてくれ。俺と真乃は普通の友人関係だ」

「じゃあ、友達以上恋人未満…… あいた！」

全く、棗さんも見た目とは裏腹にすごいこと言っな。正直ちょっと嬉しいが、絶対に口には出さない。

八月二十三日。昨日の今日でやってきてしまった。でもそれはそれでいい。プールは久しぶりだし、いい気分転換になるだろうから。でもそれにして……。

「棗さん、本当に高校生？ 大人に見えるんだが……」

「ん？ ああ、それは仕方ないねん。でもこれなら大事やる？」

そう言って麦藁帽子を頭に乘せた。余計に見える……。

女の子って水着がどうのこうのとはよく聞くが、棗さんには無関係のようだ。ごく普通の青一色の水着なのに、変にちゃらついている女の子より魅力的に見える。

「もしかして、年上好みなん？」

「……ご想像にお任せします」

そして真乃も真乃だ。空色の水玉模様が純粹なイメージを醸し出すものとなっている。綺麗なというより可愛いを目立たせている点は何気がいい。雰囲気もバツチリだ。

ちなみに棗さんのも含め、これらはとおちゃんの採点だ。そういうのを耳にたこできるくらい教え込まれた。さすがは“ミスター・サマー”。というか、とおちゃんは異名を持ちすぎだ。

「とりあえず、少し休みたい……」

「全く、ひ弱やなあ！ 何もしとらんやんけ！ 見てみい！ あの二人の生き様を！」

「……え？」

二人はいつの間にか“流れるゾーン”に入って……流れに逆らって泳いでいる！ 確かあれはかなり強いと聞いたのだが……。

「もうヤングマンパワー炸裂や！」

「いや、あれはただの迷惑じゃないのか？」

その後、二人は係員さんに嚴重注意を受けたのは言うまでもない。それはそうだ。

案の定二人は悪態をつきながら戻ってきた。

「全く！ 流れに逆って何が悪いんだ！」

「そうですね！」

「その前に、周りの人たちのことをまず考える」

病院でもそうだったが、なんでこいつらは極端にマナーが悪いんだ？

そしてやっと四人してテーブルに座ったのだった。直後、俺は急いで席を立つ。

「……悪い。ちょっと行ってくる」

「？ どこへですか？」

「……トイレだよ」

すると真乃は財布をバッグから取り出し、いくらかを俺に渡した。予想はついている。このタイミングでトイレはまずかった。

「じゃあ帰りがけにジュース買ってきてください」

「あつ、俺コーラ！」

「ワイ、お茶系で！」

「…………お前ら…………、覚えておけよ…………！」

次から次へと代金を受け取ってトイレへ向かった。

「まあ、むっちゃんはロクに遊んどらんから、ちよつどええやろ〜
」！

「もしかして、カナヅチかもな！」

アハハハハハハハハハハ！

結構離れたところで、あいつらの笑い声がこちらまで聞こえてきた。なんかムカついてきた。これではパシリだ。

それが相乗したのか、太陽が俺の肌を余計に痛み付ける。どんどん暑くなって汗が滴り落ちるのもしばしばあった。そしてそれに慣れてきた時に、見えてきた。やっと着いた。

「意外とかかった」

予想では数分のところが二、三倍かかった。だが、真乃たちからはそんなに遠くはなさそうだ。

俺はトイレに入り、そして終えた。

「さて、買つか」

公共トイレの隣に店と自販機が設けられている。その店のカウンターに行くと、上にメニューが張り付けられていた。筆で書いたような字をしている。

「……高い。高すぎる」

こういうプールの店や行事ごとの出店は普通の価格の二倍近くかかる。俺はどうしてもそれに納得いかなかった。というわけでスル―して奥の自販機へ向かった。

しかし途中で、ソフトクリームを作っていた女の従業員と目が合い、笑顔を振られる。その笑顔は悪意のない無垢なものだった。

「全く、こんなに大きいオレンジジュースは初めてですよ」

「お茶もや」

「コーラもだ」

「ごめんなさい」

結局あの笑顔に負けてしまい、買ってしまった。つくづく笑顔に弱い俺だった。

昼食を済ませた頃、太陽がピークに達した。そのせいかわ、陽炎のような景色のゆがみが見える。いつ熱射病にかかってもおかしくない。これにはさすがに応えた。

「……暑い……です……」

「どうした……？ あのはしゃぎは衰えたのか？」

「プールが熱湯じゃ誰も入りたがらないぜ……」

「大丈夫、それは幻覚だ。そう簡単に熱くはならない」

しかし、それを言っている側からプールに異変が起きていた。係員の人たちが台車で何かを放り込んでいる。あれは……氷か？

しかもそれは五分経たずに消えていった。これには口が開いて塞がらない。

「どう考えてもおかしいだろう……。まさかともと熱いわけではないし……」

まあ、それでもプールに入る客たちもいるから大丈夫なのだろうが。そして、あの二人は懲りずにまた“あれ”を敢行している。

「今がチャンスです！」

「おうよ！ 人がいない間に一周はしてやるぜえ！」

意外に目標が小さかった。

それにしても俺が入らないのももったいない。午前中は一回も入っていない。みんなが楽しんでいるのだから俺も楽しまなくては。

そう思い、立ち上がるうとした瞬間、左手に何か引つかかった。そっちを見てみると、手が引つかかっていた。

「むっちゃん、ちよい話があるねん」

「……？」

その紫色のリボンをした麦藁帽子が印象的だった。いや、そうではない。それをかぶった棗さんが印象的だったのだ。心臓が大きく呼吸した。

「……な、なんだよ棗さん……？」

「…………」

しかし、なかなか言い出してくれない。横をキョロキョロしたり、俺をちらちら見たり。それがどういう意味なのかは捉えられなかったが、言いくいのは確かだ。棗さんは手を強く握った。痛い。

「またで悪いんやけど、明日もつきおうてくれへんか？」

「……え？」

棗さんが俺のその手を使って立ち上がった。棗さんの手はすごい細く、白かった。

「明日、二時半に図書館に集合やあ！……無理？」

「…………」

昨日もそうだが、棗さんは最近俺とよく絡んでくる。別にいやではなく、むしろ嬉しい。だが、どこか変なような気がしてならない

のも事実だ。もしかして……、いや、それはないだろう。ないに決まっている。

だが、頭がどうこう考えても断る理由は見当たらない。俺はほんのちよつと考えて承諾した。

「ホンマかいな！ おおきにおおきに！」

「ああ。でも、どうして俺なんだ？ とおちゃんや真乃、それに他の友達だっているじゃないか？」

「……」

「……あつ……」

それを言い放った途端に、俯いてしまった。……俺の馬鹿。そんなことを聞かなくても理解できるだろう。頭より体が先に動いてしまった。

「棗さん、ごめ……」

「むっちゃん」

「……！」

ふわふわと揺らぐかぶりものが日差しを遮る。丁度顔が日陰に隠れた。その陰から棗さんの……目が、俺を真っ直ぐ見ていた。今にも猫のように光りそつだ。目を逸らす、顔を逸らすことを断じて許さないという意味表示が込められている。

「……」

「……………」

何も言えなかった。無表情さに……いや、その瞳に圧倒され、言
い出そうとしても出てくれない。だが、空気は不思議と重苦しくな
かった。

数十秒してから棗さんは微笑んだ。

「……………明日の二時半からやで！ 忘れんときい！」

「……………」

そう言い残すと真乃たちのいる“流れるゾーン”に走っていった。
麦藁帽子を元気に揺らしながら。俺はついて行けず、呆然と見送る
ことしかできなかった。

太陽の下、雲がゆったり流れるその下、振り向き様に優しく笑う
女の子の光景は一枚の絵のようだった。

「美浦せんぱい！ 今日はどうなお弁当ですか〜！」

「はいはい。わかったからあんまり抱きつかないの」

私がつってきた特製弁当を要求してくる後輩。そのネコみたいな
動作が愛くるしい。というかネコだった。

あれからというもの、彼と直に会うことが極端に減ってしまった。
唯一対等に話し合える存在だからできるだけ会いたかった。しかし、

仕事の関係上うまくいかないのはわかっている。その代わりがこの後輩だった。

「ん〜！ 今日も美味しいですねえ。私にも教えてほしいですよ！」

「フフツ、暇があればね」

病院にある公園のあるベンチに座っている看護師二人。私にとつてこの時間帯が羽を伸ばせる時間だった。端から見れば仲のいい友達だろう。

そんな時に何か振動するような感じがした。

「先輩、メール着てますよ」

「……やっと着たわね」

「もしかして、カレシですか！」

さらにはしゃぐ後輩をなんとか捌く。調子に乗ってどんどん話を飛躍させるこの後輩、楠波くすはの手強いところだ。

「違うわよ。ただの友達よ」

「そうなんですか……。でもすごいですよ。患者さんと友達になるなんて」

「……ただ趣味に関して意気投合しただけよ」

そう。趣味に関して……。

私はポケットから携帯を取り出して、開いた。あとは適当な操作

でメールを確認する。

「……そう」

「……どうしたんですか？ 愛の告白でも？」

携帯を閉じて再び弁当に箸をのばした。

「……ふられちゃったわ」

十三戒目「予想」

「…………ふう」

暑い。暑い。暑い。

二十四日、十時三分の今、ひどく蒸し暑かった。気温は異例の三十九度。もうどうしようもないほどの暑さだ。

それを嘲笑うかのようなセミ。彼らの大合唱は最早サイレンと化している。途絶えることのないそれは耳に残る。

太陽は自分の姿をさらけ出し、せつせと仕事に励んでいた。頼む。有給休暇あげるから休んでくれ。

そして俺はというと、

「…………56/9…………合ってる」

勉強していた。

こんな暑さの中、勉強する俺も俺だが仕方なかった。宿題が終わっていないのだから。

あの手紙が実はデタラメの場合も考えないと、後でかなり困る。まあ、十中八九は本当だろう。

「ああ…………暇だ」

だが、ずっと集中して取り組めるわけがない。暑さは集中力を確実に削っていた。それに、気になってしょうがないものもある。

俺は予め用意していたコップに清涼飲料水を注ぎ込む。その周りについている水滴が机を滴らせる。軽く拭き取ると焦げ茶に染みていた。

そして一気に半分くらいまで流し込む。俺の胃が瞬間的に冷たさ

を感知してくれる。ちょっとホツとした。

「……………勉強止めるか」

完全にノックアウトされてしまった。もう無理だ。限界だ。手元にあるリモコンを壁に向けてボタンを押す。するとすぐに、機械的な涼風が部屋中に流れた。そう。俺は欲望に負けてしまったのだ。

この生活を全てやりくりしている俺にとってクーラーは大敵だ。電気を大量に使ってしまうし、体がおかしくなる。だが、これに助けられているのも否定できない事実。

「……………十時半丁度。お昼は適当に作るとして、生命線の水が無くなるのはまずい。……………行くか」

十分にクーラーを堪能してから消し、着替える。財布と携帯を忘れずに持つ。窓を全て閉め鍵をかける。

汗は出なかった。クーラーの余韻が尾を引いているからである。やはり文明の利器だと思い知った。

そして全てチェックした後、外に出て鍵をかける。

「……………よし」

このマンションのセキュリティは半端なくすごい。設立されてから一回も空き巣にやられていないというのだから。

俺は階段を軽快に降りてから、ある場所へ向かった。そこはこのマンションの隣の自転車屋さんである。

「すみませーん。自転車貸してほしいんですけど……………」

「ああ、陸奥実さんかい？ お久しぶりだねえ……」

「はい。最近は歩いて行くことが多いものですから……」

ここに住んでいるおじいさん、田無 源重郎さんはちょっとした知り合いだ。近所からは通称、“源さん”と呼ばれている。源さんはこの道なんと五十年という大ベテランなのだ。

源さんはパイプ椅子に座って自転車を視ていた。

「まあ、好きに借りてええよ。わしに伝えてさえくれればな」

「ありがとうございます」

この自転車屋は車庫を大改造してできている。蛍光灯で淡白に染まる空間の脇にチェーンやらタイヤやらが無造作に置かれていた。俺はその中のうちの一つを拝借することに。それはいわゆるママチャリだった。

「ところで陸奥実さん、“逢い”に行つたんか？」

「……………」

自転車のペダルを慎重に回しながら言った。

「そろそろなんじゃろう？ 行ってあげなさい。余裕ができたら」

「源さんはお見通し……ですか」

「わしだって無駄に生きとるわけじゃないわい。同じ男として少しは理解できとるつもりじゃ」

俺は自転車を押して外まで出ていく。背後が少し寂しい感じがしたが振り切っていく。
最後に振り返る。

「それまで生きているかわかりませんよ」

「……ふう。着いた」

さすがは自転車。いつもなら二十分はかかるのに、その半分以下で来れてしまった。

ちゃんと定められた場所に置いてロックする。そこは入り口のすぐ脇だった。鍵を財布の中に入れ、いざ出陣する。

歩いていき、自動ドアが俺を判別し道を空ける。中から冷えた空気が出てきた。

「さて、飲み物を漁りますか」

買い物カゴを腕にぶら下げ、すぐに飲み物のコーナーに向かう。やはりこの時間帯だからだろうか、子連れの主婦が多く見えた。でも、その光景の中で見覚えのあるのを見つけた。

「あれ？」

白のワンピース姿の女の子がこちらに手を振る。どうやら気付いたようだ。彼女は足早に寄ってくる。

「あつ、むっちゃんやん！」

やはり棗さんだった。しかも母親も一緒だ。

棗さんの母親は相当似ていた。棗さんをそのまま大人にしたようである。正直姉妹かと思うくらい。その人と軽く会釈した。相変わらず棗さんは麦藁帽子をかぶっている。

「なんやあ、むっちゃんも買いもんかいな」

「えっ、まあ、そんな大それたものじゃないけど……」

「これなら、遊びいく手間省けたでえ」

「……？」

どういう意味だ？ 手間が省けるって……。俺と遊ぶ事が目的ではないのか？

「こら、ナツ。遊びに行くならちゃんとした時間に行きなさい。陸奥実君に失礼ですよ」

「むう〜！ わかった。そうする……」

本当に親子ですか？ 友達感覚なんですけど……。

その後もちよつとした小話が続く。やっていくうちになぜかエスカレートし、言い争いになっていった。人前は恥ずかしいから……。

俺はあまり気を使わせないように一言言っただけ立ち去ろうとした。

正直、今の俺には堪えかねる出来事だった。

しかし、それにまた気付いたようで、また手を掴まれてしまった。

「椿ネエ、ちょっと時間もらうわ」

「えっ？ ああ、ゆっくりしなさいな」

「？ 親子じゃないのか？」

「なんだ、そういうことか。俺はてっきり親子で買い物してるとばかり思ってたよ」

「んふふ〜！ 椿ネエとワイ、ちょっと似てるやろお？」

「ちょっとどころじゃない……」

本当の姉妹ということにびっくりだが、仲良く買い物してるのにもちよつとびっくりだった。

漸く俺の目的である飲み物コーナーに辿り着けた。店内はそう広くはないが、密集していてわかりづらい。そこが唯一の欠点だ。

「そついえば、何を買ってくるつもりだったんや？」

「ああ、飲み物だよ。とうとう切らしたようで……」

「そつなんや……。そつや！」

棗さんは何かを閃くと、バッグからなぜか紙と鉛筆を取り出した。

「一体何をしようとしているんだ？」

「今からちょっとゲームせんか？」

「え？ 別にいいけど……」

なぜやるのか聞いたかったが、止めておく。棗さんが自分からするのは珍しいし、何よりそのゲームとやらに興味を持ったからだっ

た。
そのゲームとは至って簡単。これから俺が買おうとするものを当てるというものだ。ただし、飲み物限定である。

「もし、ワイが勝ったら奢ってくれなあ？」

そして負けたらこちらが奢ってもらえるというわけだ。もちろん受けて立ってやる。しかし、そのまま見過ごす俺ではない。このままではこちらの不利なのだ。

「……いいだろう。ただし二つ条件を付け足させてくれ」

「？ なんや？」

「一つは書くものは商品名であること。もちろん、“むっちゃん”が選んだ飲み物”はなし。もう一つは、棗さんが先に書くこと。つまり、棗さんが書いてから俺が選ぶということだ。それを呑んでくれるならやるよ」

こうしておけば、姑息な手は使えまい。

棗さんは渋々承諾してくれた。そのようだとどちらか、あるいは両方やるうとしていたようだ。

「じゃあ二分後に選ぶからその間に書いてくれ。俺は後ろ向いてるから」

俺は飲み物がずらつと並べられている方に向いた。その背後に棗さんが唸っている。おそらく考えているのだろう。

そして時間はあっという間に過ぎた。

「よし、じゃあ書いた紙を隠してくれ。……ゲームスタートだ」

さて早速、何にすれば当たりづらいたろうか。おそらく棗さんは俺が手にしそうな物を予測しているだろう。ならば、逆に絶対に選ばなそうなやつにすれば、当たらないということ……。

俺は一番苦手なコーヒーに手を伸ばす。しかし、冷静に考えてみると、自分の考えが甘いかもしれない。選ばなさそうなやつを予測しているかもしれないからだ。そう思い、別の炭酸飲料に手を伸ばす。

しかし、やはりそこでも手が止まった。

「……ちよつと待て……」

目の前や周り、棗さんのことをよく考えよう。……やはり少しおかしい気がする。例えば、一口にコーヒーと言っても種類は様々。ちなみに三種類くらいある。他のお茶やスポーツドリンクとかだっているいろいろある。そして棗さんは“予測する”という。つまり、何が言いたいかというと、この勝負は俺に圧倒的に有利なのだ。

「むつちゃん、早よ選んどきいなー!」

「……ちよつと待って。考え中だから」

飲み物一つ買うだけでこんなに悩む人はまず、いないだろう。話を戻して。

こんなに分が悪いのに、なぜ棗さんは勝負したのか？ 何か確定付けられるものでもあるのだろうか？ それとも、俺が強制的に選ぶように仕組んでいるのだろうか？ いや、最低それはないだろう。

「んもう、早よしてくれやあ〜！」

「わかったわかった。……じゃあこれにするよ」

結局棗さんに急かされるままに適当に選んでしまった。手に持ったのは某メーカーの牛乳だった。イニシャルでO牛乳とでもしよう。これはこれで結果オーライだろう。

「じゃあ棗さん、書いた紙を見せてもらおうか」

「ええよ。ほな」

あっさりと突き出された一枚の切れ端。裏返しになっている。一応透けて見えるがよくわからない。それを受け取った。

「……………」

「どうや？」

これがもし運で当てたなら、棗さんは相当な強運の持ち主である。いや、運のわけがない。棗さんは自分で勝負を持ちかけたのだから。頭では冷静にこれらの事を分析できているが、体がリンクしていない。コンクリートで固められるように紙を持ったまま動かない。

いや、動けない。

「コーヒー系や炭酸を選ぼうとするが、〇牛乳を選ぶ。」

しかも俺が選んだやつどころか、その前の行動まで……。

「んっふっふう〜！ ワイの勝ちやなあ〜！」

「……………」

その澄み切った関西弁がずっと俺の頭の中を木霊した。

「じゃあなあ！ むっちゃん！」

「ああ、またな……………」

結局、午後の約束は破棄になった。どうも用事が済んだとかどうとか。まあ、それならよかった。

俺は望みの品を買い、出口で棗さんたちと別れた。今思えば、棗さんの姉の椿さんは関西弁ではなかった。

「……………帰るか」

自転車の鍵を外し、サドルに座る。そしてペダルをこいでいく。それが不思議と軽く、スピードが出てくる。そして周りが穏やかに流れていく。

信じられなかった。まさか本当に奢ることになるうとは夢にも思わなかった。

だが、よく考えてみよう。

数十種類もあるうちの一つを見事に当てる。これは意外にも不思議ではない。確率的にも百パーセント当てられないわけではないし、何かのトリックを使えば不可能ではない。ということは、棗さんはマジシャンなのか？

「でも……」

ハンドルを右に曲げ、それに伴って重心を少しずらす。自転車は前輪に従いながら、必死に回る。何の不安もなくカーブをクリアする。

でも、あの子の台詞が気になって仕方がなかった。

ワイはわかるんや……。何となくやけどな！

どういうことだ？ 俺の行動が手に取るようにわかるのか、それとも……。いや、しかし……。

散々迷ったあげく、マジシャンということになった。それはそうだ。本当の預言などあるわけないのだから。

自転車のペダルを立ってこぎまくった。ペダルをこぐ音が空気を伝わっていく。

「……ふう！ やつと着いたでえ！」

「ホント、疲れましたよ……」

「それより椿ネエ、やっぱり標準語、似合わへんよお！」

「……え？　そうですか？」

「当たり前やあ！　なんでデスマス口調になるんかがイマイチわからへんし……」

「……やっぱりそう思う？」

「表はええけど、ウチん中の時は普通にしていなあ！」

「……わかった、わかった。二人ん時は普通に喋ったる」

「……やっぱり椿ネエはそれでないアカンなあ！」

「あれでも苦労したんねん……。……そういえば、ナツは素で学校とかに行ってるのかあ？」

「そうやけど……。なんか問題あるん？」

「……ありまくりやで？」

「なんでや！　ワイのどこに問題あるねん！」

「ナツは見た目、美少女やで？　そんな美少女が関西弁喋ってみい！　ナツのこと好きな男子がちょっと落胆してしまうがな！」

「別にええよ！　ワイは好きな人おらへんし……」

「あら？　ナツ、あの陸奥実君のこと好きや……」

ゴン！

十四戒目「瑠璃」

「虹にい！」

「どうしたんだい？　またここに来て……。陸奥実君はとつくに退院してるよ？」

「そんなの知ってます。葬式の日に会いましたから」

また瑠璃人が来た。前回も自分を迎えに来てくれた気がする。自分はまた病院にいた。というのも、自分の知り合いが勤めてるところなので、その挨拶ついでに仕事だ。

あの殺人事件は未だに説明の糸口すら見せない。聞き込みのプロフェッショナルと自負している自分でさえもわからなかった。このままでは未解決のまま左遷される可能性もなきにしもあらずだった。

「虹にい、顔色悪いです。大丈夫ですか？」

「あつ、ああ。ちょっと寝不足なだけだよ。心配しないで……」

弟に心配されるほど顔に出ていたようだ。しっかりしなくては。とりあえず、まずは挨拶でもしに行こう。

「それじゃ、行こうか」

「はい！」

いつもの軽めの服装は涼しいこの空間にピッタリだ。きちんとした警官のような制服では外に出た瞬間に干からびてしまっし、何よ

り視線が痛い。Yシャツの袖を捲つて見える腕から体温が抜けていく。それを防ぐために袖をある程度直した。

そうしていると、いきなり後ろから声をかけられた。女性のような。振り返ってみる。

「こんにちは」

その人は軽く会釈をした。自分もそれに応える。

彼女は容姿端麗だった。緩いラインを描く顔は端正で、背中を超える長さの金色、瞳がエメラルドに揺らぐ。その時、柔らかく微笑んでくれた。

「あ、あはははは……」

それに合わせて笑うしかなかった。

「虹にい、鼻の下伸びてますよ」

「えっ……?」

きつとんでもない程の情けない顔だったのだろう。一体自分は何をしているんだ!

瑠璃人の首根っこを掴み、逃げるように走り去った。いや、歩き去った。……恥ずかしい。

「? お大事に」

「はあ……」

我ながら、本当に情けなかった。ああいう時にこそ“大人の振る舞い”というものをしなければいけないのに。

でも、あれほど魅力的な人と会うのは初めてかもしれない。これはいわゆる一目惚れなのか……？

「新戸 虹、二十六歳、未だに独身」

「瑠璃、言っていることとイケないことがあるんだよ。地獄車やっ
てあげようか？」

瑠璃人は時々、痛いところを突く。そこらへんは兄として厳しくしなければならぬ点だ。案の定、大人しくなってくれた。

それにしても広すぎる。ずっと歩き回っているのに向にたどり着けない。まるで迷路だ。

「虹にい、お腹空きました……」

「えっ？ あっああ、もうこんな時間なのか……」

銀色の腕時計は十一と七をそれぞれ指していた。もう三十分近く歩きつぱなしだ。しかし、出口さえもわからない。近くの案内板を確認するが、覚えるのはちょっと難しい。

それとにらめっこすること数分後、ある程度覚えられた。

「瑠璃、自分はこれから友人に会いに行く。多分そこでお昼を取
らうと思うんだけど、瑠璃はどうする？」

「えっ……？ うーん……」

正直な話、来てほしくはない。仕事関連で瑠璃人を巻き込みたくないから。

瑠璃人はちよつと考えた後、自分の手を握った。

「僕も行きます。虹には気が進まないでしょうけど」

「……いや、大丈夫だよ。でも、絶対に誰にも話しちゃダメだからね。」

「はい！」

そして一緒に歩いていった。

そこは普通の病室や診察室とは違っていた。とてもシンプルで、医療機具などほとんどない。まるでそこらへんの部屋にベッドと点滴を置いただけのようだ。床は淡い青の正方形のマスが敷き詰められている。

そんな似合わない部屋を開けた時は何かの間違いかとも思ったが、一人の白衣が小さく丸いテーブルに寝そべっているのを見て、訂正した。

その人は僕らに気づいた。

「よく来てくれたな、虹。久しぶりだ」

「ああ、何ヶ月ぶりだろうね、徹」

虹には友達との再会を果たした。少し長い黒髪を後ろで縛り上げている。スポーツマンのように焼けていて、顔つきもそれだった。それに少し背も高い。医者とは思えなかった。

徹さんは僕のことを笑いながら見下ろすと、頭をわしゃわしゃしてくる。ここは虹に専用だ。

「瑠璃人君も久しぶり」

「徹さんとは一週間くらい前に会ったと思います」

「……そうだったかな？」

虹にいの友達はどことなく同じ雰囲気を漂わせていた。まさしく、類は友を呼ぶ。

徹さんは僕たちを座らせると、昼食を差し出してくれた。と言ってもコンビニ弁当だけど文句は言わない。割り箸を割って中身を食べていく。

徹さんは丁度、三角形になるように座った。

「やっぱり、二人は似ているね」

「？ どこが？」

「ほとんど」

徹さんは以前から僕たちは似ていると話している。兄弟だから似ているかもしれないけど、なぜかそれだけが素直に受け入れられなかった。

しばらくして、やっと食べ終えた。意外に量が多かった。ふとして時間が気になる。部屋に時計が付いていなく、仕方なく虹にいのを見せてもらう。一時弱……くらい。

「じゃあ早速話を伺おうか。例の話を……」

「ちょっと待ってくれ。瑠璃人君もいるが、それでもいいのか？」

虹にいは僕の方を見て微笑んだ。

「構わない。自分が責任を持つ。なあに、瑠璃は人に言い触らすよ
うなやつじゃないよ」

「……それなら、虹を信じよう」

徹さんは椅子を下げながら立ち上がる。そして、奥のベッドから何かを持ってきた。それは何個かのファイルと書類のようだ。流石にそれらは見せてくれない。

でも、それがいかに重要で恐ろしいのかは容易に想像できた。あの虹にいが手を進めるにつれて、表情を強張らせていたからだ。

「……徹、これは本当なのか……？」

「……わからない。だが本当ならば、今後の行動は慎重になった方がいい」

一体どういうことだろう？ “慎重”につて……。そうしないと命に関わる程なのだろうか……。

僕がここに居る理由は全くない。だが、虹にいの命に関わる事ならば話は別だ。いや、たった今別になった。

そしてそれから時間が進むと、ふとして虹にいの手が止まった。

「……………？ なんだこれは……………？」

その驚きぶりを見た徹さんは虹にいの後ろに回った。僕も行きかけたが、彼らは許してくれなさそうなのでやめた。僕だけ蚊帳の外は寂しかった。

「ああ、これは今月中旬から下旬にかけての搬送してきた人、及び死亡した人のリストだよ。勿論、共通した……………ね」

「……………」

その量はあまりに膨大で紙を擦る音が二、三回以上聞こえた。

僕は今、中身を見れない状況にある。唯一できることは会話を理解することだった。

「……………これはつまり、さっきのと関係がある……………ということだね？」

「……………そうだよ。この方たちは全てあれと関係がある、かもしれない。実在していればね」

「実に難解だね。これでは犯人の見つけようがないよ……………」

二人とも頭を抱え込んでしまった。その隙に悟られないようにフアイルなどに手を伸ばすが、虹にいに一睨みされてしまった。やっぱり駄目か……………。

ならば考えるしかない。さっきの会話を整理してみよう。

フアイルに載っている人たちは少なからず、怪我や病気になったはずだ。そしてそれに関係があるという“あれ”。それは現実的に

存在するのか怪しく、あつたとしても逮捕されにくい。そんなものが果たして、あるのだろうか？

しかし、解ったこともないわけではない。

「虹にい……」

「？ どうした？」

「陸奥実君の名前もありますか？」

「……………」

後に続かなかつた。虹にはさらに俯く。徹さんは肩に手を乗せていた。その反応から簡単に読み取れる。それならば話は早い。

「虹にい、車のトランクに折りたたみ自転車、ありますよね？」

「瑠璃、何をする気だい？」

虹にいのポケットから巧く車のスペアキーを抜き取る。

「今から陸奥実君に会いに行つて、確認してきます」

「……………！」

虹にいと徹さんは度肝を抜かれた表情を見せた。その直後、それは呆れ返ってしまった。

虹にいは僕の前に立ちただかり、膝を落として目線を合わせた。

「いいかい、瑠璃人？　いくら自分の弟だからって勝手な事はしちや駄目だ。下手をすれば人生を台無しにしてしまうんだよ」

「……ですが、虹にはいつも身を投げ出すことだってあるじゃないですか」

「それは、仕事だからだよ。瑠璃人も高校生だからわかるだろう？　刑事というのはこういう仕事なんだ。だから……」

「関係ありません。僕は行きます」

僕は虹にいを振り解き、部屋を飛び出した。ドアが閉まる音が耳に残ったのは、なぜか不思議だった。

「流さん！　それでは！」

「陸奥実！　次こそは勝つてやるから覚悟しろよお！」

「ほな、またなあ〜！」

太陽が少し低くなり、暑さが失せていく。それでも強い日差しと残暑が汗を流させていた。だが、爽快で気持ちがいい。

八月三十一日。つまり夏休み最後の日。明日から学校かと思うと、気が重くて仕方がなかった。それに加えて、確実に迫ってくる“期限”。その重圧が肩にのしかかる。唯一の助け舟である美浦さんは最近連絡がつかなかった。

今日は普通に野球をして遊んだ。そして特に違和感なく過ごせてよかった。いや、それなら“ここ最近”と訂正しよう。

俺のマンションの前で解散した俺はすぐさま、帰る。庭を通り過ぎ、鉄板を貼り付けた階段を淡々と駆け上る。そして、二階に着いて……。

「……………」

二階に着いて……。

「……………」

巧く避けて奥へと進んだ。

「待ってくださいよ！ どうして無視するのですか！」

「……………じゃあなぜ、お前が仁王立ちして、進路を妨げていたのかを教えてくださいれば教えてやる」

まさか、本当にストーカーになったんじゃないだろうな……………？
こいつなら有り得る事だ。

とりあえず、落ち着きを取り戻した後に家の鍵を開けた。瑠璃人は口を横にしてじっと見ていた。

「……………ご相談です」

「……………は？」

「だから、ご相談です。……………駄目ですか？」

黒い髪をなびかせ、眼鏡を中指で上げた。
相談の為にここまでするのか？

「……とりあえず、入るか？」

「はい、どうぞ」

瑠璃人がなぜか先に入って手招きしていた。それは俺の台詞だ！
丁寧に靴を並べ、居間にへと入る。瑠璃人には適当に座らせた。
そして悟られないように時計を見ると、五時十八分を回っていた。
意外に経っている。

「意外に綺麗にしてるじゃないですか」

「……うるさいな……。そんなことはどうでもいいだろう？ それ
で、相談って何だ？」

「……それは、大したことではないんですが……」

「？」

とても言いづらそうに俯く。その表情から暗黙の了解を破ってしま
うかもしれない、と読み取れた。それほどに重要なことなのか？
何はともあれ、一応友達のご相談だ。耳を傾かせずにはいられな
い。

とりあえず、お茶をお出した。

「ありがとうございます……」

「さっきまでの態度は謝る。だが、何かあったのか？」

「……ちょっと待ってください……。頭を整理しますので……」

やはり様子がおかしい。いつもの減らず口が出てきていない。俺は向かい合うように座り、瑠璃人の気が済むまで待った。

「……」

「……」

「……」

時折、お茶をすすり味を楽しむ。一瞬クーラーを点け忘れたと思うが、今はそんなに暑くはなくむしろ、爽やかな風が入り込み、涼しかった。

時計の針が機械的に響く。

「……実は……」

「……！」

瑠璃人はいきなり話し出した。漸く話す気になれたか。静かに耳を澄ました。

「命を……狙われています」

十五戒目「懐旧」

「……みなさん！ 今日から二学期です！ いつまでも夏休み気分にならず、気持ちを切り替えていきましょう！」

「はい、校長先生ありがとうございました。では次に校歌斉唱……」

「はい、今学期から君達の担任になる福田です。あつ、知ってる人は知ってますけどね。なのでこれからもよろしく」

岡本先生が亡くなったことよって担任が代わった。今度の担任は英語の教師だ。テニスの顧問だからか、肌が立派に焼けていて、スポーツマンらしい。それにしても、みんな日焼けだの何だので変わった気がする。

九月一日、夏休みがとうとう終わってしまった。時間が過ぎるのは早い。光陰矢の如しというのが合っている。そして、期限は残り二週間で切った。せっかくのあの夏休みも入退院を繰り返して、三分の一をも無駄にしてしまった。だが、それは逆に幸運だった。

「この夏休み、いろいろありましたが、お互いに気持ちを入れ直していきましょうね！ じゃあ出席確認から……」

空席がやや目立つが、旅行の類だろう。

ふと横から真乃が声をかけてきた。

「流さん」

「どうした？」

「やけに重みがあるのでいい感じはしない。しかもクーラーとの相乗効果でさらによくなかった。」

「透気さんがいないようですが、どうしたんでしょう……？」

「確かにとおちゃんの席は無人だった。」

「しかし、俺が知らないのに真乃も知らないのではお手上げだ。そのことを伝えたのだが、どうも落ち着かない様子だった。」

「とりあえず心配するな。万一のことが起きても、とおちゃんは陸上部のエースだ。大方、風邪気味が肉離れだろう」

「昨日、会ったのに……ですか？」

「……あつ」

「そういえば、昨日の野球でも全力疾走をしていたし、しかも陸上部ならばそう簡単になるわけがない。フォローミスだ。」

「だがそれ以前に引つかかっているのは、真乃のその心配ようだ。あの後何かあったのだろうか？ それに……。」

「新戸、新戸！ ……ありやあ、新戸も休みか？」

「……………」

「あいつも休みか……。」

昨日のあの一件も気になっている。

命を……狙われています

瑠璃人は一応刑事の弟だから、そういうのはあるかもしれない。しかしそれならば、真っ先に相談するのは俺でなく虹さんではないか？ 少なくとも俺なんかよりずっと頼りになるし、何より瑠璃人は虹さんを慕っている。まあ何を考えているのかはさっぱりだが。

「陸奥実！ 陸奥実！ 返事なさい！」

「あ、ああ、はい。すみません……」

「……よし。……だが前橋も新戸も荒川も吉田も……もないのか

「……？」

「ああ、とおやんかい？ 確かとおやんは部活ちゃうん？」

「えっ！ そうなんですか！ ……びっくりしました……」

「……」

陸上部は今日、大会らしい。時季はずれなのだが、よりによって始業式の日……でもそれは仕方ないかもしれない。今日は日曜日なのだから。

休みの日に始業式などまるで聞いたことがない。いや、この学校がおかしいだけかもしれない。まあ、その分の休みはいつか貰える日があるのを祈ろう。

しかし、これで大体のやつ欠席はわかった。

「まさか、大会前日に野球ようってくれるとは思わなかった」

おそらく昨日は休みだったんだろう。それでも無理をしてまで遊べるとおちゃんは凄い。

とりあえず一つ安心した。

「でも大丈夫なんでしょうか……？」

「何がだ？」

「明日、宿題テストじゃないですか」

「……完全に忘れとった」

棗さんは初日から五日ほどで宿題を終わらせ（俺のおかげだが）、その日以来全く勉強していないという。真乃は逆にラスト五日で終わらせたとか。二人ともめちゃくちゃだな……。

「じゃあむつちゃんはどうなんやあー！」

「いや、俺は無理なくやってきたよ……」

尤も、入院したあとだが。

「むう〜！ 真乃やん、このガリ勉に何か言ってくれやあ！」

そこだけ妙に反抗する棗さんも棗さんだ。というより、なぜそういう展開に持ち込むんだ？

真乃は少し考えた後、手を叩いた。

「なら流さん、勝負しましょうよ？」

「やっぱりか。……何か最近、勝負事が多い気がするんだが……」

「？」

愚痴は控えておこう。

勝負はテストだ。科目は三教科、現代文、数学、英語だ。四人の中で一番総合得点の高い者が勝者となる。ビリは罰ゲームが下されるとか。

「ちょっと待て。“四人”って、とおちゃんもか？」

「もちろん！ 手加減無用ですよ？」

最悪だこいつ……。自分に厄が回ってこないように安全ルートを確保しやがった。相変わらず真乃は強かだ。

とりあえず、勝負事は置いといて、宿題テストは成績に相当響く。考查テスト並みなのだ。だからここを落とすわけにはいかない。

「いいだろう真乃。その勝負、やってやるっじゃないか」

棗さんも望むところという風に強く頷いた。
こうして、俺たち四人は死闘を強いられることとなった。一人は強制だが。

キーンコーンカーンコーン……キーンコーン……

「それでは皆さん、明日はテストなので頑張ってくださいね！はい、解散！」

福田先生は礼をした後、そそくさと出ていった。その瞬間、クラス全員はどっと喋りながら帰る支度を始めた。そういえば、スピーカーから響くチャイムは久しぶりだ。

俺も同様にして始める。鞆に適当な教科書、ノート等を放り込む。忘れてはならないのが三教科の用具だ。
その途中に真乃が顔を覗いてきた。

「流さん、帰りましょう！」

「っうわっ！」

俺は驚いて、力強く着席してしまった。……お尻が痛い。

「全く、何を驚いてるんですか？」

「いや、誰だっぴっくりする……」

だが、ちょっとときどきする俺も俺だ。そんな自分が青いと思っ
た。

「……じゃあ行くか。……って棗さんは？」

「一足先に帰りましたよ。明日のテストでむっちゃんをギャフンと
言わせたる！ って言っていました」

「なんだかやけに燃えてるな……」

とりあえず俺らは教室を出ていった。

昼の時と打って変わってちょっと涼しい。

九月といっても残暑はあるのに、今日は妙だ。傾いた日差しは強
いの冷めた風が頬を滑り、熱を奪い取っていく。しかもセミがそ
こらじゅうから元気に活動していた。夏なのか秋なのかよくわから
ない。でも、空がオレンジに染まっていることから、秋寄りなのだ
と推測した。

「綺麗ですね……」

「ああ」

二人して感傷に浸っていた。足を進めながら。陽が射すことで
伸びる影が二つ並ぶ。若干左の方が長い。

「私は夏や冬より、秋が好きなんです」

「？ 何でだ？」

ふとして真乃と目が合い、ふつと微笑んだ。それが状況が状況なだけに、輝いて見える。あまりに眩しくあまりに顔が熱いので、顔を逸らす。

でもなぜか懐かしい感じがする。

「よく、食欲の秋って言うじゃないですか。秋刀魚とか栗とか美味しいんですよ！」

風情とかじゃなくて、そっちな。落胆の色を巧く隠せなかった。

まあ、真乃らしいが。

「でも、実はそれは二番目なんです」

「……？ じゃあ一番の理由ってなんだ？ まさか、よく眠れるからとかそういうのじゃないよな？」

流石にそれではなかった。

真乃は一步先に歩いて、俺と向かい合った。俺はもちろん足を止める。少し近い。

そして真乃の視線があまりに真っ直ぐなので、なんだか照れくさい。でもそれをなんとか堪えて、向き合う。

彼女の髪が一方に舞う。それが一本一本細かく、光で染まっていた。普段は栗色の髪が、今だけオレンジっぽかった。ゆらゆら揺れるそれはまるで魅了するかのよう。

「一番の理由はですね……」

その時、タイミングよく突風が通り過ぎた。それが耳に振動を与えることによって、口しか動いてないように見える。

「
ですよ」

「？ もう一回言ってくれ」

真乃が振り返ると、走り出していった。左右に一定に揺れる。そしてまた振り返った。

「もう、言いませんよぉ！」

真乃は大きな口を開けて笑った。俺も走るが、真乃は追い付かせまいと再び走り出す。まるで追いかけてっこしているようだった。

「
へ」

あまりに重要なモノの為、直接入れさせてもらいました。急な用事をお詫びします。

さて以前のモノですが、調査した結果、可能性が滲み出てきました。身内がそれを提唱し、内容も大体記憶しているとのこと。その概要を記したテキストを同封しておきます。

P・S インターネットついでいろいろわかるものですね。機械不器用なものなので苦労しました。あなたも試しにインターネットを使ってみてください。」

「私は苦手だから……」

「先生、次の患者、来ますよ」

「ああ、入れてくれ」

友人から手紙がくるのは初めてに近い。年賀状ならまだしも。そんなことを思ううちに、次の患者さんが入っていた。いけない。仕事をしなくては。

「……やあ、ジヨン。調子はどうだい？」

「先生違います。ジヨンではなくて、丈君ですよ」

十六戒目「試練」

「ほなあ、むっちゃん、次はコレやで！ 一発決めてきいや！」

「では、陸奥実君。私の前に来てくれたまえ。最高の瞬間を味あわせてやるっ」

「りゅ、流さん……可愛すぎです！ うわあ……ヤバすぎです！」

「……………」

時は放課後。学校生徒が部活やら勉強に励んでいる中、俺らは通称“憩いの場”と呼ばれる場所にいた。そう、保健室である。この学校は全クラスにクーラーが導入されているが、保健室は格別に冷えている。それはおそらく雰囲気の問題だろう。

「あら、なかなかこれもイケてると思うんだけど、……………どう？」

「あつ、さすがは秋間先生！ センスありますね！」

「じゃあ、追加オーダーやなあ！」

この保健室の先生である秋間あきま 花火先生はながは女子二人と騒いでいた。切りそろえられた土色の前髪は緩いカーブを描き、後ろは紅葉のように広がっている。黒い四角のフレームの眼鏡が少し洒落ている。しかも……若い。

「もっ……勘弁して……………」

「むっちゃん、また追加やあ！ 多分あと四つはいくでえ！」

いやその前に、現在の状況がどうなっているのか……想像したくない。人生最大の汚点だろう。

なぜこうなっているのかは説明しなければならない。これはつまり……。

「なっちゃん、悪いですけど、手加減はしませんよ？」

「ワイかて、負けんで！」

「陸奥実、頑張ってくれよ。罰ゲーム……」

「……その台詞、そのままお返しする」

お互いに火花を散らし、分かれていった。

テストは九時からだ。今の時間は八時五十三分。一限目は現代文。あまり得意としない教科だ。

全員、出席番号順に席に着いていた。俺は名前が後ろの方なので、席も後ろの方だ。六列のうちの窓から二列目、後ろから二つ目の席だ。ちなみに二つ前がおちゃん、窓の列の一番前が真乃、その三つ後ろが棗さんだ。分かりづらいか。

それにしても、周りは緊迫している。無理はないだろうが、“例の連中”は暢気に話しかけている。緊張感の微塵も感じられない。すると、前のドアが勢いよくスライドした。

「はい、みんな席着いてね！ …… つて着いてるよ〜！ えらいなあ！」

ここにも緊張感のない人が。

「では、最初は現文です。シャープペンと消しゴム以外は筆箱も含めバッグに入れて下さい。その後、問題を配ります」

全員、その指示に素直に従う。その後、前から裏になっている紙を二枚渡ってきた。それは表同士が向かい合わせになっている。そして新たにもう一枚がきた。こちらは解答用紙らしく、表できた。急いでクラス、番号、名前を書く。

「あと二分です。ちなみに今回は相当レベルが上がっていますので、諦めずに頑張ってくださいね」

空気は何かが重くのしかかるように重く、さらに張りつめた。なぜそれを今更言っただろう？

残り一分もないだろう。だが、それは途轍もなく長く感じる。そして一切の音もなかった。それが続くのは、学校のチャイムがなるまでの数十秒だけだった。

キーンコーンカーンコーン……キーン……

「はい、では回収してください」

一つ後ろの生徒が順に解答用紙を貰っていく。これで現代文のテストが終了した。

その集められた用紙が一つにまとめられ、福田先生がそれを確認する。その表情からみんなの出来は確認できない。そして、異変はないらしく一限目は終了した。その瞬間、全員がどつと席を立った。声に包まれた。

「……なかなか難しかった……」

もともと得意ではない分野だ。でも全力を出した。手応えはまあまあ、おそらく八十以上は取ったと思う。

気を取り直して、次は数学だ。ここは絶対に取らなければならぬ教科だ。真乃たちと差を付けるにはここがポイントとなる。なぜなら、以前教えた時に壊滅的にひどかったからだ。だが、それは当時の話。気は抜けない。

とりあえず、少し疲れたので机に寝そべる。しかし、それを邪魔するやつがいた。

「どうや？ 天才児、陸奥実 流」

「……まあまあかな」

その一言で誰かわかった。顔を上げると案の定、脇に棗さんがいた。

「そうかあ！ ワイは絶望に平伏したんかと思ったよ」

「……どういふ罰ゲームしようか考えてたんだよ。とんでもないのをな」

さすがに猛烈に勉強（一夜漬け）しただけのことがある。随分と余裕を見せつけてくる。だが、あくまでも一夜漬けだ。

「まあ、事の発端はワイとむっちゃんや！ 華々しく勝つたからな！」

「でも次は数学だが、大丈夫なのか？ なんてっ たって棗さんは…」

「わあああ！ アカンアカン！ 言ったら許さんでえ！」

ポカポカと叩いてくるがそれを腕一本であしらう。しかも余程恥ずかしかったのか、涙目で真っ赤になっていた。あの棗さんにしてはすごく珍しいワンシーンだった。

それにしてもあれはひどかった。棗さんのプライバシーの為、明かさないでおくが、小学生でもできるようなやつを堂々と間違えたのだから。でもそれはそれで面白かったが。

「ほら、早く席着け。テスト始まるから」

「くう……バラしたらバラしたる……」

「え？」

棗さんはあつと口を塞ぎ、そそくさと逃げるように戻っていった。一体俺の何を知っているんだ？

かくして、二限目の数学は始まったのであった。……ちょっと気になる……。

「……終わった……」

テスト終了。例に倣って先生は帰っていった。その後、クラスはため息が溢れかえった。あちらこちらで文句を吐いたり安堵を零したり、後悔の念に駆られたりする声がする。

その意見に全く賛成だ。

「ラストは英語か……」

レベルは半端じゃなく高い。少なくとも俺はそう思っている。これでは勝負どころではない。最悪、赤点続出も有り得るのだから。気合いを入れ直していると、もう先生がいた。しかもいつの間にかピリピリとしている。

聞くところによると、英語のテストを作ったのは、福田先生らしい。

「さあて、みなさん。覚悟はよろしいですね？」

先生はニコニコしながら問題用紙を見ていた。

この先生、悪魔だ……。明らかに俺らが苦悩してるのを楽しんでいる。

「ちなみに、先生がやったところ、九十三点取れました。まあみなさんはもつといくでしょうね」

だからなんでプレッシャーかけるようなことを言うんだよ！

問題用紙が前から渡された。しかもなぜか、テストまで五分も残っている。さらに、表で回ってきていた。これではカンニングに……？

「問題用紙は両面印刷で一枚のみです。問題を見てくれても構いません。チャイムが鳴ったら、解答用紙を配ります。あと、シャーペンを持ったらカンニングと見做します。」

なるほど。つまり、問題用紙に書き移すのを禁止するということか。ならば頭の中なら問題はない。

俺は裏返しにして最後のに着目した。最初の方はアクセントやら発音の問題なので、大丈夫だろう。

「……！ なんだこれ……？」

そこにはこう書いてあった。

「自分の好きな諺を書き、その意味を二十語以上で答えなさい。ただし、ピリオドやコンマなどはカウントしないことにします。」

なっ、なにに！

「あつ、ではチャイムが鳴らないようなので、始めて下さい」

「……え？」

くそ！ いきなりか！

俺は雑念を全て払いのけ、目の前の強敵の攻略を開始した。

「お願いしますから、もう勘弁してください……！　もう嫌だあああ！」

「ダメやでえ〜！　散々ワイを虚仮にしとってくれよったんやからなあ……！」

俺がいつ馬鹿にした？　いつ虚仮にした？　むしろ、酷いことを言われた気さえする。

だが、今更正論を述べても無駄だろう。秋間先生はのりに乗っているし、馬鹿丸出しの三人衆はむしろ敵だ。今は三時半を過ぎたくらいだから、あと一時間以上は着せかえ人形をされなければならぬ。

「陸奥実君、君は最高のモデルだ！　ぜひ、我が前橋グループに……」

「お前はまだ学生だろ……！　この変態カメラマン……！　いつか絶対、起訴してやるからな！」

「じゃあ、これらの写真を全国公開してもいいんですね？」

「……ぐう……」

もう雁字搦めだった。反論どころか従わなくてはいけない。ある意味いじめだ！　いや、これは歴としたいじめだ！

「ええやないかあ！　そのメイド服かてものすごく可愛いんやから

あ！」

「言つなああ！ 恥ずかしいんだから！」

そんなことより、説明せねば……。

その次の日。つまり今日に相当する日だ。この日が俺の、いや、俺らの運命を左右する日だった。

まさか、この日が人生最大の日になるとは当時の俺は思いさえしなかっただろう。

「おはようさん！」

「おう！ いやあ、肩の荷が一つ下りて楽になったぜい」

「ですが、安心するのは今のうちですよ？」

「そうだ。なんだかんだでこうなった以上、決めなければならない」

時計は八時丁度を示している。朝のSHRは八時半からだ。なぜこんなに集まったのかというと、

「じゃあ、罰ゲームはなんにするん？」

このためだった。この勝負はなぜか極秘のため、早めに集まる必要があった。だったら始めに決めればよかったのに。

ともかく、会議は始まった。

「全員の荷物運びっちゅうのはどつちや？」

「そいつは軽すぎる。その類なら、全員の掃除分担をするぐらいだ妥当だ」

「でも逆にそれもありきたりですよね。もうちょっとこう、アグレッシブな方がいいです」

「それなら、一位の人がビリに一つだけ命令する、っていうのはどつちだ？」

「……えっ？」

三人とも俺の方を向いた。ちょっと怖い。

「いや、だから……、やっぱり止めとくか。それもありきたり……」

「それにしましょう！」

「グッドアイディアやなあ！」

「ぐっへへ……、何を命令しようかのお……！」

絶対に一人だけ反応が違うやつがいるが……。とにかく、罰ゲームは決定した。あとは結果を祈るのみとなった。

その後、適当に雑談となった。話していくうちに人が増えてきて、気づくと時間になっていた。先生はみんなに呼びかけている

俺らはそれぞれ分かれる。尤も、真乃は隣の席だから行く方向は同じだが。

「流さん」

「なんだ？」

その途中、真乃が話しかけてきた。

「誰がビリか楽しみですね」

「それが自分だったら笑えないけどな」

「同感です」

席に着くと直ぐに始まった。先生の話なんかろくに耳に入らなかつた。

窓の外は清々しい空模様だった。ところどころに白いのが見え、その隙間に太陽が顔を覗かせている。耳に残るガラガラ声は既に季節外れに感じる。その合間を縫って、高低のついた声がある。いい日だ。こんな日がいっまでも続けばいいのに。
ふとして、何かが聞こえた。

「それでは、三つのテストを返します」

……？

「まず、一番から取りに来て下さい。尚、現文、数学、英語の順で重ねてあります」

……え？

そして……。

「前橋！ 前橋！ 早く来なさい！」

「はいはい！ すんません！」

とおちゃんの番がきた。つまり、それは俺の番を報せるものだ。列の最後尾に並んだ。

とおちゃんは軽く頭を下げて受け取った。中は見ていない。そして一人飛んで、俺の番になった。こんな気分になったのは、通知表をもらう時以来だ。

「陸奥実君、はい」

「ど、どうも……」

震えた手で受け取ると、速やかに席に戻った。

手に汗握る思いだ。異様に体が熱い。それはそつだ。この僅か数ミリにも満たない厚さが、運命を担う光なのだから。

ふと、周りが騒がしい気がする。

「陸奥実、早く開ける！ おまえのそれで全てが決まる！」

「どうなんやあ！ どうなんやあ！」

なんでクラスの大半が俺を囲んでいるんだ？ かなり怖いぞ。

そして俺は光をゆっくりと開いていく。そこに書かれていたのは……。

「しかし、あの流さんあろう者がビリだったのは意外ですよね」

「そうやな。まあ、運も実力のうち言うからなあ。仕方あらへん」

「違う！ それはお前等が強制的に……」

「ほら、陸奥実君。スカート捲って」

「あっ！ 止める！ 捲るなよ！」

「もう、陸奥実君ってクールに見えて、シャイなのね」

テストの点数は明らかに俺が一番だった。なのに……。

「いいだろう！ 点数では一番なんだから！」

「うーん……どうします？」

「しかし、名前あらへんとなあ……」

「微妙だな」

そう、現代文以外の名前を書き忘れてしまったのだ。あまりの緊

張と焦りで問題にしか目が向いていなかった。我ながら失態だ。

先生は一応、サービスしてゼロ点にはしていない。嚴重注意はされたが。しかし、話の流れでは俺が数学と英語が名前書き忘れでゼロ点と見做され、ビリにされてしまう。されてたまるか！

ここは理屈で勝負するしかない。タイミングを見計らって……よし。

「みんなとりあえず、聞いてくれ」

「……なんだ？」

三人をこちらに振り向かせた。

「確かに、名前は書き忘れたのはねじ曲げられない事実だ。だが、今回の勝負はあくまでも点数勝負だ。しかも、先生も一応認めている。ならば、いいんじゃないかと思うんだが……」

あまり納得のいかない屁理屈だが……どうだ？ 一応、理にかなっている理由だと思うのだが。

ところが、意外な人物が名乗り上げてきた。

「ちょっと待て！」

「！」

それはとおちゃんだった。とおちゃんはいかにも俺を疑っている素振りを見せた。今の説明にどこがおかしいところでもあるのだろうか？ いや、それはないはずだ。

目の前の机を思いつき叩いた。そのいきなりの行動にクラス全員は注目する。

「陸奥実、しくじったな！ 今の言葉でお前は墓穴を掘ったぜい！」

「えっ！」

ズビシッ！ っと指を指された。

「お前は今、自分の過ちを認めたな！ ならばコレを見るおおっ！」

「？」

とおちゃんが一枚の紙を見せつけた。それを手に取り、よくよく見てみる。……どう見たって解答用紙だった。これが一体何になるというんだ？ もちろん、周りの生徒たちも疑問を隠せなかった。

「それが何になる言うんや？」

まるで俺の心を読んでいるかのような質問だった。それに真乃も頷く。

「それは俺の数学のテスト……らしい」

「？」 “らしい” ってどういうことだ？」

「名前の欄を見てみな」

そこを見てみると、書いていなかった。名前が……。しかも大きく赤丸が書いてあった。つまり……。まさか、おれの……？

「まさか、このテストが俺のって言うんじゃないだろうな？」

「まさか。んなことはないぜい。オレが言いてえのはそこじゃない」
すると、俺に背中を向けて黒板の方へ行く。そこには教卓に肘を突いて居眠り中の先生がいた。そして今度はそれを叩いて、たたき起こす。

「うおっ！ どっ、どうしたんだよ、びっくりしたなあ……！」

「先生にお聞きしたいことがあります」

とおちゃんは先生に詰め寄った。とおちゃんは一体何をしようとしているんだ？ 全く読めない。

「陸奥実のテスト、名前なかったですよ？ 名前を書き忘れたときはゼロ点じゃないんですか？」

「……まあ、いくらなんでも、二つじゃあかわいそすぎるでしょ」

「ですが、それは私情ですよ？」

……まさか……。もしかして……。

読めた。とおちゃんの思惑が読めた。しかし、それはまずすぎる。それは一発逆転を秘めた荒技だ。もし罷り通ってしまったら……、

俺の負けは確実だ。

今すぐに釘を刺そうとした。だが、口が塞がれた。

「ダメデスヨ……。イマノアナタニ、ボウガイハミトメラレマセン

……」

一体何語だ？ まるで宇宙人が喋っているかの……。とりあえず押さえつけられ、身じろぎ一つできない。

「ならば、なぜ……」

言うな！ 言わないでくれえええ！

「オレのテストはゼロ点なのですか！」

結局、生徒全員に対する素敵な“平等化”のおかげで、こんな格好にされてしまったのだった。結果は一位は真乃、二位は棗さん、三位はおちやんでビリが……。俺だ。まさかあんな落とし穴があるとは思わなかった。

「……なあ、そろそろ終わりにしてくれないか？ ……もう五時過ぎてるんだが……」

「だあめやでえ〜！ あとスクール水着と猫ミミとチャイナドレスと……」

その前に、それらは誰のモノなんだ？ しかもメイド服まで持つてるなんて相当……。

もちろん答は返ってこない。三人衆は服選び、変態カメラマンはレンズを磨いていた。いつになったらこいつらは飽きるんだ？

「よし、次はスクール水着でいくでえ！」

「……え？」

「いいですね〜！ 流さんのグラビアですね！」

「ぐひひひひ……！ 腕が鳴りますなあ……！」

「じゃあ、眼鏡かけましょっか！」

秋間先生がいきなり現れて、透明なフレームでなっている眼鏡をかける。コンタクトの上に眼鏡は……と思ったが、伊達眼鏡だったのでちよっぴり安心する。

「やっばすぎやあ！ メチャメチャかわええ！」

前言撤回。やっぱり安心できない。

「流さんは肌は白い方ですから、水着来たら……」

「魅力満載ですな」

む……っ……み……か……く……っ……

「ちよっと、待て！ 誰の水着だよ！ その前に男に着られたら嫌
だろう！ ましてや俺が着るんだぞ！」

「陸奥実君、自分に自信を持ちなさい！」

どんな自信だ！ むしろ痴態だ！

「大事だ陸奥実。私が君を頂点まで導いてやる。……これら売って」

「ぶざけるな！ そんな気持ち悪いのを売るな！ 第一、罰ゲームは写真撮影だけじゃなかったのか！」

「……いや、これはすごいで、マジで？ 髪型とか化粧したらホンマに女なれるで？」

「無視するな！」

もう逃げるしかない！

あいつらの隙が重なったのを見計らって、走り出した。何かを叫んでいるが今の俺には逃げることにしか頭にない。唯一の脱出ルートであるドアに手をかける。そして思いっきり右にひっぱ……れない？

「むっちゃん待ってやあ！」

「逃がさんぞ、陸奥実！」

「ぐわっ！」

ドアを目の前にして取り押さえられた。上からの力はとても強く、俺の力では到底歯が立たない。なにせ陸上部のエースと運動神経抜群が乗っかっているのだから無理はない。そして……。

「ショータイム！」

黒い布の固まりを手にして近付いてくるゾンビ。明らかに異質だった。

「や、やめる……」

それはゆっくりとゆっくりと近付いてくる。一歩、一歩毎に背筋が凍っていく。

「流さああああん、覚悟おおお……」

「うわあああああああ！」

後のことはよく覚えていない。いや、思い出したくない。

十七戒目「分岐」

「……先輩、さっきからどうしたんですか？ 恋の悩みですか？」

「そんなわけではないですよ。……まあ、悩みは確かにあるけど……」

「それなら、私が協力しますよ！」

「ふふっ、気持ちだけは貰っておくわ」

楠波は頬を膨らませていじけてしまった。どうやら本当に手伝いたかったようだった。私はてっきりおちよくっているのかと……。

「ただど、どちらにせよ私の台詞は変わらないと思う。いや、変わらない。『普通』の人にはとても相談にならない話なのだから……」

「先輩、休み時間終わっちゃいますよ。早く行きましょうよ！」

「はいはい、楠波は元気でいいわね。ちょっと分けてほしいくらい」

「ちよつとと言わず、全部あげますよ！」

それは丁重に断っておいた。

今日はとてもいい感じがする。九月は残暑が続くが、まるで火で炙った石に水をかけたように一気に変わっていく。あの猛暑に比べれば月と鼈だ。そして蝉の鳴き方も僅かに、でも確実に変化し始めている。

私は今は秋だと体で感じたのだった。

「……陸奥実君、ちょっといいですか？」

「あつああ。ちょっと待ってる……、はい上がり」

二枚に重なったランプが陸奥実君の勝利を告げる。他の五人はそれを呆然と眺めていた。そして打って変わってブーイングの嵐が打ちつける。ちなみにA二枚だった。

「全く、そういうのを“負け犬の遠吠え”というんだ。じゃあ後はやっけてくれ。……行くぞ」

「は、はい……」

「むつみいいい！ 絶対地獄にたたき落としてやるからなあ！」

そんな荒々しい中とりあえず、教室をさっさと出た。

僕ら二人は別空間に出た。あの騒がしい雰囲気はドア一枚でシャットアウトされる。多少は漏れているものの、振動が殺され耳に届くまでには微動になっている。さすがにパワフルだ。

廊下は右手の一組方向には誰もいなく、逆の八組方向には数人しかいない。

「たかがランプなのに熱くなった」

「……いいじゃないですか。僕は改めて陸奥実君の頭脳明晰ぶりを拝見しましたよ」

大富豪。またの名を大貧民。

トランプゲームの一つでポピュラーなゲーム。あまりに有名なためにローカルルールが存在している。例えば“11”、通称は“イレブンバック”。名称でも複数存在しているのに、効果も複数ある。どこかの地方では、バック、つまり“3”が強くなるかそのままかを選ぶ。違うところでは、強制的にバックしなければならないという。

また、“11”は禁止上がりに分類されることもある。禁止上がりとはご存知の通り、その数字で上がると強制的に大貧民されるというものだ。ここでは主に“ジョーカー破りのスピードの3”、“やぎりの8”、“11”、“2”、“ジョーカー”がそれに入っている。

「まあ、大富豪は相手を推理できるゲームだから面白いな。今度やるか？」

「その機会があればぜひ」

柄にもなく熱く語る陸奥実君はクールな普段に比べ数段幼く見えた。意外な一面が見れてよかった。それと嬉しかった。

「ひとまず、あそこに行きましょうか」

「そうだな。あと二十分くらいで昼休みが終わってしまう」

僕は少し早めに階段へ向かった。そんなにかからない。目の前にあるから。

それを登り始めた。

適当に話を進めていく僕ら。特に不自然もなく上がっていく。しかし、こんなことは初めてだった。この時間がこんなに……。

急に何かを思い出したらしく、話題を切り替えた。

「ところで、瑠璃人は大事なのか？」

「？ 何がですか？」

一旦足を止めた。

「あの……、命が狙われてるっていうのだよ」

……。

丁度五階まであと二、三段くらいの時だった。陸奥実君が……？

瑠璃人は五階まであと数段というところで止まった。いや、何か目を釘付けにされて意識がこちらに向いていない気がする。瑠璃人が初めて見せる反応だった。

「？ どうした？ 何か変なものでも見たのか？」

「……あっ、いえ。陸奥実君は相変わらず綺麗だな、と思っただけです」

「……とにかく、早く行くぞ」

不審に（かなり引き気味に）思いながら、再び行動を起こした。五階から屋上へ向かう階段にさしかかる。何かそわそわしている瑠

璃人と並ぶようにペースを合わせた。質問に答えてもらうためだった。ふとして目が合うが、無言で返された。

あまり話題にしてほしくないのか、それともすでに解決済みなのかはわからない。だが、明らかに取っ掛かりを感じるのには確かで、いまいち解せなかった。

そんなことを考えていると、ドアに直面した。着いたようだ。

「……開くのか？」

「はい。既に鍵ははずしてありますから入れますよ」

屋上へのドアは職員室にある鍵がないと開かない。しかも生徒はいかなる理由でも立入禁止である。つまり、犯罪である。

罪悪感と共に取っ手をゆっくり捻り、押してみる。老朽化しているのか、耳に障る金属音は下の方まで聞こえるかと思うくらいだった。なので一気に押し退けた。

「……すごい。すごいですね……」

「ああ。予想してたのとは違う」

空。辺り一面に広がる空。真つ青な空。白い綿飴が浮いている空。まるでそれに包まれているようだった。そして意外に風が少し強い。端っこには落ちないための柵が高く作られている。

中心の方へ歩いていく。その間、瑠璃人の漆黒の髪が激しく舞っていた。そして辿り着くと何となく優越感に浸れた気分になった。そして、浮遊感を覚えた。……感慨に耽っている場合ではない。

「それで、言いたいことってなんだ？ 人をこんなところに呼んでおいて……」

「それにしても、わくわくしてたじゃありませんか。本当は楽しみにしてたのではないですか？」

「……用件はなんだ？」

ある休み時間、瑠璃人が俺に“大事な話がある”と吹き込んできたのだ。あっちが話しかけるのは珍しいが、俺がそれに乗ろうと思っただのも珍しかった。

最初は例の件かと思っただが、先ほどの会話からして違っらしい。まさか、呼んただけとはあるまい。

瑠璃人はにっこり笑った。

「いや、ただ呼んただけですよ」

「……………」

……思っただそばから言いやがって……！ ……ならば用はない。

「すみません！ お願いですから帰らないで下さい！ ほんの冗談ですよ！」

「次は絶対に帰るからな……！」

はらわた
腸の底から沸き上がる血をどうにかして留めた。最近はずぐにいらいらしてしまう。

とりあえず、気持ちを落ち着けてから話を聞くことにした。血が緩やかになっきて、気持ちいいかもしれない。

「すみません。冗談が過ぎました。では話しますね」

「ああ」

俺らは下へ戻る塔に戻っていった。いくら柵があるからといって安心できない。むしろ高すぎて怖かった。だが、景色は見ておきたいので、中でなく塔の壁により掛かりながらと話すことにする。

俺はふとして柵の向こう側を見下ろしてみた。たまたまいた先生やら生徒やらがとても小さく見える。すぐに見るのをやめた。

瑠璃人が肩をたたいた。少し謝って、聞く体制になる。

「僕らにはあまり関係ないことですが、念のための話です」

「……」

「……虹にいかから聞いた変な噂です」

「……？ 噂？」

真剣に聞いていたのに、噂話だったのか。俺は基本的に噂は噂とでしか受け取っていない。信憑性に欠けるものはあまり好きではない。だが、“念のため”聞いておこう。

瑠璃人は俺の顔を窺ってから話を再開させた。

「このところよく、殺傷事件が多く発生しています。昨年の二倍くらいらしいです」

「……それは多すぎだな……。世の中は物騒になったものだ」

「年寄り臭い台詞言わないで下さい」

それは置いていて。

「年齢層はバラバラ、その過程も同様です。中には自殺に見せかけるものまであったようです」

「……………それが一体……………、何なんだ？」

つい、本音が出てしまった。さっさと行ってほしい。しかしなんだろう？ この重苦しい空気は？ 本人はわからないだろうけど、何というかねばねばしたというかどろつとしたというか、体にまとわりつくような変なものがあつた。

その原因はあっさり吐き捨てられた。

「それは……………、“手紙”です」

「……………！」

手紙……………？ 手紙って……………あれのことか……………？

「……………かなり内容の悪い手紙のようですが、犯人を取り調べると数名がそれを口にしたそうです」

「…………………………」

警察に存在がバレた。

存在が知られてはまずい代物だ。しかも警察とあまり関係のない瑠璃人がここまで知っていると、浸透度は高い。ただし、俺ら一般市民にはもちろん流れていないから、情報操作がされていると見て間違いない。

「……それはどういうことが書かれているんだ？」

「あれ？ 興味あるんですか？ 僕はてっきりどうでもいいと……」

「いいから答える」

全くこいつは人の揚げ足ばかり取って……！

瑠璃人は含み笑いを添えて返した。

「とりあえず、殺人を唆すことらしいですよ。僕は全て虹にいいから聞いた話なのでよくわかりませんが……」

「……そうか」

「どうやら満更でもないようだ。しかしなぜ今の時期になって発生してきたんだ？ 頭をフル回転して……」

「……そろそろ帰りましょう」

「え？」

瑠璃人は俺を置き去りにするかのようにそそくさと中へ入っていった。相変わらず急なやつだ。

俺もそれについていく。

「ちなみに、朝からずっとチャイム鳴りませんでしたよね？」

「……………」

俺が考えるのは手紙の方でなく、授業に遅れた理由だった。

「絶対に次こそは勝ってみせますよ！」

「……………」

まさかあそこで“革命”されるとは思わなかった。俺の最後の一枚は“A”。それで上がりのはずだったのに、棗さんが革命を起こしたのだ。天国から奈落の底にたたき落とされたよ。うな、積み木を崩されたような敗北感を……………じゃなくて。俺らは帰っている途中のはず……………なのに。

「ブランコって意外に楽しめますねえ〜！」

「俺は背中を押すだけで楽しくないんだがな……………、よっと！」

なぜか公園で戯れていた。

辺りは一色だった。太陽が丸く橙に光を放ち、物や俺らによって遮られる。そこは暗黒の領域だった。二つ以上できている。ブランコの放物線運動で領域は移動し、伸び縮みするが一方のみ。

あの憎き太陽はいつの間にか風情を匂わせる気障なやつに変わっていた。

「流さん、強いです。もう少し弱く押して下さい！」

「……………一応手加減してたんだが……………、わかった」

真乃の小さい背中が近づいて手に触れさせる。タイミングを見計らって掌全体に力を込めて押す。すると真乃を乗せたブランコは金属を擦れ合わせながら前に揺らぐ。今回は程よく高い。それ以降も同じくらいに保って押す。時折、態と強くしたりしてじゃれあっていた。そして橙が藍くらいに変わってくる頃、真乃は多少興奮しながら足で運動を止まらせ、降りた。

「……どうした？ そろそろか？」

「流さん、今日は何日ですか？」

突拍子にもほどがある。

真乃は空にある境界線を見ていた。

「えっと、テストが二日だったから……五日だ」

「そうですか……五日ですか……」

「何かあるのか？」

「いえ、特にありませんよ。ただ気になっただけです」

真乃はため息混じりに呟いた。

本来ならここで会話を引かせるのだが、やけに気になる点がある。俺は思い切って続けることにした。

「何が気になったんだ？」

「え？」

思った通り、目を見開いた。それがなぜか白々しく、態とらしくも見える。

「何に気になったんだ」

まるで噛みつくように言葉を尖らせる。真乃は肩を竦めて俺から視線を逸らした。その顔には多少なりとも怯えがある。確かにこれでは尋問だ。

「……悪い。変な質問だったな。……気にしないでくれ」

「……いや、いいんです」

真乃はブランコの近くに置いていた二つの鞆を持ってきた。片方を俺に渡す。底に砂埃が付いていたが、軽くはたいて落とした。

「最近流さんにはひどいことばかりしていますから、私に怒ったりしても仕方ありません」

「……あれは罰ゲームだろう？ 真乃が悪いわけじゃないし、そもそも怒ったりしていない」

あれは人生最大の汚点だが、自分が悪い。……思い出すのはよそう。

「ほら、暗くなってきたから帰るぞ」

「……はい」

すっかり染め上げられた藍を背に、公園を出ていった。

そういえば、何時間遊んだのだろう？

今日学校が終わったのが三時半過ぎ、そこから真乃と帰る途中で寄り道した。滑り台やら鉄棒やらがあるごく普通の公園に。そこでついさつきまで遊んでいたのか？ でも、こんなになるまで遊んだのはなかなか久しい。

すっかり暗くなった道を肩を並べて歩く影。電柱にぶら下がっている電灯も灯り始め、ところどころで俺らを見下ろす。通る度に真乃の顔が照らされていた。

「流さん」

まるで独り言のよう。

「何だ？」

「……な人っていますか？」

「？ 何だつて？」

「ああっ、いついえ、いいですいいです！ 気にしないで下さい！
……えへへ……」

「？」

舌を出してちよっと笑った。

今日はつくづく変な真乃だ。こんなことは珍しい。真乃は言うところにはつきり言う質だからだ。言葉を濁らせたり曖昧化させるのは何かを考えているか、言いたくないかのどちらからかだ。

そんな変な空気を引き連れたまま話が進み、遂に例の分かれ道に着いてしまった。

「……あつ、私はこっちですから……」

「ああ。大丈夫か？ 結構暗くなってるぞ？」

「大丈夫です！ 小学生じゃないですから！ では流さん、また明日！」

彼女は走って分かれていった。俺はその背中を少しの間見つめ、歩いていった。

「陸奥実君……」

十八戒目「幻想」

「はあっ、……はあっ、はあっ、はあっ、つあっ！」

誰かが走っている。

「ふうっ、ふっ、はあっ！ うふう……はあっ、はあっ、はあっ！」

一度止まって、走っては止まって、また走っては止まっただけの繰り返し。そのあまりにも挙動不審な行動はなぜか必死そうだった。

逃げていた。道無き道をがむしゃらに、怯えて、震え、呑み込まれないように。しかし、ここがどこなのかわからない。いや、それどころか自分は本当に足を動かしているのかさえわからない。意味がわからない。

まるで傍観者だった。逃げ惑う誰かを映すテレビを見ているかのよう。つまり、誰かの物語を……。

誰かは立ち止まった。

真つ暗な夜だからか、たまたま灯りが無いからなのかわからない。でも、確かに人影はあるし荒げる息もする。落ち着けと言わんばかりに静かに早く深呼吸を繰り返す。漸く平静を保てたところで今度は、真横に歩きしゃがみこんだ。そして辺りを見回す。

違う。立ち止まったのではない。隠れたのだ。おそらく歩いた方に細道があって、ゴミの陰にでも隠れたのだろう。誰かは夜目が利くようだ。

「……………」

息を極限まで殺し、辺りを探る。

「……………」

……………

……………

……………

「いなくなったのか……………」

誰かはそつと呟く。念のためにもう少し待ってみるが、何も無い。肩にのしかかる緊張感と背筋を駆け巡る悪寒が体を震えさせる。それらをなんとか抑え込み、顔を覗かせた。

「！　うわぁっ！」

期待を簡単に裏切られた。誰かは一瞬の出来事に尻餅をついた。そちらには何も無いように見える。だが、誰かが短く悲鳴を上げていることから何か居るのだろう。あまりに恐ろしい何か。

再び立ち上がろうと膝を突き立てるが、バランスが上手く取れず倒れてしまう。さっきまで収まっていた震えがその分を補うように

働いていた。使い物にならない。

「く、来るな！ 近寄るな！」

誰かはその下半身を引きずりながら後ずさる。そして遂に、背中に何かが当たった。

「くっ！ 行き止まりかよ！」

あまりに堅い衝撃が先のことを占っていた。足掻こうとしても、すでに体力も精神も底をついてしまった。もう終わりだ、そう思った。

「……嫌だ……触るな！ 止める！」

誰かは腕を引っ張り上げられ、無理矢理立たされる。膝に力が入らずすぐ崩れるが、股に何かをつつかえられた。それは激しく突き上げる。

「やめつろお！ 触るなあ！ っあ！」

体がガクガクと揺れて裂けそうになる。しかし、されるがままであった。言葉でしか抵抗できなかった口もテープらしきもので塞がれ、もはや人形でしかなかった。

誰かは一瞬体が跳ね上がり、無理矢理虚脱感を覚えさせられた。もう駄目だった。

「んふっ……んんう……」

誰かの意識はそこで途絶えた。

今度は全くの別空間だった。普通の街並みの風景だった。人も歩いていて、信号や車などの交通も盛んなところだった。ふとしてなぜか、全身真っ黒の、まるで影に覆われたような“誰か”がまたいた。おそらく別人だろう。

その誰かの横を幼い女の子が通り過ぎていった。

「……………」

誰かは少女の後を付けることにした。

少女はよく見ると少女ではなかった。顔つきはかなり幼く見えたが、身長や雰囲気は中学生くらいのもだった。なぜかそう思ったふとして少女はこちらを振り返ってきた。全身から汗があふれ出るような気分に襲われた。もしかしたら、いざこざになってしまいかもしれない。

しかし変に思わなかったのか、素っ気なく振り返り直し、再び歩き出した。誰かは内心、安堵のため息をついていた。

「……………もうよそう。馬鹿みたい」

丁度目の先にあった某ファーストフード店に入った。お腹も空い

ていてまさに丁度よかったようだ。

店内はほどほどにいた。まだ昼時でないにしろ客足はまあまあだろう。誰かは数人の列に並び、自分の番になるとコーヒーとポテトを頼んだ。お釣りのないように支払い、その数秒後に受け取った。

「……………」

適当な個人席に座った頃に自動ドアが開いた。そこにいたのは先ほどの少女だった。誰かは少し戸惑ったが、そんなこともあるだろうと気にせずポテトを口に含んだ。

「たまにはいいかもしれない。のんびりと日差しを眺めるのも」

誰かはそう呟いた。しかし、コーヒーがあまり美味しく感じられなかった。そして妙な出来事も起こった。

少女が誰かの二つ隣の席に座ったのだ。しかも全く同じメニューで。流石にこれは受け流せなかった。

気分が悪くなったのか、残り僅かのポテトとコーヒーを惜しみなく流し込む。トレイや容器を分別して捨て、足早に店を後にする。

「……………」

目の前には広々とした道路があつて、そこを何台も車が走っている。そこは変わらない。しかし、心のどこかにとっかかりが出来ていた。

誰かは再び歩き出した。それを考えるために。

「……………」

気持ちがいかに揺れる。上がるときにはどっと上がり、そこから

一気に落ちる。それは一定で、遅い。そのイメージをつかめたものの、結局はわからなかった。しかし、絶対に身に覚えがある。もう少し時間がかかるようだ。

「……………ふう」

特に行く宛もなく放浪する。高いビルをベンチから眺めたり、河原でせせらぎを感じてみたり、たまたま会った青年と話してみたりと一日という時間を散歩で埋め尽くした。そして、なぜか過ごしていくうちに祝福されたような気がしてならなかった。

誰かはある辺鄙な公園に漂流した。特に特徴のないそこは虚しい。ブランコに腰を下ろした。するといきなり、目の前に何かが現れた。

「！あなたは……………」

「……………」

夕焼けに染め上げられた橙のような髪の毛がふわふわと舞う。とても長いそれは本体を包むようだった。

少女だった。

誰かは動揺するとか驚くとかよりも、その雰囲気の虜になった。弱々しいうちに秘められる優しい何かを少女は持っていた。

しかし、少女は虚ろそうだった。それによって自然と口が動いた。

「……………どうしたの？ 具合でも悪い？」

「……………」

「……………？」

すすすすすすすすすす……」

「……み……つみ……」

「……ん？」

「むつみいいいいいいい！」

「……つつう……」

一体何なんだ？ 何があったんだ？

「へえ……なかなか粋のあることするねえ……。まさか、俺を無視するとは……」

「……へ？」

俺はすぐに時計を見てみた。……二時半くらい。つまり、五時間目の英語の授業だ。そして福田先生のこの怒りようから判断して、どうやら寝てしまったらしい。黒板と自分のノートを見比べても進行度があまりに違う。

「じゃあ陸奥実、一分あげるからこの英文を訳して」

「えっ？ ああ、はい」

俺は黒板に書かれた英文を見てみた。とりあえず問題はない。そこへ横槍を投げてくるやつがいた。

「……大丈夫ですか？ あれ、私にはさっぱりですよ……」

「真乃にできて俺にできない問題はない。心配無用だ」

真乃は流石と言わんばかりに息を吹かす。さて、そろそろだ。

「はい陸奥実、どうぞ〜！」

「……“私は誰が何と言おうとも諦める気はありません。” だと思います……」

ざっとこんな感じだろう。

ところで、これはどういう状況なんだろう？ こんな青臭い台詞のあるセクションではないはず。寝る前の記憶が正しければ、確か社会問題的なセクションだったような。一体どうということだろう？

「あつ、全くもって正解です。何で出したかというと、特に理由はないです。ただパツと閃いただけですので深く考えないでください」

ただの例文だったのか。それなら納得がいく。しかし、びっくりした。この例文がまるで自分の心情を移したかのようだったからだ。

今日は六日。期限まで残り十日くらい。今の段階でさえ何がどう

なのかがよくわからない。本当なのか嘘なのか。でも仮に本当だったとして、一体何ができるんだろう？ あのふざけた“方法”を実行しなくても言うのか？

「流さん」

そんなことできるわけがない。だから別の方法でいかななくてはいけないのだ。じゃあその“別の方法”とは何か？

「おーい、流さーん」

それが見つかれば苦労はしない。いや、もしかしたら目の前にあるかもしれないし、またはないかもしれない。“方法を実行する”以外は。

だけど黙って死ぬわけにはいかない。

「なっちゃんどうします？ 流さん、完全に殻に籠もっていますよ

……」

「じゃあ真乃やんが殻の割れ目に“キス”するふりしたらええんとかやう？」

「ええっ！ ……わっ、わかりました……やってみます……」

少し頭が痛くなってきた。この後のことは家でじっくり考えてみよう。できることなら美浦さんと連絡を取り合いたい。

「……ん？」

「……っん……」

目の前には一面真乃の目を瞑った顔があった。かなり顔が赤くなっている……何の真似だ？ しかもその本人は気づいていない。だんだん近くなってくるその前に、中指を親指に押さえさせてデコピンをしてやった。

「ふぎやっ！ なっ何するんですか！」

「それはこっちの台詞だ。それに棗さんも、何でそんなにそわそわしてるんだ？」

「ああ、いや、その、それはやなあ……なはははは……」

苦笑いとともにものすごい形相で睨まれた。真乃には陰になっていて見えなかった。

学校が終わり家に帰る頃だ。とおちゃんは毎度ながら部活なので、ほぼこれで帰ることが必然的に多かった。少しもの寂しいが仕方ない。

「それで、どうしたんだ？ 一体」

「……はい？」

「いや、だから何か言いたくて俺に声をかけたんじゃないのか？」

「……！」

一瞬真乃の顔が歪んだような……。

真乃は俯いたと思いきや、両手で俺の頬を挟みやがった。しかもかなり強く、痛い。そしてにっこり笑った。

「流さんがあまりにも閉じこもっていたので、イタズラをしたかったです」

「なっ……！ この悪戯小僧め！」

「あっはははは！ じゃあ流さんが怒ってしまったたようなので先に逃げさせてもらいます！」

真乃はお返しされる前にあっという間に逃げ去ってしまった。なんとまあ逃げ足の早いこと。あまりに一瞬で追いかける暇もない。自然と笑みが零れた。

「……全く、真乃はいつでも元気だな。羨ましいくらいに……」

「あれ？ むっちゃんにはそう見えたんか？」

棗さんが意外そうに驚く。

「え？ だって今の見たろう？ あの悪ガキぶりを」

「むっちゃんは意外にドンカンやなあ……。呆れてまうわあ……」

「おいおい、どういことだ？ 説明してくれ」

「全く。むっちゃんは頭はいいのに……。ああ！ もどかしいなあ」

「だから説明してくれよ！ どういことなんだ！」

「……むっちゃん、……怖い……」

「……あっ……」

つい苛立って怒鳴ってしまった。棗さんが少し距離を置いているのに気がつかなかった。俺は素直に謝罪した。なぜか棗さんも謝った。

棗さん曰わく、「ワイが言うてしもうたらあかんのや。意味分かるなあ？ 自分で探さなあかん。見つけなあかんのや」、「とのこと。まるで超難問のなぞなぞを出されたかのようだった。

とりあえずまた、歩き出した。

「しっかし……」

「ん？」

「さっきのむっちゃんはホンマに怖かったで？ なんかあったん？」

「……ごめん。考えてたのと被ってしまったようだ」

自分のミスをそのせいにするなんてかなり卑怯だった。だが、事実だ。

「何か悩み事あるんなら、相談してえな。一人で考えるのはよくないで」

「……ありがとう。でも大事だ。そんな大した問題じゃないから……」

普通のことなら相談したい。でも、棗さんたちを巻き込みたくない

い。もししてしまつたら、嫌でも巻き込まれるのでないかと思つて
いる。だから……。

「……そうなん？　ワイには“助けてほしい”言つてる風に見える
んけど……」

「……！」

「……教えてえな。むつちゃんの悩み事。ワイでよかつたら……」

　棗さんが俺の手を軽く握る。手に伝わる温もりは穢れのない純真
な想いを馳せている。俺はきつと、心のどこかにこれを欲していた
のだろうか。どんどん満たされていき、ついには溢れてきた。

「……ああ。わかつた。でも、もう少し待つてくれ。気持ちが落
ち着いたら相談させてくれ……」

「うん！　当然やないかい！　いきなりは急やしなあ。でも、絶対
にワイとかみんなにするんやで！」

　奥の方で赤らめる空は、次第に全体を一色に染め上げ、やがてま
た塗り替えられるだろう。正直、それを見る回数を重ねていくにつ
れ、怖くなつていた。だが、今はそう思わない。そして最後の日、
みんなとはしゃぎ回れる日々が繰り返されていく光景が脳裏にまざ
まざとあつた。残りはそんなに永くはない。でも余裕だ。みんなが
いれば。

「……それじゃあワイはここだな」

「ああ。じゃあな」

「さいならあ！」

一人の女の子は元気に走り去っていった。

「……は、なんかいい感じ……」

「？ どうしたんです？」

「ああ、えつと、すまんなあ！ 待たせてしもってつてな！」

「いえ、私の方こそ申し訳ありません。わざわざこんな夜遅くまで付き合わせてもらって……」

「ええつて！ なんてつたつて、真乃やんの為やしなあ」

「……これで、用意はできました。あとは成り行きまかせでいきますから……」

「しかし、真乃さんこそええの……？ むっちゃんの為にそこまでするんかい？」

「はい……。流さんは私のせいで何かと迷惑を掛けてきました。そのお詫びと私の想いを……伝えますよ」

「……そうか。それならワイは止めん。でも、やり方は間違えちゃ

あかんでっ？」

「はい。そろそろ入んは練習してますので……」

「あと一週間くらいやけど、焦らずガンバリい！」

十九戒目「現実・上」

「よし、それでは全員準備に取りかかってくれ。細かな質問は私にしてくれ」

「あ、あの……いいでしょうか？」

「ん？ どうした？」

「あの……、燕の巣がかなり高いところにあるんですが……。どうしたらいいでしょうか？」

「構わない。もし手だてがないなら、強行していい。私たちが欲しいのは巣ではないのだから。あとで直してあげればよいだけだ」

「分かりました。ありがとうございます」

「うむ。頑張って」

「あ、さん、ちょっとお話があるのですが、よろしいでしょうか？」

「どうした？ また質問か？」

「いえ、実は燕にはかなり種類があるようで、もしかしたら間違いの可能性がある……」

「何？ つまり、私たちが食べたい燕ではないということ？」

「……いかにも……」

「……仕方ない。先ほどの者と連携を取り、状況を随時報告」

「……手段は？」

「問わない。ただし、燕には絶対に危害を加えてはならない。不測の事態になったら機会を窺って即撤収。……いい？」

「了解しました」

「……燕の巣が食べたいのなら、高級レストランに行けばいいのに……」

空が泣いている。

幾千幾万の涙が地に降り注ぐ。風はほとんどないので真っ直ぐ伝っていった。不時着時の音が途絶えることなく連続している。テレビの砂嵐に近い。

久々に感じる休み。この頃は時間の流れが緩やかに感じる。悪い意味ではない。でも、それが逆に怖いというのもあった。

「……ふう」

そういえば、前にも似たような場面のような気がする。いや、なかった気もする。つまりは意味をそんなに含んではないということだ。忘れてしまおう。

七日。昨日の夕方はまだ晴れていたというのに、残念だ。でも時には必要なだろう。

「今日は家でじっとしてろってことか……」

ふとして、机の上にあるものが見えた。いつぞやかに撮った写真。木製の写真立てに納められている。三人の変な顔に囲まれている笑顔。今思い出すだけで笑えてくる。俺は、コンタクトを容器に入れて側に置いた。

「たまには、これで過ごすか。意外と疲れるし……」

まさか見られてるわけでもない。ここは絶対不可侵空間なのだ。しかし暇だ。

「……やっぱり寝るか……」

ヴヴヴヴ……ヴヴヴヴ……ヴヴヴヴ……ヴヴ……

携帯がバイブした。居間の方からものうるさく鳴る。それが唯一身近に感じるものだった。

そちらに行くと、テーブルに置いてあった。そして丁度止まった。メールらしい。

「誰からだ……？ 棗さんか……？」

適当にいじって開いてみると、欄の一番上に名前が表示される。俺はそれを見て嬉しくなった。

「美浦さんからじゃないか……！ やつと繋がったんだ……！」

急いで内容を確認する。

「……………行くっ……………」

無駄をすることなく身支度を済ませ、家を出ていった。もちろんコンタクトも鍵も余すことなく掛けていく。

「実は例の事についての話なんだけど……………来てくれないかしら？ 直接会って話したいの。場所はいつものところで、時間は十時から四時の間に来て。仕事の合間に話すわ。」

出来れば今日は休みだった。そうすれば、陸奥実君との時間が増えたのに。あの婦長のせいね。でも愚痴っても仕方がない。一昨日まで休んでいたのだから。

「今日来てくれるかしら……………？」

多少なりとも不安がある。期限も僅かになってしまったその恐怖から身が縮み込んでいるのでは……………と。私の期限は当分先。最低、手紙によって死ぬことはない。尤も、ガセでなかったらの話だ。

「先輩……………」

「? どうしたの?」

楠波が隣にいるのを忘れかけていた。そして私たちが病院食を運んでいるのにも。

「彼に連絡したんですか?」

「……したわ。今は電源切ってるから返事はわからないけどね」

「ついに先輩も結婚への道のりが……」

いけない。楠波の超強力な妄想が始まった。日が経つごとに鍛えられていくこれは限界を知らなかった。ちなみにずっと前は、私と楠波が……止めておこう。

とりあえず、頭を叩いておく。

「キヤツ! 何するんですかあ〜!」

「相変わらず想像力豊かなね。ほら、前見ないと……」

「ううわっ!」

案の定、ずっこけた。お皿やコップなどの食器たちが宙を舞い……
…光り輝き……回転しながら……。

ガシャアアパキイイイパリイイイ……!

テンポよく割れていった。

院内騒然。松葉杖をついて歩く老人、点滴片手に座る女性、母親と手を繋ぐ少女、傘を手に持つ青年たちがこちらを覗いていた。全員一つの想いが込められている。私もそのうちの一人になりたかった。数秒後、どこからともなく聞こえてくる。スリッパを擦らし、ぶつかる音……。もちろん彼女だった。

「まつ、まずいですよ！ なんとかしな……先輩？」

楠波の振り向いた先に私はいなかった。

「えっ！ 先輩がいない！ 私を見捨てましたねえ〜！」

「さて坂菜さん、今すぐにいきましょうね？」

「うわあああ！ せんぱああい！ 助けてくださいいいい！」

許してね楠波。私は迎えに行かなきゃいけないの。

私は楠波たちから目を背けるように立ち去った。

「待ち合わせはここだったよな……」

入り口入ってすぐ脇にある長椅子。そこがいつもの場所だった。中まで入って探していると日が暮れてしまう。夏休みあたりはそうするように決めたのだ。

持ってきておいた傘を何度か開いて粒を落とす。なるべく中に飛び散らないように外に向かってやった。そして先端からねじり、ボ

タンで留める。湿っていた。

「……………ふう」

病院というのは意外に退屈だ。携帯はもちろん、周りに被害の出るようなものは一切禁止。それはどの施設でも言えることだが。

唯一の暇つぶしは読書だ。でも、忘れたのは言うまでもない。結局、ガラス越しに外の景色を見ることがしかなかった。

「……………」

一本の線のような雨は芝生へと消える。遮られることなく。それがいくつ繰り返しているのかを数えるのは至難だ。というより無理だ。

でも何気に暇をつぶせる。

「あら、何してるの?」

「……………あつ……………」

そこへ私服姿の美浦さんがやってきた。軽く会釈を交わす。

「いえ、暇つぶしですよ」

「へえ……………」

深く追求されると逆に恥ずかしい。

「仕事は終わってたんですか?」

「ええ。後輩にやってもらってるの。快く引き受けてくれたわ」

「そうですか」

わざわざ無理をしてくれてまで話したいことなのか。感謝の気持ちとは裏腹に緊張が走った。それを読みとつてのことだろうか、先に外に向かった。俺もついていく。

相変わらず降り続けている。ところどころに暗く薄く広がる雲から。その冷えた空気が体中を包んでいる。

「さて陸奥実君、どこか行く？」

「いや、特にありませんが……」

「じゃあランチにしましょっか。今車出すから待ってて」

「はい」

美浦さんはビニール傘を差して雨の中に消えていった。

ふとして、ポケットが微震を訴えているのに気がついた。取り出してみる。

「瑠璃人？ 珍しいな、あいつから来るなんて……」

今日はどうやら珍しい事が集約されているようだ。

ちよっとドキドキしながらメールを確認した。

「陸奥実君、もし危険と感じたなら僕の携帯に繋いでおいてください。」

「？」

意味が分からない。なぜそうする必要があるんだろう？　そして一体何を根拠にしかもこのタイミングで警告するんだ？　瑠璃人は相変わらずだ。

しかし、何を考えているかわかるやつじゃないが、人の忠告は無視しない方がいい。すぐに返事をした。

「何を考えているのかわからないが、ありがとな。心に留めておくよ。」

しかし、返事をしたと同時にまたメールが着た。しかも同じ人からだった。

「できればこのメールを見てからずっと繋いでいてください。理由はお話できませんが、念のためお願いします。」

「……？」

明らかに異常。先ほどの通り、何を根拠に考えているのかわからない。瑠璃人はずっと俺を見ているわけではないし、聞いているわけでもない。メールでは重要性が上手く伝わってこないのが捉えづら。仮に、これから俺の身に何かが起こるからと考えても信憑性に欠ける。

「……！　そうだった。忘れてた」

ふっと思い出し、今までの考えを全て消去する。何となく背徳感を感じてしまう。

「……通話料金が嵩むだろうけど……仕方ない。あいつの顔を立
てやるか」

電話帳で瑠璃人のを探し、ボタンを押す。呼び出し音が鳴り始め
た。

一応話せるかと耳に当てた瞬間、白い車が目の前に止まった。反
射的に閉じてポケットにしまふ。中で黒いサングラスをかけた美浦
さんがいた。何気に似合っている。

「乗って」

見た目、某高級車に似ている。いや、それだった。異様に光る銀
色のマークが物語っている。

ドアを開けて助手席に座った。ちょっとふかふかしてて気持ちい
い。あとシートベルトもしっかりする。万全だ。

「なかなかかっこいいでしょう？ こっぴつの好きなのよ」

「ええ、すごいです。二つの意味で緊張しますよ」

「あら、もしかしてお姉さんとドライブは恥ずかしい？」

「まあ……ノーコメントで」

「うふふ……それじゃ行きましょ」

車はやや低音で走り出した。

スピードはそんなに出ていないが、アクセルを踏み込めば制限速度の二倍はすぐ出るだろう。メーターの表示に見たこともない“2”を見つけてしまった頃には、心臓が早くなる。途中で信号に突っかった。

「どう？ 乗り心地は？」

「かなりいいです」

「ちょっとカタくなってるわ。リラックス、リラックス！」

少し無理がある。

でも言われるように深呼吸を繰り返してみる。すると、仄かに鼻に残るものがあつた。何というか、香草に近い。変にきつくないいい香りだ。

「いいですね。居眠りできますよ」

「そう？ 私は眠気覚ましにやってるんだけど……」

「居眠り運転防止ですか？」

「ええ。こう見えて結構事故ってたのよ」

ここ最近は特に居眠りと飲酒運転が多発している。飲酒に限っては何年か前から厳しくなったが、それでも起きています。

「仕方ないのよね。人間だって完璧じゃないもの……」

「……………」

赤信号。車は不安なく止まった。しかし、横断歩道を踏み出してしまった。美浦さんにはっこりした。いかにも。

「あ、あの、ところで、話したいことってなんですか？」

「？」

「ほら、メールでくれたじゃないですか」

「……………忘れてたわ」

思わずずっとこけそうになった。それが目的で呼び出したんじゃないのか？

信号が青を示し、再び発進した。

「嘘よ。そうね……………、あなたって気になったことない？」

「？ 何をです？」

「手紙の内容よ。あれを読み返すうちにおかしな点を見つけたの」

手紙に？ 確かに、様々な疑問はあるのだが……………。

「“方法の一番”って意味分らないのよ」

「方法の一番……………？ って確か……………」

俺の記憶が正しければ、“素直に諦める”だった気がする。確かに考えてみればおかしい。他のでは他人を条件下で殺さなければ助からない。でも、この場合……あれ？

「気付いたわね」

「……これだと、何もせずに諦めれば死なないことになりますね」

「そうね」

つまり、最初から“一番”を選んでいれば、こんなに騒ぎ立てる必要はない。……理解できた。

「だけど引つかからない？ そんなのなら、みんなそつちを選ぶわよね？ 何もしなければいいわけなのだから」

「……」

人を殺めてしまうよりもどのくらい楽なのだろう。諦めれば死なない。だが俺には、そこへ誘導しているようにも感じる。

そもそも“何に対して諦める”のかわからない。文脈に沿ると、“人を殺すのを諦める”と受け取れる。

「意味がない……。どちらを選んでも助かってしまう……？」

じゃあこの手紙は何の為に存在しているんだ？ ……いや、待てよ？ 違う。仮に“一番”を選ばずに実行したとすると、諦めたことにならない。最後まで粘り続けて失敗したら……

アウトだ。

「一体“一番”は何をさせたいんでしょう？」

「さあ……」

意外に反応は薄かった。だからか、話題を切り替えた。

「あなたはどうするの？」

「……え？」

「もう一週間近くしかないのよ？ あなたの期限は……」

「……」

自分でこう言うのもなんだが、死が近づいているという実感が湧かない。死に対する恐怖は持っている。しかし、そんな手紙だのなんだので死ぬという自覚がない。

「とりあえず、焦らずに行こうかと思います」

「ふふ……、呆れた……」

「あはは……。自分でも思います」

まだ時間はある。それが短いかどうかはわからない。でも、絶望ではない。頼れる仲間もいる。もしかしたら、それが実感を鈍らせているのかもしれない。

「……なるほど……」

陸奥実君は関係しているのではなく、大元の一部だったのか。そしてこれがバレていないことから、お互いにほぼ完全に信頼し合っている。

でも、用心に越したことはない。万が一になったら救出できなくなる。僕にとってこれは命の綱だ。

「……………」

明らかに異常だ。自分の命を護るために人を殺すなんて馬鹿げている。そんなものがあるはずない。

陸奥実君が関係しているとは正直思いたくはなかったが、現実はそのようになっていく。僕もどうすれば助けられるのかずっと考えていた。わからない、わからなかった。殺す以外に方法は……ない……。でもそれ以前に僕は最低な事をしている。

「……………っ……………!」

「……………瑠璃人、何してるんだい？」

「!」

「携帯とにらめっこして、だいぶ苛ついているようだけど……」

「虹にい……………」

……気づかなかった。

「部屋に籠もりっぱなしでどうしたんだい？ もう昼ご飯はできてるぞ」

「……はい……、今すぐ行きます……」

陸奥実君を餌にしてやろうなんて馬鹿げている。それでも陸奥実君は受け入れてくれた。その瞬間、僕は最低な人間になったのだ。僕は虹にいを部屋から出たのを見計らって、携帯を机に置いて行った。

「……………んゆ……………」

「……………」

「……なに悦になってるのよ？ 早く起こしなさい」

「だって彼、私のタイプなんだもん……！ ホントに高校生？ 可愛い……！」

「いいから早く起こしなさい！」

「わかりました。……ねえ、起きてよ……」

「……………」

十九戒目「現実・下」

「……………んう……………ん？」

目が覚めた。

いつの間にか眠っていたようだ。体がまだ寝たりなさそうに重い。しかも、なぜかお尻が痛かった。硬い。まるで学校の椅子に無理矢理座れさせられるようだ。そして、手足は縛られている。どうやら針金のようなのだ。目を開けても暗い。目を塞がれているらしい。つまり、身動き一つ取れない状況下である。

それらを理解するのに数分を要した。しかし、なぜ自分がこんな状況になっているのかはさっぱりだった。

「……………誰かいるのか？」

……………

返事がない。

誰かが息を潜めている感じもない。人は居ないようだ。そして、この目隠しの隙間からでも何も見えないということは、灯りは消されている。

俺はできる限りに足を上げ、床を蹴る。そこから気持ちのいい音が反響する。しかし、そんなには広くないようだ。

「……………くそ」

何でこうなった？

俺の覚えている限りでは、どこかに入った瞬間に眠くなって……。意識が飛んだ。つまり、眠らされたということか。ならば何の為に……？

その時、やけに重々しい轟音がした。微かに引きずっている。

「……………てるみたいですよ」

「……………やあ外しなさい」

女性の声が約二つ、近づいてきた。その時間からやはり、広くはないことを裏付ける。

狸寝入りすればもつと情報が入るかもしれない。しかし、ある一人が的確に目隠しに手を掛け、剥ぎ取った。目を開ければ見える状態。だがやるわけにはいかない。

「……………点けて」

そう決心した途端に光に照らされた。真っ暗からいきなり眩しくなり、反射的に渋らせてしまった。

「この子、やっぱり……………」

「今から十秒以内に起きなさい。さもないと、撃つわ」

……………撃つ？

「十、九、八、……………」

相手は拳銃を持っているのか！

「四、三、二」

「わかった。起きる」

俺は仕方なく観念した。

しかし、状況は最悪だった。いや、認めたくなかった。

「あなたは……！」

「……お久しぶりね」

いつの間にか肩までしかなかった金髪に端麗な顔、そして何より、エメラルドグリーンに染められた瞳。全ては彼女のものだった。

「…………！」

「あら、陸奥実君じゃない？ どうしたの？」

「ふざけないでくださいっ！」

美浦さんは冷笑を浮かべていた。共に、黒い物体を連れ添いに渡す。

その直後、目の前がぼやけて頭が痛みを訴えた。なんだ？ ……頭が割れるように痛い！ ……

「さっきまでの威勢はどこにいったのかしらね？ ……くすくす…
…」

「……はぁ……う、う、うるさい……！ ……くすくす……！」

「……ふふ……」

笑っていやがって……！

意識を保つだけで精一杯だ。何かを盛られたようだ。気持ち悪い、体が浮く。頭の中が脈打っているのを感じてしまう。

しかし、その分なぜか冷静さとか何やらが湧きだしていた。様子を窺っている今がチャンスなんだ。痛みを堪えて、言う。

「……なっ、なんであなたが……、こんなことっを……？」

「！ 陽、あれって確か……」

「ええ、この子の精神力がすごいだけよ。尤も、それもあと少しだけ……」

“あれ”……？ 薬物か……？ 連れ添いの驚きようからして、強力らしい……。

「まあいいわ。どうせ死ぬわ。“手紙”でね……」

「！ どういうことっだ……！」

「あら、もう忘れたの？ あなた死ぬじゃない。九月十六日に……」

「……！」

何を血迷ったことを……！

「かなり驚いてるようだけど、あなたは信じてたじゃない？」

「……あれは違っつ！」

「あら？ 違うのなら何なのよ？」

「……っ……！」

俺の誕生日になった瞬間、訪れる“死”。美浦さんに言ったり自分で考えてたりとかしていたが、やはり心のどこかで思っている。

こんな馬鹿げた話があるわけない、と。第一、この話は根本的に疑問だった。……なぜなら……。

……いや待て。興奮するな！ 落ち着け、落ち着け！ 美浦さんは動揺を誘っているんだ。俺の判断力を奪うために。

バレないように深呼吸を繰り返す。知らず知らず垂らしていた汗は引き、心臓もある程度緩和していく。頭痛も少しずつ治まってく気がする。……よし。

「確かに、信じていましたよ……。ですが、確証が……」

「いや、あるわ」

「えっ？」

まるで断ち切るかのような否定。美浦さんは勝ち誇った表情だった。

すると隣にいた女性がタイミングよく、一枚の紙を見せてきた。

「この方、誰かわかる？」

それは一枚丸々、男性の写真だった。ちょっと怖そうな人だが、真面目そうで何より誰かに似ている。見覚えはなかった。いや、忘

れているだけかもしれない。

話によれば、この人は手紙の犠牲者だという。そんな手に引つかかるわけではない。

「でっち上げだ！」

「そうかしら？ 名前は岡本 和美、年齢は二十二」

「だから……！ 岡本、和美……？」

岡本……、岡本……！

「……ふざけるのもいい加減にしろ！ つい二週間くらい前にうちに来たんだ！ しかも犠牲者だと？ 有り得ない！」

さつきから神経を逆撫でしやがって……！ 何から何まで苛立ってくる。第一、俺を誘拐した理由は何なんだ？ 何か得があるのか？

「いいでしょう。それなら、話してあげるわ。真相をね……」

「真相だつて？」

「ええ」

何を狙っているのかわからない。いや、あるいは意味を持っていないのかもしれない。

とにかく、拘束されている以上は変に挑発しないほうがいい。気が変わって殺されてしまう。

話は始まった。

「彼は陸奥実君よりずっと前に手紙を受け取っていた。私たちのように郵便受けに直接……」

「……」

「最初は同じだったようね。随分とくしゃくしゃになってたわ……」

「……！」

「一つ目。」

「八月二十五日、突然の行方不明になり、翌日の夕方どこかの川の畔ほとりにいたそうよ。血まみれの死体でね……。気の毒に、お父さんの背中を追いすぎたのかしら？ ……うふふふふふ……」

「あなた、腐ってる……！」

今までで一番最悪で不謹慎だ。

俺は目を怒らして睨む。敵意と憎しみを込めたつもりだ。だが、美浦さんはそれを相手にせず、逆に俺を観察する。まるでシヨーケースのおもちゃを見るように。気持ち悪くて仕方なかった。それは束の間だった。

「それで、もう少し詳しく調べたのよ。そしたら……面白かったわあ」

「？」

「彼、父親殺しだったのね」

……

……

……父親……殺し……？

「あんだ、何言って……」

「八月十五日、午後八時十分頃、父親がメッタ刺しに遭い、死亡。……これは知ってるわね？」

「覚えていないはずがない。だって先生のご遺族が自ら打ち明けてくれたのだから……」。

「彼は“方法”を父親に実行したのよ」

「……？」

「つまり、直接手を下したってことね」

「ちょ、ちょっと待ってくれ……！ いくらなんでも無理やりすぎる！ 先生をメッタ刺しにした犯人が和美さんなんて……！ それに、それなら警察だつてとつくに逮捕してるはずだ！」

「“灯台下暗し”ってやつね。まさか、通り魔が息子だったなんて予想できるはずがないもの」

「……いや、まさか……？」

有り得るはずがないと確信していたのにもかかわらず、逆のことしか思い浮かばない。

和美さんはどことなく苛ついていた。もしかすると焦っていたかもしれない。先生を殺したのは俺だとなぜか決めつけていて、俺は当たり前だと思い込んでいた。しかし、いくら現場が家に近くて俺に会ったというだけで犯人（本当は違うが）とするのは早計だ。

和美さんは俺に罪を被せようとした……？ いや、落ち着け！

よく考える！ 美浦さんは和美さんは死んだと言った。ならば根本的に矛盾しているではないか。

やはり、フェイク。

「それ、嘘ですよね？」

「……なぜかしら？」

一瞬眉間が鋭く動くのを見逃さない。

「仮にそれらが真実とすると、和美さんは亡くなっているじゃないですか。“手紙”を持っているなら、それに殺されたのは矛盾しています。だからこれ全ては嘘だ！」

「……」

そして持っていなかったとしても、美浦さんの話は嘘になる。この事は言わなくてもわかっているだろう。案の定、黙り込んでいた。しかし、沈黙を破ったのも美浦さんだった。しかもなぜか笑いを零す。

「……言っただでしょ？ これは真相だつて……。あなたは予想以上にできるわね。……さて、次は私の番かしら？」

負け犬の遠吠えに聞こえる。

美浦さんは冷笑を馳せていた。

「彼の“方法”は“自分の家族を一人だけ抹殺する”。それ以外にもあったけれど、これが一番当てはまるところわ」

「……それで」

「……やっぱりあなたでも気付かないのかしら？ ……うふふふ……」

「？ 意味が分からない」

今のでわかったのは一つだけだ。それなのに“気付かない”と言う。全くもって意味が分からない。

しかし、話はすぐに進んでしまった。

「時間はあげないわ。なくなってきたからね。簡単に言うと、“方法に失敗が生じたから”なのよ」

「“方法”に、失敗……？」

仮に和美さんが本当にしたとすると、単純に条件に満たなかったからということになる。しかし、身内を抹殺したのに失敗した、という矛盾がまた発生する。さっきから矛盾ばかりだ。

「じゃあ矛盾を解決するから、聞いていなさい」

「…………！」

まさか…………？

「彼と父親はもちろん家族関係にある。でもそれは、あくまでもお互いが認識し合って初めて“家族”になるのよ。…………わかる？」

「…………何が、言いたいんですか…………？」

「彼らの間にはそれを認識する暇がなかった。つまり、彼は闇討ちをしたことになる。本人は気付くわけないわ。それはきつと死んだ後でもわからないでしょうね…………」

「……………」

和美さんは先生を襲った。夜間に。それはおそらく身元を示さな
いたためだったのだろう。でも、それが逆に妨げとなってしまうた。
最終的に被害者と加害者の関係に尽きてしまう。つまり、“お互い
が家族ではなかった”ため、失敗…………。

あまりに出来すぎた、そして強引すぎる。しかし不備はないし、
寧ろ可能性が出てくる。

じゃああの怒りは何だったんだ！ 自分の父親が殺されたことに、
犯人が見つからないことに腹立たしくて八つ当たりしたんじゃない
のか！ あの行動、言葉、涙は演技だったのか…………！

「…………くそ！ 遅すぎる！ 何もかも…………！」

哀れじゃないか…………。手紙の存在はおるか、全て罷り通ってしま
った。そして…………。

「今度はあなたの番よ」

いつの間にか用意された注射。先ほどのやつだろうか、容器越しに見える景色が濁っている。手足は拘束され、時間は失い、気力なんか燃え尽きてしまった。

ちゃんと中の溶液を出して具合を確かめる。ゆっくりと綺麗なアーチを描く。きっとどうにかされるんだろうな……。この人の都合のいいように操られるのだろう。

ふとある事を思い出す。最後の黝っ屁ってやつだ。

「真犯人は、みづら……………」

「…………虹にい、早く！ 早くしてください！」

「わかってる！ 仲間にも要請した！ 鼠一匹逃がしはしない！」

僕は今、パトカーに乗っている。虹にいをお願いしてやってもらった。何時間か前から出勤したのだ。

この時点で既に二日間以上経っていた。誘拐された時点で虹にいをお願いしていれば……。僕は馬鹿だ！ まさか、あっちから切られるなんて思いもしなかった。間違いなくターゲットは気付いたのだ。せめて、名前だけでも……。

パトカーは甲高くサイレンを鳴らしながらかつ飛ばしていく。

「なんで早くしなかったんだ！」

「すみません……！」

「まったく！ それで、次は！」

「その信号を左です！」

やや乱暴に急カーブする。右に体が寄るがすぐ直った。黒い棒がフロントガラスを濾しとり、飛び散る雨をすり落としていく。

陸奥実君の現在位置は明らかだ。携帯の機能で判明していた。陸奥実君に渡しておいたのが不幸中の幸いだ。電池まで取られなくてよかった。

とにかく急がないと……。

「殺させはしない！」

着いたのはその約三十分後。そんなに大きくないしっかりした廃墟だった。街からかなり離れて位置し、人影もない。車もなかった。それはそうだ。

林の中なのだから。

他のパトカーも続々と到着し、武装した警官が出てきた。その物騒とした中に見知ったのがいた。

「あ、あなた方は……」

「新戸君！」

「おお！」

「奇遇やなあ！」

あの三人組だった。一体なぜ……？

「どうしてあなた方が……？」

「ああ？ とりあえず、いろいろあつたんだよ」

「そんなことより、流さんはこの中にいるんですか！」

陸奥実君を心配していたのは僕だけではなかった。当然だ。今日
は……火曜日。

容赦なく打ちつける雨は異様に冷えていて、気持ちが悪い。寒気が
足元から這い上がってくるようだった。

それを察してか、別の警官が無言でやってきた。そして僕に目配
せをする。すべきことはわかっている。

「はい、間違いありません！ ですが、僕らはここで見守りましょ
う。素人の出る幕ではありません……」

僕たちは面識のない警官とパトカーに戻る。生い茂った草を踏む
度にみずみずしい感触を覚える。やけに鬱陶しい。

そして乗り込んだ。警官は目で礼を言う。

その意味はそれだけではないとわかっていった。伊達に虹にいく
っついていたわけではない。

そして程なくして、虹にいが先陣を切り、警官たちが中になだれ
込んでいった。僕たちはただ祈るしかなかった。

「流さん……！」

気がつけば数十分後、虹にいが真っ先に戻ってきた。護衛の警官が窓を開ける。僕はそれに身を乗り出した。

「陸奥実君は！ どうなんですか虹にい！」

他の三人もそれに乗じた。

虹にいは強張っていた。

「陸奥実君の身柄は確保した」

「本当ですか！ じゃあ今にでも……」

「駄目だ」

いつもの虹にいの声ではなかった。職務に専念している声だった。せめて一目でも会いたい、誰もがそう思っている。だが見せたくない。虹にいはそういう意味を含めて言ったのだ。つまり……。僕はとっさに前にいる人に指さした。

「あの人を呼んでいますよ？」

「え？」

そつちに向いた。その一瞬を見逃さない。

僕は開いた窓をすり抜けるように外に出た。そして一気に走った。鈍い虹にいが気づいたときにはもう遅い。三人も出ようとしたが、一人しか来れなかった。陸奥実君の隣の女子だった。

「僕は大丈夫ですが、東條さんは……」

「大丈夫ですよ！ 私は強いですから！」

物理的に強くても精神的に……。

全身に浴びながら僕は中に入った。一步毎に濡れた音がする。体と同調して程度がわからなくなっていた。

中はまるでどこかのホテルみたいだ。しかしそんな華やかなものでは全くない。酷い臭いが散乱し、辺りは茶色が黒か灰色。形容しにくい。衛生的にもよくなさそうだ。

近くにいた警官に教えてもらい、そこへ向かった。途中、虹にいの許可について聞かれたが、適当に誤魔化しておいた。そんなのはどうでもいい。

話していくうちに扉に直面した。

「ここだ……。調べてる人もいるから邪魔はダメだぞ」

「わかっています。これでも心得ていますから」

「そっか、……いいぞ」

目の前の扉は重々しく開かれた。なぜか真新しい。かなり重いよ
うで僕らも手伝った。

「……っっ」

「……………何ですか、これ……………？」

まず襲ってきたのは、強烈な臭いだった。目眩がする。入った時のやつの根源のようだ。そして眩しいほどの白。ここは完全に診療室だった。誰かがここを定期的に使っていた可能性が高い。

検察官たちが様々な道具を駆使して調べていた。そこに犯人らしき人影はいない。

「俺らがここに入ったときは既に蛻もめけの殻だった。隠れた様子もない」

「逃げ足の早い……………」

あまり広くはない部屋の奥の一隅に検察官が集まっていた。中は窺えない。そちらへ向かった。

「大丈夫だ。君を保護しに来たんだ。心配しなくていい」

「……………」

返事はない。おおよその予想はついている。

「どいてください！ どいて！」

東條さんと連携して人混みをかき分ける。数秒もしなかった。そして……………。

「……………！ 流さん！」

「陸奥実君！」

「……………」

そこにはタオルにくるまれた陸奥実君がいた。壁にもたれ、体中に力が入っていないく、何よりも目に光がなかった。こちらに気づく様子もなくなただうづくまっている。それは僕の予想していた二番目に最悪なシナリオだった。

陸奥実君はとても小さく震えていた。

「……………う、……………め、て……………」

「……………!」

「流さん！　しっかりしてください!」

東條さんが触れた瞬間に検察官に遮られた。

「君！　今の彼に触れてはならん!」

「!　どうしてです……………」

東條さんの明らかな敵対。しかし、それはあつという間になくなった。陸奥実君がさらに震えだした。

「うあああああ!　……………あああ……………なああ……………」

「見るな!」

東條さんの目を遮る。それは賢明な判断だった。

陸奥実君は……………、壊されてしまった。今までの彼ではない……………。

「もう、許してよお……！ うっ、……あうっ……つうぐっ……」

「陸奥実君……」

「そ、そんな……」

彼女は警官に寄りかかりながら、崩れ落ちた。喉に引っかかるような声もする。僕は彼を見つめた。

僕は今まで彼に言ってきた。あなたの墮ちる姿が見たい、と。あくまでも冗談だった。でも目の前に彼がいて、冗談の通りになっている。あまりにも残酷で、儂い。

人生で初めてだ。こんな思いをするのは。わからないわけではない。知らないわけではない。

自然と流れ落ちた。陸奥実君の傷ついた体に。

「……任務は完了しました」

「ご苦労様。ちょっと疲れたでしょう？」

「はい……。まさか燕があんなに頑張るとは思いませんでした。……あと、今お出ししたのが、ご要望の“燕の巣スープ”です」

「……どれどれ？ ……うん、美味しいわね」

「それでは失礼します。……とその前に」

「? どうしたの?」

「これでよかったのですか?」

「……?」

「 が黙ってはいませんよ? 実質、これで相当な時間稼
ぎはできますが……」

「大丈夫よ。私の方が一枚も二枚も上手なんだから……。んうゝお
いしー!」

「二十戒目」意識

「……………、具合の方は……………？」

「……………。全くよくない」

「ではやはり……………」

「……………、あまりにも心的外傷を受けている」

「……………」

「入院してまだ間もないけど、まるで廃人のようだ」

「！ 徹！」

「ご、ごめん……………。けど彼は相当傷ついている。しばらくは絶対に安静にさせなきゃダメだ。ましてや尋問なんてダメだぞ？」

「……………そんなことはわかってるよ。……………自分のせいで……………」

「責めるなよ。自分を責めるんなら、その時間を事件に注いでくれ」

冷たい。ドアノブがこんなに冷たいとは思わなかった。氷に触っているようだ。それが体温によって温められていき、やがて手に馴

染む。しかし捻れなかった。

徹は無言で見つめていた。ただ一人だけしかないその空間は本
当の意味で二人だった。

「……外そうか？」

音響した。

「……………いや、ここにいて」

それから、一枚のドアの前でずっと立ち尽くした。揺らぐ。決心
がつかない。どう切り出せばいいのかわからなかった。いやもし
かしたら、彼を見たくないのかもしれない。彼を見たのは数人の看
護師と徹だけだ。

「……………虹」

「ああ……………。行くよ」

意志が固まり、一気に開けた。慎重に。

ほんの少しだけ暖かい空気が触れる。多分暖房がついている。し
かし、それを感じたのは脳だけだった。

「……………」

ベッドで半身を起こして見つめる青年。陽が窓の奥から彼を包ん
でいた。しかし、見つめる先はなぜか時計の方だった。

止まっては動き、止まっては動きの繰り返しではなく、一定の速
さを保ちながら針を進めるタイプだ。無論音の発生源はない。いや、
甲高い電子音が間隔的に鳴り響き、役目を勤めている。それなのに、

「この空間だけ止まっている気がする。」

「陸奥実……君……」

「心臓が恐ろしいほどに跳ね上がった。」

「……………」

返事はなかった。それどころか見向きもしない。耳に届いていないのか、そうしようとしなのかわからない。

とりあえずお見舞いとして持ってきておいた果物の盛り合わせを近くの椅子においた。それはなかなか一杯な音をさせた。

「……………!」

「?」

いきなり陸奥実君はこちらを見た。やっと自分の存在に気づいてくれた。

「……………うつ、……………あ……………」

しかし、白い掛け物を身に寄せて自分から精一杯離れようとしている。そしてその表情は恐怖じみていた。あたかも、自分を怖がっているみたいだ。息が荒い。

「陸奥実君、大丈夫だ。自分は新戸だ。新戸 虹だよ」

「……………」

できるだけわかりやすく、柔らかく言う。それでも警戒心を解こうとしない。ただ怖がり、睨みつけていた。

「……………」

「……………ふっ……………ふっ……………」

彼は予想以上に傷ついているだけ、と簡単にそう言ったのけた。人というのはこうもあっさりと変わってしまうものなのか……………？ほんの数日前まで普通に学校に通っていて、瑠璃人たちと遊び、生活していたのに。一日を経っただけで……………。

虚しさを感じずにはいられなかった。そして心の奥から滲み出てくる後悔。今すぐにでも彼を抱きしめたかった。

「……………」

わかるはずがない。彼はきつと今、全てに恐怖を感じている。触れられれば、無理矢理にでもすれば、また壊れてしまう。それほど精神的に酷いダメージを負ってしまったている。

なぜ陸奥実君なんだ？　なぜ彼をこれ以上に……………！　彼は犯人ではなくて全くの被害者なんだ！

「陸奥実君、わからないのならそれでいい。聞かないのならそれでいい。自分は一方的に話してすぐに立ち去るよ」

「……………」

自分は正座になって頭を床につけた。

「ごめんなさい！……………自分の力不足のせいで、あなたをこんなに

傷つけてしまつて……。痛かつたよね、辛かつたよね……。！」

「……………」

「自分はこんなので許してもらおうとは思つてない。これからの罪滅ぼしも思つてない。けど！二度とあなたや犠牲者を絶対に出させやしない！」

その言葉は室内を反響し、やがて消えた。息を荒げて怯える彼はそのままだった。たとえ自分の命が危険に曝されようと、絶対に解決してみせる。自分にとってここは誓いの場となった。

ゆっくりと立ち上がり、彼を見た。やはり変わらなかつた。

「……………じゃあ自分はここで……………」

再び頭を下げ、振り返る。足が軽い。だが肩が重い。それでも内心で気持ちを入れ替えれる。

目の前にドアが立ちはだかつた。それに手をかけた時、何かか聞こえた。よく聞こえない、でも確かにした。いや、それだけではない。

もう一度振り返ってみる。

「……………！」

陸奥実君が……………？

「……むっちゃん、大事かなあ……?」

「どうだろうな……。入院してから三日くらい経ってるけど……」

「まさか事件に巻き込まれるなんて……」

「しかも誘拐されたんでしょ? 本当に危ないわよね……」

「そういえば、夏休みも……」

ざわざわざわ……

クラスはまだざわついていた。朝のSHRで“初めて”連絡されたものの、一人の生徒に対しての想いは想像以上だった。それでは細かなことはもちろん伝えられていない。ただ誘拐事件があつて陸奥実君が被害にあつた、としか。尤も僕の中では、それは“ただの誘拐事件”ではない。今日の最後の授業、つまり次の授業は中止して集会を開くらしい。

僕はそんなことよりも陸奥実君が心配だった。

「では、次は速やかに体育館に行くように。号令!」

ひとまず五時限目が終わった。その直後、担任である福田先生が慌てた様子で教室のドアをはねのける。あんなに慌てているのは珍しい。

「新戸っ！ 新戸いるかあ！」

「？」

意外にも僕の名が上がる。みんなの視線を浴びながら先生の所へ急いだ。先生はすぐに閉めて、僕を連れて行く。

……

しばらくして、げた箱のところに着いた。なぜこんな人気のないところに連れてきたのだろうか？

「早く靴を履いて駐車場に行きなさい」

「？ なぜですか？ これから集会ですけど……」

先生は僕の両肩を掴んだ。それも険しい表情で。

「……君の兄さんが……刺されました……」

「……えっ……？」

先生はさらにこう続けた。

いきなり後ろから刺されて、出血がひどくとても危険な状態だ。だから万が一のため……と。

……有り得ない。なぜなら虹には今日、陸奥実君のお見舞に行つてくると言っていた。そして仕事は非番だとも言っていた。そん

なののに、ましてや武道の達人である虹にいが後ろから刺されるなんてことは、天文学的数字でも有り得ない。

たとえ先生が言っても、そこは譲れない点だった。

「先生、そんなの出鱈目でたらめです。虹にいが襲めわれることはまずありません」

「だけど今、病院から電話があつたんだぞ？」

「それでも……、……病院……？」

僕はさつき何て考えた？ そうだ、虹にはお見舞いしに……。誰を……？

何日か前、虹にいと一緒にお見舞いの品として果物をたくさん買った。林檎とかバナナとか、ドリアンとか。まさかそれらを丸かじりして食べるはずがない。僕はそんなに尖とがっていないやつを……買った。陸奥実君のために……。

果物ナイフを……。

自分の顔が青ざめていくのがわかった。

「まさか……」

「……陸奥実君が……したらしい」

「……先生、すぐ行かせてください」

「俺の車で行くから外で待っていないさい」

先生とはそこで別れた。

普通に考えれば先生は虚言を吐いているとしか思えない。でも、相手が陸奥実君なら違ってくる。陸奥実君は今、精神錯乱に近い状態にある。それが起こったなら……。まさかそんなことがあるはずがないという希望と、もし虹にいの身に……という絶望を両足に履いて外に出ていった。

「……新戸君まで行ってしまいましたね……」

「なあ、オレ思っただけどさ……、いいか？」

「どうしたん、とおやん？」

「あつ、いや、なんでいつも陸奥実が被害にあってんのかなーつてよ。大抵はオレらと一緒になのによ……」

「確かに……そうやなあ。変な話、ワイらが誘拐されてもおかしくないねんな」

「ですが、そういった点からすれば一番誘拐しやすいのは流さんですよ」

「？　なんでだ？」

「……流さんって私たちみたいに運動が得意というわけではないので、強行してしまえば……」

「でもあいつはかなりキレるぜ？ 上手く逃れることもできるんじゃないか？」

「ええ。でも、肝心な“事”にはかなりニブチンなんですよ」

「……そうなのか？」

「どちらにしてもや。むっちゃんには何かありそうやな……。調べる価値があると思わへんか？」

「かなりありますね。流さん、秘密主義ですから、相当隠していると思いますよ」

「そこでや！ 学校終わったら、むっちゃん家行かへんか？」

「っと、かなり急な話だな」

「ええやんか！ どうせヒマやるっ？」

「オレは陸上部だ！ 最近、ロクに部活やってねえんだよ……」

「……ひどいです！ 流さんより、親友より部活を優先するんですかっ！」

「そ、そんなわけはねえ！」

「……決まりやな」

「……………はっ……………、……………？」

気づいた時は目の前が真っ暗だった。自分の目が開いているのか閉じたままなのかを疑ったが、一応前者のようだ。それを確認しようと手を顔に持っていく。顔に触れなかった。いや、それ以前に動かせている気がしない。つまり手を封じられている。足も同様だった。

記憶がない。なぜ拘束されているのか理解できなかった。まるでいきなり死んでしまったような心境だった。

「……………」

だが、あれはもちろん忘れていない。陸奥実君を襲い、とことん弄した犯人の声、口調を。

僕は今拘束されている。地べたに放り込まれているようだ。

「……………聞こえる？」

「……………!!」

声がした。

「そんなに怯えなくていい。君に危害は加えない」

そんな事信じられるわけがない。

その前に、違っていた。少し野太く凛々しい響きのする声だった。完全に男の人の声だ。変声機は使っていないようだ。しかもどこかで聞いたことがある声だ。

でも思い出せない。ある種のパニック状態になっているかもしれない。

「なぜ僕を殺さないのですか？」

やや上擦った。

「君を殺す理由はない」

「では、それに該当するのを知っていたら殺しますか？」

「それもない。ただし、彼のようになってもらうがな」

「……………！」

壊す、か。

とりあえず大人しくしている方がいい。だが、黙っているとは言われていない。僕は覚悟して言い続けた。

「なぜ僕を監禁するのですか？」

「……………君をしなくてはならない理由があるからだ」

「……………っ……………」

大人独特の言い回し。核心に触れさせるところか見せもしない。そこには拒絶が阻んでいた。つまり話したくないということ。逆に言えば責められたくないということだ。……………考えてみよう。

僕を監禁をしたということは、そうしないとこの犯人にとって不利益が生じるからと言える。しかもどこかで聞いたことのある声。

僕に身近な人間かもしれない。

「つまり、僕を監禁することで都合がいいということですよ？」

「……間接的にはね」

「？」

間接的に……？　つまりこの人は真犯人ではない……？　いやあ
るいは……。

「……喋りすぎた。少し寝てもらおうか」

「！」

そいつは僕の頭を強引に引っ張り、何かを顔に当てた。布のよう
だ。それだけではない……。……変な臭い……。クロロホルム……。！
僕はテレビのスイッチを切ったように意識を手放された。

「……本当はしたくないんだけど……。許してくれ……」

二十一戒目「焦燥」

「さん」

「? どうした?」

「実は……うでして……」

「そうか。意外に早かったな」

「……、……よう?」

「とりあえず大丈夫だ。こいつさえ来なければ……」

「わかりました。では、例の件も……」

「条件を満たした瞬間、決行だ」

「了解。では失礼します」

「ああ。頑張ってくれ」

とつくに目が覚めている。そういう抜け目が後になって尾を引いてくるのだ。僕はそれをできた。しかし、肉体的にはどうにかなくても、精神的に参ってきた。今にも気が狂いそうだが、堪えなければ全てが台無しだ。チャンスも命も。

とりあえず会話は終わったようだ。しかし、なぜか孤独を錯覚させられてしまう。絶対に人がいるのに、その気配がないというか何というか……。僕の第六感が戸惑っている。

それでも今のことから拾えたのはいくつかあった。

一つはこいつらは綿密な計画を立てていること。ちよつとしたハプニングにもしつかり報告し、見落とさない。逆に言えば、そうしないと支障を来す可能性があるというわけだ。

もう一つはやはり僕がキーマンであること。僕の行動一つで計画を台無しにできる力を持っているのだらう。とするならば、それは多分“手紙”だらう。

それよりも時間が気になる。僕はまだ寝ているので、そろそろ起きないとまずい時間になる。

「……ん……」

だから態とらしく目覚めた。

「！ 起きたか……」

「……くっ……、今何時ですか……？ お腹空きました……」

「……そうだな、そろそろ昼にしよう。……おい！」

今は十二時くらいなのか？ だとするとおかしい。僕が連れ出されたのは昼食後だ。この男のが本当なら翌日、つまり十四日の昼あたりということになる。だが嘘ならば最低でも今日、十三日の夕方あたりだ。どちらかを取るかで意味が違ってくる。

すると、急に手首や足首の締め付けが緩くなった気がした。

「……！」

そして、ついに解放された。ただし目隠しは外されていない。

「それじゃあ目隠しも外せ」

無理矢理取られる。そして目を開けた向こうには……。

真っ暗な中で目の前に少女が立っていた。少女は何かに寄りかかってなぜか泣いていた。その瞳がゆらゆら波打ち、雫を落としていく。一ヶ所に溜まっていた。どンドン溜まっていく。無くなることなく、どんどんと……。

その分だけ胸に溜まる何かは嫌なものだが嫌ではなかった。意味が分からなかった。不思議な渦が渦巻いていた……。

「……………う、……………」……………、……………う、……………う……………！ 虹

「……………つつう……………！」

「……………よし！ 今すぐ……………つてきて……………。虹、具合は……………うだ……………？」

「……最悪、だよ……」

何度も見ていて見飽きた顔にはうっすらと潤いがあった。それを雑にぬぐい去る。

脇腹の後ろから全身にかけて流れる激痛。まるで電気を流されたように痛い。しかし滑り^{ぬめ}はあまり感じなかった。徹の迅速な処置が幸を結んだのだろう。心から何度も感謝した。

「意識もはつきりしてきたな？」

「ああ、なんとかね。……一体どのくらい寝てたんだい？」

「……丸一日くらいだな。確かお見舞いした後だったからな」

「そうか……」

丸一日分止まっていた体内時計を進める。これで時間感覚は回復した。問題は……。

「陸奥実君はどうなったんだ？ 彼はどうしたんだ？」

「……ああ、それなんだけどな……。実は……」

陸奥実君は自分を刺した後、凶器を片手に病室から抜け出して、さらには病院から出ていったという。数十名の患者や看護師たちが目撃していて、ほぼ間違いない。

愕然とした。

「彼は今、状況判断がとても難しい状態だ。しかも凶器も持ち出してしまった。このままだと、被害が増えてしまう……！」

「……仕方ない」

丁度手の届くところに電話があった。それは内線も外線も使えるタイプだった。今は一刻を争う事態になっている。もうこれからは友人の兄としてでなく、警察として動かざるを得ない。

自分はボタンを順に押していく。……呼び出し音が鳴る。

「……虹、するんだな？」

「……ああ。……もしもし、こちらは新戸だ。全員に告ぐ。陸奥実流をただちに捕まえるんだ。傷害及び殺人が拡大する可能性がある。自分は今、その被害に遭い療養中。体調がよくなり次第、自分も加わる。以上！」

自分は陸奥実君を信頼していた。今も信頼したい。君なら背中から命を奪えたはずだ。なのに急所じゃないところにした。まだ戻れる。陸奥実君、自分が絶対に戻してみせる……！

「虹、陸奥実君はやはり“手紙”を持っているのか？」

「……わからない。手紙に書いた通り、瑠璃人が写真で持っていたんだ。そこには何も書いてなかったけど、内容を全て覚えてたとか……」

今思えばここ最近、瑠璃人は大胆な行動をとっている。しかも陸奥実君に関わることが多い。

そして自分に渡した情報。瑠璃人は先にこれの存在を知ったのだろうか？ だとするならば次はどんな行動をとる？ 瑠璃人のことだからこうなるのも考えていたに違いない。

「だったら瑠璃人君も探す必要があるかもな」

「……“探す”……？　そうか！」

瑠璃人は陸奥実君を止めに行くに決まっている。

「まずい！　徹、携帯を貸してくれ！」

「？　おいおい、ここをどこだと思ってる？　病院だぞ？」

そんなことは判っているけど、時間がない。理由を先に言った方が早い。

「瑠璃は陸奥実君を止めに行ったんだ！」

「何！　それホントか！」

「ああ！　瑠璃ならしかねないことだ！　頼む徹！　携帯を……っ
てもう掛けてるし……っ！」

ここは病院だ、って言ったのは誰なんだ！　だが、ありがたい。
ごめんなさい病院にいるかたがた。ほんの数分だけ時間をください！

「……………虹！」

「かかったかい！」

「……………携帯切ってるぞ、多分！」

「くそっ！　なんでこんな肝心な時に！」

瑠璃人が切つていること自体珍しいことだが、最悪だった。
瑠璃人……！

目の前に立ちふさがる建物。彼が住んでいたところだ。そんなに古くない寧ろ新築に等しいくらい。東條　真乃、前橋　透気、奈多　弓　棗が見上げていた。
ヒュウツと突風がすり抜ける。

「陸奥実んちか……。こうして見ると、なんだか不気味を感じるよ」
「……とりあえず、行きましょう。管理人から鍵は拝借していますから、大丈夫です」

棗が意を決して先に入っていた。それに続いて二人も足を歩ませる。歩が進むにつれて胸からこみ上げてくる何かが、ストッパーをかける。でも、それに従っては何も始まらない。彼を知ってこそ謎が解明できるのだから。

止まりかけた足をぎこちなく動かす。そしてそのまま階段を上っていき、遂に目に入った。使われていたドアまで走る。一瞬だった。

「真乃やん、鍵……」

「はい」

金色に煌めく鍵を差し込み、捻る。重々しく乾いた解除音がした。棗がゆつくりと引いてみる。微力を加えながら。そして、完全に開ききった。

「……………」

「……………」

「……………行くで」

中は真っ暗だった。光が入ることを一切許さない。見えるのは、外から染みこむ玄関のみ。明かり無しではとてもではないが手探りになってしまう。

棗は入ってすぐ脇を手で探る。指先に伝わる微かな突起に引っかけ、押す。暗闇から一瞬にして道筋を現した。でも突き当たりの一枚奥は依然として変わらない。

「ドキドキしますね……………」

「オレは悪いけどぞくぞくする……………。頼むから脅かすなよ……………」

「い、意外にビビリ、やなあ!」

「奈多弓も、こっ声が震えてるぞ……………!」

透気も人のことが言えなかった。

靴を慎重に脱ぎ捨てて床に足を着ける。ひんやりとしていて気持ちよかった。そのまま忍び足で向かう。まるで泥棒みたいだ、と誰かが言った。その通りだと思う。そして、奥の部屋である居間のスイッチを横に滑らせた。間が空いて電気が点いた。

「何で誰もいないんだろうな……」

「むっちゃんのお前は共働きなんとちゃうん？」

「……………」

「奈多弓、開けてくれ」

「ほな、いくで……」

今度は勢いよく開けた。

中は照明が働いていて明るい。柔らかい白に包まれている。しかしどこことなく黒かった。

早速三人ともそれぞれ散らばって物色し始めた。透気は風呂場やトイレなどの生活空間、棗はキッチンや居間、そして真乃は彼の部屋を担当した。

「なんか食器とか綺麗に並べとんのやな。なかなかの綺麗好きやで、これは……………」

棚に整頓されたそれらは寸分の狂いなく並んでいる。しかも種類別に重ねる枚数も合わせていた。ある種の芸術かもしれない。

他にも冷蔵庫、炊飯器、キッチン全てが新品同様と言っていいほどだった。

「……………なるほどな……………これはアカンなあ……………」

「みなさん、来てください！」

「……………」

真乃がいきなり叫んだ。二人はすぐさま部屋に向かう。

「どうしたん！」

「なんかあったのか！」

「これ、見てください……………」

真乃のところに行つて指差す方を見る。そつちは壁だった。それも彼の使つていたであろう机の上あたりだ。透気がそこを細かく調べると。

「……………」

「何かあるんかい？」

「……………」

黒い点がある。黒い点？ と疑り深そうに棗も行ってみる。確かに鉛筆の芯を突き刺したくらいの点があった。二人とも危なそうなので触れはしなかった。

「……………」

「これは最悪です」

「何でや？ 画鋏でポスターも留めたんやろ」

「あいつの好きな芸能人誰だったっけ？」

「そんなものではありません！ これはおそらく、“盗聴器”の類のものです」

「……盗聴器？」

透気が間抜けに言った。

「この部屋は盗聴されていたんですよ……！ しかも、既に回収されているようです」

「……変態やないか！」

「いや、そっちじゃないだろ！ きつと！」

「ですが少なくとも、流さんに恨みを持った人物に間違いはないと思います」

彼に恨みを持つ人物。直接でないならいるかもしれない。でも彼はそんな事をする人ではない。それは誰にでもわかること。

「とにかく、警察呼ぼうぜい！」

「そ、そやな！ これもアカン！」

「私が呼んできます！ お二人はここを調べてください。もしかしたらまだあるかもしれません！」

真乃は部屋を飛び出していった。

残された二人は彼の部屋を隅々まで探ることにする。ベッド、その下、本の隙間、机の引き出し、などを消化していく。しかし、違

和感あるものはなかった。それでも棗は繰り返し調べていた。内心がっかりした反面ホツとしている。

「……なあ、奈多弓」

「……なんやねん？」

「さっき言ったよな？」

「？」

「これ“も”アカンって……」

「！」

「何かあったのか？」

棗は作業していた手を止めて、透気を見る。そしてベッドに座る。透気の隣に。

「実はな、……その……」

「なんだよ。言いつらいのか？」

「……ワイ、真乃やんに言うか言わんか迷うとる」

棗は表情を落とす。その言葉も呟くようだった。本当に重大な事だと理解してくれたようで、透気も真剣な眼差しを送る。ここだけの相談……、と呟く。

「むっちゃんは多分独りや」

「……は？」

「……だから“独り”なんや」

「……もうちょっとわかりやすく言ってくれ」

ため息を深くついた。

「むっちゃんは両親と別居中や」

「……！ なんでだよ……！」

「ワイに聞かれてもわからんよ……！ ……ただ」

「……ただ？」

「お箸と茶碗は五つくらいずっとあったんやけど、お箸のうち一組だけ反対向きになっとって、茶碗は裏返しになっとった」

「……つまり……どういふこと？」

「つまり、それだけが使われてたうちゆうことや！」

透気は少し考えに耽る。頭の中で冷静に整理整頓していく。そしてある一つの事に到達した。

「じゃあ何で親の分とかもここにあるんだ？」

「……………」

「一人暮らししてんなら、自分のだけで十分だろ？ わざわざ持つてくる必要は……、……？」

棗は何も言わなかった。透気と目も合わせずじつと床を見つめる。両肘を膝に付けて頭を掌で支える。いや、覆い隠す。透気はさっきのを思い返す。考えているのはわかっているが、そこまで至れない。それを見かねて、透気に言う。

「……………気付かない？ 自分で言ってる……！」

「……………」

「……………いますよ」

「……………！」

真乃が微笑みながら戻ってきた。多少気まずい空気が流れる。当の本人はもちろん理解していない。そちらの方が良かった。棗は小さく、内緒やで……？ と呟いて真乃の方に向かった。

「……………家に帰ってからでいいか」

透気も立ち上がった。

「で、どうだった？」

「それが、電話線が切断されていたので携帯からかけました」

「マジかよ……？ 危ないのに絡んでるんじゃない……」

「大アリですね……。しかも、切断面は綺麗に揃ってましたし……」

「ってちょっと多すぎねえか！」

「……ひい、ふう、……六台止まったで？」

「ふむ……こりゃあただの失踪じゃないのお」

部屋で管理人と一緒に待つことになった。一応成人がいた方がい
いとのこと。確かに、勝手に入っていたと誤解されるよりましだ。
だが、四人とも確実に無実なので心配する必要はない。問題なのは
この後。

“手紙”について聞かれたらどう説明すればいいのだろうか？ 少
なくとも、一般の警官には知られていないはず。理解できない人間
に説明するなんてたかが知れている。しかし、されたらするしかな
い。

彼は虜になっている。それは“良いこと”だけれど、今回はどう
やら駄目。

一人の少し肉付きのいい警官がやってきた。玄関まで来た。一緒
にそこから出て、外で接待をされる。

「連絡してくれた方々ですね？」

「はい。そうですが……、これは……？」

「今からこの部屋を捜索します。警部殿からでして……」

そう言うと、後から続々と同じ格好が現れる。

「わかった。わしらはここで退散しますわい」

「はい。後で少々時間をもらいますが、よろしくお願いします」

管理人が頭を下げるとそれに倣った。そして彼らに引き継いでもらい、管理人の家に戻った。彼の家は自転車屋を趣味でやっているらしい。

その途中、いくつもの車が道を陣取っているのを見かけた。

「さすがでしたね……」

「ああ。まさかこんなになるとは思いもしなかったぜい……」

とりあえず同感ということにしておく。

「でも、むっちゃん大事かなあ？ 心配やわあ……」

「陸奥実さんは弱くはないわい。簡単にはくたばらん……！」

「随分と陸奥実を知ってるな、じいさん」

「ほっほっほ！ ……ちょっと小話してもよいかの？」

管理人はみんなに三つパイプ椅子を差し出した。それぞれ座る。それにいつの間用に用意したのか、お茶や和菓子も持ってきていた。

もちろん、最初に飛びついたのは透気。嚴重注意されたのは言つまでもない。

さて、準備は整った。

「ふむ……、実はお……」

そしていよいよ話が始まった。

二十二戒目「逃亡」

「ぜえ……、はあ……！ はあ……、はあ……、ふう……！」

息が苦しい。一呼吸する度に喉に空虚を感じる。別の生き物を動かしているような錯覚に陥っている。そのせいで頭がやけに呆然としていて、判断がしにくい。なのに思考は一つの事に恐ろしく冷めていて、行動は暴力的だった。つまり、理性を保てていない。

足を見ればひどく汚れ、赤が目立ち始めている。痛みは蚊ほどもない。覚醒してるようだ。

そして身体はどこへ向かうのか、再び走り出した。

「虹、どうする？」

「ちょっと待っててくれ……。今考えてるから……」

九月十四日、四時三十二分を丁度指した。冷房から暖房へ変わった今、部屋は暖かい空気に包まれている。しかし、そのせいで頭が熱くなっていた。

おそらく今、自分の部下たちが陸奥実君の部屋を捜査しているはずだ。そこから見つければ、被害者一人出さずに確保できるかもしれない。しかし問題は今どこにいるかだ。全員で虱潰しに炙り出すか？ いや、そんなことしたらパニックを引き起こしやすくなってしまう。

「虹、頭貸せ」

「……？」

言われるままにする。すると大きく振りかぶって……、

「うづあっ！」

頭突きをくらわせた。

「うぐおおおっ！ 何するんだよ！ いてえええ！」

しかしあちらもおでこを押さえていた。……自滅だ。
おかげで赤く腫れ上がり、遂にはぶつくりと膨れてしまった。

「全く！ 怪我人に怪我を負わせるなんてあり得ないぞ！」

「……すまん。だが、落ち着いたろ？」

「逆にム力ついてきたよ！」

「まあ、要するに落ち着けてことだよ」

「……」

口で言えはいいのに……。

でも確かに焦っていても何も始まらない。最低でもまだ被害はない。
い。

「よし、逆に誘つか。まずはコンタクトしないと……」

「おい、まさかここから抜け出せるとでも思ってるんじゃないだろうな？」

「……えっ？」

数年前、ある人が訪ねて来た。見た目からして他人とどこも無く違う。目は虚ろで希薄、そして異質だった。しかも独りきり。

ここに住みたい、呟くように言い放つ。勿論断りはしない。だが、どう考えてもおかしい。こんなに若そうな青年が独りで住みたい、とは。

親はどこにいる？ ごく普通の質問をした。彼は、一人暮らしを余儀なくされている。学校があまりに遠いから、と添える。それなら仕方ない。契約の準備を済ませた。

それを終えて部屋を案内する。本来なら三階のはずが彼の強い要望により、二階にした。なんでも見晴らしを大事にしたとか。なんだかねで部屋も決まり、一息ついた。彼はお辞儀をした。そのあと、余程寂しかったのだろうか、家に押しかけ熱烈に語ってくれた。

彼は親を交通事故で亡くしてしまったらしい。皮肉にも相手方は骨折や打撲で済んだものの、青年方は彼を残して……。あつという間の惨劇。その瞬間は今でも覚えているという。しかし、頭を強く打って二、三日間は意識不明だったという。起きた時には何も無くなっていた。

彼は涙を流しながら話していた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」マスク、取ったらどうです？ 食べにくいかと思うんですが……………」

「……………」気にしないでいい。君にバレてしまうと、後々面倒になるからな……………」

「……………」では、早く僕を解放してくれませんか？ 虹にいのお見舞いに行かなくてはいけないんです……………」

「虹にい」？

「僕の兄です。……………」駄目ですか？」

「その場合は死体になって帰ってもらえるか……………」？

「……………」っ……………」結構です！」

先ほどから毛ほども隙を見せない。唯一、監禁中は能動的に僕を

殺してはいけないという事実を武器にしているというのに。巧くかわされてしまう。

時間感覚もあやふや、虹にいたたちの現状もわからない。第一、こいつの正体すら掴めていないのだ。

「……では、一つだけ質問を受け付けよう。それが面白かったら答えてやる。つまらなかつたら……、わかってるな？ もちろん、俺たちに関しての質問はなしだ」

「……わかりました。やります」

どういふ風の吹き回しだかわからないが、チャンスが回ってきた。ここでしくじってしまったら台無しだ。

おそらく面白い質問というよりも、的を得た質問が面白いとなるのだろう。そう考えればまだやりやすくなる。僕が知りたいのはまず、どうして僕を監禁するのか、現在の時間、陸奥実君との関連性だ。こいつらに関しての質問は禁止だが、陸奥実君となら話は別だ。……屁理屈だけ。

「……まだか？　せめて昼飯が終わるくらいにはしてほしいんだが」「はい」

時間も聞いて尚且つ他の二つも含まれている質問。これにニュアンスを加えてすればいけるかもしれない。早速考える。時間はたっぷりある。なぜならこの男、フェイスマスクしていても食べづらい。まだ半分にも到達していない。

……時間、陸奥実君、監禁……。

僕を監禁したのはきつと陸奥実君との接触を避けるためだ。虹には怪我をしているし（男の言うことが正しかったら）、徹さんは

病院勤めで忙しい。となると……やはりこれしかない。

「時間、ということにしよう。質問してくれ」

「……………」

固唾を飲み込む音がやけに聞こえた。

「僕を監禁するのはいつまでですか？」

「……………？ もう一回言ってくれ」

わかりやすくはっきりと言った。

「……………僕を監禁するのはいつまでですか……………？」

「……………」

俺は握っていた箸を置いて押し黙った。そしていきなり笑い出した。

「あっはっはっはっはっ……………！ なるほどな！ ベタな質問できたか！」

「……………あっ……………」

確かに。ドラマや映画などではそんな風なのはありきたりだ。顔が熱くなってきた。

「いいだろう、答えてやる。九月十五日の二十四時までだ」

「……え？」

それはつまり、十六日ということ……。……そうか。やはりそうだったのか！

念のために確認をしたが、やはり十六日までだった。これで全てがわかった。

「まっ、別に君がどうしたって逃げられはしない。解放するまでは……な」

「確かに……。ひ弱な僕にはどうにもできないです」

でも諦めるわけにはいかない。ここでちんたらしていたら陸奥実君が殺されてしまう！ 何とかしてここから脱出できないだろうか。

「……とすまない。電話のようだ。頼むからここにいてくれよ？」

と思いきや、男はポケットから携帯を取り出し、早々と部屋から出ていった。まるで上手く出来すぎたドラマのようだ。

蛍光灯が隙間なく照らす中、別の緑のマスクをした男が入ってきた。手には堅そうな棒を持っている。多分、見張りだろう。しかもその男は服の上からでもわかるように、筋肉が盛り上がり、まるでボクサーのようだ。背も二メートルはいつている。

どうしようか？ 強行突破でいこうか？ いや、無理だ。……でも行くしか……！

「……おい」

ぎらりと鮫のような目が睨み付ける。その威圧感にたじろいでし

まっ。

「……なっ、なんですか？」

「逃げられると思うなよ？」

逃げるだって……？

「……逃げようなんて思ってませんよ……」

「？」

僕は睨み返した。

「親友を救いに行くんです！ たとえあなたのような人が立ちほだかつて！」

「……………」

一瞬だけ男が退いたような……。しかし、そんな口だけ言ってもどうもできない。物理的に不可能に近いのだから。

それでも自棄になって、男に向かおうとした時、あっちからずんずんやってきた。そして遂に僕の目の前に来た。あまりに違いすぎる体とポリウムさに圧倒された。やはり正攻法じゃとてもかなわない。

ちなみにこの人、どういう顔してるんだらう？ そう思っているといきなり腕を掴まれ、引きずられていく。

「何するんですか！」

「黙れ」

もう一度睨みつける。体が固まってしまった。まさに蛇に睨まれた蛙だ。僕は殺されてしまうのにか？

だがなぜか部屋から抜け出してしまった。左右に伸びる白い通路。ところどころに区切りがされている。そこを右へ曲がった。

「……どこへ……？」

「……お前を逃がす」

「！」

それは突如優しくなった気がした。

「似ている……」

「？」

「……何でもない。忘れる」

「……」

見た目に惑わされた（素顔はわからないが）。この人は根は優しい人に違いない。そう直感した。……声が濡れていた。

そこからは気取られないように水を打ったように静まり返る。なかなか複雑な構造らしくまるで迷路のようだ。それに部屋数がたくさんあってなぜかトイレまである。それはどこかで見たとある気がしてならなかった。

「あの……、こじって……？」

「……ん？」

「どうしたんだい？ 自分は観念したから……」

「いや、違う。……ちよっと待ってるよ……」

徹はドアをそっと開けて外を見る。そしてそのまま出て行ってしまった。

この際に……と考えたが、片腕は手錠をベッドに引っ掛けられどろろすることもできない。鍵は徹が持っている。これは自分のものにしばらくして帰ってきた。もう五時を余裕で過ぎている。そして手錠を外してくれた。息が荒かった。うっすらと汗もかいている。

「虹、様子がおかしい」

「？ どういう事だ？」

すかさず聞き返す。

「院内に誰もいないんだ。看護師はおるか患者まで……！」

「……なんだって……！」

「どうなっている……？」

「わからない。さっきまでは確かに居たんだろう?」

「ああ。……なぜ患者までも……?」

とりあえず、調べなくてはいけないようだ。自分は少しずつ体を起こす。途中、徹が止めに入ったがふりほどいた。

「一人じゃ心寂しいだろう? 一緒に行くよ」

「……無理はするなよ……。本来なら縛り付けてでも安静にしてもらうところなんだが……」

「念の為、チエックしとこう。徹もしておいて」

腹周りに巻いてあった包帯を一度外し、新たに取り替えた。染みが出来ていてやけに迫力があつた。いかに重傷かが受け取れる。

徹にハンガーに掛けてあつた上着を取ってもらう。内ポケットに窮屈そうにうずくまっている黒い物体と逆側に入っている金色をそれぞれ出す。きちんと確認した後再び戻し、上着を着た。

「できれば使いたくないね……」

「同感だ。そもそも、私は違法だ」

自分らはとりあえず、身体を解してから外に出た。

徹がゆっくり開けたその世界は重々しかった。左右に広がる通路からはなんの反響もしない。しかし静閑とは言い難い。一種の空虚だった。そんな中を散策するとなると相当きつくなるのは目に見える。

「……虹、後ろを頼むよ」

「任せてくれ」

辺りを警戒しながら歩きだした。

「ふーっ！ やつとこ着いたぜい……」

「暗くなるのが早くなりましたね」

「まあ、九月やしなあ……。……今、六時近いで」

「マジかよ……」

太陽は既に日の入りに行こうとしている。半分以上が藍色に染まり、太陽に近いところでは紅色になっていた。その狭間ではあちらからこちらへ色が移り変わっている。

ひゅっつと風が靡く。頬をすり抜けていった。

「あいつの部屋ってどこだっけ？」

「確か、同じ部屋だと聞きましたが……」

「何でいつも同じなんだろうな」

「……さあ。偶々とちゃうん？」

透気は首を傾げるが、皆が先に行くので、後を追った。ひとまず中へ入ることにする。正直、疲労しきっていた。バスやら何やらを乗り継いでくるのだからちよつと厳しかった。病院の入口、自動ドアが開いた。

「あら？」

よつに見えた。

再びやってみるが結果は同じ。うんともすんとも言わなかった。

「おい、おかしくないか？ 開かねえ……」

「全然まだ病院は終わってないですよ」

「開けてしもうてもええ？」

「え？」

なんと手動だった。誰もが疑った。

「ちやうよ！ 鍵が掛けてなかったんや！」

「……………」

「……………」

とりあえず入った。

中に入ってみると誰もいなかった。電気はしっかりついているの

に。それが変に怖かった。

「なんかホラー映画みたいだぜ」

「私は見慣れてますから大丈夫です」

「やけど、主人公にはなりたくなかったなあ」

二人とも頷いた。

するといきなり向こうから物音がした。それに一同は沈黙する。

「……今、明らかにしましたよね？」

「……なんか聞こえたで」

真乃と棗は両脇にがっしりと掴んでいた。でもなんだかんだでおいしい透気だった。

「全く、ビビりばっかだな……！」

「わ、私はビビってなんか……」

ドタッ！

「ひひひひひひひひ……」

「……やっぱりじゃんか」

半分呆れていた。

その方向は入って前方にある受付の左通路の方からだった。明かりは点いているのに、なぜか足を出すのを躊躇わせた。後ろから引き止められるのを妙に感じさせる。

透気はそれと両脇を振り払い、行く。

「とりあえず、椅子に座ってる。……見てくる」

「お気をつけて……！」

頷き合った。

透気は壁に背をつけ、肩越しに見てみる。すると何やら聞こえてきた。どうやら何かを話す声のようだ。いきなり出るのはまずいで様子を窺う。

「……、……う……ん……ね……」

「……あ、確かに……」

「……が、……を……つもり……しょう……」

「わからない……」

「……？」

よく聞こえなかった。分かったのは話しこんでいるというだけだ。しかし、目を凝らしてみると……、

「……も、やはり……です……」

「……！ あいつは……」

新戸 瑠璃人がいた。しかもその隣にはかなり体つきの良いフルフェイスの男もいた。明らかに透気には面識はない。さらに、ある部屋の前で話し込んでいるようだ。番号は角度が悪すぎて見えない。とりあえず、引き返す。

二人が身を寄せ合っていた。

「お前ら……、どんだけだよ……」

「こ、これはいいとして、どうしたんですか？」

「なんでか知らんが、あつちに新戸とマッチョなオッサンがいる」

「？ なんで？」

「知るかよ。でも、切羽詰まってるみたいだ」

「とおさん、彼らと合流した方がいいんじゃないでしょうか……？」

確かに、この誰もいないという異常事態でいつ何が起こるかわからない。でも本人は少し何か引つかかる。この何かを置き忘れたような、そんな気分させるものがあつた。

「……つーか、オレらは陸奥実に来ただけだぜ？ とつとつと行こう」

「……そう、ですよね……」

「……」

結局、新戸のいる方とは逆側の通路を通っていった。

「ん？」

「どうした？」

「今人影が……」

「そうか？ 俺には何も……」

「そうですか」

助けてくれた肉付きのいい人、星 衛まもるさんは怪訝そうだった。僕的には、誰かいてくれた方が心強い。

でもまさか、ここに監禁されているとは思ってもしなかった。陸奥実君は病院の一室を持つ廃墟だったが、僕は全くの逆だった。となると、ここに虹にいと徹さんもいるはず……と思って捜しているのだが、なかなか見つからない。いち早く察知して、抜け出したのだろうか？

「とりあえずここは危険だ。早く出るんだ。出口はすぐそこにある」

星さんはその出口の方へ向かおうとした。僕は慌てて服を引っ張る。

「虹にいを黙って見過ごせません……！ 怪我をしてるんですから……」

「……そうか」

「素晴らしき兄弟愛だな、と呟いたのが聞こえた。

虹にいを捜すのに相当の時間を食っている。もう仕方ない。携帯を使ってしまおう。僕はポケットから携帯を取り出し、電話帳からかける。」

「……」

「……見つかるといいな」

「……僕は見つけたくないです」

「？ なぜだ？」

「ここで出会ってしまったら、僕らと同じ状況下じゃないですか。だから僕は既に徹さんと一緒に帰宅してることを望みますね」

「……なるほど」

しかし、予想通りになかなか繋がらない。ちょっと考えてみる。

虹にいは常に携帯の電源は入れてるし持っている。でも今回は場所が場所だけに、さすがに入れてなかった。隣にはおそらく徹さんがいるから、というのが利いている。それは逆に一つのことを示していることになる。

「星さん、虹にいたちは残念ながら、中にいるようです」

「そうか。ここはあまりに広すぎるからすれ違いになることが多いだろう」

「では、来る可能性が高いところを先回りして待ちましょ。途中で会ってくればいいのですが」

星さんは反抗することなく了解してくれた。僕らはそのまま真っ直ぐ歩いていった。

「徹、緊張感なさすぎだよ。もう少し自覚してほしいね」

「仕方ないだろ？ 出すものは出さないと体に悪いんだ」

それは一理あるかもしれないが、堂々と言うのはやめて欲しい。背中から這いずり回る痛みと疲労感を引きずりながら見回っていた。というより、脱出しようとしていた、なのに、徹の待たされ大幅に時間が過ぎてしまった。丁度見つけた時計は六時二十分を指している。

「気を引き締めるから許してくれよ。な？」

「本当に医者なのかい？ とにかく行こう」

歩いてどのくらいだろう？ 瑠璃人はどうしているのだろうか？

陸奥実君の搜索状況は？ 怪我の進行は？ 全くの虚無の中で疑問やら悩みやらが交錯していた。話さない分だけ頭が悩む。

無言で歩いていくと、やっと着いた。受付場に。

「やはり、ここにもいないな」

「わからないけど、人が入ってきたようだよ」

「え？」

「あそこを見なよ」

徹に指を指して教える。そこは出入口だった。外の電気は消え、内側の光が照らす。なかなか透明な自動ドアから冷たい風が流れ込んでいる。

「誰かが開けたんだ。外部の者が入ってきたのか逆なのかはわからないけど……」

「……ちょっと待ってみようか」

「その価値はあるようだ。徹、“使い方”は覚えてる？」

「とりあえずな。だがその前にまず……だからな？」

「わかってるよ」

椅子の陰に座り込み、じっと待ち続けた。

.....

六時三十九分。受付の上にある時計はそう示している。一向に変化はない。

「.....！」

と思った矢先に起きた。徹に目で合図を送る。微かながらに足音が聞こえる。しかも複数。休む間もなく、緊張感が張り詰める。

.....ツ.....ツ.....ツ.....トッ.....

どんどん近づいてくる。しかし、なぜか複数音だったのが単音に変わっていた。おそろおそろポケットに手を伸ばす。

そして擦る音を経て、止んだ。

「.....」

どこから湧いたのか、一筋の雫が頬を伝っていく。それをゆっくりと拭う。

「……」

まさに手が触れた瞬間だった。

「東條、奈多弓、いいぜ」

「……！」

どこかで聞いたことのある声だ。ポケットから手を離し、様子を見る。

「……にし……、りゅう……いません……」

「ああ。それどころか人っ子一人いやしないな」

「……み悪い……。早く帰らん？」

「そうだな。もうこんな時間だし」

どうやらお見舞いに来たようだ。彼らがドアを開けたらしい。そして待っている、二人の女の子と男の子が姿を現した。……確か彼らは……。

「ねえ、君……」

「動くな！ お前ら！」

「え？」

そういえば、徹にサインを送るのを忘れていた。

「うわぁっ！」

「なんですか！」

「チャカ持つとるで！」

あっさりとした音は反響せず、壁に穴を開ける。間一髪、三人はすぐに物陰に隠れてくれた。……やはり持たせない方が良かった。下手をすれば乱射してしまう。

黒光りするそれはいかにも、相手を死へ追いやれる死に神だった。

「徹！ 今すぐ下ろせ！ 彼らは一般市民だぞ！」

「……！ すまん」

素直に従ってくれた。

すっかり怯えきってしまった三人をなんとか説得し、無事にコンタクトできた。落ち着かせるように椅子に座らせる。

彼らとはあまり面識がない。せいぜい、瑠璃人の友人程度にしか覚えていなかった。そこで、ここで再認識することにした。

前橋 透気君と奈多弓 棗さん、東條 真乃さんたちは六時前にここを訪れた。なんでも、陸奥実君のお見舞いに来たという。しかし、陸奥実君はおるか誰もいなかったので引き返すことにしたらしい。

「ねえ？ ここに来る途中、陸奥実君か新戸 瑠璃人を見かけなかった？」

「いや……、あっ！ 新戸なら初っ端見かけたぜい」

「何？ 瑠璃人はここに居るのかい！」

「せやけど、マッチョなおっちゃんも居たらしいさかい」

マッチョなおじさん？ どういうことだ？ これはやはり呼びかけるしかないな。

「わかった、ありがとう。君たちはすぐにここから離れなさい。自分たちは……」

「待って下さい！」

「？」

東條さんが叫んだ。奈多弓さんと前橋君はとても意外そうだった。

「流さんは、どうしていないんですか……？ どこにいつちゃったんですか……？」

「……そうだぜおっさん！ 陸奥実はどこいつちまったんだ！」

「……お、おっさん……」

まだ二十六なのに……。ショックは隠しきれなかった。背中を徹が慰めてくれた。

それはともかく、話していいものだろうか？ 東條さんらは友人以上の関係にあるだろう。ならば、教えてあげれば助力になるかもしれない。しかし、彼らに殺人犯になろうとしていることを暴露するののか？

「……虹」

「……………」

こんなに迷うのは久しぶりだ。
ふとして、過去にベテランの先輩の教えてことを思い出した。
迷った時とにかく嘘はつくな。その嘘で人を殺してしまう。”

「……………わかった。言おう」

「こ、虹！」

唇を噛み締める。

「陸奥実 流は今、殺人未遂で逃走中だ。自分が殺されそうになっ
た」

彼らにあの傷を見せた。赤いシミが多少広がっていた。もちろん
痛みも比例している。
唾然としていた。

「……………とにかく時間がない！ 頼みがある！」

「な、なんですか？」

「彼を捜し出してくれ！ 被害が増える前に！」

事件に巻き込んでしまうのは承知の上。今は猫の手も借りたく
らいだ。それでも彼らは少し困惑しながらも受け入れてくれた。
…

…ありがとう。

念のため、携帯番号を教えた。何かあれば連絡するように、と添えて。すると一目散に駆けていった。

「……虹」

「わかってているよ。瑠璃人を呼び出したら、二人とも署に送る。それから捜索に……」

「そうじゃなくて……」

「？」

徹は額に手を当てたり脈を計ったりした。目を無理矢理見られたりもした。

「お前はもうリタイヤしろ。出血しすぎて脈拍もおかしいし、唇もどどめ色だ」

二十三戒目「疎外」

銃声。どうやらどこかで争っていたようだ。僕たち以外にも最低二人以上はいるはずだ。片方は無論だろう。もし、そうでなかったら……。

ひとまずここに留まっているのは危険だ。

「下の方からだ。あっちから聞こえた」

指差す方向は僕たちが入って来たところだった。一瞬脳裏に嫌なイメージが掠める。……いや、そんなことはありえない。

仮に発砲したのが敵だとすると、証拠隠滅のために行動していると考えれる。そして一発しか撃っていないということは対象を鎮圧できたと考えるべきだ。しかし、虹にいたちも持っているから銃撃戦は避けられないはず。一発で鎮圧できたとは考えにくい。あるいはどちらかが一発で……というのは有り得るが。

どちらにしても0626号室は危ない。

僕は部屋にある一切の物をできるだけ元通りにした。

「……」

それらはポケットに入れた。

「……さて、行きますか」

「どこへだ？」

「そっちですよ」

「？ 銃声のした方か？」

僕は頷いた。

「とおやん、待ってえな！」

「はあっ、はあっ、……はあっ！」

時間は七時を既に回っているはず。

「あの！ 散らばって捜した方がいいと思っんですけど！」

「ダメだ！ お前まで誘拐されんぞ！」

バスを乗り継いでいき、終点を降りた時からずっと走りっぱなしだ。

「せやかて、範囲広すぎるでえ！」

「……くっ！」

「！」

三人ともがむしゃらだった。捜すのに必死で、周りなんか目も配れない。それは驚愕と困惑が生み出した副産物だ。焦らずに冷静に考えたい。

だが、その時間すら惜しい。

「くそ！ あいつどこにいったよ！」

かなり暗い道を走る。一定で明るくなったりするが、やはり暗かった。爪先にぐつと力を込め、蹴り出す。加速した瞬間に逆の足、爪先で着地し、再び加速する。ただそれだけなのにひどく疲れる。手当たり次第に走り回り、捜した。図書館、公園、市民プール、土手とありとあらゆるところを。皮肉にも、こっちに来てあまり日が経っていないのが幸運かもしれない。土地勘はまだ鈍い方だろう。

「くそつたれ！ これじゃあ部活となんら変わんねえじゃねえか！」

「ひ、ひとまず休もうや……。体力ありすぎやで……」

「ちょっと厳しいです……」

二人して座り込んだ。もはや、肩で息をしないと間に合わない。汗が尋常でなくくらいに垂れ落ちていく。一方で透気は爽快な汗と細かい呼吸で息を整えている。

「……うーん、普段からしてないからすぐ疲れんだ……」

「否定はしませんよ……ふう」

「でも……」

棗は立ち上がった。

「奈多弓の言う通りだ。休んだおかげで閃いたぜい！」

「本当ですかっ！」

真乃も立ち上がる。

「ああ！ オレの勘が正しけりゃ……。行くぜい！」

三人は一斉に走り出した。

「……つぐう！ ぜえっ！ ぜえっ！ ……ぜえ……！」

「……む？ あっ！ おい！ いたぞ！」

「追っんだ！ 追えええ！」

「！ ……ッ……！」

「？ 逃げない！ こっちに向かってくる！」

「……凶器を所持している！」

「仕方ない！ 応戦するぞ！」

「……こちら、に犯人発見！ 相手は凶器を所持して
いる！ 至急、増援を頼む！」

「……っっ……！」

「くそ！ 逃げたぞ！」

「さすがに頭の回転は速いな！」

「今、そこ曲がった！」

「よし！………っぐあぁっ！」

「！」

「なにぃ！」

「さん！」

「………」

「救急車呼べ！ こいつは俺らに任せる！」

「はい！」

………

………

………

「さん、意識保って！」

「……っふっ！俺に、構わずっ行け！」

「！無理に決まってるじゃないですか！　　さんを置いていくなんて……！」

「大丈夫だ……。ほら、聞こえてきたろ？　　時間がもつたいない……！」

「しかし……！」

「大丈夫だって……！」

「……せめて、来たらにしてください。負傷者一人では危険です！」

「わかつ……。っ！危ねえ！」

「え？」

グシヤアアアア……

「……三人目」

「……繋がらない……。一体どうしたんだ？」

「なあ、まさか……」

「それは有り得ない。信頼できる四人に向かってもらった。……万が一でも……」

「それより、どうするのですか？ 僕らをこんなに縛り付けて連行して」

「瑠璃、言っただはずだ。事件に首を突っ込むなって。……お前たちを連行した後、尋問部に引き渡す。うちの署の連中は、たとえ自分の弟でも容赦しないからね。覚悟しなさい」

虹にはやはり虹にいった。久しぶりに再会するや否や、手錠をかけるなんて。でも虹にはそういう人だ。

僕らは徹さんの車で警察署に向かっているところだ。左手は星さんの右手に繋がれている。

窓の外は意外にも面白かった。機械的に並べられているビルや家などの建物から四角い光を放出する。それが横にスライドし、長細くなる。速ければより細くなり、遅いと太くなる。いかにも生き物みたいだ。

そんな事より、まさか虹にいたちだとは思わなかった。誰に撃つたかは教えてくれなかったが、おかげで犯罪者扱いだ。僕は寧ろ被害者で星さんは恩人だ。陸奥実君もこういう気持ちなんだろう。

「陸奥実君はどうなりましたか？」

「それに答える意味はない」

ぴしゃりと打ち切られる。

「どうしてですか？」

「お前にはもう関係のないことだからだ」

「……………」

虹にはかんかん怒っている。だけどそれは全く嫌じゃなかった。それだけ僕を心配してくれていたからだ。嬉しかった。でも話を聞いてほしい。

「虹にい…………話を……………」

「黙ってくれ」

「……………」

虹にい…………！ 伝えたいことが山ほどあるのに…………！

「お願いですから……………」

「黙れと言ってるんだ！…………っ……………」

「！ 虹！ キレるな！ 傷口が開くぞ！」

「……………ぐっ……………、悪い……………」

「……………」

そういえば先程からやけに庇っているように見える。脇腹だ。今もそこを押さえている。傷口……………？ 思い当たる節は一つしかない。虹にはやはり……………！

「……………」

「瑠璃……………」

「あ、あれ……………」

「お前……………」

「……………おっおかしいですね……………」

眼の奥が焼けるように熱い。その根源が溢れ出す。雫が一粒ずつだったのが次第に流れを作ってきた。

何とも表現できない。複雑に絡み合ったモノが反応して体中に拡散していった。

「……………うぐつ、えぐつ……………、っ僕、おかしいのです……………」

「……………」

「虹に……………、どうして僕を、また突き放すのですか……………？」

「……………瑠璃……………」

虹にいの大きな手が頬に触れた。流れが指を經由して下へと続く。

「僕は虹にいの役に、……んっ、立ちたかったただけえっ、なのに……」

「瑠璃」

「虹にいはやっぱり邪魔ですか？」

「……」

「……虹にい……」

「徹、そこを右に行ってくれ。自販機あったと思う……」

「わかった。流石は粋な兄貴ですこと……ぐがあっ！」

「はあっ、はあっ……、着いたぜい……。ふうー！マジで応えた……」

「……シャレにならん……」

目の前には嫌と言うほど目に焼き付いた光景が広がっていた。三人はその門前にいる。学校だ。

門は人一人分通れるくらいにずれていた。

「……ビンゴ……かな？」

「そのようですね」

躊躇わずに突き進んだ。

いつもとは違う感じた。それは確かに、夜に入るなんて初めてだから当然かもしれない。夜の校庭はいつもより広く、何よりも飲み込まれそうだった。夜中にも部活をすることはあるが、その時はライトを点けていた。印象はまさしく表と裏だった。

そんな広大な闇をを通過し、そのまま靴入れへ直行する。

「今思んやけど……」

「どうした？」

思わず固唾を飲み込む。

「見つかったら謹慎とかあったりせえへんか？」

「……あるかも」

「ですが、見つからなければいいと思いますよ」

さすがに肝が据わってる……、誰かが呟いた。

だがよく考えてみれば、それは彼にも言えることだ。もし一人でも発見されたら、連帯責任で全員道連れだろう。真乃の表情はあの表情だった。

そんな背徳感とちよつとした仲間意識を抱えながら上履きを履く。すると、彼のところに目がいった。

「来てんのか……?」

「……開けてみます?」

「そつやね。とおやん、開けてえなあ」

透気は素直に従う。ぼつかりと凹んだ取っ手に指を引っ掛け、勢いよく引いた。びっくり箱を開ける気分で開けてみる。すると水門を開けたように中の物が溢れ出てきた。全て真っ白だった。白い妖精だった。

「なっ……」

「なんやねん！ これらはっ!」

「すっ、すごいですね……」

透気は靴入れを思いつき殴り付けた。ひしゃげてしまった。

「あのやるお……! ラブレターがぎっしり詰まってやがった……!
! オレなんか一枚ももらったことないのに!」

「知らんのかあ? ファンクラブあるらしいで……」

「なんだつてえええっ! 奴めええ……許さん! 取っ捕まえて紹介させてやる!」

「大学生かいっ!」

このままでは埒があかないと、真乃は棗を強引に連れて行った。

「それでは手筈通り、私たちは上に行きます。とおさんは下からお願ひします」

「おっおう！ 任せろっ！」

棗たちは闇の中へと入っていった。

「……寂しいなあ……って……ん？ なんだこれ？ やけに高級そうなラブレターだな。こんなかに“陸奥実先輩、大好きです”ってかあ〜！ ああああああっ！ マジで引き裂きてええええええ！」

……………ペリッ

「ちょっとだけ見ちゃえ！」

……………ペリッ……………ピリピリッ……………

「それにしても、本格的すぎだろ」

……………パリッ……………！

「なんで蠟で留めてあんだ？ しかもあいつの名前も筆記体だし。こりゃあ、金持ちの家だなっ……………っておいおい！ 二枚入ってる

「！」

……トッ……

「ラブメッセージ贈りすぎだろ！ ……ふむ、どれどれ」

……ッ……ッ……

「……何も書いてねえ。こっちは……陸奥実用か？ 用意周到だな。
……んで、こっちは……」

……チッ……

「うげっ！ びっしり埋めすぎだろ！ 読む気失せるわ！」

……チッ……チッ……

「っーかよお……」

……チッ……

「さつきからてめえ、うるやつ……」

バチチチチチチチチチチチイッ！

「つつつ！」

ドタッ……

「はぁ……、夜の学校はさらに怖いですね……」

「そつやな。……すんません！ 誰かいるう！」

「……なっ、なっちゃん！ 警備員に見つかったらどうするんですか！」

「ちゅうか、あんさんがビビってただけやん……」

二人とも相変わらずだった。真乃は棗の腕にしがみついて離れない。いや、離さない。足を震わせながら歩いていた。

空高く見下ろす丸は太陽のように照っている。窓から廊下へと注がれる。まるで道を照らすかのようで、夜なのに影と光とをくつきりと分かれていた。だが、少し肌寒い。

「……流さん……」

「……」

「……」

「……心配？」

「……いいえ。してないですよ」

光にちようど入った。微笑んでいた。無理をしているのがよくわかる。それは果たしてどちらによってかはわからないが、柔らかく逆の手で肩に触れる。

「強がらなくてもええんやで」

「……っ……強がってません！」

「……！」

腕を離れた。そして突き放す。棗は呆気に取られたが、顔をしかめらせた。

「……」

「なあ、真乃やん。ワイな、聞きたいことがあんねん」

「？」

ゆっくりと詰め寄る。

「……どうしてそんなにむっちゃんが……」

真乃の耳に近づいてそっとうめいた。

「……なんや？」

「……！……それは……私は……」

「違う」

真っ直ぐに見詰めた。真乃の瞳を。

「……水は透明。濁っていたって透明にできる。逆だってできる。でも、人間には当て嵌まらない」

「……な……なっちゃん？」

「……そのはずなのに、あなたは何故例外なの？ この世に例外は有り得ないのに……」

真乃は目を伏せた。それに倣って顔を俯かせる。

「それともあなたは……」

「！」

頬を持ち上げ、無理矢理目を合わせた。

「……………“水”なの？」

「……………」

ふるふると弱々しく震えていた。

今度は棗が俯いた。すると、目一杯に笑顔を見せ付ける。明らかに不似合いだった。

「こちらあつっ！ 君たちっ！」

「！」

「なんで中にいるんだ！ こちらに来なさい！」

「……………マズイなあ……………」

随分と声に張りがない人だった。それでもとりあえず警備員なので仕方なく行くことにする。そして目の前にするやいなや、真乃は携帯を取り出した。

「すみません……………。その前に警察に電話していいですか？」

「どうしてだ？」

「昨年の文化祭の時の知ってますよね？」

「……………あっ、ああ」

返事が遅かった。

「数万円が酒屋に消えちゃったんですよね……」

「……あつ……」

「いや、消したんですよね？」

「……」

「にやはは……恐ろしや恐ろしや……」

たとえ彼女と面識が全くななくても、力が勝っていても勝てないよ
うな気がする。

しかし、警備員は俯いたままでもなにも言わない。そしてついには
立ちすくんでしまった。

「私はまだ辞めるわけにはいかないんだ……。だから大人しく帰っ
てくれ……」

「どういづことですか？」

「……実はな」

警備員は静かに語り出した。

「私は家族の柱だ。妻と子ども三人いる。娘が挟まれて生まれたん
だ。情けない話だが、一番下の、君らと同じくらいの息子が引きこ
もっているんだ」

「……なんでや？」

「……………私たちは本当の親ではないんだ……………」

「えっ……………」

なぜか真乃が過敏になった。

「どこで知ったのか、クラスメートから過剰ないじめを受けたらしい。ましてや頭の出来る子だったから簡単に対象になってしまった……………」

それと一体何の関係があるのだろうか？ しかし、真乃はいきなりその人の肩を抱いてあげた。棗は驚きを隠せなかった。

「……………わかりました。もう結構です」

「真乃やん……………」

「大変失礼しました。すぐに立ち去ります」

「……………え……………」

真乃は立ち上がると、逃げるように走り去った。棗も頭を下げてから後を追う。

「どうしたんや？ らしくないで……………！」

「流さんはここにはいません」

「？ なんでわかんねん？」

「……………」

二人は四階から一気に一階に戻る。相当速いペースで棗は付いていくのがやっとなかった。だから何も言えなかった。いや、どちらにしても言えないかもしれない。口に出したら………という話を作ると身が震える。

靴入れに着くとすぐに脱ぎっぱなしだった靴を履く。そして暗闇に消え入った。

「後少しね……………」

「……………そうですね」

「しかし、おかしな世界だわ」

「なぜですか？」

「だって誰も私をかまってくれないんですもの……………。ウフフフフ……………」

二十四戒目「終演・上」

「み……君……！」

「……」

「君！ 起きて！」

「……っ……くっ……」

「大丈夫か？」

「………頭が痛い」

「そうか……。少し安静にしてなさい。救急車呼ぶから」

「……いや、そいつはいらぬ。それよりも今何時？」

「……今は……九時近い」

「！ もうそんな時間か！ 学校始まつてるじゃん！」

「今日は十五日の日曜日だから休みだよ」

「………そうか。………それとちよつといいか？」

「？」

「………あそこの中見てきてくんね？」

「あのちよつと開いてるやつか？ 何か忘れ物？」

「ああ」

「………………。何も無いぞ！」

「え…………？ 手紙とか上履きとかは！」

「そんな物もない！」

「…………わかった！ サンキュー！」

「本当に大事なのか？」

「ああ。悪かったな。それじゃ…………って」

「ならば君はすぐに交番に連行しないとね…………」

暗闇の中に広がる仄かな光。弱々しい。手で包んでしまえば消えてしまうくらいに。でも、それは風船のように膨らみ、だんだんと強くなっていく。そして急に弾けて眩しくなった。闇という闇は一切かき消され、目の前に広がったのは、

「…………ん…………」

木陰だった。

頭が痛い。どうやら堅い台で仰向けていたようだ。ぎりぎりで寝違えてはいかった。

いくらか青みを含んでいる紅葉が何十何百と折り重なっている。隙間から木漏れ日が照明と陰を作っていた。そして、寝ていた場所である台は木をモチーフにしたベンチだった。堅いわけだ。

俺は半身を起こして辺りを見回す。あまり広くないせに立派に咲き誇る紅たち。ブランコがあつてシーソーがあつて……、やけに錆び付いているのが目立つが、機能は十分果たしている。見覚えがあつた。

以前の公園だった。

「……真乃と……遊んだ公園……。……？」

ふとして違和感を鋭く感じた。どこかが乾燥しているようだ。それはもう、見れば一目瞭然だった。

「……！……なつに、これ……。！」

体をつつかえていた手が赤みを帯びていた。紅葉もみじのように。明らかに自分のモノではない誰かが、ペンキとなって染め上げていた。擦ってみると、ボロボロ剥がれ落ちていく。妙な親密感が練り込まれていた。

「……俺は、何をしたんだ……。？」

そして、今度は右のポケットから強調される“存在感”。そっと抜き出して……。

「！これは……」

それも塗り潰してあった。プラスチックで拵えた先は真っ赤だが、新鮮な輝きを垣間見せる。俺が何をしたのかを如実に物語っていた。

「う、嘘だ……！ 嘘だ！ 嘘だ嘘だ嘘だ！」

俺はしてしまったのか！ この手で……！ ……誰を？

それより、今は何日だ？ 身体の時間感覚がかなり遅れている。それに加えて、体中が悲鳴をあげている。筋肉痛のようだ。

「さすがにここに留まるのはまずいし……。一旦帰ろう」

不幸中の幸いにも服などにはついていない。手と顔をなるべく隠せば大丈夫だ。

「被害者から加害者になってしまったな……」

俺は俯き、ポケットに手を突っ込んで、そこから離れた。

「……話は以上です。僕は全てを吐きました」

「……」

結局、二人ともうちで匿うことになってしまった。実質三人だが。朝食を終えて、取り調べていたところだ。徹と星 衛には食器洗いをさせている。

「ふむ……」

二時過ぎに担任の先生が瑠璃を呼び出し、車に乗せた。自分が刺されたと仄めかした上で。そこから誘拐されるまでは記憶がないらしい。そして昨日、見張り役の男と逃走。

時間的に狂いはない。刺された時間と伝わる時間は多少ずれていてもおかしくはない。そして先生の供述と対応。偶然と考えれば全て片づけられるが……。

それよりも、なぜ星が瑠璃人を逃がしたのかが引つ掛かる。本人曰く、あちらのやり方についていけなくなったとか。……とりあえずそれは置いておこう。

「とりあえず、他にはないのかい？」

「ありません。……本当です！ 虹にい！」

「……」

問題はそこから誘拐されるまでのプロセスだ。

あの瑠璃人を誘拐監禁するなんて難しいほどこの上ない。強引にするしかない。下手をすれば返り討ちだ。なのに一切抵抗させずに完了させた。そこがポイントだ。

「どうして気付かなかった？」

「……そ、それが、なんだか眠くなってきちゃいまして……」

「居眠りしたのかい？ 全く……」

怒りを通り越して呆れた。

「あははは……。ですが、おかしいんですよ」

「？」

瑠璃人は冷蔵庫から水を取り出し、二つに注ぎ足す。

「なんとというか、心地良くなかったんです」

「……どういこと？」

「無理やり寝付かせられた、というのが妥当なのでしょうが……」

つまり、自分から進んで眠ったのではなく、何らかの作用で睡眠状態にさせたということか。納得いかない面もあるが、とりあえず十分だ。

「よし、その先生の名前は？」

「……福田、先生です。福田 勝富先生……」

適当なメモ用紙に走り書きする。

なんとなく含みがあるように聞こえた。

「あと他には？」

「美浦だ」

「！」

いきなり星が割ってきた。

「“美浦”というのは？」

「お前、会わなかったのか？ 金髪で綺麗で色っぽいナースさんだ」

「そしてエメラルドグリーンの瞳、まるで外人のような容姿をしている」

「ほら、虹にいが鼻の下を伸ばした方ですよ」

「瑠璃、あとで覚えておきなさい」

徹の後に隠れても無駄だぞ、瑠璃人。……それは後にして。

あの人が美浦という人なのか。確か病院で会った気がする。外見上は外国人だ。金髪で異色の瞳だった。ハーフなのだろう。

しかし一体何の関係が……？ その疑問は意外にも、徹の後ろが説明してくれた。

「虹にいは覚えていますか？ 陸奥実君が通り魔に遭った事件のこと」

覚えているも何も、自分はそれを切欠に動き出したようなものだ。

あの時はびつくりした。陸奥実君が死んでしまつかもしれない、と瑠璃人から唆されて……とこれは別の話だった。そういえばあの時のお仕置きはまだだった。

「その日を境に、美浦と陸奥実君は積極的に連絡を取り合っていたんです」

「そうなのかい？ ただ友達になっただけとか……」

「……そんな軽い話のわけないだろ！」

「あはは……」

今のは冗談にしてみても、不自然と言えば不自然だ。自分を世話してくれるただの看護師一人に、ましてやメールアドレスまで交換してまで友達になろうとするだろうか？ もっとも、陸奥実君がその方に興味を抱かない限りはないと思う。
瑠璃人は肩から顔を覗かせる。

「あの用心深い陸奥実君が情報を渡してまでコンタクトしたい理由があると思われます」

「……つまり……それが……」

「“手紙”でしょう」

なるほど。それなら納得はいく。だが、それには一つ問題がある。自分の代わりに徹が言ってくれた。

「じゃあ、お互いにどうやってそれを知ったんだ？ まさか出会っ

て早々、打ち明けあったわけじゃあるまいし……」

確かに。陸奥実君は親しい友人ですら自分から明かさない秘密主義者だ。他人に等しい美浦に話すとは考えにくい。彼女の方からならいいが、“はずれ”だと話が広がってしまうだけなので、後で目立った行動が取りづらくなる。つまり、互いに相手が“当たり前”だという確証がなければ、リスクが伴ってしまうのだ。

しかし、瑠璃人はそれを見越してか首を横に振った。

「……きつと、そんなことはどうでもいいんです」

「？ どういうことだ？」

反応したのは星の方だった。

「陸奥実君と美浦には“接点”がある。それだけを考えていけばいいと思います」

「……それってつまり……」

「すみません。そればかりは僕も解らないんです……、はい……」

瑠璃人もお手上げ状態だった。瑠璃人が全てというわけではないが、頼りの綱にも限界はあった。

ならば、話は簡単だ。

「……美浦を重要参考人として搜索だ」

「そうですね。机上の空論はあてになりませんから」

早速、棚にある家電に手を伸ばした。しかし、それを星がまた割ってきた。

「……無理だ」

「どうしてだい？」

星は深くため息をついた。もはや呆れ果てた様子だ。苛立ちを感じたのは言うまでもない。

「美浦はおそらく日本にいない」

「……？ どういう意味ですか？」

「意味はない。どこかのビーチでワインでも飲んでるだろう」

「……だから言ってるやろ！ ワイらには時間がないんや！」

「そうです！ 早く流さんを見つけないと……」

「なあ、お姉さん。オレらは今、新戸のおっさんに頼まれてるんだが……」

「え？ 新戸って……新戸刑事のこと？」

「……そうですけど」

「ほ、本当にいい！ わあああ！ すごい！ あとでメアド欲しいなあー！」

「……………持つてるけど」

「本当！ それくれたら、黙っててあげるわ！ 絶対よ！ 約束する！」

「わ、わかったよ……………。あげるから学校に戻ってくれ……………」

「わかったわあ！」

「はあ……………」

「……………」

「……………」

「……………むっちゃん、どこ行ったんやろ……………？」

「……………」

「コンビニでパンでも食ってんじゃねえか？」

「……………言われてみれば、お昼とっくに過ぎていますね」

「そっやっただあ……………」

「腹減ったぜ……………」

「食べてる暇はありませんよ」

「そりゃあわかってる。……あっ……、「コンビ」……」

「諦めい。ワイらには使命があるんやで」

「では……連絡してみます?」

「そやな。もう丸一日経つとるし……」

「では早速。……もしもし? おっさん?」

陸奥実君は今日死ぬ。誰かの手によって。手紙なんて所詮は紙切れだ。人がペンで書いた物に過ぎない。どんな想いで綴ったかは知ったことではないが、ろくな事ではない。

絶対に殺させない!

「虹にい、一刻も早く陸奥実君を捕まえないと……」

「わかってる! だが、連絡が取れないと思っていたら……」

虹にはリモコンでテレビをつけた。うちのテレビは少し旧型なので映りがあまりよくない。つけてから数秒でやっと見えてきた。これは……ニュース……。

……が四人、惨殺されていたのです。先生、これはどう受け取るでしょうか？

そうですね。おそらく犯人は、相当頭が切れますよ

どうしてですか？

四つの死体の位置をマーキングしますと……この通り、全て道の分岐点にあります。このことから、犯人は逃げながら犯行に及んだのではないのでしょうか。そして……

どこのテレビも同じような事をしている。事件がある毎に専門家を呼んで中身を検証していく。これがいいか悪いかは別として、個人的に好きではなかった。

しかし、そう思っているのは僕だけではない。
虹にいの方を見やると指が真っ白になるほど、握りしめていた。

「……殺されたんだ」

「えっ？」

「彼に……四人とも……」

「彼って……陸奥実君ですか？」

「……そうだ」

「……………」

陸奥実君の精神状態、状況、犯行を考慮すると、彼でない確証が

持てない。寧ろ彼である可能性の方が高いかもしれない。
虹にはその手で床を殴りつけた。

「もう彼を……信じきれない……！」

「！虹にい！」

虹にも暴走しかけてる……！

と思つた瞬間、前のめりに倒れ込んでしまった。いきなりすぎる
出来事に時が止まったように感じてしまう。まさか……失血死？

「こ、虹にい！」

「ああ、大事だよ瑠璃人君。後ろからプスツとやっただけだ。こ
いつ、二つの意味でヤバかつたからな」

「……今回だけ礼を言います」

「まあ、いいつてことさ。長い付き合いだしな。……星、このアホ
をベッドに丁寧に放り込んでくれ」

「わかつた」

とりあえず、二つの意味で助かつたわけだ。もつとも、医者が好き
勝手に注射するのはいかがと思うが。

それよりも直前の言葉の方が信じられなかった。あの虹にいが仕
事以外で人を信じないことがあるなんて……。ましてや……。

僕は隣の部屋に向かった。そこは虹にいの部屋だ。相変わらず
何も無いところで、あるといえば部屋を囲むように立ち並ぶ本棚、
それに収められている大量の小説しかない。

虹にいをベッドに下ろして俯せる。後からやってきた徹さんが服を捲くり上げると、白かった包帯が染み渡っていた。それを僕の隣で手慣れた手つきで交換していく。僕と星さんはそれを見詰めていた。

「…………無理しすぎると死にますよ…………虹にい」

見るのを止めて、虹にいの顔をこちらに向かせた。すっかりトレードマークになってしまった前髪の寝癖でじやれる。指に絡めたり結んだりした。最後に頬を堪能させてもらった。

「…………やはり、直に本人に聞くしかありませんね」

「だがどうする？ 居場所が特定できないぞ？」

「僕は陸奥実君なんかに負けませんよ。…………テストでは負けますが」

僅かに湿っていた…………。

白黒のモノと余程縁があるらしい。正直おしまいかと思った。

しかし、逃げることに何の意味があるのだろうか？ 俺は虹さんを突き刺し、あの四人を無惨な姿に変えてしまった(らしい)。それで捕まったら間違いなく重罪。下手をすれば死刑…………。

つまり、どちらにしても殺されてしまうわけだ。あるいは“手紙の宣告”はこれを示しているかもしれない。ただし、捕まった場合は免れる可能性はないわけではない。

ならばすぐにも自首すべきだ。ある意味警察が守ってくれているのだから。

「……………ふう」

しかし、その前にしなければならぬ事がある。それを完遂するまでは……………。

今はトイレの中だ。用もたしているが、もちろんその為だけではない。

「……………こんなに鉄臭い……………」

手に付いたモノを剥がれ落としていたのだ。一旦家に帰ろうかと思っただが、それはまずい。家宅捜査しているかもしれないし、血液検査が怖い。血はどんなに流しても、決定的な証拠となって残ってしまう。ならばあえて不定的なコンビニを選んだわけだ。たまたま見つけたというのもあるが。

「さて、ついでにこいつも洗うか」

“護身用”のこれは、トイレトペーパーに水を浸して擦り落とす。穢れた紙は小さくちぎって一気に流した。それだけでも輝きを取り戻した。

「……………よし、行くか」

念のため、手をポケットに入れて同じポーズを保つ。店員や客の目が怖い。今にでも叫んでしまいたい……………。そして店員の挨拶と共に出れた。不振がられることなく。

大通り。人で埋め尽くされている。別に満員電車のようなわけで

はない。ただ、そんな迫力があつた。過去の意識が抜けていない。そんな人だかりの真ん中を車たちが突つ切る。俺はそれに溶け込む。

「家には行けないだろうな……」

時間はまだある。半日以上残っている。その間に何としても真実を……、見つけないと！ おそらく、それはあそこにあるだろう。

「携帯も抜き取られている……いや、病院から脱走してきたのだからそこに……」

ここから病院はかなり遠い。最悪なことに財布も置いてきてしまっている。自力で行くしかない。

「……………慎重に」

たとえ面識がないからとはいえ、ほんの少しでも油断してはいけない。一瞬でも認識されれば俺の存在は強く、儚く消える。流れに身を任せればいい。

「一石二鳥だな……」

「……………ん……………？」

「やっと気付いたか」

「……………瑠璃は？」

「ああ、どこかに行ったぞ」

「！ 瑠璃……………！」

「止めとけ。まだ顔が冴えてない」

「で、でも！」

「たまには弟のことも信用しろよ。それとな、休むときには休んどけ。来たるべき時のためにな」

今思えば無理をし過ぎたかもしれない。脇腹の後ろを刺され、その翌日にはこうしているのだから。傷の具合を見ると、包帯が新しく付け替えられていた。ほんの少しだけアルコールの匂いがする。清潔にしないと膿むどころか腐ってしまう、ととばかりを喰らった。

体調はいま一つ。完全に治るまでには数週間は必要だろう。でも、現状ではその理由は通じない。

陸奥実君が犯人だとは思いたくもない。寧ろ被害者なのだ。なのになぜ……………？ 先ほどの“美浦”が関連しているのは間違いはない。

「……………徹」

「なんだ？」

「……………美浦は具体的にどういう方だ？」

「そうだな。誰からでも憧れの的だよ。老若男女親しまれている」

「……事件直前に何かあったかい？」

「……うーん……特には……」

瑠璃人の仮説に則ると、美浦と陸奥実君は個人的な親交はあった。それも複数回。多分“例の物”での話だろう。それ以外にも目的はあったらうけど。

そして星の証言。冗談かどうかはわからないにしても、本当に行方知らずになっっている。つまり、事件に関与していたから逃げ出した……と言える。しかし、それではあからさまに自分が犯人です、と言っているようなものだ。

じっくりこないどころか、かすってすらしてない気がする。

「あ、そういえば……」

「何か思い出した？」

「九月入ってから五日間くらい旅行してきたな」

「りよ、旅行？」

「ああ。彼女、旅行好きなんだ。度々仕事抜け出して行っていたよ」

旅行……？

「……よくクビにされないね……」

「病院側としてもあれほどの逸材は手放したくないようだ。太陽み
たいな人だからな」

いいなあ……。自分もそれをやってみたい。……じゃなくて五日間ほどの旅行。その間に計画を立てていたならば……？

「……どちらにせよ、今は陸奥実君をなんとかしないと……」

時間は十三時を回ろうとしていた。その時、携帯が鳴った。おそるおそる手に取ると、彼からだった。

「……はい？」

「おっさん！ 陸奥実が見つかんねっすよ！ そっちはどう！」

「こっちもだよ。それどころか瑠璃もどこか行ってしまっただね……」

前橋君たちも難航しているようだ。

「……もしもし？」

「！ その声は東條さんだね？」

「はい……」

いきなりだったので戸惑ってしまった。すると電話の奥からしゃっくりのような声がした。

「流さんがあなたを刺したのは本当ですか……？」

「……残念ながら本当だよ」

「では警察官四人を殺めてしまったのは流さんですか？」

「……………」

なぜ彼女が知っている…………？ まだ公にすらしていないはず…………！

「……………」

「新戸…………さん…………？ 違うって言うてくださいますよ…………。どうして否定してくれないんですか…………？」

「……………」

そういえばあの時もそうだった。自分が陸奥実君の身柄を確保した時も同じように…………。そして彼を最も心配しているのは瑠璃人でも自分でもない。東條さんなんだ。彼と会えたのは三人の中で東條さんだけ。現実を目の当たりにしたのは彼女だけなんだ…………。

「……………」

「新戸さん……………」

そんな時に突如、体に何か舞い降りた感覚に襲われた。それは脳天から一気に爪先に駆け抜ける。雷が直撃したようだった。

これが俗に言う“閃き”だった。

「東條さん……………」

「はっはい……………」

「今すぐ行ってほしいところがある!」

「そっ、それはどこですか……?」

「それは……」

「見えてきましたね……」

「ああ。……それにしても……」

「?」

「勝手に借りてよかったのか? この車……」

「いいんですよ。虹には普段使いませんから」

「じゃあどうやって出勤してるんだ?」

「部下にアツシーさせてるんですよ。……ああ、気をつけてください。傷付けると怒られます。虹にいが僕の次に溺愛してるものなんですからね」

「……なるほど。意外に可愛い一面もあるんだな」

「いえ、あなたには負けますよ」

「ありがとうございます」

「……」

「あれ？　どうかしましたか？」

「いや、別に」

星さんは車に鍵をかけた。意外に照れ屋だったようで、そそくさと先に歩いていった。僕は一旦“それ”を見上げた。

真っ白に大きく示される存在感はいつになく虚しい。とりあえずあるというだけになってしまった。数日前まであんなにたくさんいたのに。

その入り口から星さんは僕を呼んだ。周りを確認してそちらに向かう。

「何をしていた？　早く行くぞ」

「わかってますよ。少し黄昏ていたんです」

「お荷物は持ったのか？」

「はい。この通り」

荷物といってもそんな大袈裟な物ではない。レジ袋に何個か入っているだけだ。

「一体何する気だ？」

「お楽しみは取っついておいた方が楽しさが増しますよ」

「生憎、楽しもうと思えない年頃だから、そうはならない」

「虹にいをお姫様抱っこして、さり気なく遊んでたのにはですか？」

「……ふふふっ」

「……………」

「どうしたのですか？ 無口になって……………」

「……………やれやれ、お前に勝てる気がしない」

「口で負かすのは得意分野です……………」

と、小話はここまでにしよう。これ以上続くと星さんが泣いてしまつかもしれない。

もし彼がここにいれば、新たな勝負の幕開けだ。僕と陸奥実君、どちらが上なのか。おそらく、ここに居てほしいという願望は知恵比べがしたいのと同じなのかもしれない。

僕らは中に入っていった。

二十四戒目「終演・中」

「誰もいない……。どうなっている……」

病院の裏口から侵入した。鍵がなぜか掛かっていなかった。

俺は何回もここに来たことがあるが、こんなに静まり返っているのは初めてだ。薄暗い。奥の方で点々と一定距離に赤く光っている。道標を成していて頼りになりそうだ。ゆっくり歩き始めた。

「今にも出てきそうだな」

今更怖がってどうする。どうせ俺の“期限”は今日までじゃないか。恐怖とは生きたい願望だ。

ランプと手に触れる壁を頼りに道を進んでいく。確か、俺のいた部屋は0626号室だったな。

……この病院、呆れるほどに広い。同じ一階でもそれぞれから上がると違うところに行ってしまうのだ。しかも俺は裏口という未知の扉から来てしまった。迷子になるのはほぼ必然的だ。

いや、よく考えるんだ。裏口はよく非常口として兼用されることもある。つまり、入口から遠い位置にあるということだ。逆に言えば、すぐに二階へ上がれる位置にということだ。

「真っ直ぐ歩いていけば階段にありつけるはずだ」

決して走らずに歩いていくと、案の定、赤が階段を指し示すかのように設置されているところに着いた。

「ここから行けるはずだ」

多少の不安を押し殺しつつ上っていく。二階はすぐに着いてしま
うが、考えなければ。移動中にもあらゆる思考を張り巡らさないと
……。

美浦の情報が欲しい。病院の看護師なのだからリストくらいはあ
るだろう。出会った当初はさほど気にしなかったのだが、今になっ
て疑問が浮き彫りになった。

どうして美浦は俺の前に姿を現したのか。俺を刺したのは紛れも
無く彼女だ。彼女自身も特徴を見られないように真つ黒のサングラ
スやマスクをしていた。それは対象が俺だからだと思っていた。…
…違う。

「ふう」

唯一一緒にいた真乃たちに覺られないようにするためだったのだ。

「……………くそっ！」

つまり、あれは俺を殺すためではない。俺と接触する機会を設け
るためにやったのだ。しかも殺してしまっても損にはならない。“
解放”への道を一步進むのだから。……………しかし、そうすると疑問が
また出る。それは……………。

……………

「……………はっ」

いけない。

「……」

考えに耽ってどこにいるかわからなくなった。動きは最小限に……
…と思っただら、いつの間にか達成してしまっていた。

「……無意識ってすごいんだな……」

俺はドアノブに手を掛け、捻って中に入った。

……

「……………」

思わず目を疑った。

カーテンで光の通り道を覆っている。まばゆく、鮮やかでとても直視できなかった。洞穴から抜け出てきたようだった。同じ空間なのにこんなに対照的に違うなんて……。

しかし、どことなく懐かしかった。

「なんて眩しいんだろう……」

……とそんなことよりも。

「……………ない」

ここに来た目的を探す。しかし、一足遅かったのか、どこにも見当たらなかった。まあ、携帯は暗証番号かけてあるし、財布も一、二万くらいとポイントカードくらいだけだ。

「……………」

……被害は甚大だ。通報したいところだが、自分が牢屋に放り込まれてしまう。

「……………ならば……………」

今度は痕跡を調べてみよう。少なくとも何かがあるに違いない。俺はありとあらゆる、そして考えられるだけの巧妙な場所も全て探した。ベッドの下や隙間、機具類などだ。できれば、俺の意識が無かった時のちょっとした手掛かりでもあれば……………。

「……………ん？」

それらしき何かがあった。

「……………」

客用に重ねて用意してあった円椅子の隙間だ。ほんの少しだけ白い角が見える。盲点だった。椅子を持ち上げてみる。……………。

「……………これは……………」

脳に刻み込まれたそれが滲み出るように中を満たしていく。一杯になった時、記憶として嫌でも思い出されるのだ。

「……………一体誰のだ……………？」

ほの暗い。昨日の一緒に逃げた時より不気味さが増し、より足を前に出すのを躊躇わせる。受付のところの明かりが消えかかっていて、尚一層際立たせる。ちょうど、スロープのある位置にある赤いランプが僅かに照らしてくれるだけ。懐中電灯を使ってもよかつたが、人がいないこの空間では明らかに不似合いだ。相手が誰もいないと思っているうちがチャンスなのだ。

……しかし、その前に気になることがいくつもある。

「……ここは一体何が起こったんでしょうか……？ バミューダトライアングルみたいです」

「俺にもわからない」

突如として消えてしまった病院内の人たち。医療関係者ならまだしも、患者までも謎の失踪を遂げている。痕跡一つ残さずに。

「……神隠しですかね」

「それも特大級のな」

「……」

そしてもう一つ。

「……星さん。あなた、何か知ってませんか？ なんとなく気にかかるとは思いますが……」

「……」

星さんは美浦と関係性があるのかどうかだ。美浦のことを多少なりとも知っているから、少なくともないことはないだろう。

皮肉にも彼は僕を助けてくれた。もし、僕が彼について何か気付いたとしても、先手を打たれている。もっとも、恩で返すかどうかは僕の勝手だが。

「……俺にだって、上の連中が何を考えているかわからないんだ。ただの“コマ”だ。それに……」

「それに？」

「助けてあげた恩人に対して言うことか？」

「……無愛想なクセに……」

それ以上は言えなかった。

「それでどうするんだ？」

「……そうですね。とりあえず、裏口ありましたので確認しましよ
う」

「？ 鼠はどうするんだ？」

「負傷する可能性があるんで、二階以上から飛び降りることはできません。つまり、こちらが鼠の存在を知れば、いくらでも対処ができるということです」

「なるほど」

しかし、問題はいなかった時の場合だ。その時はどうしようもない。論理的に説いたつもりでも中身は運だけの問題。僕はいる方に全てを賭けたのだ。

僕は裏口へ向かった。その間は一切の沈黙。行く前に耳を澄ましておくようお願いしたからだ。しかし、自分と隣の足音しか聞こえなかった。

集中しているうちに目的地に着いた。途中で枝分かれがあり、二階へ続く階段だったが、目的を優先させた。

「……」

行き止まりに穴をあけたようなところだ。その穴がドアのわけだが。平面を二つに分ける赤いのが目の前にいる。

「ガラスは割れてませんね……」

「となると、開いてたか開けたかだ」

星さんが一旦外に出た瞬間、ガラスが一斉に割れる音が響いた。甲高くてうるさい。しかも尋常じゃないほど。慌てて戻ってきた。

「どうしたんです？」

「ビール箱を落としてしまった」

「……」

かなり抜けてる……。というよりも、置く方も置く方だが。

「それだけじゃない。鍵穴を調べてきたんだ。……どうやら開いてたようだ」

「……空き巣の経験からしてですか？」

「……………」

「じゃ、じゃあ本格的に捜しますか」

「……そうだな。一旦受付に戻るぞ」

「あつ、ちよつといいですか……。……よし、行きますか」

では気を取り直して考えよう。

こんな大きな所で出会う確率はおそらく、一桁以下だろう。だから逆にこちらから訴えかける必要がある。だが、しすぎると逃げられてしまう。その為にも今のあれにちよつとした事を施したのだ。

……それはいいとして。

つまり、ターゲットを逃がしてはいけない上に、捕まえるという作業を今日中に手早く行わなければならぬ。難易度は高い。しかもこちらの存在が気付かれていなければいるほど困難だ。

「……………どうする……………？」

受付に戻った。ここからが勝負所だ。

「……………」

まずい。……非常にまずい。遂に誰か来たようだ。

「……………」

もし、美浦のアジトがここならば、来た人間は当然掃除の為としか思えない。複数人は確実にいる。そいつらは任務遂行の為なら、手段は選びはしないだろう。そんな連中から逃れることができるのだろうか？

「……相手はプロだろうな。以前みたくはできない」

あたかも自分がやったように呟く。幸か不幸か、当時の記憶はなかった。

手に持っているのは安っぽいナイフ。尖っていないく、柄はプラスチックで拵えてある。

「……………やるしかない……………か……………。真実を確かめるためにも……………」

この瞬間から俺は殺人鬼に戻ったのだ。無実の殺人鬼に……………。

「時間はない。確実に仕留めるんだ……………」

見つけたやつをポケットに無造作に突っ込む。そして、右手には唯一の武器を握り締める。不思議と手に馴染んでいて、身体の一部と化したような感触だった。

ドアを目の前にして、ゆっくりと引いた。

「……………」

頭だけ廊下に出して左右を確認する。中から差し込まれた光がある程度助けてくれたものの、奥の方は暗くてよくわからない。

「……………！」

ふと気付いた。急いで退く。

相手は先程の通り、俺を完全に消すために来た。ならば準備は怠らないはずだ。暗いところでも見えるように暗視スコープの類を持っているかもしれない。向こうが見えるのにこちらが見えないという非常に不利な状況下にいることになる。

「暫くはここにいた方が……………。……………？」

そういえば、引っ掛かったんだよね……………。

「……………！！」

外に仕掛けたモノは外からでも内からでも発動するように細工をしておいた。ばれないようにしたもの、病院にあるのは明らかに不自然だ。だが、割れた音は確かにした。あんなお粗末な畏に、しかもプロが果たして引っ掛かるだろうか。考えられるのは二つ。ただの間抜けかそれぐらいの別の連中かだ。

「……………」

もっ少しここで考えてみよう。

間抜けはいいとして、仮に別の連中だったら誰なのか。どちらに

しても俺を追っていることに代わりはあるまい。美浦以外で俺を追っている連中……。

「……まさか……」

警察？ いや、そちらの方が自然だ。ということとはつまり……。

「虹さんたちか……」

美浦か虹さんたちか。どちらにしても状況は最悪だ。……いや、できれば虹さんたちの方がまだ……いい。

「よし、道はまだある……！」

希望とは裏腹に、結末がどうなるのか知りたい自分がいた。

「……」

「……」

あらゆる思考を張り巡らし、僕の中の全てに問いかける。その中で唯一のものは……。

「……星さん」

「……なんだ？」

「裏口から0626号室へ向かうには、最短距離でどう行けますか？」

「行く途中にあったあれを上って暫く進めば着ける。あと反対側の階段もあるがな」

星さんは受付にあったペンと紙で地図を示してくれた。長方形のような形から枝分かれしていて、短い横棒の midpoint に階段がある。外れに裏口、他にも三つくらいありそうだ。

「他に出入口は三つあるんですね？」

「ああ。あそこを含めてな」

星さんは僕たちが入ってきた入口を指差した。

「……それを聞いてどうする？」

「……そうですね……」

僕は袋からぐるぐる巻きにされた太い針金と、白い布で縛り繋がった紐を渡した。

「家から持ってきました。それを使って残りの二つを留めて下さい」

「……よく持って来れたな。それと、これは？」

「ここに戻る間にベッドのシーツやらをもらいました。留める間にそれは垂らしてきてください。途中で無くなったら補充もしてください」

さいね」

「いつの間に……。俺は奴隷か」

「……早くして下さいよ！ 僕もしなきゃいけないことがあるんですっ！」

野良犬を追い払うように行かせた。さて、僕も用意しようか……。

……

暫くして、星さんが帰ってきた。僕は僕なりにいろいろして大変だった。だけど、これで巧くいくかどうか……。

「おい」

「……どうかしましたか？」

「とりあえず一周させたが、やけに臭いぞ」

「まあ……気にしない方がいいですよ」

やけに臭いを気にしているのが、なんだか幼く見える。

「さて星さん、ライター持ってますか？ 持っていたら貸して下さい」

「！」

ちょっと渋っていたが、かなり高そうなジッポを貸してくれた。薄い黄金色に光るそれに刻まれた獅子が印象的だ。お気に入りだよ。うだ。

そして今度は僕が大人らしさを見せる番。作戦開始だ。僕らは受付の奥の方の部屋で待機した。

「念のためにこれを渡します」

星さんに渡したものは、ちょっとしたコネでもらったガスマスクだ。僕の分もしっかりある。

「よつと！」

布の先っぽを取る。蓋を勢いよく開けると同時に、ぼんやりと橙が灯った。これをする则自分の命に関わるかもしれない。それでもしなければ……。

意を決して橙を近付けた。ちりちりと焼けていき、乗り移った。着火。急いで遠くに投げる。導火線とも言うべき白い布は表現通りに道に沿って燃え渡った。黒い煙を発し始めていた。

炎は導火線を伝ってどこかへ向かう。

「これはまさか……！」

「あなたにここを一周させたのはこの為ですよ」

一階は長方形の単純な造りになっている。非常口やらは離れているが、結局はそれの枝分かれに過ぎない。つまり、縛りに行けばここに戻ってこれるのだ。これが何を意味しているかという……。

「まさしく、“炙り出し”だな」

「僕の頭の中ではこれしかありませんでした。……そして」

僕はひたすら耳を澄ませる。もし、彼が僕の考え通りだったら……。

「……………ふう」

いつにもなく緊張する。どこから襲われてもおかしくないのだ。だから神経を研ぎ澄ましておく必要がある。普段こういうことはしないから余計に疲れてしまうのだ。それに美浦に関しての情報も探さなくてはいけない。まるでスパイゲームをしているようだ。

歩いていくと、病室とは少し違う部屋が迎えてくれた。かなり厳重そうだ。

「……………ありそうだ……………」

金庫のように分厚いドアだ。そのくせにダイアルでなく、一般の鍵になっている。しかもノブもちゃんとある。一体なんの為なんだかわからない。

「開いてる……………なんてことはないよな……………」

試しに捻ってみると……………。

「……………」

何の抵抗もなく捻れた。

「！なんだこれ……！」

しかし、押せない。確かに開いているはずなのだが……。

「くうっ！」

全力で押しやってつと体を横にしてぎりぎり入れるくらいになった。汗出てきた……。

確かに、全部金属でできていれば重いに決まっている。でも尋常ではない……。ある意味、防犯である。

やっとの思いで入ってみると、案の定だった。

「段ボールだらけ……」

整理されているとは思えない杜撰な部屋だ。ただ重ねてあるだけではないか。

この部屋は病室と同じくらいの部屋だ。窓はなく、さらに薄暗い。電気を付けても逆に浮き彫りに見えるくらい。段ボールの塊は左右二カ所に分けられていて、左側が圧倒的に多い。

「右から片付けよう」

ということとで右から手を伸ばしていった。

少ないといっても、二十以上はくだらない。一番上から見ている。

「さて……、……………?」

初っ端の一枚目の題目はこう書いてある。

「“N”宛」

……“N”？ 続きを読んでもみる。

「“N”へ」

もしこれをあなたが見ているのなら、私はこの世界にいないでしょう。でも悲しまないでください。あなたは物事を純粹に受け止め、諦めない力を持っています。何回でも挑戦して目醒めさせてください。あなたは不可を可にできるのです。

しかし、これを見つけた時点では間に合わないかと思えます。私がないのですから。次の時はどうか私の代わりに、あるいは一緒に手伝ってください。」

「……………」

これは察するに、筆者が“N”という人物に送った遺書みたいだ。一見、“N”にメッセージを綴ったようだが、内容が深い。

筆者は自分の死を予期して書いた。つまり、命を取られるのに十分に値する人物だ。そして彼（彼女）の信用できる人間、“N”。イニシャルならば普通は“R・M”のように二つのアルファベットを使う。もしかしたら“N”は愛称かもしれないし、暗号かもしれない。

「他にも調べてみよう。“N”がわかるかも……………ん？」

二枚目を取ろうとする前に目が無性に痒い。周りが少し煙たく、

息苦しい。急いで床に伏せた。

「なんだ？ これ……」

煙たかったのがだんだんと黒みを含んでいく。そして何よりも焦げ臭かった。ま、まさか……。

「か、火事か！」

まさか奴らは俺を病院と共に焼き尽くす気なのか。あるいは窒息死とかで……？ なんて大胆なんだ！

「おっ落ち着け！ ……落ち着け……」

こういつ時こそ落ち着かなければならない。

相手が俺ごと病院を焼き尽くすというのが魂胆なら、まだ先はある。知られてはまずい物が凝縮しているに違いない。そして、ここにあるのが値するだろう。つまり、これらを誰かに渡せれば……。しかし、時間は長くない。酸素が足りなくなるかもしれない。

「……………よし」

俺はさらに漁ることにした。できるだけ迅速に。

「おかしいですね」

「どうした？」

「……まさか……！」

僕の考え通りなら、彼は急いで窓から飛び降りるかと思ったのだが……。彼はまだ中にいるつもりなのか？ だとしたら……まずい。目の前は橙に染まっている。

「彼は命を賭してまで僕たちをおびき寄せている可能性があります」

「……このままだと本当に大火事になりかねないぞ」

「それに関しては大丈夫です」

問題なのは彼の生存と罠に態と嵌まるタイミングだ。今、考えているのも惜しいくらいだ。下手をすれば、樞で久しぶりの対面だ。そして、彼は準備が調っている。いくらでも対処できる体制にあるのだ。

「……………」

「早くしないとお互いに危ない」

全くもっての正論だ。

「ですが……………」

「炎は二階まで燃え上がっているはずだ。だからあいつは逃げられないだろう？ 袋の鼠じゃないか！ そうするのがお前の策略じゃないのか！」

「……………」

実際、危険なのは彼だけではない。中に居続ける僕らもなのだ。本当だったら星さんは外で待たせたかった。僕が身を差し出してまで解決しなきゃいけない事件だったから……………。

「……………すみませんね」

「……………？何がだ？」

「あなたにまで危害を加えてしまっ……………」

「……………それはあいつを捕まえてからにするんだな」

「違いますよ。あなたが死ぬ前に言わないと採算合いませんから」

「……………早くしろ」

「わかりました」

僕は背後に設置されている四角い箱に手を伸ばす。こここの予備電源だ。随分と熱が籠っている。僕は黒い出っ張りを上にあげた。かなり不安だ。もし作動しなかったら……………。

……………バチンッ……………

しかし、あっさりと予想を裏切ってくれた。

「……なるほどな」

「少ししたらすぐ行きますよ！」

「……………水？」

突如として部屋を包み込む水滴たち。天井にいくつか付いている金属から吹き出していた。瞬く間に全身が重くなった。ほんの一瞬だけあの時の湿りが思い浮かぶ。しかし、ほどなくして沈黙していった。

その前に大変なことになっている。

「濡れちゃまずい……………！」

部屋に積まれた紙たちが水を吸ってしまう！

しかし、全然手遅れだった。どうやら、段ボールは防水加工されていないなく、ふやけてしまっていた。もちろん中身も駄目だった。生き残りは……………。

「持って帰りたいが、諦めよう」

目の前にいたら怒鳴り付けてやりたい。いてほしくないが。

そんなことよりも、この行為を理解できない。どちらも消却したいのなら、ほっとけばいいだけだ。なのに強行手段を台なしにさせた……………。

考えなければならぬのは、俺を殺すのが目的なのか否かなのだ。つまり、直接手を下すか捕まえるかのどちらかということ。一体何の理由でかはわからないが、どちらにも言えることが二つある。

「……行こう」

ここに留まっただけでも時間の無駄だということ。

俺は中腰になって部屋から出た。上は真っ黒になっていて見える見えないの問題ではない。かといって中腰になってみても、視界はあまりよくなかった。下手したら……。

そしてもう一つ。

「……………ふう」

直接出会うことだ。

相手は何らかの理由で直接殺しに来る。俺との接触は避けられな
いだろう。だから逆に利用して、迎え撃ってやる。これで。

しかし、俺の元来の目的が違うことにやっと気付いた。それは美
浦の情報だ。あくまでもそれが知りたいわけであって、敵を殲滅す
るのは違う。

「……………ひとまず、様子見つてことにするか」

しかし、修正はきかなかつた。

俺は右手で逆に持って慎重に歩いていった。

「行きますよ！ マスクはしっかり着けてください！」

「くそっ！ ほとんど真っ暗だ！」

正しく恵みの雨。熱を吸い取ってくれる。

防火用のスプリンクラーを作動させたのだ。すぐに動かしてしま
うとただのボヤで終わってしまう。だから、ある程度炎を成長させ
る必要があったのだ。身を削ってまでも。そしてもう一つの狙いは
……。

「下の明かりを辿ってください！」

「わかった！」

このためだ。暗闇に乗じて一気に接近できるのだ。もっとも、彼
はどこにいるかは、もう予測できないが。

頭の中に地図を描きながら走っていくと、明かりが一つ分間を空
けていた。曲がり角だった。つまりは二階へ行けるはず。案の定、
明かりは上に向かっていった。僕は壁伝いに二段飛ばしで上り切っ
た。

明かりは三つに分かれていた。

「……………」

「もたもたする暇はない！ 俺は右に行くっ！」

「わかりました！ 真ん中行きますー！」

僕らは二手に別れた。星さんの背中はあるという間に黒に混じっ

ていった。

恵みの雨が僕の頭を叩き、顔を伝って中に染み込んでいく。

「……………」

僕はゆっくり歩くことにした。

「……………」

靴も思い切り吸い込んでいる。みずみずしさが籠った音がシャワーの音と調和して、あの日のことを思い出させる。もっとも、状況がまるで違うが。

僕が彼を変えてみせる。

「絶対に墮とさせやしませんよ……………」

……………ザクッ……………

「……………」

……………

……………

痛い。

「う……………」

……

……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………ピチャ……………

「うわあああああああああああつっ！」

「いつ痛い！ 何が起こった！ 刺された！ どこを……………誰に……………！」

「……………あつ……………」

「……………」

まさか……………陸奥実君……………？

「お前……………まさか……………」

震えていた。

「瑠璃人か……………？」

「……………」

「瑠璃人……………！」

僕の足は勝手に力を失った。体は完全に倒れず、誰かに支えられている。

虹にもこんな気持ちだったのだろうか……。

「何でお前がここに……」

「……………決まってるっじゃないですか……………」

あなたを捜しに来たんですよ……………。

傷みは徐々に体中に染み渡り、やがて頭が落ち着いていく。刺された所から水に溶け込んでいくのを感じる。僕は仰向けにされた。なんて一瞬なんだろう。たった一回だけ刺されるだけでこんなに痛いし、全て見えなくなってくる。

久しぶりの再会が本当に棺になるのか……………？
皮肉だ。

「大人しく……………しろよ……………！ 血……………止めるから……………」

「……………無理ですよ……………。だってこんなに出てるじゃないですか……………」

僕は死ぬのか……………。その間に一つだけ思い出したことがある。

“最も親しい友人を殺せば、所有者は救われる”……………。陸奥実君は遂に救われることになるんだ。僕を生贄にして。

でも、嬉しい。逆に言えば、陸奥実君は僕を“親友”として認めてくれたんだ。だから僕を殺してくれた……………。なんだか気持ち悪い考えだ。これじゃそういう人みたいじゃないか。

……………。彼の気持ちはどうなのかはわからないが、僕は勝手に思い込んで行くことにする。

「……陸奥実君」

「……くそ！ 水のせいで血が止まらない！」

「あはは……」

策士策に溺れる。

「陸奥実君……」

「何だよ……！ 喋るな……」

「……あの……」

その前に陸奥実君に一つ聞きたい……。とても言いにくいことだけど……。

400

「……僕のことを“親友”と思ってるのですか……？」

「……」

陸奥実君は押し黙ってしまった。

でもそれは僅かだった。

「当然だろ……」

照れ臭そうに呟いた。……ありがとう。

「これで僕も少しだけ非情になれます……」

「……………?」

ガンッ!

「……………来ましたね」

「大事か? 怪我は?」

「えっと、頭がくらくらします……………」

「……………救急車呼ぶか?」

「徹さんがいるから大事に至らないと思います」

「……………俺は結局、何もできなかつたな」

「そんなことはありません! 僕を助けてくれたじゃないですか」

「……………」

「これで貸しが二つになりましたね」

「貸しを作った覚えはない」

「なんで僕の周りには照れ屋さんばかりなのでしょう?……………」

「……とりあえず、一件落着だな」

「と言いたいところなのですが、これからが勝負ですよ」

二十四戒目「終演・下」

「……もしもし？」

「瑠璃！ 一体どこに行ってたんだ！ 今すぐ帰って……」

「たった今、陸奥実君を捕まえました」

「……？ ごめん、電波が悪いようだ。もう一回言ってくれ」

「……陸奥実君を捕獲しましたっ！」

……

……

「……」

「……」

「……本当かい！」

「さっきから言ってるじゃないですか……」

「ばっ場所は！ 今どこだ！」

「病院前です。それと、着替えを三人分持ってきて下さい……」

「わかった！ 徹、テレ……めて早く……」

……………プツ

「……これであとは待つだけですな、陸奥実君」

「……………」

車を降りると、電話の通りに“三人”がいた。そのうちの二人は全身水浸しでしかも真っ黒。一体この中で何をしたのかわからない。着替えの意味がよくわかった。

しかも瑠璃人の右腕は赤みを帯びていた。すぐに車で待たせている徹が呼び出してくれた。

そして星の隣には……。

「……………」

「……陸奥実……君」

「……………」

彼が座り込んでいた。抵抗する様子は全くない。

その代わりに何にも感じられない無表情な目で睨んでくる。しかし、矛先は自分ではない。瑠璃人でも誰でもない誰かにしていた。だが、僅かに以前の彼のような雰囲気は戻っていた。そう、それは正しく、“始め”に戻りつつあるのだった。

星は何も言わないまま、瑠璃人のところへ向かった。実質、この場に二人しかいない。

自分は最初の言葉が見つからなかった。いや、見つけれなかった。当然彼を憎んでいるわけではない。ただ、彼の眼が云っている叫びにどう応えればいいのかわからなかった。

「……虹さん」

「……なんだい？」

彼の方からだった。

「……すみません……でした」

「？」

「虹さんにいつも増して迷惑をかけてしまいました……。遂には同僚まで……」

「……」

瞳を伏せる。先程の威圧は嘘のように消滅していた。謝罪……だった。

通りに植えられた並木がざわざわと葉を散らせながら騒ぎ出す。

「……いいよ……。もう過ぎたことだしね……」

「……」

四つのことを見下げているわけではない。できれば、殴り飛ばしても返してほしい。でもそれができないのは誰だっかわかっている。彼はたった独りでもがき苦しみ、たった独りでここまで来た。九月十五日、午後四時五十二分まで。だから自分は責めない。この身を裂かれようとも。そして念いは背中に積もっている。

自分は彼に歩み寄った。彼は立ち上がる。拒絶はなかった。

「君がこんなになっちゃったのは自分の責任だ」

「……なぜですか？」

「……覚えていないと思うけど、君は一回精神を壊されたんだ」

「……！」

「それはきつと美浦が君に何かをしたんだと思う」

それなのに、今こうして平然と話ができる陸奥実君はすごい。事実を真つ正面から受け止めて。

「……」

「もっと早く助け出せれば、こんなことにはならなかったはずだっ
たんだ」

「……」

全ての引き金は自分。瑠璃人がどうのこうのじゃない。彼に注意を向けていれば、もっと考えて……。

「虹さん」

「……」

「違いますよ。それこそあなたのせいじゃありません……」

「……！」

「……美浦さんのせいでもないし、誰のせいでもないです」

陸奥実君はズボンのポケットから何かを取り出した。二つあった。両方とも見覚えがあるどころではなかった。片方を自分に手渡してくれた。軽い。湿り気がある。

「それは中で見つけた手紙です。いろいろあって二枚しかありません」

「これは陸奥実君の……」

彼は首を横に振った。

自分は頷いて、なくさないように胸ポケットに折り畳んで入れた。

「それで美浦さんを助けてください」

「！ なんだって！」

「……助けてください」

自分をめちやくちやにした相手を助けてほしい……。彼は確かにそう伝えたのだ。どう考えたって理解できるわけがない。

しかし、裏腹に陸奥実君の顔には笑顔が浮かんでいた。悲しみ云々なんてない無垢な笑顔だった。

「全ては“手紙”のせいです。美浦さんも俺と同じように苦しんでいます。その恐怖から自分を見失っているだけなんです」

「自分を傷つけた犯人でも庇うつもりなのかい！」

「……………」

怒りに似た感情が沸き上がる。仕方がないのはわかっている。でも、言わずにはいられなかった。

陸奥実君は片方を突き付けた。

「！……………陸奥実君……………！」

震えていない。それほどに決意は固いのかもしれない。

「どうせ俺には先はない。だから同じ境遇に立たされている人間を救いたいんだ！」

「……………！」

「……………この意味、わかりますよね……………虹さん……………」

「……………」

“手紙”の呪縛。陸奥実君や美浦を巻き込んだ正体不明の代物。彼の願いはその謎を暴いて彼女の命を救うこと。しかし、彼女は犯人で行方不明中。海外逃亡も有り得る。仮に見つけられたとしても極刑になるかもしれない。明らかに分は悪かった。

「……………」

「……………わかった」

「！」

「……………美浦を助けるよ……………」

でも、それが彼の本望なら……………。なにより、彼らしかった。

「……………ありがとうございます。これで思い残すことはないです」

「……………えっ……………？」

彼は自分に向けると、両手で持つ。それが何を意味しているのかを理解するのに、一瞬出遅れた。

「陸奥実君っ！ やめろっ！」

「……………さようなら」

角度をつけて思い切り振り下ろす。そして……………。

……

「止めておきなさい……」

「……」

俺の手は寸前で止まった。いや、止められた。

「……………」

「何を考えてるんですか！」

後ろから聞こえた。滅多にない怒号だった。

「どうしていつも一人で思い悩むんですか！」

「……………」

「……………」

察しはついている。最も会いたくなかった人だった。振り返った。

「何か言ってくださいよ！ 流さん！」

「……………」

づかづかと近寄っては胸倉を掴んでくる。相変わらずらしかった。彼女の瞳は少し揺らいでいて、ちよつとでも擦れば溢れかえってしまいそうだ。それを怒りやらなんやらでなんとか抑えている状態だった。

栗色の髪が激しく踊る。

「……………私たちがどんなに心配してたか……………」

「……………」

口は簡単に言葉を出させてくれない。俺が一言でも発したら、精一杯抑えているのが一気に崩れるだろう。そして、目の前の女の子がそれによって穢れるかと思うと、嫌で嫌でしょうがなかった。俺と真乃の間にはもう境界線が敷かれていた。

「……………流さん、あなたの声を聞かせて……………」

「……………」

俺のはやけに頑固だった。

「流さん……………」

真乃の手がぱつと離れた。と思った瞬間に……………、

「……………!」

「……………」

抱きしめられた。頭の中のもやもやが一瞬にして晴れたような気がした。難しいことを振り回していたのが馬鹿らしく思える。

「……………ま……………の」

「……………やっとつ、聞けましたね……………。りゅっつさんの声……………つく……………」

「……………真乃……………」

直に触れた。まるで我が子との再会を果たすように頬を擦り合い、吐息に当たり、彼女の嗚咽に近い囁きを一方的に聞かせる。信じられないほど温かかった。少しだけ……………触れていたい……………。

それが濡れてきたとき、初めて本当に“真乃”なんだと気付けた。“真乃”がすぐ側にいてくれたんだ……………。

……………辛かったですよね……………？

「……………!」

こんなにぼろぼろになって、酷いことされて……………

「真乃……………」

救いを求めているのは寧ろ自分なのに、周り全員が敵で……！

「……」

私は会いたかった……救いの手を差し延べたかった……

何だろう？ この頭の中に直接入り込む言葉の羅列は？ 耳から入ってきているわけではない。かといって眼からでもない。人間の感覚とは違う何か、頭の中で文字と化して理解されていく。ごく自然と、当たり前のように。

少し青い表現だが、真乃が直接俺に語りかけてくれたのかもしれない。その……何かで。

「……悪かったな。お前にこんな苦勞かけて……」

「……まったくです……。女の子を泣かせるなんて最低ですよ……」

「……そうだな」

真乃の声に漸く力が戻る。でも、まだ濡れていた。そんな真乃をそっと引き離す。そろそろ……。

「真乃……。俺、行かなきゃ……」

「……！」

罪悪にはその分の然るべき裁断が待っている。これらは常に表裏

一体だ。俺は大罪を犯した。だからそれに等しい罪を償わなければならぬ……。しかし、真乃はまた抱き着いてきた。俺を見上げて拒否の意志を連呼する。この時ほど苦しいことは今までなかった。それでも俺は真乃を諭す。納得したかを確かめて、ゆっくり引きはがした。反抗はなかった。これで、俺は“期限”を迎えることになるのだろう。

その時、虹さんが手錠を持ってやってきた。その傍らに瑠璃人もいる。

「よし、後は自分に任せてくれ。瑠璃と東條さんには部下が送ってくれる」

「！ 僕もですか！」

「そうだよ。大人しくしてなさい」

「……個人的にはありがたいです……」

そして、虹さんは銀色を俺に見せ付けて、はめた。

「……ごめん。本当はしたくないんだ……」

「構いません。……殺人犯ですから」

俺と星とかいう男は虹さんの車に乗り込んだ。この人は確か瑠璃人と一緒にいた。なのになぜ……？ なんにせよ、反したには違いない。

二人が外から見詰めている。はっきりと違う空間だ。一枚しか隔てていないのに……。我ながら不思議だ。きつと、テレビとかの犯罪者もこんな気持ちなのだろう。まあ、まさか体験できようとは思

いもしなかったが。

やがて、エンジンがかかる。なんだか口の中に苦さが広まっていた。そして間もなく発進していった……。

その時だった。

「待って下さい！」

「！」

虹さんが慌ててブレーキを踏みながらハンドルを鋭く切る。金切り声を上げながら擦れていき、やがて止まった。後少して虹さんも刑務所行きだった。

それよりも、目の前に釘付けにされた。

「待って下さい！」

「真乃！」

真乃だった。両手を一杯に広げ、車を無理矢理止めたのだ。なんて無茶な……！

真乃は運転席の窓を開けさせた。

「行かせないで下さい！」

「……真乃……」

正直な話、哀しかった。俺の今までの行動と独りで暴走していたのが混ざり合って、出来たものが後悔だった。これを考えて動いてきたのに、それ自体が後悔に繋がっていたのだ。つまり、最初から

……。こんな思考を張り巡らせたって無駄だ。
虹さんは真乃の肩に触れた。

「……………。東條さんの気持ちは痛いほどわかるよ。でも、ダメなんだ……………」

「……………どうしてですか……………？」

「……………」

「……………流さんは被害者なんですよ！ 流さんをめっちゃめっちゃにした犯人をほったらかしにして、被害者の流さんを逮捕するのは不自然じゃないですかっ！」

「……………」

真乃、いいんだ……………。たとえ被害者だろうとなんだろうと、俺が殺人を犯したのは代わりない。揺るぎない事実なんだ。わかってくれ、真乃……………。

「違う。彼は警察官四人を猟奇的に殺害した極悪犯だ。そこに自然も理不尽も何も無い……………何も無いんだ……………」

虹さんだって好きでやってるわけじゃない（そうなのかはわからないが）。肩にのしかかったモノが、自分の中にある正義を貫き通してるだけだ。けれど、それは無視できない。無視したら成就されないし、背くことになる。

「……………真乃、わかって……………」

「ちよつて待てやあああああつっ！」

「！」

この声は……まさか……！

「黙ってきいてりゃ、理不尽がどうのこうのだった？」

「むつちゃん！ 久しぶりやなあ！」

「棗さん……！ ……とおちゃん！」

後ろを見ると、懐かしい顔があった。それだけでもう……。いや、必死で堪える。

二人は車の両側に回り込んで、虹さんを挟み撃ちにする。棗さんは真乃の方へ。とおちゃんは反対側からドアを開けて睨み付ける。虹さんはさほど驚かずに冷静な態度をとっていた。面識はあるようだ。

これから何をするつもりなんだろう？ 隣に座る星さんも眺めていた。

「おっさん」

「な、なんだい……？」

おっさん……？

「陸奥実是人殺しなんてできる度胸なんかねえっすよ。こいつはアリすら踏めないんすよ」

「それは自分だって分かってるよ」

「……………」

なんだか複雑な心境だ。

「だから、むっちゃんなんかシカトして、誘拐犯見つける方がええと思うんよ!」

「今、捜している最中だ」

なんか馬鹿にされてるようで気持ち良くない……。

「君たちがどんなに訴えても無理だ。頼むから道を空けてくれ……」

「いいよ、三人とも。ありがとう。その気持ちだけですごく嬉しいよ……」

「いや、よくありません」

「……………」

また別の声が今度は車内から聞こえた。これは一人しかいない。思った通りそいつは助手席に座っていた。いつの間に……。珍しくご機嫌ななめのような。

「質問があります」

「……な、なに？」

「一つ、陸奥実君を捕まえたのは誰でしょう？」

「……！」

「二つ、僕を疑ったのは誰でしょう？」

「……うっ……」

「三つ、刑事としてあるまじき行為をしたのは誰でしょう？」

「……」

……卑怯だ。こいつ、人の弱みを握っている。これは完全に恐喝に値する。瑠璃人も現行犯逮捕できる。しかし、そんなことをしたら……、きつとばらすつもりなんだろう……。兄弟なのに容赦はしない。

しかもハツタリだとしても、やがては同じ運命を辿ることになる。なぜなら……。

「へえ〜！ あの刑事殿が不祥事を起こしてるんですかあ〜。気になりますねえ……」

この女がいるからだ……。なんでこいつらは計画も立ててないのに、こんなに息が合ってるんだ……。

虹さんは結局、重圧をかけられてあえなく降参した。きつと本人もこうなるように仕組まれたと思わざるをえないだろう。

しかし、これは犯罪者に加担しているわけで、そちらの方が問題だ。よって、非常事態の尋問という名義で一先ず丸く納められた。

ただし、警備員は必ず二人以上は同行しなければならぬと条件を付け加える。ところが、それも強烈な重圧によって撤廃された。全ては誰かさんの計算通り。

謎の男はその一部始終を見て、豪快に笑い続けていた。

「嬉しいのやら可哀相なのやら……」

僕と陸奥実君は虹にいの車を降りた。その際に星さんが声をかけてくれた。“せいぜい頑張ってくれ”と“気をつけてくれ”とのこと。僕は“せいぜい刑務所に送られないようにもがいてください”と返してあげた。星さんはお手上げだった。

車が走り抜けていくと、徹さんが僕と陸奥実君を呼び出した。これからどこかへ行くようで、彼女たちは別のパトカーに乗り込んだ。そして、僕らも乗って走り出した。

既に以前の陸奥実君になっていた。

「まさか、二人いるとは思わなかった」

「ふふふ……、陸奥実君はまだ甘いですね。でも僕もでした。こちらの作戦をやり返されるなんて、思いもありませんでした」

「お前の方が一枚上手か……」

なんとも言えない表情を描く。

それよりも、先ほどまで完全に敵と味方だったのに今では元通りになっている。正直驚きだ。もうちょっと険悪だと思っていた。そ

んなところが陸奥実君らしい。きっと彼女のおかげだろう。
寧ろ今の方が澄んでいる。

「……………」

しかし、代償はあった。

右腕に巻き付いた包帯。大事には至らないが、痛みがはっきりしている。やんわりと染まっている。これくらいで済むのならどうってことはない。

ただ気になるのは、切られた時に腕でなく胸の辺りに鋭く突き刺さったような激痛が走ったことだ。まあ、単純に被害妄想が大袈裟になっただけだと思う。

「…………悪かったな。大丈夫か？ 腕……………」

「大丈夫ですよ、もう…………。痛くないですから……………」

「……………」

この調子で、さっきから謝りっぱなしなのはしつこい。

「僕は忘れてません」

「？」

「“大富豪”、やりましょうね」

「……………」

陸奥実君は急に外を向いた。

数十分後に到着した。外は既に暗さを増して、時間の経過を物語っていた。僕はここでやっと周りを眺められる。

オレンジ色の大きい球が雲に体の一部を隠しながら沈む。そのせいで照らされた表面は同色になる。球が沈むにつれ、赤みから青みに変化していた。正反対の位置に鋭く発光する点があった。

景色を堪能して、振り向いてみる。そこにはお馴染みがあった。

「……今何時ですか？」

「……つと、六時近いな」

「ありがとうございます。それでは……」

徹さんに頭を下げる。向こうも軽く返した後、車を走らせてあっという間に小さくなり消えた。

その場には僕と陸奥実君と奈多弓さんと前橋君と、東條さんしかない。彼女らは先に着いたようだ。

それ以外に誰もいなかった。

「さて、どうする？ 時間なら全然あるぜい」

「そつやなあ……」

妖しく微笑む。

「遊びたいし、いっぱい話したいです！」

「……僕もです」

「……多分、権限はないんだろうな……」

陸奥実君は降参したかのようにため息を付いた。そして手で招いてくれる。それに従った。

途中、花壇が目についた。丁寧に煉瓦で囲われた土はそれと一体化しているようだ。中心から花が点々と咲き誇っている。花に関しては博識でないのでよくはわからない。ただ、白いと言えなかった。

そして、少し歩くと年代を感じさせる階段状の鉄の板たちに遭遇した。黒くて独特の模様が刻まれていて、以外と頑丈だった。

「久しぶりかもしれない」

「そうですね……」

二階の真ん中辺りのドアで立ち止まる。そして突起を捻り、引く。逆らうことなくすんなり開いた。陸奥実君が先に中に入ると、続々と做っていく。僕はもう一度だけ見回してから後に続いた。

懐かしい。彼の家に来たのもかれこれ二週間ぶりだ。あれは……“揺さ振り”をかけた日だ。そんなことは今更どうでもいい。

「さて……何する？」

「そりゃあモチロン」

「大富豪に決まってるじゃないですか！」

「そうや！ むっちゃんをみんなでハメて地獄に落とすんやで！」

ものすごい殺気を感じる。目を合わせるだけで本当に嘔みつきそう。余程哀れなやられ方をされたのだから。そして陸奥実君はそれほど強運を引き寄せているのかもしれない。

僕はひとまず……。

「……あの、僕は結構ですので……」

「ダメだ！」

「うわっ！」

前橋君がいきなりにゆうっと現れた。

「やつを倒すには、お前の力は絶対必要だ！」

「はっ、はぁ……」

「という事で、新戸君も強制参加や」

「う、うわぁ！」

誰かに首の裏を持たれ、連行される。考えなくても想像できた。目の先には、テーブルで既に準備万端の二人がトランプを切りまくっている。その手さばきはマジシャンのようにスピーディーだった。ただ……、憎しみが募っていた。

「ま、まあ瑠璃人、とりあえずやろう。やりたいって言ってただろ

う?」

「……わかりました。やらないと殺されそうですからね……」

仕方なさそうに返事しても、心臓は速く打っていた。

僕らは四角いテーブルに座りこんだ。五角形のように座り、飛び出た一角に陸奥実君が座る。東條さんと前橋君は陸奥実君を挟むように座る。奈多弓さんは前橋君の隣に、僕は東條さんの隣に腰を下ろした。

「……………ふう。……………それじゃあゲーム開始しよう」

「美浦は本当にどこにいる?」

「知らない」

「あなたは誰の犬だ?」

「わからない」

「……………はあ……………」

さつきから“知らない”“わからない”の一点張りだ。明らかに星は美浦と最低でも間接的に繋がっている。それだけは確かなはずだ。そして陸奥実君を襲った犯人もおそらく……………。

しかし、証拠がない。現場からは値するものは毛すら見つからな

いいし、指紋すらない。服の繊維や足跡もないのだ。どう考えたっておかしい。最低でも髪の毛の一本は落ちているはずなのに。自慢ではないが、うちの検察官はかなり優秀で、ミスは無いに等しいくらいだ。

「虹」

「……なんだい？」

「お前の家じゃなくて、署に受け渡したほうがいいんじゃないか？」

「……」

そうしたほうがいいのかもしれない。言い方が良くないが、星は用済みだ。尋問部へ身柄を寄越せば、大体の人間は口を割る。星も例外ではないだろう。

でも、最後に聞きたいことがあるのに……。……仕方ない。

「……“お前は美浦に自分から従って犯行に及んだのか、仕方なく従ったのか”、イエスかノーどちらかで答えてくれ」

「……！」

いつもの方式に戻そう。そちらの方が早い。するとなぜか、あっさりと“ノー”と答えてくれた。つまり……。

「……脅されているのかい？」

「当然だ！ 今現在でも身の危険は減らないんだ！」

「……じゃあ事実を教えてください」

なるほど。美浦は武力行使で人員をかき集めていたのか。……そうすると彼女は一体何の組織に入っているんだ？ 暴力団？ 極道？ そのくらいのも、あるいはそれ以上のレベルだろう。どちらにせよ、厄介極まりない。

「……無駄だ」

ところが待っていたのは諦観だった。

「？ なぜ？」

「話したとしても、遅すぎる」

「？」

遅すぎる？ 何が遅すぎるんだ？
星は体を横にして仰向けになった。

「陸奥実の“手紙”は読んだか？」

「！ ……内容は知っている」

「今日と明日の境目が“期限”だ」

確かに、今日は九月十五日。二十四時になれば誕生日を迎える。今の時間は七時過ぎ。猶予までにはまだある。逆に質問仕返した。

「彼は一体誰に殺されるんだい？」

「……そつちの予想は？」

返された。

「美浦」

仕方なく即答した。

「……実は、よくわからないんだ」

「？ どういうことだ？」

星が起き上がって面と向かった。そして、これは憶測であつて、俺は美浦に脅されていたんだ、と言い張った。とりあえず、それは置いておく。

「美浦と陸奥実はコンタクトをしていたのは事実だ。しかしそれはなぜだ？」

「そんなの私でも解るよ。情報収集のため、だろ？」

自分の代わりに徹が答えた。

「ならばそこに疑問がある。最初から美浦が犯人ならば、陸奥実とコンタクトする必要はないんじゃないか？」

「……」

美浦が犯人ならば、接近する必要がない。看護師なのだから殺す

機会、方法はいくらでもあるのだから。つまり、関係性を持つことで彼が何かに巻き込まれた時、疑われやすくなるということになる。他人と他人との犯行の方がしやすいわけだ。しかし実際はそうでなかった（誘拐犯かもしれないが）。
そして星が言いたいことは……。

「美浦の狙いは陸奥実君の命そのものでなく、彼の何か……？ ……！」

ふとしてあることを思い出した。

「……“手紙”だ」

ポケットに入れておいた手紙を取り出す。そしてテーブルに広げた。

「……何も……書いてない……？」

二十五戒目「告別」

「……はい、7渡し。上がり」

「はあああああああつ！」

「ワレ、なにまた上がったんねん！」

「どう考えても仕込んでるとしか……」

「お前……何十分も切っとして仕込めるわけないだろう……」

「むむう〜！ リセットしてもう一回やりますよ…！」

「えっと、確か三十二回目だな、その台詞」

「10捨て二枚、上がり」

「……もう無理……。頭おかしいんじゃない？」

「そうですね……。休憩にしましょうか……」

「……まだやるのかよ……」

もう既に八時を回っていた。あれからずっと大富豪しかやってい

ない。数時間、トランプと睨み合っていたのだった。まあ、その健闘も虚しく大富豪になれたのは一人しかいないわけだが。

「腹減った……」

「……」

「……」

闘う意志があっても空腹には敵わない。

俺は仕方なく立ち上がった。

「……俺が作るよ」

「おっ？ 飯作れんのか？」

……。

「……たまに親が仕事で帰ってこない時もあるからな……」

俺は逃げるようにキッチンへ向かった。生憎、ここからキッチンは少し離れている。

そういえばとおちゃんたちは知らないのを忘れていた。口が滑るところだった。瑠璃人は虹さん繋がりで知っている。それもあって黙っていた。……もしかしたら、みんなにばれているかもしれない。とりあえず、何を作ろうか。

「……もしや……」

最近ここに帰るのが少なくなっている。冷蔵庫は……。

「大丈夫か……？ 腐ってたりとか……」

必然的な不安がにじり寄る。腫れ物に触るようだ。でも、それをなんとか押さえ込んで、手をかけた。

時だった。

「！」

手が離れない。

「……………」

それはそうだ。

「あっ……………」

「……………流さん……………」

そこに、真乃の手が重なっていた。

「まっ、まままま、真乃っ！」

「？ どうしたんですか？」

「えっ……………？ ……！」

なっ、なに緊張してるんだ……………！ 落ち着いて深呼吸……………じゃなくって！

どう考えても俺は焦っている。それは以前にも同じことがあったからだ。忘れかけていた記憶が水のように溢れ出てくる。そしてあの時の映像の一秒一秒がこの瞬間に詰め込まれていた。恥ずかしい……。

「……覚えていますか？」

「な、何を……？」

「……仕返し」

「……え？」

真乃がその手を無理矢理剥がし、引つ張る。いきなり自分の方へ。

「ちよっ、と待て！」

「お返しですよ」

そして、首の辺りに頭をつづくまらせる。ほんのちよっこの出来事だが、理解するには十分すぎた。

俺の顔がうづくまる。

「……流さん……顔、赤いですね。真っ赤っかです」

「当たり前だ！ だって……その……」

それ以上は恥ずかしすぎて言えなかった。おそらく真乃から見れば、俺なんか何かの小動物に見えるだろう。頭から湯気が立っているだろう。

一回目だった。

「あの時、流さんはこうやってました」

「……………」

「だから“お返し”です」

「真乃……………」

あれは悪戯心が芽生えただけで、真乃の赤面した顔が見たかっただけで……………。意識なんかしてなくて……………。

真乃の心の音がしている。

赤ちゃんが泣き止まない時にビニール袋をぐしゃぐしゃ音立てると泣き止む、というのを聞いたことがある。それは、その音が胎内にいた時の音と似ているから母親の胎内にいると思いつき、安心するからだという。もしかしたら、今それが起きているかもしれない。変な意味じゃなく。

「不思議だな……………。落ち着いてくるよ……………」

「ふふ、そう言われるとなんだか恥ずかしいです」

「……………」

さすがに恥ずかしさが積もってきた。

「……………み、みんなは？」

「……………買い物です。その中、からっぽでしたから」

「……？」

途端に騒々しかった空間が余韻を残しつつ、変に静まり返る。…

…そこに真乃と俺しかいない。

そして変な緊張感も残していた。

「奈多弓さん」

「なんや？」

「前橋君だけでなく、どうして僕もなんですか……？」

「……不満かい？」

「いや、なんとなくです」

嫌みとかそういうわけではない。僕は三人とは間接的にしか面識はない。だから少し抵抗があるのでは……、と思ったただけだ。

僕らは最寄りのスーパーに既にいた。僕がカートを押し、二人が食材を入れる。特に前橋君は遠征に行っていた。なので奈多弓さんと僕が常に一緒だった。そこにも多少の疑問がある。

しかし、彼女は眉をしかめる。

「理由なんかあらへんよ？」

「え？」

「ただ、買いもん行きたいなあ思つて、連れてきただけやねん。そこに理由なんか必要？」

「……はあ……」

なぜか妙に納得させられる。

奈多弓さんはその後も野菜やら肉やらを入れていく。それだけで一杯に溢れそうだ。食材的にはカレーかシチューのようだ。僕はとるける派が好きだ。……あれ？

「なんか楽しそうやなあ！」

「あ、えっと……僕、ちょっと変ですね」

僕が……興奮する？ こんな感覚は久しい。

「変やないで。ワイだってそうやもん」

「……僕は感情表現が疎いんです」

「それは使っていないだけ」

「……？」

急に態度が変化したような……。しかし、それをもって会話は終わり告げた。

沈黙が続きながら、レジに着いた。適当に済ませると前橋君は向こう側に荷物を置いていく。僕は買ったビニール袋に収めていった。

実は結構得意だったりする。途中で彼に褒められたのが少し嬉しかった。

「……んな、行くで」

それを合図にスーパーから出て行った。

「……遅いな……」

「えっ、ええ……」

針の音が唯一、無音をかき消してくれる。

「……きつと、たくさん買い物してるんだと思います……」

「そんなにいらなかったのにな……」

「そうですね。……あははは……」

そしてギクシャクが空間を覆っていた。

真乃と二人きりは本当に久しぶりで、何を話したらいいか分からなかった。あっちもそれを感じているせいかもしれない。

棗さんたちが帰ってくるのを待つことにしよう。けど、真乃と話したい……。

伝えてみて。

「……？」

今のは？

言ってみて。

誰の言葉？ 周りは真乃しかいなかった。

待っていたから。

誰を？

ずっと前から……

……

……

「……ゆう……、流さん、聞いてますか？」

「……？ ……ああ、聞いているよ」

今のは何だ？ 女の人の声で、凜々しく少し低い。大人らしいのになぜか幼さがあつた。必死になって頭の中を探すが、次第に薄れていく。遂には消えてなくなった。

それらとは裏腹に自然と口から出れた。

「……ありがとう」

「……え？」

「今までありがとう」

真乃は少し驚きを隠せずに狼狽する。だが、冷静を取り戻すと、満面の笑みを返してくれた。

「……いえいえ。当然の事をしてきただけです」

「……けどどうして真乃は……」

「うおらあああああっ！」

何か言おうとしたその瞬間、三人が帰ってきた。かなり五月蠅い。こちらに来て興奮状態はさらに上がる。宝くじに当たったかのような騒ぎようだ。

とおちゃんと瑠璃人が買ってきたものをどっさり下ろす。中身はテーブルをおおよそ占めてしまうほどあつた。その費用は誰が支払ったんだ？

「もう遅いですよっ！」

「すまんっ！ 今すぐ支度したる！」

「ところで陸奥実、東條とラブラブクッキングしたか！」

「……え？」

思いがけない火の粉が降り懸かる。隙をついて、とおちゃんの顎に思いつ切りねじり込んだ。動かなくなった。

「さて、今のうちにどんどん作ってしまおう」

「そ、そうですね……」

「恐ろしや……むつつみい……、がくっ」

料理はテキパキとスムーズに進み、テーブルに置かれる。もう小一時間かかっている。それでも短かく感じた。

部屋に充満する香ばしさと円やかさが匂わせる。食欲を注がせる。僕は日頃の腕を振るわせていた。

「……できました！」

「ああ、やっと終わったなあ！」

「お腹減りましたよ……。早く戴きましょつよ！」

「そつだな。……とおちゃん、夕飯できたよ」

今微かに反応したような……。

「……よつしゃあああああつっ！ さすがは……ぐはああつ
！」

今折れる音がしたような……。

「あんさん、なんで手伝わなかつたん！ こちとら大変やつたんや
で！」

「死刑です死刑！」

「それはあいつのせい……ぎゃあああああつ！ 助けてええ
え！」

なんとという理不尽だろう。それでも罷り通すあの二人はつくづく
最強のコンビだ。そう思わざるを得ない一面だった。

とりあえず一通り懲らしめた後、人が変わったように自分の席に
戻る。そして合掌。

「いただきますっ！」

「いただきやす！」

「い、いただきます……」

この人たちはなんでこんなにテンション高いんだろう？
ひとまず、食べることにした。

.....

.....

.....

美味しかった。半分くらいが手作りじゃないにしろ、格別だ。まるで一足早いクリスマスのようなようだ。作った時間と食べ尽くした時間は二倍くらい差があった。もちろん、後者の方が長い。というより、ほとんどが会話の時間だった。面白く、怖く、楽しく、愉快で最高の瞬間だった。久しぶりに笑顔を見れた。

こんな時間がずっと続けばいいのに.....。

「じちそうさまでした」

「.....あぁ〜食った食った！」

「そうやねえ.....。さすがに食べ過ぎてしもったわ.....」

「みんなは休んでいい。適当に片づけるから」

「いや！ そいつはオレにやらせてもらおう！ 男としてな！」

前橋君が相当な量の食器たちをあつと言う間に運んだ。そして水を流すあの音が聞こえてきた。食器が打ち付け合うのも。

「ふふっ、とおやんは単純やなあ」

「そうですね。それが彼のいいところです」

ふとして時計を見てみると、短針が“十”を指そうとするところだった。……………。

僕の中で黒いものが生み出される。

「誰かあゝ！ 助けてくれええ！」

「！ どうした！」

「間違えて洗剤飲んじった〜！」

「どんな間違え方ですかっ！ ……まったく」

「とりあえず危ないと思います」

「そうやね。むっちゃんと真乃やん、いってやっというて」

二人は顔を見合わせ、あちらに急行した。するとなぜか悲鳴が拡大していた。

それよりも僕には、奈多弓さんが二人を“態と”行かせたようにも思える。

「二人してアホやなあ……………」

「……あなたは行かなくていいんですか？」

「大事やる。プロなんやからな」

少々呆れ笑いする。僕もそれに合わせた。

「……………」

「……………」

「……………」

「？」

僕を凝視してくる。どこかに埃でもって付いてるかと思はれはたく。しかし、それでも視てきた。そこへ三人が戻ってくる。

「……ちよつと失礼するわ……………」

彼女は入れ替わるように部屋を出ていった。僕も含めて見送った。

「どうしたんでしょう？」

「トイレに決まってるだろ」

「瑠璃人、何か言ってたか？」

僕にフるのか……。僕は適当に前橋君の言つとおりだということ

にした。特に不振がられることなく会話が進んでいく。あれはおそらく……。

同じように理由を添えて部屋を出ていく。その先には案の定、彼女が待っていた。廊下は心なしか暗く、余計に不気味に見えてしまう。後ろをさりげなく向くと、形に沿って光が漏れている。

「……………」

「……さすがやな」

「何がですか？」

「何でもない。気にせんという」

一体僕に何の用だろう？ 険しい表情から察するに、少なくともいい話ではなさそうだ。

僕らは奥の方のトイレの前まで行った。途中、話し掛けたような気がしたが、意識がそちらになかった。あまりに微かな声だった。中にいる人たちにはとても拾えないくらい。こんなに近くにいる僕ですら……。

そして着くやいなや、今度は面と向かってくる。

「むっちゃん、本当に人殺してもうたんか……？」

「……………！」

“人殺し”。この場に、いやどの場にも相応しくない単語が零れた。

「……………どうなん？」

「…………それは…………」

天から地へ堕ちた気分だ。

言いづらかった。彼がやったのは否定できない。実質、自分でもやったと述べていた。奈多弓さんがどういう経緯で知ったのかはさて置き、僕の一言がどのような影響を与えてしまっのかが怖い。もちろん渋っしては自ずと答えを公表するようなもの。まさしく同じだった。

「…………お願い…………どうなの…………？」

「…………」

僕に詰め寄る。胸元を握りしめ、見上げて目を潤わせて。普段の彼女からは想像できない苦しげな顔だった。

どうして彼女は知りたがるのだろうか？ 友達だから？ ただ信じられないから？ どれも違う。

僕には自分の一生を捧げてでも何とかしたい“決意”を感じ取れた。彼女の眼はそう訴えている。だから嘘は……………つけない。けれど……………。

「…………わかりません」

「…………え？」

「僕には未だにわからないことがあるのです。どうして陸奥実君が自らの手を穢したのかを……………」

「……………それでよ……………」

「とおさん」

「ん？　なんだ？　……………ああ、わりいわりい」

とおちゃんはばつが悪そうに頭を掻いた。時計を見ると、十時四十五分を過ぎようとしていた。さすがに長かったか。

「そろそろか？」

「おう、帰るぜい。なあに心配すんなよ！　ちよつとの辛抱だろ？」
……………。

「ああ、ほんの数週間だ。あつと言つ間だよ」

「……………」

現実には甘くない。俺はきつと何十年、いやもしかしたら……………。今更後悔やらなんやら負の念はない。俺は罪の重さを背負い続け、生きていかなければならないのだ。そして、虹さんに謎を解いてもらいたい。この世に存在する“参加者”を救うことに繋がるからだ。それが俺に対する“贖罪”。

「玄関まで送るよ」

「ありがとうございます」

「あのトイレ組も連れてかなきゃな」

居間を出て進んでいくと、隼さんがトイレのドアに寄りかかっていた。俺らに気づくと跳ねるように近づく。

「もしかして、お開きかい？」

「夜遅いし、疲れただろうから……」

「そうかい」

がつくり肩を落とす。もしかしてまだ騒ぎたかったのか？ 事情はどうあれ、さすがに近所迷惑だ。

瑠璃人が出てきた。

「瑠璃人……」

俺の顔を見て、くすつと笑う。

「……さて、帰りますか。陸奥実君は寂しがり屋さんなので心が痛みますが……」

「誰が寂しがり屋だ」

とりあえず小突く。相変わらず憎まれ口は減らないようだ。玄関まで行き着く。靴を履き、向き合った。段差のついたみんなの背がもどかしくなる。

「それじゃあな！」

「またなあ！」

「さよならです」

「また明日！」

「……ああ！ またな！」

……ガチャン

……

……

「……ふう」

いつもながら、見送るのは胸が傷くなる。それはちょっとしか離れていないのに全く異なる環境だからだ。身を締め付ける程に襲いかかる静けさ、空しさ。どこかの人の俳句を思い立たせる。

やがて四人の騒がしさは薄れていき、遂には消えた。しっかりと味わってから居間に戻った。

誰もいない。当たり前だ。でも、ほんの数時間前の映像が残像となって再生する。豪快な笑い声、強烈な悲鳴、爽やかな関西弁、大いびた口調やらなんやらがここに残っていた。それを思い出すだけ

で今でも笑いだしてしまう。

「一時間ちよっと……か……」

きつと、あつという間じゃない。たとえどちらかが不成立しても絶対なる孤独に包まれる。いや、片方は完全に確定している。それが早いか遅いかの違いだけだ。手の施しようがない。

……まさか、自分でも考えられなかった。こんな紙切れにこんなに人生をめちやめちやにされるなんて。深く考えすぎた？ 最初から気にしなければよかった？ じゃあ……。

「……どうすればいいんだよ……！」

結果的にこうなる。そして答は……。

「……ふう」

自分の部屋に向かい、机の引き出しを漁る。既に開封された手紙を見つけ、開く。

「……」2019年九月十六日、午前十二時に亡くなります。ですが、それを回避する方法がございます。

- 一、素直に諦める。
- 二、現在の自分の年齢分だけ関係が全くない他人を抹殺する。
- 三、最も親しい友人を一人だけ抹殺する。「……」

生き延びるには殺すしかない、という結論に達する。さもないと自分に死が降り懸かる。

あまりに理不尽で自分勝手なものだ。いきなり自分が死ぬと宣告しておいて、殺人沙汰を引き起こさせるなんて。俺は別に何も悪い

「ことはしていないのに……」。

……いや、

……ある。

「……俺だけ……」

……とても想像したくない……」。

「……生き延びたからか……?」

そうじゃないことを信じたい。けど……」。

「みんなが死んだのに、俺だけぬけぬけと生き延びてたからか……」
「！」

「……」

「いいんですか？ 置いてきてしまっ」

「自分から行ったんやで？ 待ってたら邪魔なだけや」

「でも、あいつはホントにドンカンだよ。マンガの主人公じゃねえんだからよ……」

「もしそうなら、ワイらは盗み聞きしようとする脇役やな」

「脇役でもなんでもいいですから、ここから離れませんか？ 怪しまれますよ」

「……………いいんだよバカヤロー……………！ もしかしたらノリでそのままぶほあぁっ！」

「確かに出歯亀やし……………、外で待ってよな」

「ですね。ほら、前橋君、行きますよ……………！」

「最近殴られてばっか……………」

……………

「遂に……………か」

「そつやな。いろいろ忙しかったんやから……………」

「……………もしかして、あなた方は気付いて……………」

「当然だろ？ ……あのさ、話変わるけど、クラスで流行った“陸奥実&東條カップル説”あったよな？」

「あっ！ 言ったらアカンでっ！」

「？ ええ。確か、付き合ってるのか……………でしたね」

「新戸君、聞かんといて！」

「あれ、実はな……」

「とおやああああん！」

……奈多弓が勝手に流行らせたんだよ

「……？ どういうことですか……？」

「それは絶対秘密言つたのに……」

「二人とも自分に素直じゃねえもんだから、噂流したんだよ。つまり、周りで何気なくあいつらの気持ちを矯正させたわけだ。……悪く言つとな」

「……そうだったんですか」

「……あんさんたち、絶対二人に内緒やで？ 真乃やんですら知らないんやから……」

「でも強ち、本人達は嫌そうではなかったですよ。照れてましたし……」

「それほどお互いに意識はあつたってことだろうな。ああ！ 才しも青春してええええつ！」

「あはははは……、そうなら僕もさり気なく応援しますよ」

「アンタ、自分の立場わかってんのかい？」

「？ どういふことですか？」

「新戸君のファンクラブあるそつやで？」

「……え？」

……ガタッ

「あっ……」

「！ 誰だっ！」

突然の物音。俺は素早くそちらへ身を返した。ちょうど居間の方のドアにいた。

「真乃！」

「えっ？ あああ、えっつと、そつです」

「なんで……」

無意識に怒鳴り付けてしまう。

「ふえっ……、あ、あっあの、忘れ物を取りに……」

「そんなことじゃないっ！」

俺、どうしたんだ……？ まだ修正は利く。今すぐに謝るんだ！
真乃は……。

「俺が聞きたいのは……」

何を言おうとしているんだ……？ 俺は……なんで……何の関係のない真乃を……。

「どうやって……入ってきた……？」

疑っているんだ？

「そ、それは……」

真乃、どうして顔を歪めるんだ？ 正直に鍵が開いてたって言う
てくれよ。どうして目を伏せる？

「鍵が閉まってなかったんで……」

「……そうか……」

そうだ。俺は鍵を閉めなかったのではなく、閉められなかった。
外界とを断ち切ることが出来なかった。いや、半分は諦めていたか
もしれないが。

とにかく、謝るんだ。変な言い方だが、真乃は無害だ。今なら酷いこと言ってすまなかつたって言える。

しかし、実際は真逆だった。

「ならばさらにおかしい……！」

「え……？」

「俺は扉という扉を全て締め切った。玄関から通路の、果てはトイレまでもな。動かしたなら嫌でも音は発生する。なのに、一切聞こえなかった……」

「……………」

先程から、いや、ずっと前から不思議に感じてた。ごくたまに、真乃はいきなり居間に現れることがある。どうせ色々したんだと気にしなかったのだが、この時だけはそれができなかった。もしかしたら、怒鳴っているのはそのせい……？ 違う。

今思えば、夏休み入ってから数日後、三人が家に押しかけることがあった。その時も真乃が同様にしていたのだが、玄関が破壊されていた。いや、そうではない。

“綺麗に外されていた”……。

「どうということなんだ？ ま……、え……」

「……………」

俺の複雑な思考回路は一瞬にして砂と化した。

真ん丸の中に俺がいる。微動だにしていない俺がいる。その表情

は呆気に取られた真っ白だった。それがしばらく平行する。意識が白紙に描かれるように色付けられていった。

恐怖という名の黒に……。

優しく、妖しく微笑んだ。……俺は恐れていたんだ、きつと……。

「流さんは今までのがあつて、かなり疲れていると思います。なので、ゆっくり休んで下さい……」

「……………」

そう言われると、成すがままにされてしまった。動けない俺を介護するかのようにベッドに寝付かせる。身体的に不具合はない。無駄がなく無理をさせない。

茶色の瞳が真っ直ぐ俺を見下ろしている。いや、俺の眼をただ見つめている。

「……………ゆっくりお休み下さい……………」

まるで決められた台詞を言うように吐き捨てる。そして人差し指を立てた。

「今日は、……………ですか？」

「……………？ 何だつて？」

よく聞こえない。まるで自分に言い聞かせているようだった。焦らさ、ないで……………？ これ……………どこかで……………？

「……………今日は、何日ですか？」

「…………えっ…………？」

…………思い出した…………？ 真乃に…………殺された夢…………。
入院時代、真乃と二人きりになったときのだ…………。ま、まさか…
…！

「流さん……………」

「あっ……………」

今度こそ真乃に…………

殺される！

「うわああああああああああっっ！」

「ぎゃあっ…！」

「来るなっ！ 来るなああああああっ！」

「まっ、待って流さん！」

「！ ああああっ！」

「ぎゃあああああ…！」

ドガアッ！

「……………、……………」

……

「……………！……………」

……

……

「！ おいつ陸奥実！ お前、ど」行く……………」

「はあっ、はあっ、っっっ」

「……………なんかやばくね？」

「……………！ 今の時間は……………」

「十一時五十二分やねんけど……………」

「いけません！ すぐに捕まえないと……………」

「任せろっ!」

「奈多弓さんは東條さんを! 僕は追いますっ!」

「わかった!」

「……………ようしました」

「ご苦労様。あとは任せてちょうだい……………」

「……………はい」

「……………」

「どうでしたか?」

「あの子、やっぱり使えるわぁ……………。玩具にしたいわねえ……………」

「……………。……………始めますか?」

「ええ、ファイナーレよ! 彼と私、どちらが上か……………。……………うふふ
ふふふ……………」

「もしもし、虹にい！」

「……ん、どうした？」

「今何してますっ！」

「尋問中だよ」

「よかった！ 今、陸奥実君が逃走しています！」

「！ なんだって！ 陸奥実君はこれを計算して……」

「それはありません！ 彼の容体は明らかに異様でした」

「……わかった。経緯は後だ！ 今すぐ捕まえる！」

「残り五分もありません！ 急いでください！」

「……んんっ……」

「ま、真乃やん！ 真乃やん！」

「……っっ……」

「大事かい！」

「……はい、なんとか……」

目を開けたそこは部屋だった。なっちゃんに抱き上げられている。そして私は思い知らされる。

彼はここにいない。頬を撫でてくれた漆黒の髪、体を包んでくれた温かい手、苦しく鼓動する心、何もいなくなっていた。その分だけ胸が張り裂けそうになって、切なくて、苦しくて……。

気付いてくれなかった。

「流さん……」

さっきなっちゃんが慌てた様子で頭をよく撫でてくれる。傷かった。

私は肩を借りてなんとか立ち上がる。ふと写真立てが目に入った。居間の隅っこにある本棚にある。それを手に取る。私たち四人が写っていた。

「あはは……。無愛想やな……」

「でも……」

笑っている。

きっと写真に不慣れなんだろう。唯一、一緒に撮れたモノなのだから。

裏に留めてあるホックをずらし、中身を取り出す。それをポケットに入れる。

時計は10と11の間くらい。間に合うだろうか……？

「……流さん」

「あつ、待って真乃ちゃん！」

私は飛び出した。

走る。探す。どこにいるかわからない彼を。ひたすらに、ひたすらに。普段そんなには気にしていない運動不足がここで際立ってきた。苦しい。しかも、焦りと不安が混じり合って心臓に負担をかける。それでも諦めるわけにはいかない。私は流さんを助けてあげたい。流さんの事が好きだから……！そして……。

「流さん……！」

「むっちゃん！」

私となつちゃんは途中で二つに分かれた。さらに駆け抜ける。一人を頭に巡らせて。周りになんか気を配ってられない。なりふり構ってられない！

「あつ、あれは……！」

私は運命と出会えた。間違いない！

立ち止まった瞬間にとめどなく流れ出す汗が景色を広げてくれた。証明してくれた。ここは……真ん中だ。

彼はこちらに走ってきてくれた。

「流さん！」

「真乃！ 危なああいつ！」

「……えっ……？」

気付いたら私は大通りの歩道にいて、道路から流さんが走ってくる。でもその動きはスローモーションで、時間が止まっているくらいに遅い。その時、私はやっとどうという状況なのかを理解できた。頭の中で何かが聞こえてきた。

私……死ぬんだ……。それを流さんが……。

突如として聞こえる規則正しく、乱れることのない針の音。次第に体にまで満たしていった。こういう時って走馬灯みたいに思い出が駆け巡るんじゃないのかな……？ ちっとも自覚がない……。

……49……50……

ほんのちょこつとしかズレていなかった周りが速さを取り戻してきた。でも私は何も出来ない。金縛りにあったかのように動けない。流さんの動きを見ていなければならない。

……チツ……チツ……

あつ……ダメです……

チツ……チツ……

……来てはいけません……

私はそこにいた。

向こうからやってくるランプは赤い一線を放ちながら鳴っている。そして遂に止まった。周りには人っ子一人いない。そこにいるのは赤く染まった私と彼らだけ。

白の箱に赤い線を引つ張つてあるところで縦と交わる。そこから緑の服を着た連中は彼を青で包み、箱に入れた。その途中、隙間から変な方向を指差す腕が見えた。間もなく連中は乗り込んで、ゆっくりと走り去っていく。

ゆっくりと……。

EACH STORY

「……………」

自分は持つてきておいた一升瓶の蓋を抜き、それを目の前にかける。白く被ったそれに染み入り、灰色に近い色が濃く染められた。景色一面真っ白だった。目の前を羽みたく舞って、積もっていく手を延ばせば簡単にそこに当たって熱を奪い去る。もはや冷たいとも感じない。コートの首らへんをボタンで留めた。風の入り込む余地が減り、中が温まる。

「悪かったな、香……………。約束…………、果たせなかった」

二月九日、美浦は未だに見つけられない。わずかな情報を使い、駆け付けても、既に足跡を消していた。それが何回も繰り返され、ここに至る。一部の噂では美浦はもう死んでいたとか、世界中を駆け巡っていると……………。噂が噂を呼び、遂には本当に生きているのかさえわからなくなってしまった。

たとえばどちらにしても、彼との約束を破るわけにはいかない。

「……………刑事……………」

「……………」

声のする方へ振り返る。そこには見慣れた人が座っていた。微妙かに白に包まれる中、母親に押ししてもらい、自分の前まで来てくれた。そこで挨拶を交わした。

「……………誰の……………ですか？ 流さんのは別の所ですが……………」

「……ああ、これかい？」

一升瓶を傍らに置いた。

「友人だよ。この職業柄、どうしても殉職してしまうのもいる……」

風が悪戯に髪を撫でた。彼女のはその方向に緩やかに揺れる。粒々と白を染めていた。

それを機に、母親は席を外してくれた。会釈して背中を見送る。

「……それより、君の方はどうだい？ 具合……」

「はい、まだ少し悪いです……」

「それなのに来たのかい？」

「ずっと中に缶詰されるほうが気が滅入ります。外の空気を吸いたいんです」

「確かにね。でも無理はしないでくれよ」

彼女も壊れかけていた。目の前であつという間の惨劇が繰り広げられたのだ。まともなのがおかしい。

「わかってますよ」

でも、彼らのおかげで確実に快方に向かっている。矛盾しているが、陸奥実君がいてくれたら、もっとよくなっているだろう。

彼女は遠くを眺めた。

「……雪、綺麗ですね」

「……ああ。小さい頃、よく友達と雪合戦したよ」

「面白いですよ、雪合戦。雪に石とか詰めて遊びました。神経使
うんですよ……」

「……それはね……」

上に積もった雪を丸くして渡してくれた。ひんやりとしていた。
それをどこでもないとどこかに投げた。放物線を描いて白に飲み込ま
れた。彼女は漏らし笑いを隠していた。

そして止んだ。

自分は空を見上げた。真っ白とは言えない雲が果てまで覆い尽く
している。

「雪って不思議だ……」

思わず零れた。

「……？ どうしてですか？」

それを拾い上げてくれた。

「おんなじ雲からなのに、雨だと落ち込むけど、雪だとそうでもな
い。どちらも元を辿れば水からできてるのに……」

「……」

彼女も見上げた。

「雪、好きなんですか？」

「……ちょっとだけ」

照れ臭かった。

ふっと、目に雪が入りそうになって瞼を閉じた。そこに触れるやいなや、水となって伝っていく。……一瞬それに促されそうになる。

「……」

けど、我慢した。

「……新戸さん……」

「どうした？」

慌てて目を擦る。

「雨は神様が流した涙とか恵みとかって表現されますよね……？」

「……うーん、ないことはないね」

「じゃあ雪は神様の何なのでしょう……」

「……………」

「……………」

……

「……………」

自分は地面に積もる雪の上辺部分を手に取り、放置した。その部分を中心に感覚がさらに鋭敏に働く。少しして水滴が生まれた。それを垂らす。

それをじっと見つめていた。

「……………」

「雪は溶ければ雨になる。けど、同じじゃない。……自分は懺悔だと思っよ」

「“懺悔”……………」

残った雪をそこら辺に捨てた。

「天気は気まぐれだから、期待を裏切った償いみたいな感じで降らせてくれる。……雪が嫌いな人は、学校を休みにしてくれるから……とか……………」

「うふふ……。そういう風に考えられませんでした。詩人ですね」

「いや、かつこつけたわけじゃないよ」

願わくば、誰にもこれを教えてほしくはない。恥ずかしい。今更
ほんのちよつとだけ後悔した。

肩や頭に積もった雪を払い落とす。

「……そろそろ帰ろうか」

「……はい」

どことなく、力が戻ったような気がした。

彼女の車椅子をゆっくり押ししていく。後ろを向くと、二本の跡が
一つの墓に真つすぐ延びていた。途中に、方向転換した際に残った
ぐしゃぐしゃな跡がある。名残惜しむように向き直ると、彼女の恵
みか懺悔かわからない水滴が頬を流れ落ちるのが見えた。

自分は彼女の母親のいるところへ行つた。見なかつた事にして。

「へ」

今回の件ですが、ちよつとした関連性があるのが調べ回つてわか
りました。それは　さんと直接お会いしてから話す予定でしたが、
思わぬ事故が起こつたので送らせていただきました。

一、彼らは何かしらの大きな事故や病気を起こしています。下記
を参照してください。

陸奥実　流……交通事故（九月十六日）

美浦　陽……遭難事故（二月七日）

岡本　和美……脳梗塞（八月下旬）

二、いずれも 病院で治療を受け、見事に回復。後遺症もなく
元気に過ごしていたようです。

三、全員自分の誕生日に亡くなっています。陸奥実は人身事故、
美浦は撲殺、岡本は刺殺です。これは完全に“例の物”と関係して
います。

四、その“例の物”ですが、身元から発見されませんでした。自
宅も洗ったのですが、いずれも消失しています。

P・S 個人的には美浦が犯人だと思つのですが、どう思います
か？ 今度会つた時に飯でも食いながら話しましょう。それではま
た。

二月十六日」

「……そんなことはわかりきってます。問題なのは、どうして星さ
んまで自殺したのかということです。……はい、……はい……、そ
うです。美浦の誕生日の次の日にです。……。……。……そういうこ
とになりますね。星さんは“手紙”の関係者だと僕は思います。……
……。……。実は、彼の家にお邪魔した時、手紙を発見したんです。
ところが、何も書いてありませんでした。それを彼に見せ付けると
驚愕した顔を見せました。つまり……」

……“手紙”は対象者しか見れない

「……ということが言えるでしょう。“別の手紙”も同様でしたし。
……ええ……多分……。……気になります。それがわかれば糸口が
見えるかもしれませぬ……。……。はい、わかりました。僕の

話を聞いてくれてありがとうございます。それでは失礼します…

……プチッ

「……陸奥実君……」

「大事ななあ……真乃ちゃん……」

「……心配すんなよ。今はそっとした方があいつのためだと思っぜい」

「……あっ、あんさん、やり過ぎや！ 休憩挟まんぞ！」

「あ？ ……つと、……ふうーっ！」

「それにしてもさすが、陸上馬鹿やな……。ほな、飲みもん」

「……サンキュ……。助かるぜ……い」

「……」

「……ん？」

「……………」

「どうした？ オレの顔がカッコイイのか？」

「ちやうわっ！ 絶対！」

「そう照れるなよ。知ってっから」

「……………羨ましい」

「……………シカト？ ……………？ 羨ましい？」

「私はいっぱい迷ったり悩んだりしてるのに、あなたはいつも真っ直ぐ。左右されず、自分の決めたことは決して曲げない。そんな単純さが羨ましい……………」

……………

……………

「……………おいおい」

「……………」

「オレが単細胞だって言ってるのかよ……………。悩みくらいあるぞ……………」

「……………どんな？」

「……恥ずかしくて言えるか」

「……」

「……はあ……。いいか、奈多」……」

「？」

「お前の悩み事はどんなんかは知らん。だがな、たとえシャーペン
をどれにするかっつう小さい事でも、誰かの人生に関わるくらいで
けえ事でも、中身はどれでも同じなんだぜい」

「……」

「諦めずに悩み抜いて動けたかどうかなんだ」

「……じゃあ後者の悩み事だったらどうするの……？」

「…….？」

「それも繰り返しできなくて袋小路だったらどうしろっつーいの…」

「…！」

「…….？」

「過ぎ去った時間をどうしたら変えられるのっ！」

「…….？」

「ねえ！ 教えてよっ！」

「駄目だな」

「……………えっ……………？」

「……………」

「何言って……………」

「奈多弓、お前は悩み抜いてねえ。それどころかスタンバイすらしてねえ」

「……………そ、そんなことない！ 私はずっと考えてきた……………。それが……………」

「だってそれなら、オレらに相談するじゃねえか……………！」

「……………！」

「……………」

「……………とおちゃん……………、うつつうつつ……………」

ピンポン……………

……

ガチャンッ！

「どちら様………？」

「美浦 陽さん………だよね」

「………？」

「よくもやってくれたね」

「………！」

「殺してあげる。十一時五十九分、今すぐ」

「ちよつとまちな………」

ガスッ！

「あぁっ！」

ブツッ！

.....

.....

メキイツグシヤア、ベキヤゴボツボキアドゴオボキイツ！ グチヤ
ツグチヤツグチヤツグチヤツグチヤツグチヤツグチヤツグチヤツグ
チヤツグチヤツグチヤツグチヤツ.....

目の前の真実はきつと嘘。遠くある嘘は嘘。近くにあつても嘘。真実だった真実が嘘だった。真実はどこにもない。あるとしても嘘で固められちゃう。そうなるのをあなたは検曲げたかった。どうしてこうなってしまったの？ あなたは、いきたかつたんじゃないの？ どうして助けたの？ あなたは間違いを犯した。でも、それは殺めたことでも疑ったことでもない。それは、嘘を探さなかったことなのかもね。……つてもう遅いか。劇は既に終了しちゃったし……。後は立ち去るのみ。はい、さようなら……また見に行けたら行く。

E A C H S T O R Y (後書き)

今までお読みいただきありがとうございます。おかげでこの小説を書き終えることが出来ました。そして、稚拙な内容と読みにくい文章ですみませんでした。内容はさておき、実は文章は読みにくいようにしたのです(負け犬の遠吠え)！さらに、よくわからない推理系ファンタジー小説になりましたが、オチは決めておりません！さて、もしかしたら次回作は遅くなるかもしれませんが。私事に忙しすぎて手に負えない状況にあるのです。なので、ご了承ください。最後に、小説って楽しいんですね。小説をいじれるのが面白いんです。自分で言うのもなんですが、暇があったら試してみてください。自分も初めてでしたから……。それではまたどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491c/>

十七で死にます。

2010年10月12日01時58分発行